

有岡城跡・伊丹郷町 V

—宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書—



1997.3

伊丹市教育委員会
大手前女子大学史学研究所

有岡城跡・伊丹郷町 V

—宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書—

1997.3

伊丹市教育委員会
大手前女子大学史学研究所



1 伊丹市立博物館藏 (148.5cm×78.5cm)



1 第97次調査D-6区第2次面東側全景 (南より)



2 第97次調査B-13区 SK26 (南より)



3 第51次調査B-1-4区 SV01~04 (西より)



4 第51次調査B-1-1区 SI11 (北より)



5 第51次調査B-1-1区 SY19 (西より)

序

伊丹市は西摂平野の中央部に位置し、猪名川流域を中心に、弥生時代から古代・中世の遺跡が豊富に存在し、歴史と伝統を今に残す町であります。

その中で、国の史跡に指定されている「有岡城」は惣構えをもった最古の城として知られていますが、現在では発掘調査の成果にもとづいて、JR伊丹駅付近の本丸跡は復元され、史跡公園として活用され、また市民の憩いの場として重宝されています。有岡城の歴史は天正年間に幕を閉じますが、その後江戸時代に至り、旧有岡城内には酒造業が興り、江戸に送る「下り酒」の産地として大いに栄えました。現在でも、重要文化財「旧岡田家住宅」をはじめ、往時の伊丹郷町を偲ぶ建造物が残されています。

一方、伊丹郷町では市街地再開発事業が計画され、新しい街づくりが進められています。教育委員会では、開発事業に備え、遺跡の保存を図るため事前に埋蔵文化財発掘調査を行っていますが、こうした発掘調査により、中世の有岡城跡、近世の伊丹郷町の繁栄の様子が次第に明らかになってきました。

本書は、こうした伊丹郷町の歴史を残す宮ノ前地区市街地再開発事業地区内の発掘調査報告書であります。発掘調査に際しましては、大手前女子大学の全面的な協力をいただきました。大手前女子大学には、現在も継続して調査をお願いしているほか、併せて出土資料の整理事業を実施していただいております。

この度、こうした貴重な調査成果が報告書として刊行されることになりましたことは誠に慶びにたえません。

末尾になりましたが、今回の調査に当たりご尽力くださった日比野丈夫学長、藤井直正教授、直接発掘調査を担当されました川口宏海・前川 要両氏およびこの調査に参加されました多くの方がたのご苦勞に対し、心から謝意を申し上げます。

平成9年3月

伊丹市教育委員会
教育長 乾 一雄

序

伊丹市の前身である有岡城跡の研究は近年著しい成果を取り、併せて廢墟から生まれ今日の伊丹市街の基盤となった郷町の調査も注目すべき進展をみた。いうまでもなく有岡城は戦国時代に荒木村重の手で構築され、その居城である主郭と侍町、さらに西側に広がる城下町を惣構えといわれる外郭城で取囲んだ画期的な規模のものであった。その本格的な発掘調査が伊丹市教育委員会によって行われたのは、昭和50年にさかのぼるが、わが大手前女子大学が同教育委員会の委託を受けてこれに従事してからすでに12年になる。

最初は昭和60年に行われた惣構え内の東北部を占める地域、第2回はJR福知山線伊丹駅の西に当たる有岡城の主郭南部が残存する地域で、昭和61年に実施。第3回は今日の伊丹市街の中心部に近い三軒寺前広場で、伊丹郷町最古の由緒ある地域、昭和63年に実施。第4回が宮ノ前商店街の西側に当たる郷町の中心地域で、昭和62年に着手されたが、家屋の立退きなどさまざまな困難に遭遇し、いまだに所期の目的が達せられていない。

以上の発掘調査に関する報告書としては、昭和62年10月『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ—三井パークマンション建設に伴う発掘調査報告書』、平成4年3月『同上Ⅱ第1分冊—JR伊丹駅前地域再開発に伴う発掘調査報告書』・『同上Ⅱ第2分冊』、平成6年3月『同上Ⅲ—三軒寺プラザ建設に伴う発掘調査報告書』について、平成7年3月『同上Ⅳ—宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書』が、伊丹市教育委員会と大手前女子大学史学研究所の名で出版されている。本冊は上記Ⅳに続くもので、大手前女子大学の担当分についての資料と出土遺物の整理報告書であり、あと1冊をもって終結する予定である。

発掘調査の結果明らかになった二、三のことを上げると、(一)有岡城の主郭は南北に長い伊丹台地の中央東部を含め、その南には侍町が連なり、付近には有岡城築城以前の遺構も見出される。これに沿って大溝筋という水路があって、西には城下町が展開していた。(二)屋敷町には堀や溝が交差して方形の敷地が形成され、井戸や建物のあとのほか天正7年(1579)の落城をしのばせる焼土層や鉛製の鉄砲玉などが発見された。(三)出土遺物は南北朝からしだいに多く、戦国時代になると中国・朝鮮・タイなどからの華やかな陶磁器、当時流行した茶器の類が注目に上る。(四)城下町としては鎌倉より室町までの発展があとづけられ、とくに近世になると酒造業の隆盛を語る遺構や、町人の文化向上を如実に示すものがある。

終わりに、兵庫県教育委員会及び伊丹市教育委員会関係各位のご援助とご指導に対し深く感謝しなければならない。なお本学の藤井直正教授が大手前栄養文化学院川口宏海助教授とともに、困難な発掘作業や報告書作成に費やされたご苦労、両氏に協力された本学の卒業生、在学生の皆さんに心から敬意を表するものである。

平成9年3月

大手前女子大学学長 日比野丈夫




例 言













1. 本書は兵庫県伊丹市による宮ノ前地区市街地再開発事業に伴って、伊丹市宮ノ前1丁目・2丁目において実施した、有岡城跡と伊丹郷町遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 現場における調査は、大手前女子大学日比野丈次学長を委員長とする「有岡城跡調査委員会」を組織し、大手前女子大学史学科教授藤井直正を調査担当者として、大手前女子学園が伊丹市の委託による事業として実施した。なお、これにかかる経費は委託料として伊丹市より支出を受けた。
3. 本書に収めた調査は、第51次調査（昭和62年9月8日から昭和63年3月31日まで）の一部。第63次調査（昭和63年7月29日から昭和63年10月31日まで）の一部。および第97次調査（平成2年12月14日から平成3年3月30日まで）である。
4. 現場における調査は、調査担当者である藤井直正の管理・指導のもとに、主任調査員として、川口宏海（大手前栄養文化学院助教）・前川 要（当時、大手前女子大学研究嘱託、現在、富山大学人文学部助教）主任調査員補佐として、服部秀穂・濱田幸司（当時、大阪教育大学修士課程、現在、寝屋川市教育委員会技手）が専従した。また、調査員として、細川佳子（現在、伊丹市教育委員会嘱託）・小笠原（旧姓萩野）典子・山上（旧姓熊田）真子（現在、尼崎市教育委員会嘱託）及び事務員として谷田久美子・平井千保ら、大手前女子大学卒業生を充てた。さらに、大手前女子大学史学科所属学生のほか、多数の学生諸君の参加・協力を得、調査補助員とした。これら参加者の名簿は巻末に掲げた。
5. 調査資料並びに出土遺物の整理作業は、川口宏海と、その指導のもとに、調査員赤松和佳・木南アツ子（現在、芦屋市教育委員会嘱託）・川上啓子・小出匡子・波邊晴香、卒業後新たに調査員に加わった佐藤由美によって、現場の終了後、逐次、これも多数の学生に協力を得て進めてきた。

資料整理および本報告書作成に向けての作業は、改めて平成5年度より6カ年継続事業の一部として伊丹市教育委員会より委託を受けた。

6. 本整理作業は、調査担当者毎にまとまった調査区域を2年毎に3回に分けて順次報告することとしているが、今回の報告は、そのうちの第II期分に当たる。
7. 本報告書の作成は企画段階で藤井の指導・助言のもとに、原稿の執筆と編集の作業は主任調査員及び調査員の全員が担当し、学生諸君多数の協力によって進めた。原稿の執筆分担については、目次に明記した通りである。
8. 巻頭に掲げた写真のうち、「文化改正伊丹之図」（伊丹市立博物館所蔵）は、伊丹市立博物館より提供を受けた。
9. 遺構写真は川口・前川・細川・小笠原・赤松、遺物写真は川上・小出・波邊がそれぞれ撮影した。
10. 一般的な土壌については、予算の都合上個別遺構図を掲載しなかった。よって、遺構全体図と主要遺構年代表を参照していただきたい。
11. 遺構表示記号は、奈良国立文化財研究所の用例にほぼ従ったが、一部独自のものを使用した。
SA 櫓, SB 建物, SD 溝, SE 井戸, SI 陶衣壺, SK 土塊, SP 柱, SS 礎石,
SU 堀桶, SV 竈, SW 埋篋, SY 水琴窟, SX その他
12. 位置の掲載は、平面直角座標系Vによる。建設省基本点・基準点・および伊丹市公共基準点（旧市立社会経済会館前の水準点Na14の最新の水準値、昭和53年のT.P.=16.640mを用いてT-8まで引き、後

に順に各ポイントに水準値を与えた。)を使用し、記載している数値は、X・Yともm単位で、水準はO.P.(大阪湾中等水位)である。

13. 遺構・遺物の色調については、『新版・標準土色帖』(農林水産技術会議事務局昭和51年)を併用し、全て肉眼観察によって比定した。本文の遺構図のうち、壁面土層図は1/60、建物には主に1/120、埋甕・埋桶は1/20、その他は1/60にした。また、壁面土層図のは焼土層、は炭火物層、は石や瓦などを表した。

14. 遺物の絵付けにおいては、赤色(朱)・薄朱・桃色・緑色・黄緑色・茶色・黄色・青色・紫色・黒・金色のスクリーントーンを使って表した。瓦質土器は断面にのスクリーントーンを使って表した。

本文の遺物図のうち屋瓦は1/4、銭貨は1/2、大型製品は、1/6・1/8、その他は1/3にした。

15. 現場における発掘調査の実施に当たっては、伊丹市再開発事務所関係者諸氏、および平成5年度から2か年にわたる資料整理に至るまで、伊丹市教育委員会生涯学習部・文化財担当各位の指導・助言を得たほか、株式会社染の川組、西村興業株式会社、写測エンジニアリング株式会社、イビソク株式会社の協力、その他多くの機関と多数の方々への援助を受けた。

さらに、大手前女子学園藤井健造前理事長(平成3年2月10日逝去)、現福井秀加理事長、大手前女子大学日比野丈夫学長、企画・運営委員会諸先生には、調査の進行から本報告書の刊行の至るまで指導・助言と各方面にわたってご配慮を得たことを付記する。

16. 今回の報告書作成にあたり、多くの方々、および機関のご協力・ご教示を賜ったが、ここに、関係各氏の芳名を載せ、謝意を表する。なお、敬称は略させていただいた。

井上喜久男 (愛知県陶磁資料館)

大橋 康二 (佐賀県立九州陶磁文化館)

岡 佳子 (大手前女子大学)

小長谷正治 (伊丹市教育委員会)

鹿取 秀雄 (日本貝類学会評議委員)

岸田 直史 (伊丹市役所再開発部都市再開発事務所)

紀平 肇 (清風中・高等学校)

小坂 浩一 (伊丹市役所再開発部都市再開発事務所)

塩田 昌弘 (大手前女子短期大学講師)

中西 薫 (丹波古陶館)

中野 雄二 (波佐見町教育委員会)

藤澤 良祐 (瀬戸市埋蔵文化財センター)

宮崎 泰史 (大阪府立弥生文化博物館)

和島恭仁雄 (伊丹市立博物館)

本文目次

序	伊丹市教育委員会教育長 乾 一雄	i
序	大手前女子大学学長 日比野丈夫	iii
例 言		v
第1章 調査の経過	(藤井)	1
第2章 調査方法	(川口)	3
第1節 調査区割と図面割		3
第2節 基準点と水準点の設置		3
第3節 調査の方法		3
第3章 調査の成果		7
第1節 第51次調査B-1-1区	(赤松)	7
1. はじめに		7
2. 基本層序		7
3. 第5次面の遺構と遺物		11
4. 第4次面の遺構と遺物		14
5. 第3次面の遺構と遺物		19
6. 第2次面の遺構と遺物		27
7. 第1次面の遺構と遺物		32
8. まとめ		40
第2節 第51次調査B-1-4区	(赤松)	42
1. 基本層序		42
2. 第4次面の遺構と遺物		42
3. 第3次面の遺構と遺物		42
4. 第2次面の遺構と遺物		43
5. 第1次面の遺構と遺物		45
6. まとめ		45
第3節 第51次調査B-2-1区	(川上)	47
1. 基本層序		47
2. 第5次面の遺構と遺物		47
3. 第4次面の遺構と遺物		48
4. 第3次面の遺構と遺物		54
5. 第2次面の遺構と遺物		59

6.	第1次面の遺構と遺物	63
7.	まとめ	67
第4節	第51次調査B—2—2区	(小出) 68
1.	基本層序	68
2.	第4次面の遺構と遺物	68
3.	第3次面の遺構と遺物	71
4.	第2次面の遺構と遺物	78
5.	第1次面の遺構と遺物	89
6.	まとめ	94
第5節	第51次調査B—3区	(渡邊) 96
1.	基本層序	96
2.	第3次面の遺構と遺物	96
3.	第2次面の遺構と遺物	106
4.	第1次面の遺構と遺物	108
5.	まとめ	114
第6節	第63次調査B—5区	(赤松) 115
1.	基本層序	115
2.	第4次面の遺構と遺物	115
3.	第3次面の遺構と遺物	115
4.	第2次面の遺構と遺物	122
5.	第1次面の遺構と遺物	128
6.	まとめ	129
第7節	第97次調査B—13区	(赤松) 130
1.	基本層序	130
2.	第4次面の遺構と遺物	130
3.	第3次面の遺構と遺物	130
4.	第2次面の遺構と遺物	137
5.	第1次面の遺構と遺物	138
6.	まとめ	142
第8節	第51次調査D—2区	(赤松) 143
1.	基本層序	143
2.	第4次面の遺構と遺物	143
3.	第3次面の遺構と遺物	149
4.	第2次面の遺構と遺物	151
5.	第1次面の遺構と遺物	154
6.	まとめ	156
第9節	第51次調査D—2—2区	(赤松) 158
1.	基本層序	158

2. 第4次面の遺構と遺物	158
3. 第3次面の遺構と遺物	158
4. 第2次面の遺構と遺物	158
5. 第1次面の遺構と遺物	159
6. まとめ	166
第10節 第63次調査D—4区	(赤松) 167
1. 基本層序	167
2. 第4次面の遺構と遺物	167
3. 第3次面の遺構と遺物	169
4. 第2次面の遺構と遺物	176
5. 第1次面の遺構と遺物	180
6. まとめ	182
第11節 第97次調査D—6区	(赤松) 183
1. 基本層序	183
2. 第4次面の遺構と遺物	183
3. 第3次面の遺構と遺物	183
4. 第2次面の遺構と遺物	194
5. 第1次面の遺構と遺物	200
6. まとめ	212
第4章 結 語	(川口) 213
第1節 調査区域の遺構の変遷について	(川口) 213
第2節 焼土処理土壌について	(川口) 234
第3節 池状遺構について	(川口) 235
第4節 遺物計測方法および分析結果について	(川口) 236
第5節 土師質土器皿の分類について	(川口・渡邊) 245
付 章 伊丹郷町出土の貝類	(赤松) 253
第1節 伊丹郷町遺跡出土の主な貝類の特徴	253
第2節 出土貝類の年代別組成と出土状況	255
第3節 伊丹郷町出土のサザエ及びシジミでみる貝類流通について	256
第4節 伊丹郷町出土の貝類の調理法	257
第5節 まとめ	258
<表紙図版解説>	(藤井) 260

図 版 目 次

巻頭図版1 文化改正伊丹之図

巻頭図版2 遺構写真

1. 第97次調査D-6区第2次面全景
2. 第97次調査B-13区 SK26
3. 第51次調査B-1-4区 SV04
4. 第51次調査B-1-1区 S111
5. 第51次調査B-1-1区 SY19

図版1 第51次調査B-1-1区遺構(1)

1. 宮ノ前開発地区航空写真(昭和36年)
2. 第51次調査B-1-1区第5次面全景

図版2 第51次調査B-1-1区遺構(2)

1. 第51次調査B-1-1区第4次面全景
2. 第51次調査B-1-1区北東部分
第3・4次面

図版3 第51次調査B-1-1区遺構(3)

1. 第51次調査B-1-1区第3次面全景
2. 第51次調査B-1-1区第2次面全景

図版4 第51次調査B-1-1区遺構(4)

1. 第51次調査B-1-1区北東部分第2次面
2. 第51次調査B-1-1区第1次面全景

図版5 第51次調査B-1-1区遺構(5)

1. SB13
2. SB13・SK680
3. SB13・SK681
4. SE04
5. SE02

図版6 第51次調査B-1-1区遺構(6)

1. SY14
2. SD05
3. SB08・09
4. SV234
5. S111

図版7 第51次調査B-1-1区遺構(7)

1. SI05
2. SI09

3. SW186

4. SK38

5. SB01

図版8 第51次調査B-1-1区遺構(8)

1. SB04
2. SB02

図版9 第51次調査B-1-1区遺構(9)

1. SB10
2. SB04・SS332
3. SY04
4. SY19上面
5. SY19下面
6. SI03・02
7. SX01

図版10 第51次調査B-1-1区遺物(1)

SE04・SK565・SK601・SE699・SE118・
SK525・SK450・SK451・SK475・SK465

図版11 第51次調査B-1-1区遺物(2)

SK450・SK475・SK465・SK441・SE02・
SY14

図版12 第51次調査B-1-1区遺物(3)

SD05・SK305・SK340・SK246・SS332・
SK270

図版13 第51次調査B-1-1区遺物(4)

SK246・SV234・S111・SI05・SI08・S
I09・SK60・SK38

図版14 第51次調査B-1-1区遺物(5)

SK38・SW186・SK198・SY04・SY19・S
X01

図版15 第51次調査B-1-1区遺物(6)

SI02・SI03

図版16 第51次調査B-1-4区遺構(1)

1. 第4次面全景
2. 第3次面全景
3. 第2次面全景

4. 第1次面全景
5. SV01・02・03・04
6. 砂利敷面
- 図版17 第51次調査B-1-4区遺物(1)
SV04・SK20・SK60
- 図版18 第51次調査B-2-1区遺構(1)
1. 第51次調査B-2-1区第5次面全景
2. 第51次調査B-2-1区第4次面全景
- 図版19 第51次調査B-2-1区遺構(2)
1. 第51次調査B-2-1区第3次面全景
2. 第51次調査B-2-1区第2次面全景
- 図版20 第51次調査B-2-1区遺構(3)
1. 第51次調査B-2-1区第1次面全景
2. SK468
3. SE07
4. SK479
5. SK293・294
- 図版21 第51次調査B-2-1区遺構(4)
1. SK317
2. SE04
3. SI06
4. SY05
5. SK190
6. SK277
7. SK150
8. SK160
- 図版22 第51次調査B-2-1区遺構(5)
1. SB01
2. SS151
3. SE03
4. SE02
5. SD01下面
6. SD01上面
- 図版23 第51次調査B-2-1区遺物(1)
SK468・SK479・SK322・SK411・SK294・
SK317・SE04
- 図版24 第51次調査B-2-1区遺物(2)
SI06・SY05・SK277・SK190・SK150
- 図版25 第51次調査B-2-1区遺物(3)
SK160
- 図版26 第51次調査B-2-1区遺物(4)
SK160・SS151・SE03・SE02・SD01
- 図版27 第51次調査B-2-2区遺構(1)
1. 第4次面全景
2. 第3次面全景
3. 第2次面全景
4. 第1次面全景
- 図版28 第51次調査B-2-2区遺構(2)
1. SX04
2. SX05
3. SE09
4. SK798
5. SV697
6. SK678
7. SU613
8. SK722
- 図版29 第51次調査B-2-2区遺構(3)
1. SU630
2. SD15
3. SK642
4. 石列
5. SE08
6. SI510
7. SU526・525
8. SW10・11
- 図版30 第51次調査B-2-2区遺物(1)
SK839・SE09・SK798・SK771・SK750
- 図版31 第51次調査B-2-2区遺物(2)
SK750・SV697・SD15・SK724・SK678・
SK642
- 図版32 第51次調査B-2-2区遺物(3)
SK663・SK613・SK681・SK722
- 図版33 第51次調査B-2-2区遺物(4)
SK722・SK710
- 図版34 第51次調査B-2-2区遺物(5)
SK630・SK731・SE08・SI510・SW11

- 図版35 第51次調査B-2-2区遺物 (6)
SW11・SU526・SD12
- 図版36 第51次調査B-3区遺構 (1)
1. 第51次調査B-3区第3次面全景
2. 第51次調査B-3区第2次面全景
- 図版37 第51次調査B-3区遺構 (2)
1. 第51次調査B-3区第1次面全景
2. SB06
3. SS165
4. SD06・07・08
- 図版38 第51次調査B-3区遺構 (3)
1. SK222
2. SX147
3. SB01
4. SW04
5. SE01
6. SY18
7. SY15
- 図版39 第51次調査B-3区遺物 (1)
SD06・SD07・SD08・SS165・SK222・SK72・SW04・SX147
- 図版40 第51次調査B-3区遺物 (2)
SX147・SE01
- 図版41 第51次調査B-3区遺物 (3)
SE01・SY18・SY15
- 図版42 第63次調査B-5区遺構 (1)
1. 第63次調査B-5区第4次面全景
2. 第63次調査B-5区第3次面全景
- 図版43 第63次調査B-5区遺構 (2)
1. 第63次調査B-5区第2次面全景
2. 第63次調査B-5区第1次面全景
- 図版44 第63次調査B-5区遺構 (3)
1. SA01
2. SV03
3. SV05
4. SV02
5. SK134
6. SV01
7. SE02
- 図版45 第63次調査B-5区遺構 (4)
1. SD05・06
2. SX132
3. SE01
4. SD01・02
5. SD02石だまり
6. 礎石墨書
7. 石列
- 図版46 第63次調査B-5区遺物 (1)
SK175・SX02・SV03・SE02・SD04・SD05・SX134・SX132
- 図版47 第63次調査B-5区遺物 (2)
SK132・SK119・SE01下層・SE01上層・SK43
- 図版48 第97次調査B-13区遺構 (1)
1. 第4次面全景
2. 第3次面全景
3. 第2次面全景
4. 第1次面全景
- 図版49 第97次調査B-13区遺構 (2)
1. SB03
2. SK26
3. SK22
4. SI01
5. SI02
- 図版50 第97次調査B-13区遺物 (1)
SK54・SK40・SK26・SK28
- 図版51 第97次調査B-13区遺物 (2)
SK28・SK22・SK34・SI01・SI02・SX14
- 図版52 第97次調査B-13区遺物 (3)
SX14
- 図版53 第51次調査D-2区遺構 (1)
1. 第51次調査D-2区第4次面全景
2. 第51次調査D-2区第3次面全景
- 図版54 第51次調査D-2区遺構 (2)
1. 第51次調査D-2区第2次面全景

2. 第51次調査D-2区第1次面全景
- 図版55 第51次調査D-2区遺構(3)
1. SD401
 2. SD401土師質土器皿出土状況
 3. SD401獣骨出土状況
 4. SX302
 5. SE301
 6. SX201
- 図版56 第51次調査D-2区遺物(1)
- SD401・SE301・SD301・SD303・SX202
- 図版57 第51次調査D-2区遺物(2)
- SK202・SX201・SK202・SP113・SX106
- 図版58 第51次調査D-2-2区遺構(1)
1. 第51次調査D-2-2区第4次面全景
 2. 第51次調査D-2-2区第3次面全景
- 図版59 第51次調査D-2-2区遺構(2)
1. 第51次調査D-2-2区第2次面全景
 2. 第51次調査D-2-2区第1次面全景
- 図版60 第51次調査D-2-2区遺構(3)
1. SD401
 2. SE301
 3. SV01-A・B・C
 4. SV01-A・B
 5. SE02
- 図版61 第51次調査D-2-2区遺物(1)
- SX305・SP212・SX207・SV01-C・SV01-A・SV01-B
- 図版62 第51次調査D-2-2区遺物(2)
- SE02・SX108・SX104
- 図版63 第63次調査D-4区遺構(1)
1. 第63次調査D-4区第4次面全景
 2. 第63次調査D-4区第3次面全景
- 図版64 第63次調査D-4区遺構(2)
1. 第63次調査D-4区第2次面全景
 2. 第63次調査D-4区第1次面全景
- 図版65 第63次調査D-4区遺構(3)
1. SB01・02
 2. SP314
 3. SX402
 4. SD301
 5. SU309
- 図版66 第63次調査D-4区遺構(4)
1. SV222
 2. SV222焚口部分
 3. SX221
 4. SD101上面
 5. SD101下面
- 図版67 第63次調査D-4区遺物(1)
- SX404・SU309・SX304
- 図版68 第63次調査D-4区遺物(2)
- 包含層第3次面精査時出土遺物・SX301・焼土層・SX206・SX218・SV222
- 図版69 第63次調査D-4区遺物(3)
- SV222・SX221・包含層・SD101
- 図版70 第97次調査D-6区遺構(1)
1. 第97次調査D-6区第3次面(東側)全景
 2. 第97次調査D-6区第2次面(東側)全景
- 図版71 第97次調査D-6区遺構(2)
1. 第97次調査D-6区第2・3次面(西側)全景・第1次面(東側)全景
 2. 第97次調査D-6区第1次面全景
- 図版72 第97次調査D-6区遺構(3)
1. トレンチ1 第3次面全景
 2. トレンチ1 第2次面全景
 3. トレンチ1 第1次面全景
 4. SD202
 5. SB03・05
- 図版73 第97次調査D-6区遺構(4)
1. SB01・02
 2. SB04
 3. SP82
 4. SP92
 5. SD300
 6. SE329
 7. SX362
 8. SX01-04

図版74 第97次調査D-6区遺構 (5)

1. SY03
2. SY29上面
3. SY29
4. SD09
5. SK150
6. SK88

図版75 第97次調査D-6区遺物 (1)

SP409・SD300・SK412・SK450・SK120・
SK428・SK454・SK453

図版76 第97次調査D-6区遺物 (2)

SK436・SE329・SX362・SK300

図版77 第97次調査D-6区遺物 (3)

SK300・SP17・SP07・SU01・SY03・SD
09・SK150・SK88・SK11

図版78 第97次調査D-6区遺物 (4)

SK11・SY29・SX62

図・表目次

(調査の方法)

第1図 5m方眼割図
第2図 有岡城跡・伊丹町調査区割図

(第51次調査B-1-1区)

第3図 調査地点位置図	5・6
第4図 中央アゼ土層図	8
第5図 B-1-1区北壁土層図	9・10
第6図 SB13遺構図	11
第7図 SE04遺構図	12
第8図 SE04 (1・2)・SK565 (3~5)・ SK601 (6~10)・SE699 (11~16) 出土遺物	13
第9図 SE118遺構図	14
第10図 SE118 (1)・SK525 (2)・SK450 (3~5)・SK451 (6・7)・SK475 (8~11)・SK465 (12~18) 出土遺物	16
第11図 SK441出土遺物	18
第12図 SE02遺構図	20
第13図 SY14遺構図	20
第14図 SE02出土遺物	21
第15図 SE02 (1) SY14 (2) 出土遺物	22
第16図 SD05遺構図	23
第17図 SK246遺構図	24
第18図 SD05 (1~9)・SK305 (10~12)・ 16)・SK340 (13~15) 出土遺物	25
第19図 SK340 (1~5)・SK246 (6・7・13)・ SS332 (8・9)・SK270 (10~12)・ SV234 (14) 出土遺物	26
第20図 SB08遺構図	27
第21図 SB09遺構図	27
第22図 SV234遺構図	28
第23図 S I11遺構図	28
第24図 S I05遺構図	28

第25図 S I08遺構図	29
第26図 SV234 (1)・S I11 (2~6)・S I05 (7・8)・S I08 (9・10) 出土遺物	30
第27図 S I09遺構図	31
第28図 SW186遺構図	31
第29図 SK38遺構図	32
第30図 S I09 (1~3)・SW186 (4)・SK80 (5)・SK38 (6~8) 出土遺物	33
第31図 SK198出土遺物	34
第32図 SB01遺構図	34
第33図 SB02遺構図	35
第34図 SB04遺構図	36
第35図 旧岸上久弥家復元平面図	37
第36図 SB14遺構図	37
第37図 SY04遺構図	37
第38図 SY19遺構図	37
第39図 SY04 (1)・SY19 (2~4) 出土遺物	38
第40図 S I02・03遺構図	39
第41図 SX01遺構図	39
第42図 SX01 (1)・S I02 (2・3)・S I03 (4・5)・SY04 (6・7) 出土遺物	40

(第51次調査B-1-4区)

第43図 B-1-4区東壁土層図	43
第44図 SV01・02・03・04遺構図	44
第45図 SV04 (1)・SK20 (2・3)・SK06 (4) 出土遺物	45
第46図 SB02遺構図	46

(第51次調査B-2-1区)

第47図 SK468 (1)・SK479 (2~5) 出土遺物	48
第48図 B-2-1区北壁土層図	49・50
第49図 SE07遺構図	51

第50图	SK294遺構図	51	第78图	SV697(3・8)・SD15(1・2・4)・SK724(5)・SK678(6・7)・SK642(9)・SK663(10~12)・SU613(13・16・17)・SK681(14・15~18)出土遺物	81
第51图	SK322(1~4)・SK411(5~7)・SK294(8・9)・SK317(10~15)出土遺物	53	第79图	SK681(1~3)・SK722(4~6)出土遺物	82
第52图	SB04遺構図	54	第80图	SK722出土遺物	84
第53图	SE02・04遺構図	54	第81图	SK722(1)・SK710(2~5)出土遺物	86
第54图	SE04出土遺物	55	第82图	SU630遺構図	87
第55图	SI06遺構図	57	第83图	SU630(1・2)・SK731(3~5)出土遺物	87
第56图	SK277・SY05遺構図	57	第84图	SB01(B-2-2区)・SB02(B-5区)遺構図	88
第57图	SI06(1・2)・SY05(3~5)・SK277(6)・SK190(7~9)出土遺物	58	第85图	SE08遺構図	88
第58图	SK150(1~6)・SK160(7~13)出土遺物	60	第86图	SI510遺構図	89
第59图	SK160出土遺物(1)	61	第87图	SW10・11遺構図	90
第60图	SK160出土遺物(2)	62	第88图	SE08(1~11)・SI510(12~15)・SW11(16・17)出土遺物	91
第61图	SB01遺構図	64	第89图	SI510出土遺物	92
第62图	SB03遺構図	64	第90图	SU525・526遺構図	92
第63图	SE03遺構図	65	第91图	SU526(1)・SD12(2)出土遺物	93
第64图	SD01遺構図	65			
第65图	SS151(1・2)・SE03(3・4)・SE02(5~7)・SD01(8~10)出土遺物	66			
(第51次調査B-2-2区)			(第51次調査B-3区)		
第66图	SK839出土遺物	68	第92图	B-3区北壁土層図	97
第67图	B-2-2区南壁土層図	69・70	第93图	B-3区西壁土層図	98
第68图	SX04遺構図	71	第94图	SB06遺構図	99
第69图	SX05遺構図	71	第95图	SS165出土遺物	100
第70图	SE09遺構図	72	第96图	SD06遺構図	101
第71图	SE09出土遺物	73	第97图	SD07・08遺構図	102
第72图	SK798(1~4)・SK771(5・6)・SK750(7・8)出土遺物	74	第98图	SD06(1~7)・SD08(9)・SD07(8・10)・SK222(11~19)出土遺物	103
第73图	SK750出土遺物	75	第99图	SX147遺構図	104
第74图	SV697・SV01遺構図	77	第100图	SX147出土遺物	105
第75图	SD15遺構図	78	第101图	SW04遺構図	106
第76图	SK642遺構図	79	第102图	SW04出土遺物	106
第77图	SU613遺構図	79			

第103図	S K72出土遺物	107
第104図	S B01遺構図	108
第105図	S E 01遺構図	109
第106図	S Y15遺構図	110
第107図	S Y18遺構図	110
第108図	S E 01出土遺物 (1)	111
第109図	S E 01出土遺物 (2) (S=1/2)	112
第110図	S E 01(1~5)・S Y18(6)・S Y15(7) 出土遺物	113

(第63次調査B-5区)

第111図	B-5区北壁・西壁土層図	116
第112図	S A01遺構図	117
第113図	S K175出土遺物	118
第114図	S V03・05遺構図	118
第115図	S V02・S X119遺構図	119
第116図	S E 02遺構図	120
第117図	S D04遺構図	120
第118図	S D05遺構図	121
第119図	S K134遺物出土状況 (部分)	121
第120図	S X132遺構図	122
第121図	S V02 (1・2)・S V03 (3)・S E 02 (4~8)・S D04 (9)・S D05 (10・11)・ S K134 (12~17) 出土遺物	123
第122図	S K134 (1)・S X132 (2~5)・S K119 (6~8) 出土遺物	124
第123図	S E 01遺構図	125
第124図	S E 01下層出土遺物	126
第125図	S E 01下層 (1)・S E 01上層 (2~8)・ 出土遺物	127
第126図	S K43出土遺物	128
第127図	S B01遺構図	129

(第97次調査B-13区)

第128図	B-13区第4次面・3次面遺構全体図	131
第129図	B-13区第2次面・1次面遺構全体図	132
第130図	B-13区西壁土層図	133
第131図	S B01遺構図	133

第132図	S K54 (1・2)・S K40 (3) 出土遺物	134
第133図	S K26出土遺物	135
第134図	S K26 (1)・S K28 (2~7)・S K22 (8~10)・S K34 (11~14) 出土遺物	136
第135図	S I 01遺構図	138
第136図	S I 02遺構図	138
第137図	S I 01 (1)・S I 02 (2) 出土遺物	139
第138図	S X14遺構図	140
第139図	S X14出土遺物	141

(第51次調査D-2区)

第140図	S D401遺構図	144
第141図	D-2区・D-2-2区北壁土層図 ……………	145・146
第142図	S D401土層図	147
第143図	S D401出土遺物	147
第144図	S X302遺構図	148
第145図	S E301遺構図	149
第146図	S E301 (1~4)・S D301 (5~7)・ S D303 (9~14) 出土遺物	150
第147図	S X201遺構図	152
第148図	S X201 (1~7)・S X202 (8~13) 出土遺物	153
第149図	S X202出土遺物	154
第150図	S B01遺構図	155
第151図	S P113 (7)・S X106 (1~6) 出土遺物	156

(第51次調査D-2-2区)

第152図	S E301遺構図	159
第153図	S X305出土遺物	159
第154図	S U207遺構図	160
第155図	S P212 (1~4・7・9・10)・S U207 (5・6~8) 出土遺物	160
第156図	S V01-A・B・C遺構図	162
第157図	S V01-C (1~4)・S V01-A (5・ 6)・S V01-B (7~11) 出土遺物	163

第158図	S V01—B出土遺物	164	第187図	S P 409 (1・5)・S D300 (2~4・6~11) 出土遺物	189
第159図	S E02遺構図	164	第188図	S D300遺構図	190
第160図	S E02 (1・2)・S X108 (3・4・6)・S X104 (5・7) 出土遺物	165	第189図	S K412 (1)・S K450 (2)・S K120 (3~5)・S K428 (6) 出土遺物	190
(第83次調査D—4区)					
第161図	D—4区北壁土層図	168	第190図	S K454 (1)・S K453 (2~6) 出土遺物	192
第162図	S X404出土遺物	169	第191図	S K453出土遺物	193
第163図	S X402遺構図	170	第192図	S K436出土遺物	194
第164図	S B01遺構図	171	第193図	S B04遺構図	195
第165図	S B02遺構図	171	第194図	S B05遺構図	195
第166図	S D301遺構図	171	第195図	S E329遺構図	196
第167図	S U309遺構図	172	第196図	S X362遺構図	197
第168図	S U309 (1) 出土遺物	172	第197図	S E329 (1~9)・S X362 (10) 出土遺物	198
第169図	S U309 (2) 出土遺物	173	第198図	S K300出土遺物 (1)	199
第170図	S X301遺構図	174	第199図	S K300出土遺物 (2)	199
第171図	S X304 (1~12・16・17)・S X301 (20)・包含層第3次面精査時 (13~15・18・19) 出土遺物	175	第200図	S X01・02・03遺構図	200
第172図	焼土層出土遺物	176	第201図	S Y03遺構図	201
第173図	S V222遺構図	177	第202図	S Y29遺構図	202
第174図	S X221遺構図	178	第203図	S D09遺構図	203
第175図	S X206 (1・2)・S X218 (3・4・10~16)・S X222 (5・6・8・9)・包含層 (7) 出土遺物	179	第204図	S P17 (1)・S P07 (2)・S U01 (3・4)・S Y03 (6)・S D09 (5・7~11)・S K150 (12~14) 出土遺物	204
第176図	S X221出土遺物	180	第205図	S Y29 (1)・S X62 (2~4) 出土遺物	206
第177図	S B03遺構図	180	第206図	S K11出土遺物 (1)	207
第178図	S D101遺構図	181	第207図	S K11出土遺物 (2)	208
第179図	S D101出土遺物	182	第208図	S K11出土遺物 (3)	209
(第97次調査D—6区)					
第180図	D—6区東壁土層図	184	第209図	S X88遺構図	210
第181図	D—6区北壁土層図	185・186	第210図	S X88出土遺物	211
第182図	D—6区西壁土層図	187	第211図	S X62遺構図	211
第183図	S D202遺構図	187	(結語)		
第184図	S B01遺構図	188	第212図	伊丹町古絵図 (八木哲浩1982年)	214
第185図	S B02遺構図	188	第213図	B—1—1区遺構変遷図 (1) III—1・2期	216
第186図	S B03遺構図	188			

第214図	B-1-1区遺構変遷図(2) III-3期217	第225図	池状遺構分布図.....236
第215図	B-1-4・B-2-2・B-3・B-5 区遺構変遷図(1) III-1期.....217	第226図	用途別・産地別構成比グラフ(1) ...242
第216図	B-1-4・B-2-2・B-3・B-5 区遺構変遷図(2) III-2期.....217	第227図	用途別・産地別構成比グラフ(2) ...243
第217図	B-1-4・B-2-2・B-3・B-5 区遺構変遷図(2) III-3期.....218	第228図	土師質土器型式分類図.....246
第218図	文化改正伊丹之図(八木哲浩1982年) 219	第229図	第51次調査出土土師質土器目分量グラフ247
第219図	B-2-1区遺構変遷図.....220	表3	伊丹郷町遺物計測基礎データ(1)~(5)248~252
第220図	B-13区遺構変遷図.....222	(付章)	
第221図	D-2・D-2-2・D-4・D-6区遺 構変遷図(1) III-1期.....223	表4	伊丹郷町出土の貝類種名.....253
第222図	D-2・D-2-2・D-4・D-6区遺 構変遷図(2) III-2期.....223	第230図	貝類部分の名称.....254
第223図	D-2・D-2-2・D-4・D-6区遺 構変遷図(3) III-3期.....224	第231図	伊丹郷町出土の貝類.....255
表1	主要遺構年代表(1)~(8) ...226~233	第232図	年代別出土貝類構成比.....256
表2	伊丹郷町火災年表.....234	表5	一括廃棄一覧表.....257
第224図	焼土処理土壌分布図.....235	第233図	ハマグリ殻長分布図.....258
		第234図	バイガイ殻長分布図.....258
		第235図	琴棋書画図文火入.....261

付 図

- 付図1 第51次調査B-1-1区第5次面・第4次面遺構全体図
 付図2 第51次調査B-1-1区第3次面・第2次面・第1次面遺構全体図
 付図3 第51次調査B-1-4区遺構全体図
 付図4 第51次調査B-2-1区第5次面・第4次面遺構全体図
 付図5 第51次調査B-2-1区第3次面・第2次面・第1次面遺構全体図
 付図6 第51次調査B-2-2区遺構全体図
 付図7 第51次調査B-3区遺構全体図
 付図8 第63次調査B-5区遺構全体図
 付図9 第51次調査D-2区遺構全体図
 付図10 第51次調査D-2-2区遺構全体図
 付図11 第63次調査D-4区遺構全体図
 付図12 第97次調査D-6区遺構全体図

調査参加者名簿

■外乗の部

大手前女子大学	谷 のりえ	高橋 里美	松田公美子		(19期生)
	惣田 早苗	高比良 恵	竹安 智美	橋本 和美	松本有加子
	山口 薫				(20期生)
	磯辺 敦子	大保奈津子	川嶋由紀子	二川ひとみ	菅井 京子
	坪田 晴子	西田 明子	西村 美紀	盛山 牧美	(21期生)
	阿久津 薫	安藤 周子	石田 幸子		(22期生)
	石田 有紀	石永 光	浦部 綾子	江川奈緒美	鯨島 直美
	梶井 俊子	竹村 三菜	田中 稔子		(23期生)

大阪学院大学	伊藤 秀樹				
大阪教育大学	佐々木 六				
大阪産業大学	山口 裕				
大阪商業大学	平本 雄士	松田 研			
大手前栄養文化学院	秋山 典子	葉山かおる			

■内乗の部

大手前女子大学	長田 芳子				(23期生)
	立本 美奈				(26期生)
	川島 裕美	河向井瑠紀	高木 愛子	田中万紀子	山下 和美
					(27期生)
	石井 利枝	大石 真	中嶋由美子	中山 明子	野上 優子
	平原 優子				(28期生)
	岡松 弥恵	吉川 敬子	木村 幸子	四宮 玲子	波多野有機子
	村田八重子	山村 佳子	山本 敦子	中塚 敦子	(29期生)
	奥田 真弓	柏木 明子	川島久里佳	古瀬由賀子	田中 智恵
	中野麻里子	中村 裕子	堀本 華子	宮本 敦子	(30期生)
大手前女子短期大学	酒井 裕子	杉村 仁美	竹田 寿子	谷掛真奈美	留岡理絵子
	福本 陽子	島崎 鈴子	下農由紀子		

第1章 調査の経過

伊丹町の中心部に当たる地域一帯は、伊丹市当局による市街地再開発事業と、それに関連する県道の移設、さらに伊丹市立文化会館の改築及び地下駐車場の建設など、様々な工事が間断なく続けられている。

昭和62年度から始まった宮ノ前地区市街地再開発事業の現場での作業は、開始依頼すずに10年を越えているが、まだ立退きの完了していない家屋も一部残り、その他に予想される種々の事情や、平成7年1月17日に起こった阪神・淡路大震災の影響も加わって、まだ完成に至っていない。

現在工事の行われているすべての区域は、有岡城跡の惣構えの内部であり、また伊丹町遺跡として、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、たとえ狭小な地域であっても工事に先立って発掘調査が行われて来た。ただし工事内容と工事主体が異なる場合もあり、それに伴って発掘調査も場所と時期が違ってくるという状況であり、過去10年余にわたってこうした状況に対応しながら調査が進められてきている。従って市街地再開発地域を含む「有岡城跡・伊丹町の発掘調査」は昭和50年における現在のJR伊丹駅前の整備に伴う調査から起算して180以上に及んでいるのである。

伊丹市による「宮ノ前地区市街地再開発事業」は、伊丹町の中央を通り抜ける県道以北、宮ノ前商店街を中心として左右にひろがる市街地約16,000㎡を対象とし、その中にある既設家屋を撤去し、県道の路線変更と拡幅を合わせ、旧商店街の西北に市立アイフォニックホール（音楽堂、既に完成している）と商店街の東側（既に完成している）と西側に店舗を取り入れた高層共同住宅を建設する事業である。

これに伴う発掘調査は、先に刊行した『有岡城跡・伊丹町Ⅳ』に述べた通り、宮ノ前商店街の西側にA・B、東側にC・Dの4地区が設定され、本報告書に収録したのは次表の第Ⅱ期分に当たる。

	川 口 担 当	前 川 口 担 当
第Ⅰ期 (平成5・6年度)	第43次調査	第51次調査A-1・2・3・4区 第78次調査A-5・B-8区
第Ⅱ期 (平成7・8年度)	第51次調査B-1-1・1-4・2-1・2-2・ 3・5・D-2・D-2-2区 第63次調査B-5・D-4区 第97次調査D-6・B-13区	
第Ⅲ期 (平成9・10年度)		第51次調査B-1-2・1-3区 第63次調査B-4・6区 第78次調査B-7区 第83次調査B-9・10区 第86次調査B-11-1・11-2・12区

「宮ノ前地区市街地再開発事業に伴う発掘調査」のうち、大手前女子学園有岡城跡調査委員会の担当分についての資料および出土遺物の整理と報告書の作成・刊行については、平成5年度から6カ年継続事業として、伊丹市より委託を受けて実施してきた。作業は当初に立てた計画に従って、現場の調査を担当した主任調査員川口宏海・前川 要四君の指導の下に調査員（大手前女子大学史学科卒業生）の手によって順調に進めることができ、報告書の第1冊目は『有岡城跡・伊丹町Ⅳ』として平成7年3月末に刊行した。本書はそれに続く第2冊目であるが、収録した調査地域は、上の表に記載したとおりである。

作業は全体にわたって川口宏海（大手前栄文化学院助教授）の指導に従って、赤松和佳・川上啓子・小

出国子・渡邊晴香・佐藤由美らのチームで進め、在学生諸君多数が参加して補助役をつとめた。子定の計画に沿って相次いで報告書を刊行できるのは、これらの諸君の情熱と労苦の賜物であり、現場の発掘調査から資料整理に至るまでの間、常々懇切なご配慮と指導・助言を賜っている兵庫県教育委員会および伊丹市教育委員会の関係各位、例言に名を掲げた各位をはじめとする多くの方々のご芳情と共に感謝の気持を表しておきたい。

ところで、平成8年(1996)は、大手前女子学園創設50周年、大手前女子大学創立30周年、大手前女子短期大学の伊丹への移転・開校10周年という記念すべき年に当たった。「有岡城跡・伊丹郷町の調査」も11日を迎えたこの機会に、かねてより企画していた、調査の成果を学園内外、特に伊丹市民の方々に紹介する講演と報告の会を開催することとした。タイトルを“城と町”とし、平成8年10月20日(日)大手前女子短期大学Aホールを会場として、兵庫県教育委員会・伊丹市教育委員会の後援を得て開催することができた。

当日のスケジュールは次の通りである。多数の方々がお集まりいただき盛会であったことはこの上ない喜びである。

午前	開会あいさつ 大手前女子大学学長 日比野丈夫	午後	成果報告 有岡城跡・伊丹郷町 一調査の経過と今後の課題一 大手前女子大学教授 藤井 直正 考古学から見た伊丹の酒造業 伊丹市教育委員会 小長谷正治 有岡城跡・伊丹郷町遺跡の諸相 大手前栄養文化学院助教授 川口 宏海
	講演 戦国の動乱と伊丹 大手前女子大学教授 熱田 公 伊丹郷町の復原 一古文書・聞き取り・発掘調査の成果から一 伊丹市立博物館長 和島恭仁雄		閉会あいさつ 大手前女子学園理事長 福井 秀加

これに合わせて、調査員の諸君の日ごろの研究内容を織りまぜ、調査の成果をわかりやすく解説・紹介した『城・町・くらし』(A4判、38ページ)を刊行し、当日参加された方々と関係者に配布した。

末尾になったが、有岡城跡・伊丹郷町の調査を開始した当初から学内指導委員会の委員長として、事業の運営にご指導・助言をいただいていた大手前女子大学学長日比野丈夫先生は、平成8年度末をもって学長を退任されることになった。学長にお迎えしたのは昭和55年4月のことであったが、以来17年間、「有岡城跡・伊丹郷町の調査」に先立つ「大坂城三の丸跡の調査」、さらに史学研究所の事業として委託を受けたその他の事業を含めて、在任中の全期間を通じてご指導を得てきたことになる。

先般、大学の教授会の席上で福井秀加理事長から、理事会の意向として学長のご退任後も史学研究所長に就任されることが決定されているとお聞きしたが、引き続きご指導を得ることができるのは心強い限りである。御苦勞をおかけしたことへのおわびをふくめ、これまでのご指導に対して謝意を申し上げると共に、先生のご健勝とこの事業を完遂するまで、より一層のご助言を賜るようお願いを申し上げます次第である。

私ども大手前女子大学史学研究所による「有岡城跡・伊丹郷町の調査」にかかる事業はあと2年、平成11年3月末に「宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書」の第3冊目「有岡城跡・伊丹郷町の調査VI」をもって完結させる予定であるが、有終の美を飾らせていただくためにも、関係各位のご支援をお願いし、まず筆をおくことにしたい。

(藤井 直正)

第2章 調査方法

第1節 調査区割と図面割

有岡城跡・伊丹郷町遺跡は、南北約1.7km、東西約0.8kmを測る広大な都市遺跡である。したがって、昭和61年に行ったJ R伊丹駅前の第23次調査の際に、遺跡全体の調査区割と図面割を設定した。その後の調査はすべてこれに従っている。

調査区割は、国土座標の第V系の $X = -134,400\text{m}$ 、 $Y = +99,800\text{m}$ を北西の基点とし、50m方眼を大区画の上位の区割りとして、東西横列をA・B・C～X、南北縦列を1・2・3～36とし、A1、B2などと呼称することにした(第1図)。さらに、その中の最小単位を5mグリッドとし、50m大区画の北西隅から東西横列をa・b・c～j、南北縦列を1・2・3～10とし、a1、b2などと呼称することにした。したがって、最終的に各5mグリッドは、A1-a1、B2-b1などと呼称することにした(第1図)。

図面割については、調査区割および伊丹市の1/500道路台帳との整合性を考えて、同じ上記の座標値を基点にして設定した。詳細は、既刊の発掘調査報告書『有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ』(伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1992年)、『有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ』(同前 1995年)を参照されたい。

第2節 基準点と水準点の設置

現地調査にあたっては、調査区域を囲む道路に開口トラバースポイントを設け、随時これより調査区内に5mメッシュ杭を設置した。ポイント設置は、株式会社エンジニアリング社に委託した。

水準点は、伊丹市公共基準点の旧社会経済会館(現・伊丹第一ホテル北館)前のNO.14の最新値、昭和53年のT.P.=16.640mを基準とし、大阪湾岸であることを考慮して、O.P.(大阪湾中等潮位)換算(T.P.+1.3m)して使用することとした。

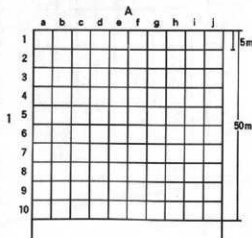
第3節 調査の方法

現地調査にあたっては、時間的制約から最上層の近代までの土層を機械によって掘削し、以下は人力による遺構掘削を行った。

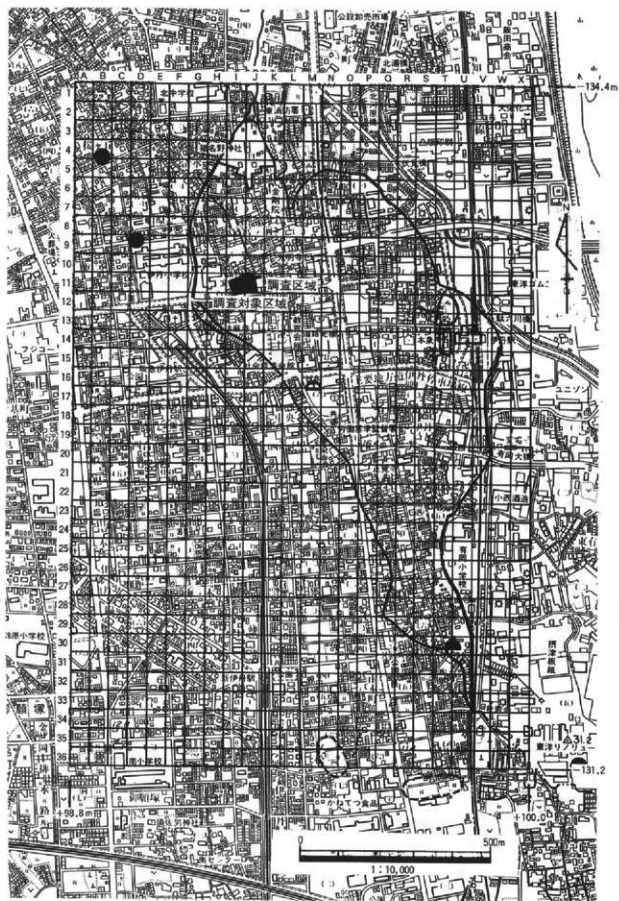
平面図は、狭い調査区は $S=1/20$ 手書き図面と $S=1/40$ 平板測量図面を作成し、広い調査区は航空測量会社に委託してアドバルーンおよびクレーン・ミニチュアヘリコプターによる航空測量を行って $S=1/20$ 、 $S=1/100$ の図面を作成した。断面図は、 $S=1/20$ 手書き図面を作成した。

遺構写真撮影は35mm小型、6×7版中型、5×7版大型カメラにより、随時行った。全景撮影には、固定ローリングタワー5～6段を1～2基設置して行った。

整理作業は、コンテナ箱にして約1200箱にのぼる膨大な出土品を対象としている。作業は、平成7年4月から、平成9年3月まで行った。



第1図 5m方眼割図



第2図 有岡城跡・伊丹町調査区画図



第3図 調査地点位置図

第3章 調査の成果

第1節 第51次調査B-1-1区

1. はじめに

有岡城跡・伊丹郷町の遺構・遺物は、基本的に中世の在城期と近世の伊丹郷町期の2時期に大別できる。前回の伊丹郷町宮ノ前地区の発掘調査報告IVの成果を受けて、

- I期 伊丹城期（～天正2年・1574年）
- II期 荒木村重の有岡城及び池田之助（元助）期（天正2年・1574～天正11年・1583）
- III期 近世の在郷町期・伊丹郷町期（天正11年・1583～明治時代中頃）
 - 1期（16世紀末～17世紀中頃）
 - 2期（17世紀後半～18世紀後半）
 - 3期（18世紀後半～19世紀後半）
- IV期 近代（明治中頃～）

とした。III-1-3期は、さらに以下のように細分化した（本報告書第4章結語第1節参照）。

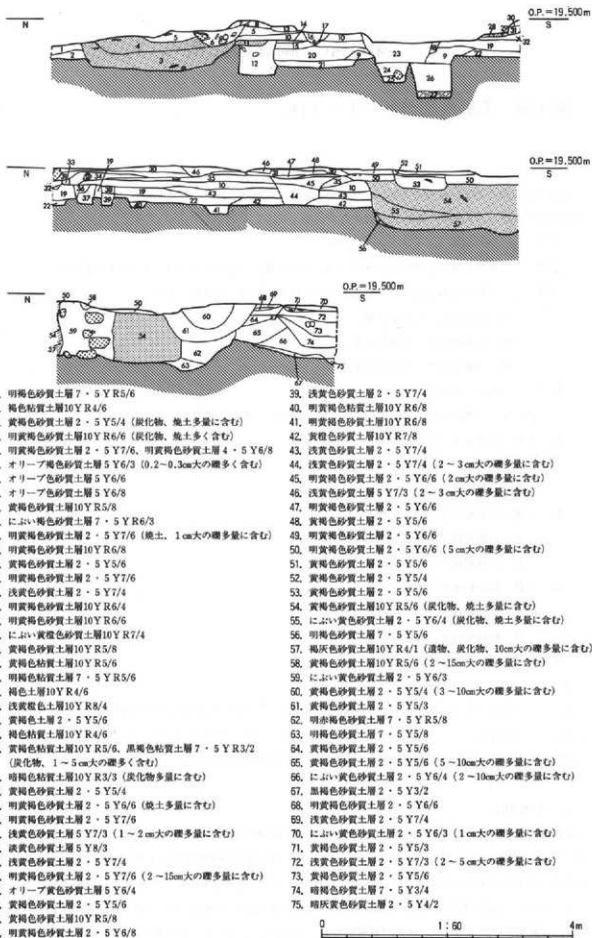
- III-1期 16世紀末～17世紀中頃
 - a 16世紀末～17世紀初頭
 - b 17世紀前半～17世紀中頃
- III-2期 17世紀後半～18世紀後半
 - a 17世紀後半～18世紀初頭
 - b 18世紀前半～18世紀後半
- III-3期 18世紀後半～19世紀後半
 - a 18世紀後半～19世紀初頭
 - b 19世紀前半～19世紀後半
- IV期 近代（明治時代中頃以降）

と細分する。以下、この時期区分に従って記述する。

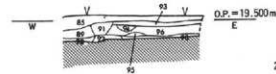
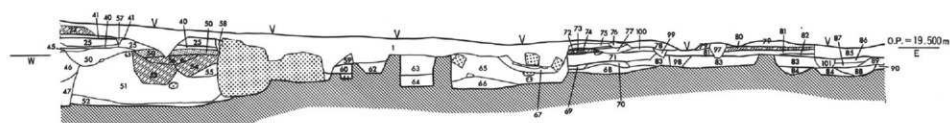
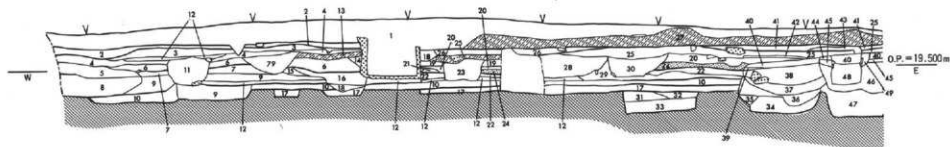
B-1-1区は、猪名野神社参道沿い西側に位置する。『天保十五年(1844)伊丹郷町分間絵図』（第212図）によると、「北少路村」にあたり、『元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（第212図）には、屋敷主庄右衛門、住人は日用人庄兵衛と、日用人五兵衛、その南側に屋敷主市兵衛、住人は日用人六兵衛である。

2. 基本層序

遺構面は6面検出した。地山直上に、17世紀前半頃の遺物を含む明黄褐色粘質土層（第5図第17層現地表面より110cm下）、その上層に、オリーブ褐色砂質土層（第5図第10層現地表面より100cm下）がみられる。その上に、17世紀前半から中頃までの遺物を含む整地層（第5図第7層明黄褐色砂質土層現地表面より70cm下）、さらに、享保の火災層（第5図第54層現地表面より50cm下）を検出した。その上に、第2次面の三和土層にふい黄褐色砂質土層（第5図第93層現地表面より48cm下）、そして、焼土層（第5図第27層現地表面より30



第4図 B-1-1区中央アセチ層図



1. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/4
(遺物、2~10m大の礫多量に含む)
2. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/3 (整地層)
3. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3
4. 明黄色砂質土層 10Y R6/6 (整地層)
(3~5m大の礫多量に含む)
5. 黄褐色砂質土層 10Y R5/8
6. におい黄褐色砂質土層 10Y R6/4
7. 明黄色砂質土層 10Y R6/6
8. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6 (遺物多量に含む)
9. 明赤褐色砂質土層 5 Y R5/8
10. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
11. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3
(遺物多量に含む)
12. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
13. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/4
14. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
(遺物多量に含む)
15. 明黄色砂質土層 2・5 Y7/6
16. 浅黄色砂質土層 2・5 Y7/4
17. 明褐色粘質土層 7・5 Y5/8
18. におい黄褐色砂質土層 10Y R7/2
19. におい黄褐色砂質土層 10Y R5/4
(炭化物多量に含む)
20. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6
21. 明黄色砂質土層 2・5 Y6/6
(1~5m大の礫多量に含む)
22. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6

23. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
(遺物多量に含む)
24. 明黄色砂質土層 10Y R5/8
25. 明黄色粘土層 2・5 Y6/6
26. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6
27. 黒色炭化物層 2・5 Y2/1
(遺物多量に含む)
28. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
29. 明黄色砂質土層 2・5 Y6/6
30. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/4
(遺物多量に含む)
31. 明黄色砂質土層 10Y R6/8
32. 明黄色砂質土層 10Y R6/6
33. 明褐色粘質土層 7・5 Y5/8
34. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
35. 明褐色砂質土層 2・5 Y6/6
36. におい黄褐色砂質土層 10Y R7/3
37. におい黄褐色砂質土層 10Y R6/4
38. 浅黄色砂質土層 2・5 Y7/4
(遺物多量に含む)
39. 浅黄色砂質土層 2・5 Y7/3
40. 明黄色砂質土層 2・5 Y7/6
41. 黄色砂質土層 2・5 Y7/8
42. 明黄色砂質土層 2・5 Y6/6
43. におい黄褐色砂質土層 10Y R7/3
44. 黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6
45. 浅黄色砂質土層 2・5 Y7/3
46. 明黄色砂質土層 2・5 Y6/6
47. 黄褐色砂質土層 10Y R7/8

48. 黄色砂質土層 5 Y7/6
49. 明黄色砂質土層 2・5 Y5/6
50. 明黄色砂質土層 2・5 Y6/6
51. におい黄色砂質土層 10Y R6/3
(1~5m大の礫多量に含む)
52. におい赤褐色砂質土層 5 Y R4/4
53. 明黄色砂質土層 10Y R6/8
54. 明黄色粘土層 2・5 Y7/6
55. 明黄色砂質土層 2・5 Y6/6
56. 黄褐色砂質土層 10Y R7/8
57. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
(0.5~1m大の礫多量に含む)
58. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
59. オリブ黄色砂質土層 5 Y6/4
60. 明黄色砂質土層 10Y R6/4
61. 明赤褐色砂質土層 5 Y R5/8
62. におい黄褐色砂質土層 10Y R4/3
(遺物多量に含む)
63. オリブ色砂質土層 5 Y6/8
64. 黄褐色砂質土層 2・5 Y3/2
65. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
66. におい黄褐色砂質土層 10Y R5/3
67. におい黄褐色砂質土層 10Y R7/2
68. におい褐色砂質土層 7・5 Y R7/4
69. におい褐色砂質土層 7・5 Y6/4
70. 明黄色砂質土層 2・5 Y7/6
71. 明黄色砂質土層 2・5 Y6/6
72. 浅黄色砂質土層 2・5 Y7/4
73. におい黄褐色砂質土層 10Y R6/4
74. 黄褐色砂質土層 7・5 Y R7/8
75. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
76. 黄色砂質土層 2・5 Y7/8
77. 明黄色砂質土層 2・5 Y6/8
78. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y5/2
79. 浅黄色砂質土層 2・5 Y7/4
(木根、1m大の礫多量に含む)

80. オリブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3
(炭化物、焼土、木根多量に含む)
81. 黄褐色砂質土層 10Y R5/8
82. 褐色砂質土層 10Y R4/4
83. 褐色砂質土層 10Y R4/4
(炭化物、焼土多量に含む)
84. におい黄褐色砂質土層 10Y R5/4
(1~8m大の礫多量に含む)
85. 褐色砂質土層 7・5 Y R4/4
(炭化物、木根、1~6m大の礫多量に含む)
86. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6
87. 褐色砂質土層 7・5 Y R4/6
(炭化物多量に含む)
88. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/4
89. 明黄色砂質土層 10Y R6/6
90. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6
91. 明黄色砂質土層 10Y R6/6
(炭化物多量に含む)
92. 明黄色砂質土層 10Y R6/4
(焼土、木根、1~6m大の礫多量に含む)
93. 明黄色粘土層 7・5 Y R5/6
(1~8m大の礫多量に含む)
94. におい黄褐色砂質土層 10Y R5/4
(炭化物、1cm大の礫多量に含む)
95. 明黄色砂質土層 10Y R5/3
(炭化物、焼土、木根多量に含む)
96. 明黄色砂質土層 10Y R5/6
97. 明黄色砂質土層 2・5 Y R5/4
(1~3m大の礫多量に含む)
98. 明黄色砂質土層 10Y R5/4
(炭化物、木根多量に含む)
99. 黄褐色砂質土層 10Y R5/6
100. におい黄褐色砂質土層 10Y R6/4
(炭化物、焼土多量に含む)
101. におい黄褐色砂質土層 10Y R5/4



第5図 B-1-1区北壁土層図

cm下)が堆積し、その上に、第1次面の三和土層(第5図第2層現地表面より22cm下)を検出した。調査面積は692m²である。

3. 第5次面の遺構と遺物

地山直上に、部分的に須恵器・土師器を含む包含層(第5図第17層)がみられ、この上面と地山面を第5次面としてとらえた。建物は、7世紀後半～8世紀前半頃と考えられる建物(SB13)が建っていたことが分かった。また、16世紀末～17世紀前半の柱穴・井戸を猪名野神社参道(宮ノ前商店街通り)から西へ14m付近で検出し、この頃から、復元は不可能ではあるが、掘立柱建物などが建っていたことがわかった。また、調査区西側は遺構の重複があり、上面で検出できなかったものもみられる。

SB13

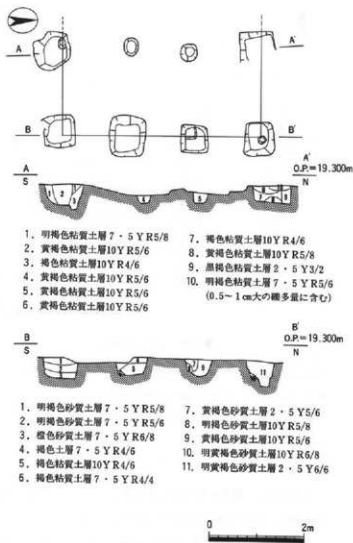
SB13は、調査区中央やや西側に位置する(第6図・図版5)。掘立柱建物である。柱穴の掘形の平面形は方形を呈し、一辺0.8m、深さ0.35m位のものである。柱痕は判明したもので直径0.2m、深さ0.6mを測る。この調査区のB-6区で北西方向の続きを検出し、4間×3間の建物であることがわかった。果行の方位は、真北に対してN3.°07'E、磁北に対してN9.°10'Eである。柱間距離は、1.5m～1.7mで、桁行東西方向に約6.2m、梁行南北方向に約4.5mである。出土遺物はなかったが、しかし、方形の掘形をもつ掘立柱は、畿内では5世紀代以降にみられ、後述するB-2-1区やD-6区で、7世紀後半～8世紀前半頃の須恵器・土師器が出土しており、この建物はおそらくその頃の建物と考えられる。また、7世紀後半～8世紀前半以降の遺構と遺物は、16世紀後半にいたるまで検出していない。それは、その他の地区でも同じである。

SE04

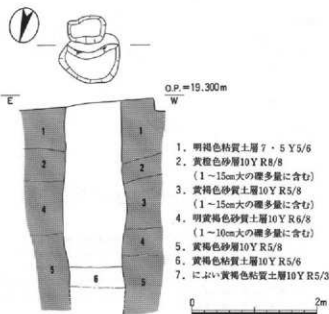
SE04は、調査区中央に位置する(第7図・図版5)。平面形は不整形を呈し、長径0.96m、深さ2.94m以上を測る。素掘りの井戸である。断面形はほぼ垂直である。湧水層は確認できなかった。

第8図-1は、唐津焼碗である。口径11cm、器高7.7cm、高台径4cmを測る。高台が低く、体部から口縁部にかけて外側へやや張出している。高台の削りは浅いが丁寧に作られており、内面から外面体部にかけて灰釉が掛けられている。大橋康二氏の編年(大橋1989年)II期に属する。2は、丹波焼播鉢である。体部が直線的に立上がるタイプのものである。体部は無釉を呈し、内面の播目は6本単位である。大平茂氏の編年(大平1992年)II期に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀前半と考えられる。II-1b期に属する。



第6図 SB13遺構図



第7図 S E04遺構図

端部は外へ張出しており、体部はやや薄手を呈し、外面にユビオサエ痕がみられる。内面体部の掘目は7本単位である。大平茂氏の編年VI期に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀中頃～17世紀後半と考えられる。III-1 b 期からIII-2 a 期に属する遺構である。

S K601

S K601は、調査区北西隅に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ2.85m、幅2.44m、深さ0.15mを測る。廃棄土壌で遺物が大量に出土した。

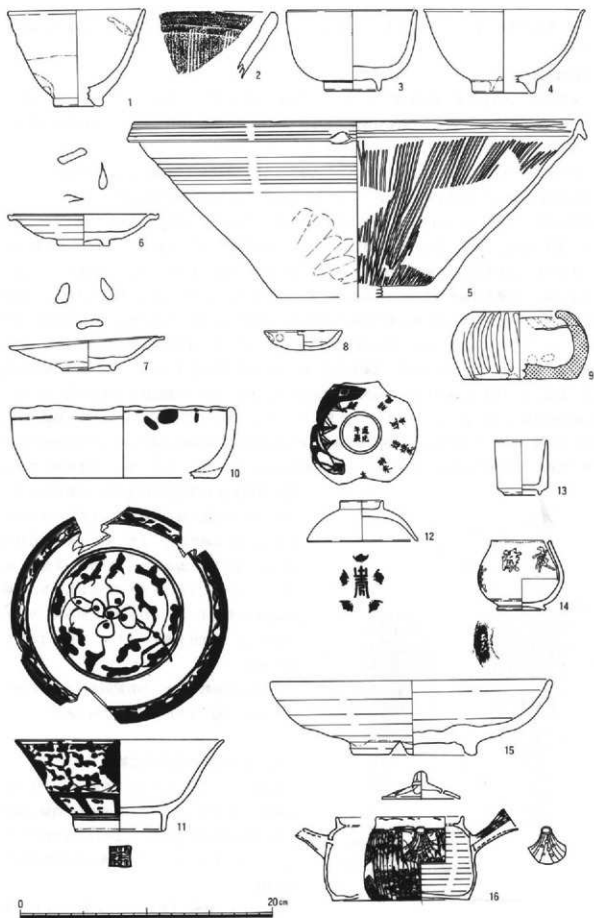
第8図-6・7は、唐津焼砂目溝線皿である。6は、口径12.4cm、器高2.6cm、高台径4.1cmを測る。体部が大きく外へ張出すタイプで、内面から外面体部にかけて、灰釉が掛けられている。7は、口径12.5cm、器高2.8cm、高台径4.5cmを測る。成形は6と同タイプである。6・7は、大橋康二氏の編年II-1期に属する。8・10は、土質土器である。8は、皿である。口径6.2cm、器高1.55cmを測る。体部から口縁にかけてやや直に立上がるタイプのものである。内面と外面にナデ調整、外面口縁部には指頭圧痕を施している。口縁部に灯芯痕がみられ灯明皿として使用していたと思われる。I T (伊丹町町期)・I 型式A類に属する。10は、鉢である。口径18cm、器高5.9cm、底径14.6cmを測る。口縁部は波状になっている。成形は、粘土円盤に粘土紐輪積み成形し、外面体部はナデ調整、内面体部はヨコナデ調整を施している。体部内外面に雲母が附着している。また、内面には煤が附着しているため、火入れとして使用していたと思われる。9は、瓦質土器鉢である。口径6.2cm、器高5.4cm、底径9cmを測る。粘土円盤に粘土紐輪積み成形し、外面はヘラミガキ後、カンナで模様を施している。内面は、体部と底部・体部と口縁部のそれぞれの境に指頭圧痕がみられる。

また、遺物が一括に出土したため、産地別構成比と用途別構成比(第226・227図)を作成した。産地別では、在地産が半分を占め、唐津焼・丹波焼とつづく、用途別でみると、食膳具が大半を占め、調理具が次にくることがわかった。さらに、細かく見ると、産地の半分を占める在地産の用途別をみると、小皿・焙烙・灯明皿の順になる。しかし、用途別の食器類では、在地産のものより、陶磁器類が大半を占めていることがわかり、食膳具としては、陶磁器類に変わっていることがわかった。

S K565

S K565は、調査区南西隅に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ3.24m、幅1.34m、深さ0.56mを測る。廃棄土壌で、17世紀代の遺物がまとめて出土した。

第8図-3は、肥前磁器染付碗である。口径10.6cm、器高6.5cm、高台径4.6cmを測る。呉須の発色が悪く、体部も厚手である。外面体部に一重網目文が描かれており、高台畳付に砂が付着している。大橋康二氏の編年III期に属する。4は、姫野焼碗である。口径12.6cm、器高6.7cm、高台径5.2cmを測る。外面に銅緑釉、内面には透明釉を掛けている。高台は無釉である。5は、丹波焼鉢である。口径36cm、器高14.2cm、底径13cmを測る。口縁



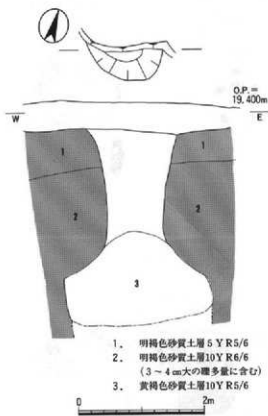
第8図 SE04 (1・2)・SK565 (3~5)・SK601 (6~10)・SE699 (11~16) 出土遺物

出土遺物を概観すると、17世紀中頃～17世紀後半と考えられ、III-1 b期からIII-2 a期に属する遺構である。

SE 699

SE 699は、調査区北側中程に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長径1.1m、深さ3.41mを測る。筒型に真直ぐに掘られている。湧水層は確認できなかった。遺構の切合いが複雑だったため最終面で検出した。本来は2次面の遺構と思われる。

第8図-11・12は、中国製品である。11は、青花鉢である。口径16.8cm、器高7.3cm、高台径7.2cmを測る。体部内外面や見込みに花唐草文が描かれている。高台内に銘がみられる。高台壘付は露胎である。12は、染付蓋である。口径8.8cm、器高3.3cm、つまみ径3.5cmを測る。呉須の発色が良好で、文様も丁寧に描かれている。文様は船文と「順風□送去・福祿壽時来・大□□」の吉祥句がみられる。また、つまみ内に「道光年製」の銘がある。道光年間は、清朝宣宗の1821～1850年の間である。内面に寿文・こもり文が描かれている。13は、瀬戸・美濃焼白磁湯飲である。口径4.2cm、器高4.25cm、高台径4.8cmを測る。筒型状のもので、高台壘付は露胎である。14は、朝日焼小壺である。口径4.8cm、器高5.5cm、底径3.8cmを測る。底部と体部の境付近に「あさひ」の刻印がみられる。朝日焼は、遠州七瀬の一つである。京都府宇治市朝日山に位置し、慶長年間(1596～1615)の開窯と伝える。陶器を中心に焼いていたが、慶安年間(1648～1652)頃に一時絶えたが、文久元年(1861)に再興した。口縁部と外面底部以外に灰釉を掛け、体部に鉄釉で文字を描いている。口縁部が無釉なのは、おそらく蓋を伴うものと思われる。15は、陶胎の皿である。口径22.6cm、器高6.1cm、高台径10cmを測る。胎土に0.2cm位の礫を多く含み、釉の色もPalegreenishsky10B8.5/1.5とやや黒帯びた白色である。高台は割り高台で、無釉である。産地は関西周辺のものと考えられる。16は、常滑焼急須である。



第9図 SE 118遺構図

蓋は、口径6.3cm、器高2.25cmを測る。上面にカンナケズリによって文様を施している。つまみはハリツケで胎土には赤土を練り込む。また、孔が一か所みられる。急須は、口径7cm、器高7.2cm、底径7.7cmを測る。注口はハリツケで、丁寧にヘラナデがみられ、茶こし部は体部に穴を開けている。外面体部は縦方向にカンナケズリによって文様を施す。同じく、胎土には赤土を練り込む。

出土遺物を概観すると、19世紀前半から19世紀後半と考えられ、III-3 b期に属する遺構である。

4. 第4次面の遺構と遺物

第4次面は、三和土は検出できなかった。礎石・礎石痕もみられなかったが、調査区中央より西側に廃棄土壌が多くみられたことから、この付近は裏庭だったと思われる。主に、17世紀代の遺構を中心に検出した。

SE 118

SE 118は、調査区北壁付近やや東側に位置する(第9図)。平面形は不整形を呈し、長径1.2m、深さ3.24

m以上を測る。素掘りの井戸である。ラッパ状に掘られ、下方は筒形状になっている。湧水層は確認できなかった。この遺構は第5次面の遺構である。

第10図-1は、唐津焼皿である。高台径4.8cmを測る。高台は無軸で、内面に灰軸が掛けられている。小片で分かりにくい。大橋康二氏の編年II-1期に属する砂目溝縁皿と考えられる。

出土遺物を概観すると、17世紀前半と考えられ、III-1b期に属する遺構である。

S K 525

S K 525は、調査区中程に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ2.34m、幅1.3m、深さ0.08mを測る。本来は5次面の遺構である。

第10図-2は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。口径9cmを測る。小片で時期を決めるのは難しいが、藤澤良祐氏の瀬戸大窯編年(藤澤1986年)7期に属すると考えられる。その他の出土遺物と合わせて考えると、この遺構の年代観は16世紀後半と思われる。II期に属する。

S K 450

S K 450は、調査区北西隅に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ1.2m、幅0.58m以上、深さ0.24mを測る。

第10図-3は、肥前磁器青磁碗である。口径12.4cm、器高6.9cm、高台径4.4cmを測る。高台は高めで、体部は口縁部にむかって大きく湾曲している。高台は無軸である。大橋康二氏の編年III期に属する。4は、土師質土器焙烙である。口径28cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプである。口縁部内外面はヨコナア調整、外面底部は未調整である。体部全体に煤が付着している。難波洋三氏の分類(難波1992年)C類に属する。5は、丹波焼壺である。口径11cmを測る。口縁部は外へ折れ曲り、内外面に自然軸が掛けられている。檜崎彰一氏の編年(檜崎1977年)江戸I期に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀前半～17世紀中頃と考えられ、III-2a期に属する。

S K 451

S K 451は、S K 450の南隣に接する遺構である(表1)。平面形は長さ0.53m、幅0.49m、深さ0.3mを測る。まわりの遺構によって、潰されているが17世紀前半の遺物がまとも出土した。

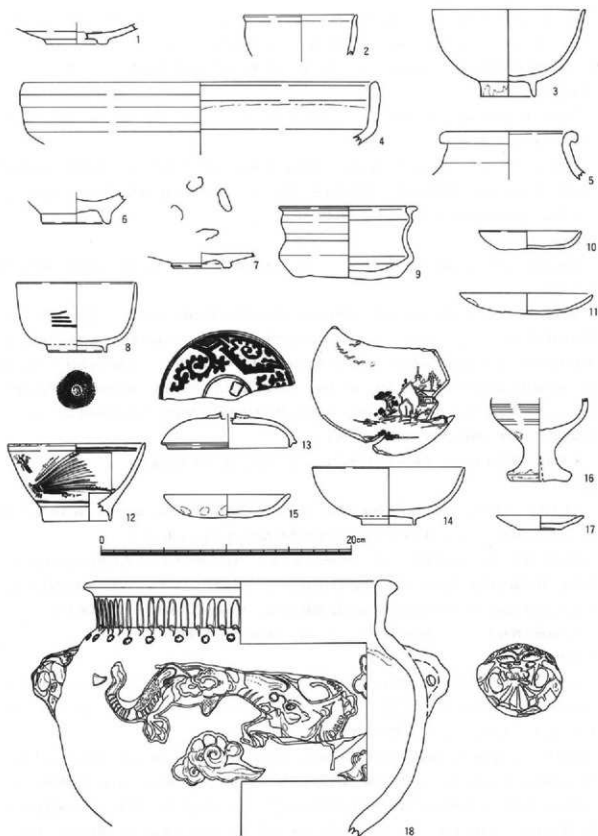
第10図-6は、肥前磁器青磁碗である。高台径5.4cmを測る。体部は厚手を呈し、高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年II期に属する。7は、唐津焼砂目皿である。高台径4.5cmを測る。内面に灰軸が掛けられ、見込みには砂目痕が4カ所みられる。外面底部は無軸である。大橋康二氏の編年II-1期に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀前半と考えられ、III-1b期に属する遺構である。

S K 475

S K 475は、調査区北側中程に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ1.8m、幅1.56m、深さ0.54mを測る。埋土は5層みられ、最上層に、焼土・炭化物が多量に堆積し、遺物もこの層から出土した。享保14年(1729)の北少路村の大火災の際の処理土壌ではないかと思われる。

第10図-8は、肥前京焼風陶磁碗である。口径9.6cm、器高5.6cm、高台径4.4cmを測る。外面に鉄絵が描かれ、高台内に印銘がみられる。高台は無軸である。大橋康二氏の編年III期に属する。9は、丹波焼鉢である。口径11cm、器高6cm、底径8cmを測る。全体的に釉が変色しており、火入れとして使用していた可能性がある。10・11は、土師質土器皿である。10は、口径8.1cm、器高1.6cmを測る。内面はナア調整を施し、外面には指頭圧調整がみられる。11は、口径10.6cm、器高1.7cmを測る。内面口縁部はヨコナア調整、内面底部にはナア調整を施し、外面に指頭圧痕がみられる。体部は薄く浅手の



第10圖 SE118 (1)・SK525 (2)・SK450 (3~5)・SK451 (6・7)・
SK475 (8~11)・SK465 (12~18) 出土遺物

皿である。I T (伊丹郷町期)・2 型式A 類に属するタイプである。

ここでは、上述した土師質土器皿以外にも多量の土師質土器皿が出土しことから、分量グラフを作成した。その結果、口径8~9cm、器高1cmのもの、口径10~11cm、器高2cmの2タイプにわかれる事がわかった。

出土遺物を概観すると、17世紀末~18世紀前半と考えられ、III-2 a 期に属する。

SK485

SK485は、調査区北西側に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ2.18m、幅1.56m、深さ0.15mを測る。廃棄土壌で遺物が多量に出土した。

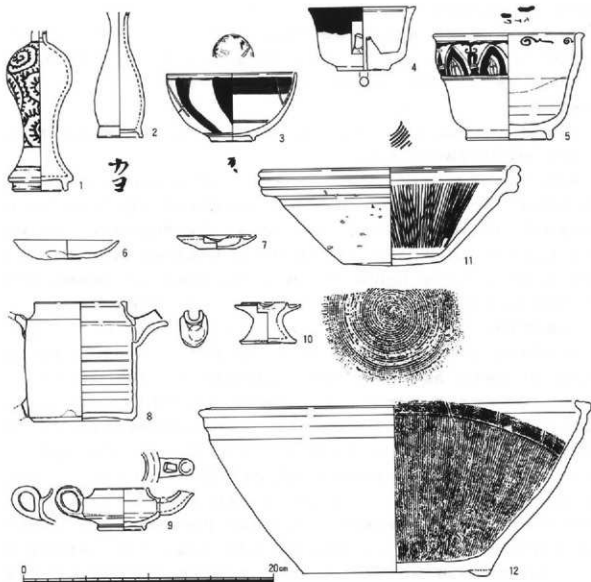
第10図-12・13は肥前磁器である。12は、広東型染付碗である。口径11cm、器高6.2cm、高台径5.4cmを測る。体部は薄く、呉須の発色も良好で丁寧に描かれている。文様は稻東文に雀文が描かれている。13は、段重の蓋である。口径9.8cm、器高2.8cmを測る。これも、体部は薄く、呉須の発色も良好である。文様は蛸唐草文が描かれている。夏は一本の太い線で表され丁寧に描かれている。体部と接する部分は無軸である。大橋康二氏の編年では、12はV期、13はIV期にそれぞれ属する。14は、肥前陶器である。京焼風陶器平碗である。口径12.2cm、器高4.6cm、高台径4.3cmを測る。内面には呉須によって、丁寧に桜間山水文が描かれている。京焼風陶器の中でも古い時期のものである。これ以外に同じものが2個いっしょに出土した。大橋康二氏の編年III期に属する。15~17は、土師質土器である。15・17は、皿である。15は、口径19cm、器高1.85cmを測る。手づくね成形で、調整は、内面はナデ調整、外面は指頭圧調整である。口縁部には灯芯底が2カ所みられ灯明皿として使用していたと思われる。I T (伊丹郷町期)・1 型式A 類に属する。17は、口径6.9cm、器高1.15cmを測る。口縁部成形で、底部に右回転糸切り痕があり、内面は丁寧に回転ナデを施している。底部が平坦で、体部から口縁部にかけて直つぐに外へ延びているタイプのものである。16は、台付タンコロである。底径4.6cmを測る。全体に鉄軸が掛けられ、突起は体部成形後、ハリツケしている。また、底部には、直径0.07cm、深さ2.5cm位の穿孔がみられる。これは、行灯や提灯の底板に打ち付けてある釘に差し込むための穴である。18は、瀬戸・美濃焼鉄掛である。口径25cmを測る。内面口縁部から外面全体に緑釉が掛けられ、内面には錆釉が刷毛塗りされている。外面の文様は、型造りした飛龍をハリツケ、口縁部は刻印とカンナで、花印と楕円状の文様を描いている。また、肩部には、獅子頭を形取った双耳が付けられている。藤澤良祐氏の本業焼編年(藤澤1987年) III段階9期に属する。

出土遺物を概観すると、一部古いものがみられるが、18世紀前半~18世紀末と考えられ、III-3 a 期に属する遺構である。

SK441

SK441は、調査区西側中央に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ1.1m以上、幅0.66m以上、深さ0.56mを測る。廃棄土壌で遺物が多量に出土した。

第11図-1・3は、肥前磁器である。1は、染付御神酒徳利である。高台径4.2cmを測る。瓶子形を呈し、高台は輪高台である。肩の張りが大きい全体的にすっきりしたタイプのものである。呉須の発色は悪い。外面の文様は蛸唐草文が描かれている。3は、染付碗である。口径10.4cm、器高5.5cm、高台径3.35cmを測る。外面に捺文を描いている。体部には焼継ぎ痕がみられ、高台内に朱書が施されている。大橋康二氏の編年では、1はIV期、3はV期に属する。2は、伊賀・信楽焼小瓶である。高台径3.6cmを測る。外面には銅緑釉を掛け、高台は無軸である。高台内に「カヨ」の墨書がみられる。4・6は、土師質土器である。4は、乗燭である。口径8.4cm、器高5.1cm、底径4.1cmを測る。芯立ては体部成形後、ハリツケしナデ調整を施している。底部には乱雑な糸切り痕がみられる。また、内面から外面口縁部にかけて鉄軸が掛けられている。6



第11図 SK441出土遺物

は、皿である。口径8.2cm、器高1.4cmを測る。内面は丁寧にナテ調整を施し、外面は指頭圧調整している。IT（伊丹郷町期）・I型式A類に属するものである。5は、瀬戸・美濃焼染付香炉である。口径11.6cm、器高8.6cm、高台径6.6cmを測る。外面体部中部から下部に鉄軸を掛け、口縁部内外面に具須で文様を描いている。内面体部は無軸で、高台畳付は露胎である。7～10は、京・伊賀・信楽焼製品である。7は、灯明受皿である。口径6.4cm、器高1.1cmを測る。外面口縁部から内面にかけて灰軸が掛けられている。それ以外は無軸である。また、受けの部分に半月状の切り込みがある。これは、灯芯をつたって落ちて溜まった油を回収しやすくするための工夫である。8は、水注である。口径7.2cm、器高9.5cm、底径7.7cmを測る。内面口縁部から外面体部にかけて灰軸が掛けられている。それ以外は無軸である。9は、カンテラである。口径4.4cm、器高3.6cm、高台径3.6cm、注口径1cmを測る。口縁部と外面底部以外に灰軸が掛けられている。カンテラは、西洋の金属製のカンテラを陶器で模倣したものである。片口と両口のものがある。注口部から灯芯を出す。多量に油が入るので、長時間の使用に適し、また、握り手が付いているので持ち運びに便利で、火を灯す以外に油差しとしても使用していた。10は、灯明台である。口径5.2cm、器高3.3cm、底径4.2cmを測る。内面受

部から外面底部まで灰釉が掛けられている。内面と底部は無釉である。また、受けの部分に半月状の切り込みがある。11は、明焼播鉢である。口径20.4cm、器高7.8cm、底径8cmを測る。口縁部は外へ大きく張り出し、断面が三角形に近い形をしている。外面の調整は、底部から口縁部外縁帯や下まで、丁寧に回転ヘラケズリ調整を施している。胎土に0.2cm位の礫を多く含み、内面の播目は、11本を1単位とし密に入れている。白神典之氏の種類(白神1990年)Ⅲ類に属する。12は、丹波焼播鉢である。口径31.5cm、器高13.6cm、底径14.7cmを測る。口縁部は内傾し、口縁部端部は平坦で、断面が「T」の字状になり、内面には塗土が施されているが、それ以外は無釉である。内面体部の播目は8本を1単位とするものを密に施し、見込みの播目は溝巻き状に入れている。また、底部には胎土目が一部残っている。大平 茂氏の編年Ⅹ期に属する。

ここでも、遺物が大量に出土したため、産地別・用途別構成比を作成した(第226・227図)。グラフをみると産地では、京焼系(伊賀・信楽焼)のものが大半で、用途別では、調度具・調理具が多い事がわかった。調度具別で見ると、大半が灯明皿であった。そのほかの結果については、第4章第4節の遺物計測および分析結果をみていただきたい。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀後半と考えられ、Ⅲ-3b期に属する遺構である。

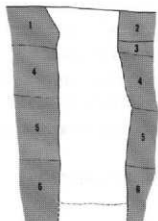
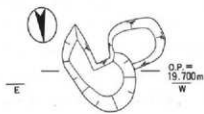
5. 第3次面の遺構と遺物

第3次面は、第1次面で検出した東側の2棟の建物(SB01・04)とはほぼ同範囲で三和土を検出した。また、その東側には多くの廃棄土壌を検出し、裏庭となっていたと思われる。さらに、大きな焼土土壌を検出した。出土遺物から享保14年(1729)の北少路村の大火災の際の処理土壌と思われ、三和土を切って作られているため、この面で大火災が発生したことがうかがえる。また、三和土が敷かれる年代だが、三和土の下面の遺構(SK527)の年代が17世紀後半までで、それ以降に敷かれたと思われる。

SE02

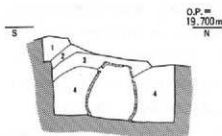
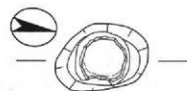
SE02は、北壁付近中に位置する(第12図・図版5)。平面形は不整形を呈し、長径1.45m、深さ3m以上を測る。筒型に掘られている、素掘りの井戸である。また、埋土から井戸砕瓦が出土したため、上部は瓦積みではないかと思われる。また、遺物も18世紀代のものがまとまって出土した。

第14図—1～3は、肥前磁器である。1は、染付碗である。口径11.6cm、器高6cm、高台径4.7cmを測る。体部は全体的に薄く、丸碗のようであるが外側へやや張っている。口縁部には口鉋を施している。高台は、下部が外へ張り、断面が「ハ」字形になっている。文様は、成り物の葉文が描かれている。高台登付は露胎である。2は、筒型染付碗である。口径7.6cm、器高5.7cm、高台径3.9cmを測る。外面に矢羽根文・山形文、内面口縁部に四方摩文を描いている。見込みにみえる五弁花は手書きによる。高台登付は露胎である。3は、青磁染付碗の蓋である。口径9.7cm、器高2.7cm、つまみ径4.1cmを測る。内面口縁部に四方摩文、内面中央にコンニャク印判によって五弁花が描かれている。1～3は、大橋康二氏の編年Ⅳに属する。4は、伊賀・信楽焼土壌である。口径15cm、器高4.5cm、底径5.6cmを測る。口縁部と外面底部以外に、灰釉が掛けられている。底部に脚が3カ所付けられている。5は、瀬戸・美濃焼皿である。口径12.2cm、器高2.3cm、高台径5.6cmを測る。全体に灰釉を掛け、口縁部を波状にしている。6～9は、土師質土器である。6は、柿輪仏花瓶である。底径9.2cmを測る。ロクロ成形で、底部は平坦である。外面から内面中程まで柿輪を施している。底部には左回転糸切り痕がみられる。7は、皿である。口径7.6cm、器高1.85cmを測る。手ずくね成形で、内面は丁寧にナデ調整を施し、外面には指頭瓦痕がみられる。IT(伊丹郷町期)・1型式A類に属する。8は、焙烙である。口径33.6cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプである。口縁部内外面はヨコナデ調整、外



1. 明褐色粘質土層 7・5 Y R 5/6
2. 明褐色粘質土層 7・5 Y R 5/6 (藍土)
3. 明褐色粘質土層 7・5 Y R 5/6 (藍土)
4. 黄褐色砂層 10 Y R 8/8
(1~15cm大の礫多量に含む)
5. 黄褐色砂質土層 10 Y R 5/8
(1~15cm大の礫多量に含む)
6. 黄褐色砂層 10 Y R 5/8

第12図 SE02遺構図



1. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y 6/6
2. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 4/4
3. 黄色砂質土層 5 Y 8/6
4. によく黄褐色砂質土層 10 Y R 5/4

第13図 SY14遺構図

面底部は未調整である。また、体部と底部の境目をヘラケズリによる面取りを施している。難波洋三氏の分類E類に属する。9は、風炉である。口径24.6cm、器高25.2cm、高台径24.6cmを測る。粘土円盤に粘土紐輪積み成形後、脚部を粘土輪積み成形している。外面はナデ調整、内面は軽くナデ調整を施している。脚には沈線がみられ、下部に2カ所半月状の切り込みがある。また、体部内面には突起があり、穿孔が1カ所ある。

第15図-1は、井戸枠瓦である。全長31.4cm、幅26.7cm、厚さ5.8cmを測る。体部に矢先のようなタキ目を2列入れている。また、「金岡瓦宗」の刻印がみられる。「金岡」は、伊丹町の北西部に当たる大広寺村地内の字名である。伊丹の総氏神である猪名野神社の祭礼に関する記録の、天保十二年(1841)の項に、金岡に「金岡瓦屋宗次郎」の名が記載されており、金岡で瓦屋を営んでいることがわかった(藤井1989年)。「金岡瓦宗」は、「金岡瓦屋宗次郎」の略号と思われる。

出土遺物を概観すると、18世紀前半~18世紀後半と考えられる。III-2 b 期に属する。

SY14

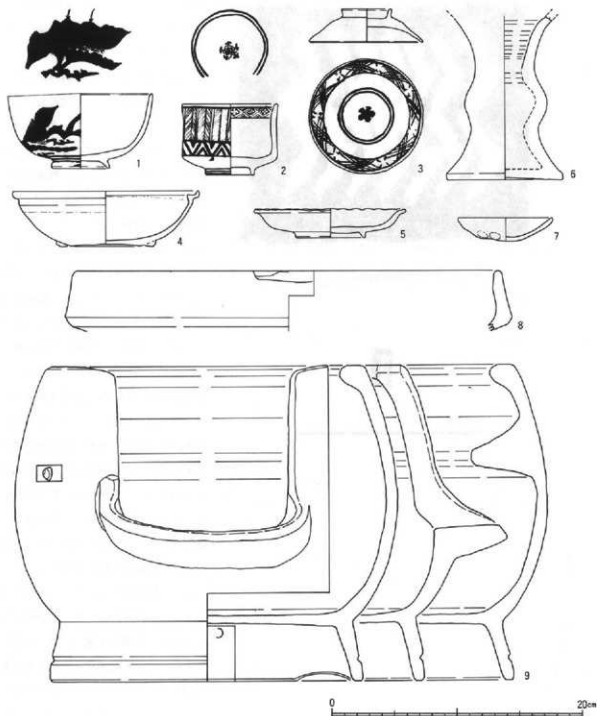
SY14は、調査区北側中央付近に位置する(第13図・図版6)。水琴窟遺構である。平面形は楕円形を呈し、0.48m、幅0.33m、深さ0.29mを測る。甕をただ逆さまにしただけの簡単なものである。この遺構の年代観から、SB01に伴うものと思われる。また、この遺構の北側にも水琴窟(SY04)を検出したが、SY14の方が古く、作りかえられた際に場所も移動したと思われる。

第15図-2は、丹波焼甕である。口径23.8cm、器高29.2cm、底径13.8cmを測る。口縁端部は平坦で、断面形が「T」の字形をする。体部中央から肩部の張りは強いが、体部下はスマートである。内面から外面にかけて塗土を施し、その後、外面口縁部に灰釉を掛けている。外面底部は無釉で、中央に直径2cmの孔がみられる。この孔は、水琴窟として使用する際に開けられたと思われる。檜崎彰一氏の編年(檜崎1977年)江戸IV期に属する。

出土遺物を概観すると18世紀末~19世紀前半と考えられる。III-3 a 期に属する。

SD05

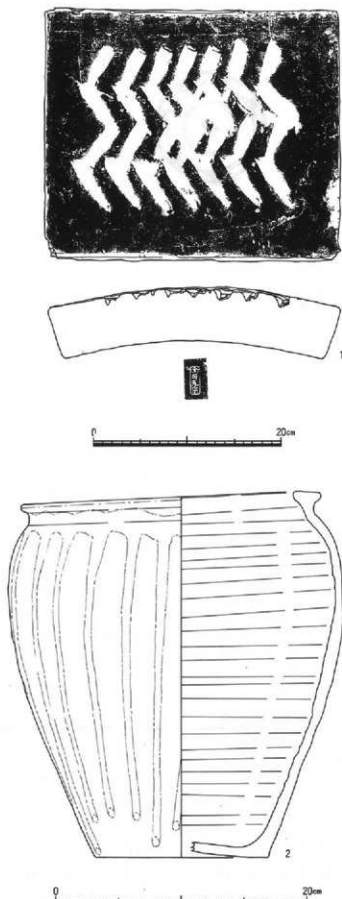
SD05は、調査区西壁付近中央に位置する(第16図・図版6)。長さ6m以上、幅0.44m、深さ0.24mを測る。屋敷境石積溝である。40cm位の花崗岩が2段に積み上げられていた。東側にあるSD02に通じるかどうかはわからない。同時期には作られたと思わ



第14図 SE02出土遺物

れるが、SD05は19世紀前半には埋められていることがわかった。図化した遺物は溝内から出土したものである。

第18図一1～3は、肥前磁器である。1は、染付碗である。口径10.2cm、器高5.7cm、高台径4.1cmを測る。器形は薄く、呉須の発色は良好で、文様は丁寧に描かれ、外面体部は花唐草文、内面口縁部は四方禪文、見込みには牡丹唐草文である。体部には焼継ぎ痕があり、高台畳付は露胎である。2は、染付蓋である。口径9.2cm、器高2.6cm、つまみ径3.4cmを測る。1に伴うものである。有田周辺の窯の製品と思われる。3は、染



第15図 SE02 (1)・SY04 (2) 出土遺物

付碗である。口径10cm、器高5.2cm、高台径3.6cmを測る。1・2と同様に、非常に丁寧に作られている。外面の文様は区画割り草花文で、見込みにも菊文が描かれている。これと同じものかもう1個出土している。1～3は、大橋康二氏の編年IV期に属する。4は、瀬戸・美濃焼双耳壺である。外面体部は口縁部下から中程まで灰釉が掛けられ、それ以外は無釉である。5～9は、土師質土器である。5・6は、皿である。5は、内面に柿釉が掛けられ、口縁部に灯芯底がある、いわゆる、柿釉灯明皿である。口径6.3cm、器高1.2cmを測る。ロクロ成形で、底部には左回転糸切り痕がみられる。6は、口径7cm、器高1.8cmを測る。胎土は浅黄褐色を呈し、やや厚手である。手づくね成形で、内面はナデ調整、外面には指頭圧調整を施している。口縁部に灯芯底がみられ灯明皿として使用していたと思われる。IT (伊丹町期) 1型A類に属する。7は、焙烙である。口径20cmを測る。口縁部と底部が突出るタイプである。器形はやや小さく、薄手である。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整を施し、外面底部は未調整である。難波洋氏の分類G類に属する。8は、ミニチュア土製品である。高さ5.1cm、幅4.3cm、厚さ2.3cmを測る。形は鐘楼と思われる。鐘楼は箱庭道具として使用されていた。成形は型合わせ成形で、合わせ目をヘラケズリしている。全体に雲母が付着している。9は、風炉である。口径20.4cm、器高20.1cm、高台径22.6cmを測る。成形は、体部を粘土紐輪積み成形し、その後、全体に回転ナデ調整し、底部に

半月状の切込みと陰刻文を入れている。外面全体には赤色泥土を塗り、体部内面には突起をハリツケ、孔を入れている。また、穿孔には針金が巻いてあった。

出土遺物を概観すると、18世紀末～19世紀前半と考えられる。Ⅲ-3 a～3 b期に属する。

SK305

SK305は、SD05の北隣に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ3.22m、幅2.43m、深さ0.28mを測る。

第18図-10は、唐津系陶器刷毛目文碗である。口径10.8cm、器高2.43cm、高台径3.8cmを測る。体部全体に白化粧土による刷毛目文様を施している。高台畳付は露胎である。11は、埴野焼皿である。口径12cm、器高3.4cm、高台径4.1cmを測る。内面から外面体部にかけて青緑釉を掛け、見込みには蛇ノ目軸ハギを施している。

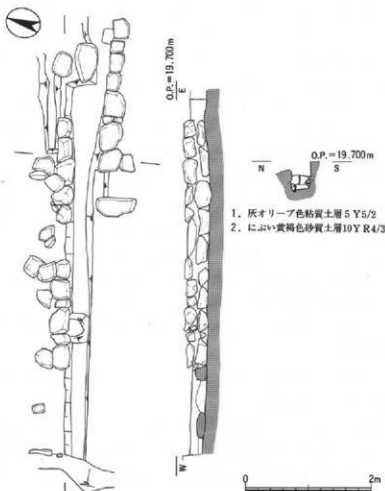
高台は無軸である。10-11は、大橋康二氏の編年IV期に属する。12は、丹波焼鉢である。口径11cm、器高6.85cm、底径9cmを測る。体部に耳部がみられ、おそらく双耳と思われる。また、内面には煤が付着していることから、火入れとして使用していたと考えられる。16は、丹波焼播鉢である。底径17cmを測る。外面体部にユビオサエ痕がみられる。内面体部の播目は8本単位を呈し、見込みは中心に8本単位の播目を「+」に入れた後、外周に円を描いている。大平 茂氏の編年V期に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀前半～18世紀中頃と考えられる。Ⅲ-2 b期に属する。

SK340

SK340は、調査区中央やや東南部に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ6.5m、幅3.22m、深さ0.68mを測る。焼土処理土壌である。上述したが、出土遺物から享保十四年(1729)の北少路村の大火災の処理土壌と思われる。また、三和土を切って作られており、3次面の三和土の時期はこの頃と思われる。

第18図-13・14は、肥前磁器染付碗である。13は、口径10.4cm、器高5.95cm、高台径4cmを測る。外面の文様は草花文である。火災に遭ったためか全体的に変色している。高台畳付は露胎である。14は、口径11.8cm、器高7cm、高台径5.4cmを測る。13より体部が厚く、高台脇から腰部がやや張っている。文様は草花文である。高台畳付は露胎で砂が付着している。13・14もいわゆる「くらわんか手」のもので、大橋康二氏の編年IV期に属する。15は、肥前磁器皿である。口径9.9cm、器高3.15cm、高台径3.8cmを測る。見込みには蛇ノ目軸ハギが施され、口縁部は無軸である。これも、大橋康二氏の編年IV期に属する。



第18図 SD05遺構図

1. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y5/2
2. 赤い黄褐色砂質土層 10 Y R 4/3

第19図-1は、丹波焼塋である。口径43cmを測る。口縁端部の断面が「T」字形で、上部には3本の沈線がみられる。また、内外面に塗土が施され、その後、外面には灰軸が掛けられている。2~4は、瓦である。2は、菊文軒丸瓦である。全長(残)6cm、瓦当部径8.2cm、内区径6.8cm、周縁幅0.7cm、瓦当部厚1.5cmを測る。調整は、瓦当周縁部および瓦当表面周縁部は、周縁に沿ってナデ調整、瓦当表面はナデ調整を施している。瓦当部と丸瓦部の接合部は、凸面は縦方向にヘラケズリ調整がみられる。瓦当面には雲母が付着している。3は、軒平瓦である。全長(残)8cm、瓦当部高4.1cm、上周縁幅1cm、文様区幅2.2cm、顎下部厚1.2cm、顎上部厚2.5cmを測る。調整は、周縁部は周縁に沿ってナデ調整、瓦当表面はヨコナデ調整、平瓦部表面は未調整である。また、平瓦部凹部は瓦当部から縦方向にナデ調整がみられる。文様は、均整唐草文である。中心飾は花卉文で、唐草は葉先が下向きに反向き、文様の出もはっきりしている。また、火災に遭ったためか全体的に変色している。4は、丸瓦である。全長(残)19.3cm、玉縁部長4.5cm、体部幅14cm、玉縁部幅11cm、厚さ2cmを測る。調整は、玉縁部は円周に沿ってナデ調整、丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリ調整を施し、丸瓦部凹部に布目がみられる。5は、「寛永通寶」である。直径3.4cm、厚さ0.1cmを測る。古寛永通寶で、寶の字の貝画末尾が「ス」である。背文はみられない。

出土遺物を概観すると、古寛永通寶以外は、17世紀末~享保14年(1729)まで、III-2 a 期に属する。

S K 246

S K 246は、調査区北壁付近中程に位置する(第17図)。平面形は不整形を呈し、長さ0.84m以上、幅0.84m、深さ0.35mを測る。

第19図-6・7は、肥前磁器である。6は、染付仏飯具である。口径6cm、器高5.3cm、底径3.4cmを測る。全体的に厚手で、呉須の発色も悪い。外面の文様は笹文である。底部は無軸である。7は、筒型染付碗である。高台径3.9cmを測る。外面に、山形文・矢羽模様が描かれている。高台登付は露出である。6・7は、大橋康二氏の編年V期に属する。13は、瓦質土器流し台である。長辺(残)86.3cm、短辺48.3cm、厚さ3.6cmを測る。成形は、長方形の粘土板を2枚重ねて底部を成形し、その上に、2枚重ねた板状の粘土をハリツ

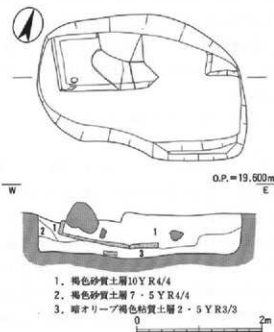
ケ側面体部を成形している。その後、接合部を粘土を足して補強しナデ調整している。また、内面には、水落としの穴が1カ所あり、それに通じる溝が3条みられる。これらは、成形後ヘラによって陰刻している。瓦質土器流し台は、宮ノ前地区では他に例はなく、非常に珍しい。当時はまだ木製のものが主流だったと思われる。

出土遺物を概観すると、18世紀後半~19世紀初頭と考えられ、III-3 a 期に属する遺構である。

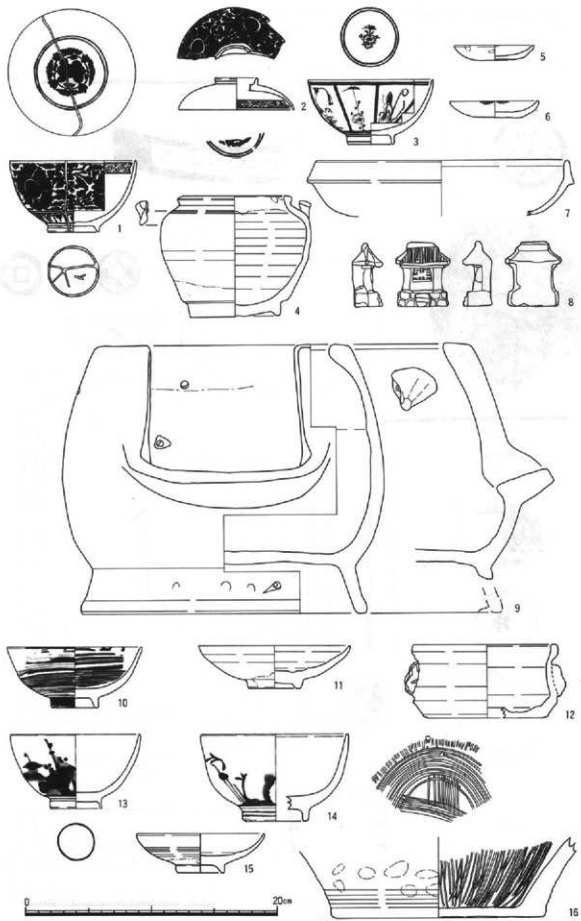
S K 270

S K 270は、S E 02の東側に位置する(表1)。平面形は楕円形を呈し、長さ1.04m、幅0.66m、深さ0.6mを測る。

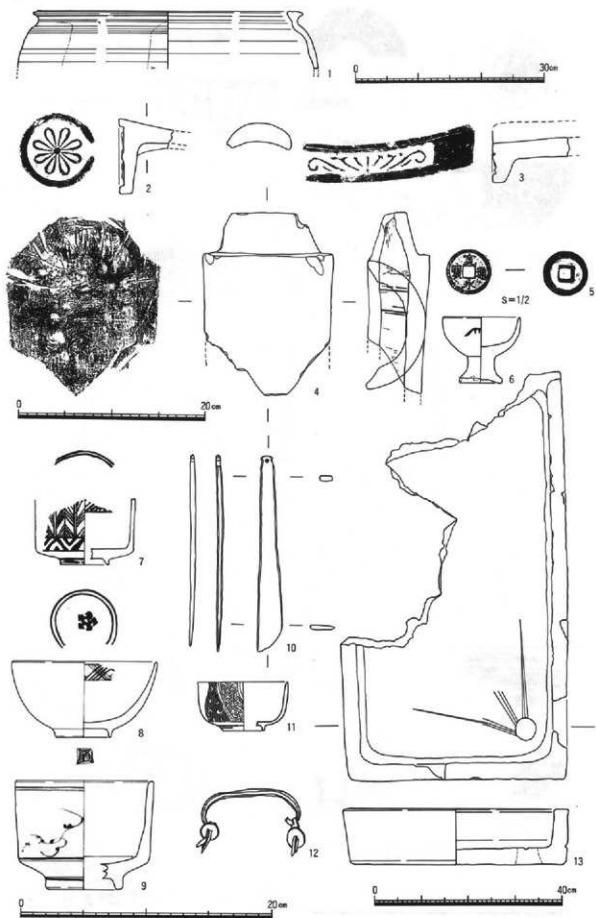
第19図-10は、骨製ヘラである。長さ15.3cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmを測る。動物の種類はわからない。緻密できめ細かく丁寧に作られている。11は、肥前磁器赤



第17図 S K 246遺構図



第10圖 S D05 (1~9)・S K305 (10~12・16)・S K340 (13~15) 出土遺物



第19图 SK340 (1~5) · SK246 (6·7·13) · SS332 (8·9) · SK270 (10~12) · SV234 (14) 出土遺物

検碗である。口径7.2cm、器高3.9cm、高台径2.4cmを測る。全体的に薄く小型の碗である。墨弾きによる唐草文と七宝文を描いている。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年IV期に属する。12は、銅製握手である。長さ7.8cm、幅4.6cm、厚さ0.6cmを測る。本体と繋ぐ飾りは円形で、中心から銅製の足が2本通っており、それを体部に通し折曲げると思われる。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。III-3 a 期に属する。

6. 第2次面の遺構と遺物

第2次面では、第1次面と同じ場所に三和土を検出した。このうち、S B07・10・14は礎石・礎石痕を検出できなかったが、S B07・10は1次面で検出したS B01・04の前身の建物だったと思われる。S B06は、1次面の土蔵の下になるが、この時期は建物だったことがわかった。後述する第1次面と同様に、北西部は石積溝から南側で、S B10とS B06は中庭で繋がった建物で建っていたと考えられる。その他の建物については順に説明したいと思う。

S B08

S B08は、調査区北西部に位置する(第20図・図版6)。桁行2間半(4.92m)、梁行2間半(4.92m)の礎石建物である。第1次面のS B02とはほぼ同範囲で三和土を検出したが、様相が異なる。南西隅からは、便所と考えられる木桶を埋めた遺構SU141が出土した。この埋桶遺構は、掘形遺物の年代が18世紀後半～19世紀前半であり、この頃に建物も、建てられたと思われる。また、南側には、庭石を検出したことから庭だったと考えられる。III-3 a 期に属する。

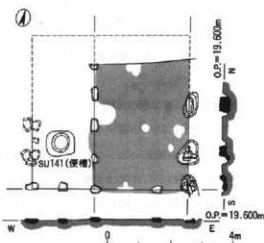
S B09

S B09は、S B08の西側に位置する(第21図・図版6)。桁行1間半以上(2.995m)、梁行3間半以上(6.3m)の礎石建物である。この建物の三和土の下の遺構(S K305)の年代が、18世紀前半～19世紀前半であり、それ以降に建てられたことがわかる。また、この建物の三和土を切って作られた防空壕(S X152・153)の年代観が、第2次大戦頃なので、この頃には存在し、その後取り壊されていたと思われる。

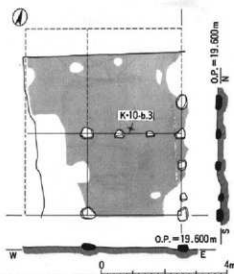
S V234

S V234は、S B10の北西側に位置する(第22図・図版6)。長さ2.75m、幅0.75m内で、竈の底部を検出した。残存状態が悪く底部のみだが、4基の燃焼室を確認した。

第26図-1は、土師質土器皿である。口径6.5cm、器高1.15cmを測る。ロクロ成形で、内面は丁寧に回転ナデ調整を施し、外面底部には右回転糸切り痕がみられる。口縁部には灯芯痕がみられることから、灯明皿として使用していたと思われる。図化しなかったが、その他に、肥前磁器コンニャク印判文碗



第20図 S B08遺構図



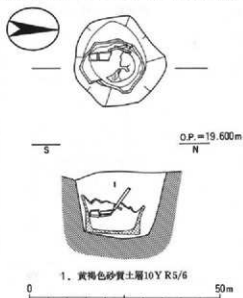
第21図 S B09遺構図



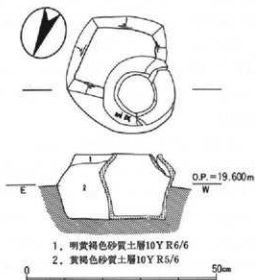
第22図 S V234遺構図

納められていた。墨と筆を納める意味は、男子医生の場合、生活上で必須な読み書きの上達を願って納めたと考えられている。

第26図一5・6は、土師質土器火消壺と蓋である。5の蓋は、口径15.4cm、器高4cm、つまみ径3.9cmを測る。粘土円盤に粘土紐輪積み成形し、天井部内面と口縁部を回転台を利用してヨコナデ調整を施している。その後、つまみ部をハリツケし、その周辺をナデ調整している。6は、口径12.2cm、器高18.6cm、底径14.4cmを測る。肩部から体部は算盤玉形をしているが、肩部はやや内湾するがそなりに強くない。外型作り分割成形である。外面は回転台を利用し、丁寧にヨコナデ調整を施している。また、接合部と外面口縁部をヘラケズリ調整している。また、内面に黒色物(胎衣を包んだ布か?)が付着していた。肩部には「いと?」の墨書がみられる。5・6ともに、川口安海氏の編年(川口1989年一a) II-2期に属する。3は、筆である。



第23図 S I11遺構図



第24図 S I05遺構図

などが出土した。

出土遺物を概観すると、18世紀前半～18世紀後半と考えられる。III-2b期に属する。

S I11

S I11は、調査区東側中程に位置する(第23・図版6)。掘形の平面形は円形を呈し、掘形は直径0.23m、深さ0.18mを測る。この北側でも胎衣壺(S I12)を検出し時期も同年代である。胎衣壺は伊丹舞町出土の場合、間口・通り庭・床下・裏庭で出土することが多い(川口1989年一a)。この遺構の年代観からS B04に伴うものと考えられ、床下に埋められていたと思われる。また、壺内には墨と筆が

先端部の残存長5.7cm、厚さ0.6cm、体部の残存長16.5cm、厚さ0.7cmを測る。竹製のものである。体部には黒色となった紙が貼りついている。筆は竹製製品のため、遺存状態が特殊な環境でない限りは残らず、検出できたことは好運であった。4は、墨である。長さ8.9cm、幅2.5cm、厚さ0.9cmを測る。これも残存状態が良好であった。表には「國王□」の文字、裏には城郭が型押しによって成形されている。

出土遺物を概観すると19世紀前半と考えられる。III-3 b期に属する。

S 105

S 105は、調査区北東部に位置する(第24図・図版7)。掘形の平面形は不整形を呈し、掘形の大きさは長さ0.31m、幅0.27m、深さ0.16mを測る。S B02と同時代と思われ、また、床を切って出土しているため建物内に埋められていたと考えられる。

第26図一7・8は、土師質土器火消壺と蓋である。7は、口径14.8cm、器高2.6cmを測る。成形はS I 11の壺と同様である。8は、口径11.8cm、器高17.1cm、底径14.8cmを測る。肩部から体部は算盤玉形をしているが、肩部が短い。成形は外型作り分割成形である。調整はS I 11と同様である。肩部に「三又」の墨書がみられる。7・8ともに、川口宏海氏の編年II-2期に属する。

出土遺物を概観すると19世紀前半と考えられ、III-3 b期に属する遺構である。

S 108

S I 08は、南壁沿い南東隅に位置する(第25図)。掘形の平面形は楕円形を呈し、長さ0.35m、幅0.27m、深さ0.43mを測る。遺物の年代観から、S B04に伴うものと考えられることから、通り庭に埋められていたと思われる。

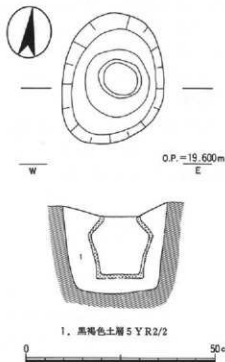
第26図一9・10は、土師質土器火消壺と蓋である。9は、口径12.1cm、器高3.25cmを測る。S I 11・05と器形・調整は同じである。内面に黒色物が付着している。10は、口径11.7cm、器高18.8cm、底径13.8cmを測る。これもS I 05と器形・調整は同じである。体部には「ニキ」の朱書がみられる。9・10共に、川口宏海氏の編年II-2期に属する。

出土遺物を概観すると19世紀前半と考えられ、III-3 b期に属する遺構である。

S 109

S I 09は、S I 08の北西隣に位置する(第27図・図版7)。掘形の平面形は楕円形を呈し、長さ0.43m、幅0.35m、深さ0.37mを測る。これもS I 08と北西隣から出土したことから、通り庭に埋められていたと思われる。また、壺と一緒に丹波焼徳利が埋められていた。

第30図一1・2は、土師質土器火消壺と蓋である。1は、口径15cm、器高4.1cm、つまみ径4.1cmを測る。成形は上記の壺と同じである。内面には黒色物が付着している。胎土に雲母を含む。2は、口径12.5cm、器高18cm、底径13cmを測る。器形は上記のものといっしょで算盤玉形をしているが、肩部と体部の接合部は大きく外へ張り出している。外面は、丁寧に回転ヘラナデを施し、内面にはナデ調整がみられる。内面底部に黒色内容物が付着している。1・2は、川口宏海氏の編年II-2期に属する。3は、丹波焼徳利である。口



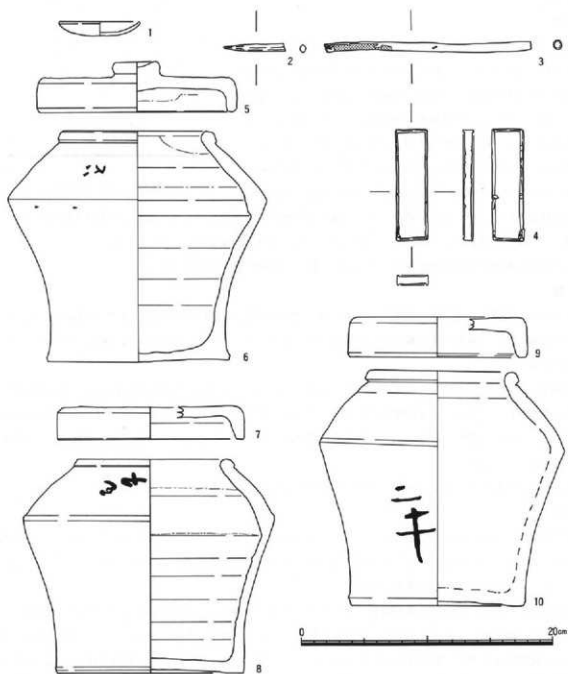
第25図 S I 08遺構図

径3.8cm、器高24.9cm、底径9.7cmを測る。口縁端部は外側へやや張り丸味がある。体部は大きく外へ張りだし、下部に重みを感じられる。器形からみて提げ徳利と思われる。外面全体に塗土が掛けられているが、内面と底部は無釉である。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀中頃と考えられる。III-3 b期に属する遺構である。

SW186

SW186は、調査区南東隅に位置する(第28図・図版7)。掘形の平面形は楕円形を呈し、長さ0.45m、幅0.35m、深さ0.12m、内矩の長さ0.3m、深さ0.06mを測る。出土遺物の年代観からSB04と同年代と考えられる。甕内には油状の付着物がみられる。付着物の成分分析結果は、次回に報告したい。



第28図 SW234 (1)・SI11 (2～6)・SI05 (7・8)・SI08 (9・10) 出土遺物

第30図-4は、信楽焼甕である。底径20.4cmを測る。底部しか出土しなかったが、体部内外面に鉄軸が掛けられている。外面底部は無軸である。内面には付着物がみられる。

出土遺物を概観すると、19世紀前半と考えられる。Ⅲ-3 b期に属する。

SK80

SK80は、調査区北東部に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ1m、幅0.72m、深さ0.36mを測る。

第30図-5は、肥前磁器染付碗である。高台径3.9cmを測る。呉須の発色はやや薄い。外面に一直綱目文が描かれている。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。その他に、信楽焼せんべい壺が出土したが、震災によつて行方不明となった。

出土遺物を概観すると、17世紀後半と考えられ、Ⅲ-2 a期に属する遺構である。

SK38

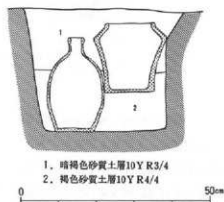
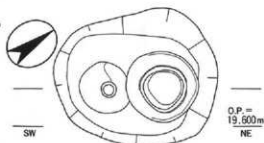
SK38は、調査区北東隅に位置する(第29図)。平面形は長方形を呈し、長辺2.3m、短辺0.96m、深さ0.3mを測る。方形の遺構内壁には粘土層に平瓦を埋め込み、その西側には10cm大の礫石が敷かれていた。遺構内からは多量の遺物が出たため、調査時は土壌でとらえた。しかし、遺物の年代観から、SB01に伴うもので、三和土を切って作られており、位置的には座敷下あたることから、地下室ではないかと考えられる。

第30図-6は、肥前磁器染付皿である。口径6cm、器高2.1cm、高台径3cmを測る。外面には笹文が描かれている。高台登付は露胎である。大橋康二氏の編年Ⅳ期に属する。8は、明石焼播鉢である。口径27cm、器高9.8cm、底径12cmを測る。胎土は赤褐色を呈し、1cm程の礫を含む。底部から口縁部外縁帯直下まで回転ヘラケズリを施している。播目は、内面に8本単位で、見込みには放射状に7本単位で施している。回転台は右回りである。白神典之氏の分類Ⅱ類に属する。7は、左巻き三巴文軒丸瓦である。全長(残)6.2cm、瓦当部径14.2cm、文様区径10.4cm、周縁幅2.2cmを測る。文様の突出度は高く、巴文は全体的に太めで、稜をなす。調整は、瓦当周縁部はヘラミガキ調整、丸瓦部凸面はヘラケズリ後、ヘラミガキ調整を施している。また、瓦当表面周縁部は周縁に沿ってナア調整、瓦当部と丸瓦部の接合部にはナア調整がみられる。

出土遺物を概観すると、18世紀中頃~18世紀後半と考えられ、Ⅲ-2 b期に属する遺構である。

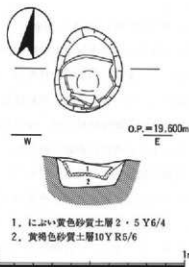
SK198

SK198は、SK234が埋め戻された後、その上面につくられた廃棄土壌である(表1)。平面形は不整形を



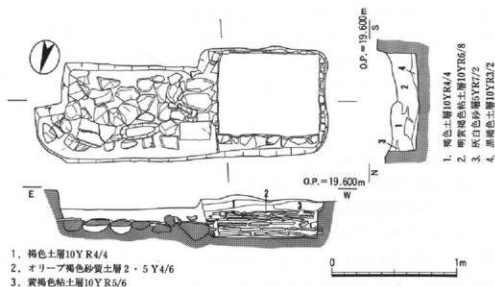
1. 暗褐色砂質土層10Y R3/4
2. 褐色砂質土層10Y R4/4

第27図 SI09遺構図



1. 濃い黄色砂質土層2・5 Y6/4
2. 暗褐色砂質土層10Y R5/6

第28図 SW186遺構図



第29図 S K38遺構図

呈し、長さ0.62m、幅0.58m、深さ0.3mを測る。

第31図は、土師質土器風炉である。口径26.4cm、器高23cm、高台径25cmを測る。調整は、上記した第3次面S E02（第12図）のものと同じだが、これは外面体部を丁寧にヘラミガキ調整している。器形は、窓部は、体部を半月状に切り開いたものである。内面に煤が付着している。その他の出土遺物は、少量であったが、肥前磁器染付碗（大橋康二氏の編年IV・V期）のものがみられた。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。III-3 a 期に属する遺構である。

7. 第1次面の遺構と遺物

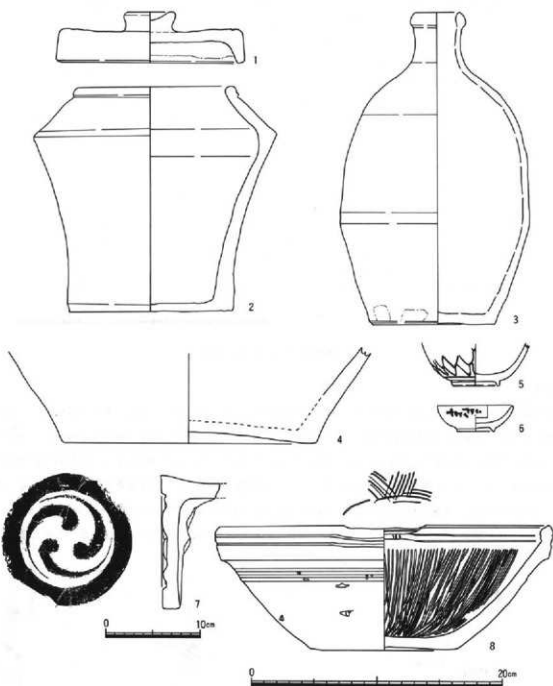
第1次面では、19世紀中頃以降の遺構面である。三和土は、東側開口付近と第2次面S B08とはほぼ同範囲でみられた。東側の猪名野神社参道（現・宮ノ前商店街通り）に面して、S B01・S B04があり、北西側にS B02があって、合計3棟の礎石建物が確認された。屋敷地制は、中央の石積溝（S D02）から北側は本来別であるが、北側屋敷地中程に塀の基礎となる南北方向の掘削の溝状落ち込み（S E01の西に隣接）があって、これより北西部は南側の屋敷地につながっていたことを関係者から聞くことができた。すなわち、北西部は南側の屋敷主が買取り、所有していたものと考えられる。また、S B01・S B04は既存建物である。S B04の西側には土蔵S B14・S B15が建てられており、このうちS B15は、コンクリート基礎をもっているため、近代に建てられた土蔵と考えられる。S B08の後身の建物S B02は、立派な庭園を持つ建物であることもわかった。また、S B09はこの面ではすでになくなっていた。

S B01

S B01は、S D02の北東側に位置する（第32図・図版7）。東側を開口とする礎石建物である。桁行3間半（南北6.89m）、梁行7間半（東西14.76m）を測る。既存建物で厨子二階の建物である。西側奥には、井戸や水琴窟・便所が出土しこれに伴うものである。根石S K05から19世紀中頃の遺物が出土しており、このころに建築された建物である。III-3 b 期～IV期に属する。

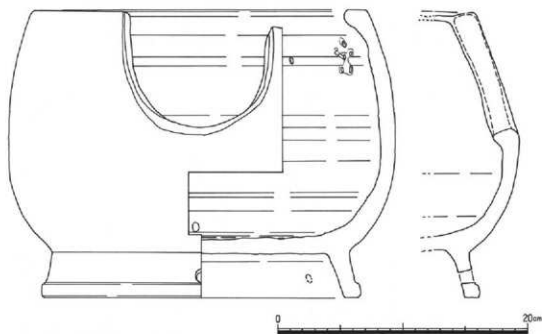
S B02

S B02は、2次面で検出したS B08とはほぼ同じ範囲に位置する（第33図・図版8）。桁行4間半（東西8.86m）、梁行2間半（南北4.992m）を測る。S B08は前身の建物と思われ、建て替えられていることがわかっ



第10図 S I 09 (1~3)・SW186 (4)・SK80 (5)・SK38 (6~8) 出土遺物

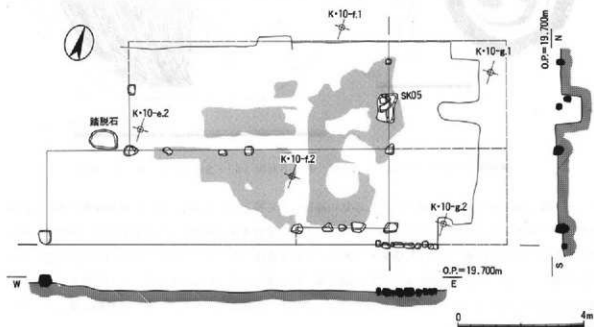
た。その際、規模を拡大し、西側を広げL字状の建物に立て替えられている。また、建物南側の床部に深喉が敷かれてあり、その南側に沓脱石を検出した。おそらく建物南側は縁側だったと思われる。西側には水琴窟 (SY19) やそれに通じる飛石が置かれており、立派な庭園であった。また、これらの上に20cm近く焼土層が堆積していた。これは、昭和30年に宮ノ前市場一帯が火災に遭った時のもので、この建物もこの火災で焼失したと考えられる。昭和36年の航空写真ではここはすでに庭になっており、その後建物は建っていない事がわかった。IV期に属する。



第31図 SK198出土遺物

SB04

SB04は、SD02の南東側に位置する(第34図・図版9)。これもSB01と同様、東側を開口とする礎石建物である。桁行6間半(南北約12.6m)、梁行4間以上(東西約7.98m)を測る。検出した礎石は、根石をもっており、これもSB07と同様駢子二階の建物である。SB01に比べるとやや大きいため根石を必要としたと思われる。中には墨書があるものもあった。この建物の間取りが、伊丹市史に記載されている(第35図)。それを見ると、北側は居室部になっており、居室部分は食い違い四間取りになっていることがわかる。調査でもこれを確認した。また、この建物に伴う脆衣甕のうちSI02・03・11・12は、出土した位置的が仏



第32図 SB01遺構図

間部分にあたと考えられ、産屋として利用された床下に埋められることがあり、おそらく、この部屋はそれにあたとと思われる。さらに、南側は通り庭になっているが、ここからも陶衣壺S I 08・09が出土し、その西側から井戸も検出した。SB 14・15はこの建物に伴うものであり、さらに、これらの建物間に池遺構(S X 01)を検出したことから、その間は庭部だったと思われる。III-3 a 期からIV期に属する。

S S 332

S S 332は、調査区中程に位置する

(表1)。根石遺構である。この遺構は、第1次面のSB 04に伴う礎石で、この年代観がSB 04の築造年代と考える。10~40cm位の花崗岩石を7個を置き、石と石の間に小石混じり褐色粘質土を詰めていた。

第19図-8は、肥前青磁染付碗である。口径11.8cm、器高6.1cm、高台径4.4cmを測る。呉須の発色は良好で、内面口縁部に四方學文、見込みにはコンニャク印判による五弁花が描かれている。また、高台内に二重方形枠内に簡素な渦文がみられる。高台壘付は露胎である。9は、肥前陶胎染付筒型碗である。口径11cm、器高8.8cm、高台径6cmを測る。体部は厚く、全体の釉の発色は黒帯びている。外面に唐草文が描かれ、高台壘付は露胎である。8・9は大橋康二氏の福年V期に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀末~19世紀前半と考えられる。この他に出土遺物がなかったため、建物の築造期を決めるのは難しいが、18世紀末~19世紀前半が上限期と思われる。III-3 b 期に属する遺構である。

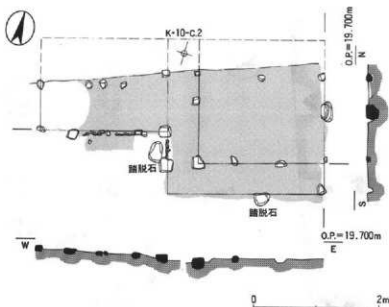
SB 14

SB 14は、SB 04の西隣に位置する(第36図・図版9)。桁行3間半(南北約6.89m)、梁行2間(東西3.9m)を測る。土蔵建物である。基礎は、10~40cm大の花崗岩を下部に敷き、その上に漆喰張り、さらにその上部を40cm位で外側は平滑な切石を二段積み上げている。基礎石の下に19世紀後半の土壌SK 228があり、これ以降に建てられたものである。また、その西側ではコンクリートの基礎を持つ土蔵(SB 15)が建てられていた。これは20世紀初頭以降の建物でもある。SB 14は、SB 04に伴うものである。いずれもIV期に属する。

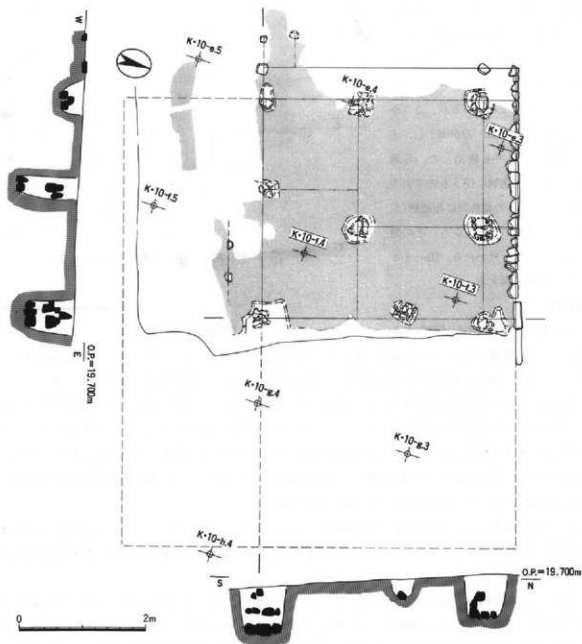
SY 04

SY 04は、北壁沿い中央に位置する(第37図・図版9)。楕形の平面形は円形を呈し、直径0.78m、深さ0.92m、内径の直径0.58m、深さ0.52mを測る。水琴窟の構造は、外部はなにも施されていないが、内部に長さ約75cmの鉄製棒が中央に刺さっていた。おそらく、共鳴棒ではないかと考えられる。こういう例は初めてである。また、この北西隣に、便槽遺構を検出したことから、便所使用後の手洗い排水処理として使われたと思われる。

第39図-1は、大谷焼大甕である。口径67.5cm、器高87cm、底径23.9cmを測る。3段分割成形である。口縁部端は平垣になり、断面は「T」字状である。外面は丁寧に鉄輪が掛けられ、内面は軽く刷毛塗りされている。底部は無輪である。川口宏海氏の大谷焼分類(川口1995年)II類に属する。



第39図 SB 02遺構図



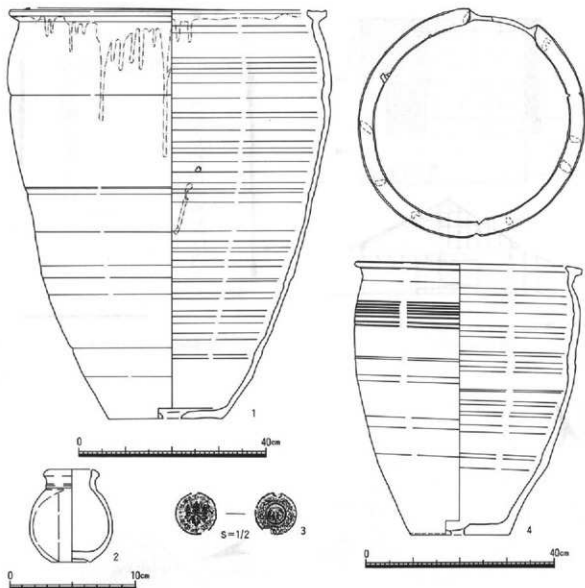
第34図 SB04遺構図

第42図一6・7は、鉄製棒である。7は、長さ75.35cm、厚さ0.8cmを測る。先端部は何かにつ引っ掛けるようにリング形に折り曲げてあり、もう一方も折り曲げてある。6は、長さ43.75cm、幅2.2cm、厚さ1.2cmを測る。板状の棒である。

出土遺物を概観すると19世紀中頃～19世紀後半と考えられ、Ⅲ-3 b期に属する遺構である。

SY18

SY18は、調査区北西側に位置する(第38・図版9)。掘形の平面形は円形を呈し、直径1.1m、深さ0.4mを測る。この水琴窟を検出した位置は、SB02の底部にあたる。これに通じる飛石が設置しており、おそらく、立派な手水鉢もしくは寛がともなったのではないかと考えられる。水琴窟の構造は、甕を逆位に埋め、水が窗口以外に流れないようにそのまわりを漆喰でかためていた。また、窗口のまわりには長さ10cm位の小石を敷き、さらにその外側を長さ60cm位の礫石で堰堤を築く、しっかりとした水琴窟である。



第39図 SY04 (1)・SY19 (2~4) 出土遺物

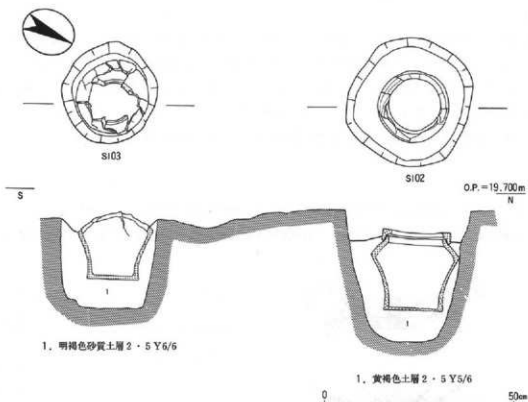
第39図一2は、ガラス瓶である。口径3cm、器高7.3cm、底径3cmを測る。薄いヘンマーミントグリーンを呈する。用途は不明である。3は、一銭銅貨である。直径2.2cm、厚さ0.1cmを測る。裏面には「大日本 大正十〇年」とある。4は、大谷焼甕である。口径47.9cm、器高58.1cm、底径20.5cmを測る。器形は口縁部外縁がやや下方している。それ以外はS I 04とほぼ同じである。調整も同じである。

出土遺物を概観すると、19世紀後半～20世紀前半と考えられる。IV期に属する遺構である。

S I 02

S I 02は、調査区東側中央に位置する(第40図・図版9)。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.33m、深さ0.35m。この下面でも胞衣壺を2個体検出し、さらに、南隣でもS I 03が出土した。S B 04の床下に埋置される。座敷下に埋められていたことがわかった。S I 03とは、さほど時期差はないと思われる。

第42図一2・3は、土師質土器火消壺と蓋である。2は、口径17.8cmを測る。天井部は粘土円盤粘土紐輪積み成形をする。その後、回転台を利用して天井部内面と口縁部にヨコナデ調整を施している。3は、口径15.3cm、器高19.2cm、底径15.1cmを測る。肩部がやや直線気味で、体部の境が鮮明である。調整は、外型作り分



第40図 SI 02・03遺構図

割成形である。底部となる粘土円盤に外型粘土紐輪積み成形した体部を接合する。その後、肩部を接合し、その境目をヘラケズリ調整している。内面に黒色物が付着している。1・2ともに、川口宏海氏の編年II-2期に属する。

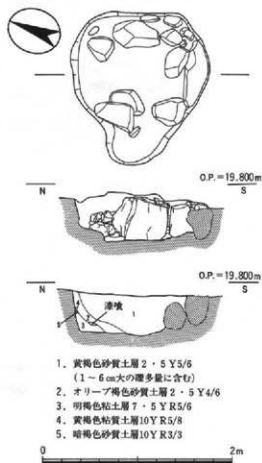
出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀後半と考えられ、III-3 b期に属する遺構である。

SI 03

SI 03は、SI 02の南隣に位置する(第40図・図版9)。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.33m、深さ0.24mを測る。

第42図一4・5は、土師質土器火消壺である。4は、つまみ径4cmを測る。つまみ部中央がくぼんでおり、これは川口宏海氏の編年II-1期以降にみられるタイプのものである。内面には黒色物が付着している。5は、口径12.6cm、器高17.8cm、底径13.6cmを測る。肩部はやや直線気味で、体部の境がはっきりしているが、SI 02に比べると弱い。調整はSI 02と同じである。4・5ともに、川口宏海氏の編年II-2期に属する。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀後半と考えられる。III-3 b期に属する遺構である。



第41図 SX01遺構図

SX01

SX01は、調査区中央に位置する（第41図）。池遺構と思われる。平面形は円形を呈し、長さ1.6m、深さ0.42mを測る。この遺構は、円形に掘り下げ、そのまわりを10～15cm位の礎石を置き漆喰で固定していた。

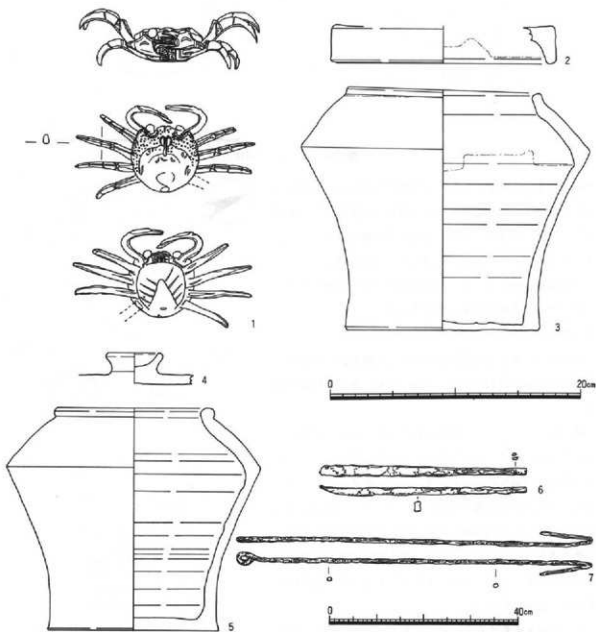
第42図-1は、銅製かに形置物である。体長14cm、幅8cm、厚さ4.5cmを測る。体部と足部・手部は別々に成形後、溶接している。非常に細かいところまで表現している。

出土遺物を概観すると、19世紀後半～20世紀前半と考えられる。IV期に属する遺構である。

8. まとめ

B-1-1区は、奈良時代から現代の遺構を検出した。時代を追ってまとめたいと思う。

7～8世紀頃ここに掘立柱建物が存在し、16世紀後半には猪名野神社参道沿いに掘立柱建物を建て、裏庭



第42図 SX01 (1)・S I 02 (2・3)・S I 03 (4・5)・S Y 04 (6・7) 出土遺物

には井戸が作られていた。さらに調査区東側は、17世紀後半以降になると三和土が敷かれて建物が建てられたと思われる。享保14年（1729）の北少路村の大火災に遭い、その後、火災前と同範囲で建物が建てられる。18世紀末～19世紀前半には、厨子二階の建物に建て替えられ、西側にも建物が建てられるようになった。一部庭にかわったところもあるが、それ以後現代まで続く。このように古い時期の建物を確認できたことは大きな成果であった。また、享保14年（1729）の北少路村の大火災痕を確認できたことで、郷町内の火災の広がりを知ることができた。

第2節 第51次調査B-1-4区

B-1-4区は、猪名野神社に通じる宮ノ前商店街から西側に延びる小道に面している。『天保十五年(1844)伊丹郷町分間絵図』(第212図)によると、「北少路村」にあたり、さらに、『元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(第212図)には、屋敷主善兵衛、住人は町代佐兵衛と記された地点の東側に比定する。

1. 基本層序

遺構面は、4面検出した。基本層序は、南隣のB-2-2区とほとんど同様である。地山直上には、黄褐色粘質土層(第43図第49層現地表面より30cm下)、その上は、第3次遺構面(第43図第16層現地表面より約20cm下)、さらに上層に、よく似た2層の整地層黄褐色土層(第43図第8層現地表面より約15cm下)、黄褐色砂質土層(第43図第13層現地表面より約13cm下)がみられる。その上に、2時期目の三和土層(第43図第3層・第10層現地表面より10cm下)が堆積し、その上層に、1時期目の三和土層(第43図第5層現地表面より5cm下)を検出した。調査面積は29㎡である。

2. 第4次面の遺構と遺物

第4次面では三和土は見られず、建物の存在は考えられない。また、検出した遺構も遺物が出土せず、性格は不明である。

3. 第3次面の遺構と遺物

第3次面では三和土は検出されなかった。また、礎石・礎石痕も見られなかったので、建物の存在を示す直接のものはみられなかったが、調査区南側で壁の下部の基礎固めと思われるものを検出した。その他に、3基1組竈を東端中央に検出した。上述したが、『元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町絵図』ではここは町屋になっており、おそらく、西側から延びる建物が建ち東側は台所だったのではないかと考えられる。

SV01・03・04

SV01~04は、調査区東端中央に位置する(第45図・図版16)。半地下式の竈である。燃焼室の大きさは、SV01は直径0.58m、深さ0.25m、SV03は直径0.58m、深さ0.2m、SV04は直径0.5m、深さ0.22mを測る。3基1組の竈である。この竈は、壁を背にして東側に焚口を設けている。燃焼室内には粘土を薄く張っていた。前庭部は、はじめは東側に傾斜をつけて深く掘り下げ使用していたが、その後、黄色粘土に平瓦片を混ぜて叩き固めた床を張ってかさあげしている。III-2期に属する遺構である。

第45図-1は、軒丸瓦である。全長(残)6cm、瓦当部径(推)14.4cm、周縁幅2cmを測る。調整は、瓦当部は周縁部に沿ってナデ調整、瓦当裏面は周縁部に沿ってナデ調整を施している。瓦当面に雲母が付着している。出土遺物がほとんどなく年代をきめるのが難しいが、18世紀前半代と考えられる。

SK20

SK20は、調査区南壁沿いに位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ4.2m以上、幅1m以上、深さ0.24mを測る。南端の庭部分に位置する。調査区南側のB-5区でもこの遺構の続きを検出した。その上面では3cm程度の礎石を敷き固めた状態で検出した。『文化改正伊丹之図』によると、路地になっており、それに当たるのではないかとと思われる。また、出土遺物は2時期あり、作り替えられていると思われる。時期は、17世紀末~18世紀前半と18世紀後半~19世紀初頭である。III-2期に属する遺構である。

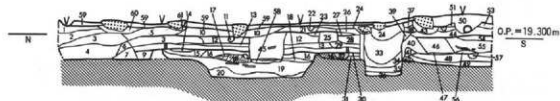
第45図—2・3は、肥前磁器である。2は、青磁染付碗である。口径11.4cm、器高6.1cm、高台径4.8cmを測る。内面口縁部に四方準文、見込みに三方割銀杏文が描かれている。高台内には「簡江」銘の變化したものが描かれ、簡江は佐賀県山内町にある窯場の名前である。この年代で窯場の名前を入れるのは珍しい（鈴田1995年）。3は、染付碗である。高台径5.2cmを測る。呉須の発色は、やや黒帯びている。外面体部の文様は七宝文、見込みには草花文が描かれている。1・2共に、大橋康二氏の編年（大橋1989年）IV期に属する。出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。図化した遺物は2時期目の出土遺物である。

4. 第2次面の遺構と遺物

第2次面ではほぼ全体に三和土面を検出した。礎石・礎石痕も数箇所みられ、建物が建っていたことがわかった。

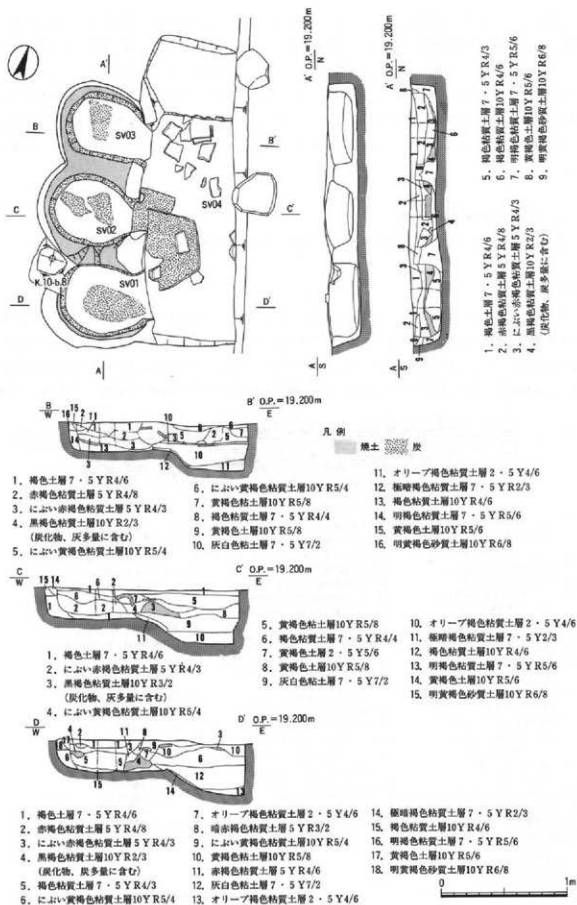
SB03

SB03は、SB01とはほぼ同位置である（第45図）。桁行1間半（東西約3m）以上、梁行1間（南北2m）以上を測る。建物の南側に位置するところに、第3次面でもみられた壁の基礎固めと思われるものを検出し、南側は少なくともここまでは建物が建っていたと思われる。さらに、SB03とは組合わない礎石・礎石痕があり、建物が建て替えられたと考えられる。また、検出した三和土に伴う遺構（SK16）の年代観が、18世

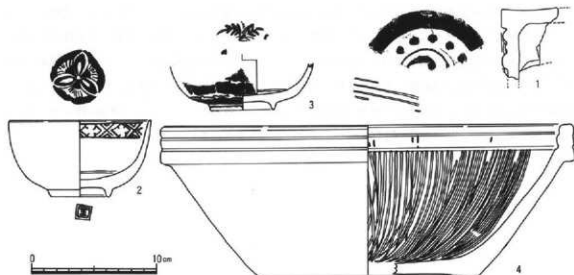


1. ぶい黄色砂質土層2・5 Y6/3
(炭化物多量に含む)
2. ぶい黄褐色砂質土層10 Y R5/4
3. 黄褐色砂質土層10 Y R5/6
4. 黄褐色砂質土層10 Y R5/6
5. ぶい黄褐色土層10 Y R4/3
(5cm大の礫多量に含む)
6. 褐色粘質土層10 Y R4/4
7. 黄褐色土層2・5 Y5/4
8. 黄褐色土層2・5 Y5/6
9. オリープ褐色土層2・5 Y4/6
(粘土多量に含む)
10. オリープ褐色土層2・5 Y4/4
11. 明黄褐色粘質土層2・5 Y6/8
12. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6
13. 黄褐色粘質土層10 Y R5/8
(5cm大の礫多量に含む)
14. 明黄褐色土層10 Y R6/6
15. 褐色土層10 Y R4/6
16. 明黄褐色土層2・5 Y6/6
17. 暗褐色土層7・5 Y3/4
18. 褐色砂質土層7・5 Y4/6
19. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/6
(炭化物、粘土多量に含む)
20. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/3
21. ぶい黄色砂質土層2・5 Y6/4
22. ぶい黄色砂質土層2・5 Y6/3
23. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/3
24. 明黄褐色砂質土層2・5 Y7/6
25. オリープ褐色砂質土層2・5 Y4/6
26. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/1
27. 浅黄色砂質土層2・5 Y7/4
28. 明黄褐色砂質土層10 Y R6/6
29. ぶい黄褐色砂質土層10 Y R6/4
30. ぶい黄褐色砂質土層10 Y R6/3
31. 浅黄色砂質土層2・5 Y7/3
32. オリープ褐色砂質土層2・5 Y4/6
(炭化物、粘土多量に含む)
33. ぶい褐色砂質土層7・5 Y5/4
(2cm大の礫多量に含む)
34. 黄褐色砂質土層10 Y R5/6
35. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/3
36. 黄褐色粘質土層10 Y R5/6
37. ぶい黄褐色砂質土層10 Y R6/4
38. ぶい黄褐色砂質土層10 Y R6/3
39. 明黄褐色砂質土層10 Y R6/6
40. 黄褐色砂質土層10 Y R5/8
41. オリープ褐色砂質土層2・5 Y4/6
42. 明黄褐色砂質土層10 Y R6/8
43. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6
44. オリープ褐色砂質土層2・5 Y4/6
45. オリープ褐色砂質土層2・5 Y4/6
46. ぶい黄褐色砂質土層10 Y R5/4
47. 明黄褐色砂質土層10 Y R6/6
48. ぶい黄褐色粘質土層10 Y R4/3
(炭化物多量に含む)
49. 黄褐色粘質土層10 Y R5/8
50. 黄褐色砂質土層10 Y R5/8
51. 明黄褐色砂質土層10 Y R7/6
52. 明黄褐色砂質土層2・5 Y7/6
53. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/4
(0.5cm大の礫多量に含む)
54. オリープ褐色砂質土層2・5 Y4/6
(0.5～2cm大の礫多量に含む)
55. 暗褐色砂質土層10 Y R3/4
56. 褐色砂質土層10 Y R4/4
57. 暗灰色粘質土層2・5 Y4/2
58. 暗灰色砂質土層2・5 Y5/2
(炭化物多量に含む)
59. ぶい黄色粘質土層2・5 Y6/4
60. オリープ褐色粘質土層2・5 Y4/4
61. 褐色土層10 Y R4/4

第45図 B-1-4 区東壁土層図



第44図 SV01・02・03・04遺構図



第45図 SV04 (1)・SK20 (2・3)・SK06 (4) 出土遺物

紀後半～19世紀初頭で、この建物は、19世紀前半頃には建てられていたと思われる。III-3 b 期に属する。

5. 第1次面の遺構と遺物

第1次面は、調査区北側より南へ6mの範囲で三和土を検出した。北側の礎石列は、既存する建物 (SB 01) のものである。上述した路地はこれに伴うものである。

SB02

SB01は、1間を1.969mとし、桁行2間(東西3.938m)以上、梁行3間(南北5.907m)と考えられる(第46図) 既存建物がある。上述したが、南側は裏庭とし、既存する建物と構造が同じなら西側が通り庭と思われる。また、間口が2間とまわりの建物に比べて規模が小さく、長屋の可能性が高い。また、この建物にともなう三和土の下面の遺構 (SK11・16) の年代から、19世紀後半以降に建てられたと考えられ、III-3 b 期に属する。

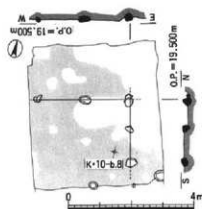
SK06

SK06は、調査区南端中程に位置する。平面形は長方形を呈し、長辺1.4m、短辺0.8m、深さ0.9mを測る。廃棄土壌である。遺物が多量に出土した。

第45図-4は、柳焼摺鉢である。口径32.3cm、器高12.1cm、底径17.6cmを測る。色調は赤褐色を呈する。口縁部外縁帯の張りが大きい。外面調整は、底部際から口縁部外縁帯直下まで回転ヘラケズリを施している。内面体部の摺目は8本単位である。ロクロは左回転である。白神典之氏分類(白神1990年)のII類に属する。よって、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。III-3 a 期に属する遺構である。

6. まとめ

B-1-4区は、調査面積が小さく全体の様相をあまり把握できなかった。しかし、18世紀代の竈は、残存状態も良く検出し、当時の竈の変遷を知るうえで好資料を得られた。また、建物の変遷をま



第46図 SB02遺構図

とめていうと、18世紀以前はわからないが、遺構の検出状況から建物はなかったと思われる。建物が建てられるのは、18世紀に入ってからと思われるが、性格は不明である。しかし、調査区北側に猪名野神社参道に通じる道が延長されると、北側を間口とする建物が建てられる。さらに19世紀代に入ると、裏地開発が進み路地が作られ、建物南側の裏庭部にも建物が建てられるようになる。検出した路地は、B-5区でも検出し、『文化改正伊丹之図』にみられるような路地が敷かれていたと思われる。このように、調査面積が狭く全体を覆うのは難しかったが、19世紀代の路地を検出できたことは大きな成果であった。

第3節 第51次調査B-2-1区

B-2-1区は、「延宝五年(1677)伊丹郷町地味委細絵図」や「天保十五年(1844)伊丹郷町分間絵図」(八木哲浩1982年)で見隔口村にあたることからわかる。「元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町絵図」によると、本百姓長左衛門を屋敷主とし、西側を間口とした味噌ウリ五兵衛及び日用(日雇い)で生活している伝兵衛・吉兵衛の屋敷地に相当することがわかる。なお、当調査区は昭和63年試掘調査でDトレンチとしてトレンチ調査を行っており、中央部の遺構は同報告書(「藤井直正他有岡城跡・伊丹郷町IV」1995年)を参照していただきたい。調査面積は420㎡である。

1. 基本層序

遺構面は発掘区全面で5面検出した。地山面は東端でO.P.=18.700m、西端でO.P.=18.600m、北端でO.P.=18.800mを測り、西側に南北方向の浅い谷状地形が認められる。この谷状地形部分には、後述する7世紀後半～8世紀前半の遺物包含層が堆積していた。北壁土層断面図(第48図)を観察すると、地山直上層に第5次面明褐色土層7.5Y R5/6(第12層、現地表下より0.9～1m下)、その上に第4次面オリーブ褐色砂質土層2.5Y 4/6(第8層現地表下より約0.7m下)が、その上層には、第3次面ふいオリーブ褐色土層10Y R5/4(第7層、現地表下より約0.5m下)その上層には、享保14年(1729)の焼土層と思われる明赤色砂質土層5Y R5/6(第5層)がみられる。この層は、第2次面と第3次面の間に位置している。第2次面は、黄褐色砂質土層10Y R5/8(第4層、現地表下より約0.3m下)を、第1次面は、褐色土層10Y R4/4(第12層、現地表下より約0.2m下)を検出した。

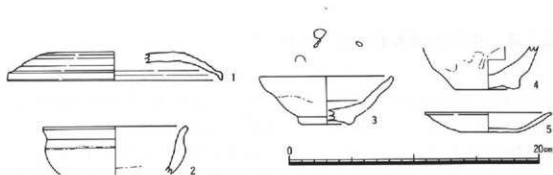
2. 第5次面の遺構と遺物

第5次面は16世紀末～17世紀前半の遺構が中心である。地山直上に部分的に須恵器、土師器を含む包含層(第48図第12層明褐色粘質土層)がみられ、包含層上面から切り込まれた遺構を掘り残しつつ、地山面まで下げた。従って、包含層上面と地山面とを第5次面としてとらえた。包含層上面での遺構は、南東部に柱穴群を検出した。その他は遺構がまばらにしか存在しない。西側では、胎土目唐津焼碗など16世紀末～17世紀前半の遺物を含む土壇(SK461・SK475・SK479)が検出されている。また、SK475からは丸瓦、平瓦が出土している。従って、包含層上面は17世紀前半の遺構面である。また、道路に面する南東部には掘立柱の柱穴が散在し、掘立柱建物が存在していたと考えられる。地山直上の包含層からは、8世紀前半の須恵器が出土している。調査区内に位置するDトレンチでは、中村浩氏編年(中村1978年)Ⅲ型式2段階～3段階の須恵器長頸壺、須恵器杯蓋・身、土師器鍋が出土している。従って本調査区地山面は、7世紀後半～8世紀前半の遺構面と考えられるが、この調査では明確な遺構は存在しなかった。しかし、宮ノ前地区において、7世紀後半～8世紀前半に既に人々が居住していたことが判明したのは大きな成果である。

SK468

SK468は調査区北部に位置する(表1・図版20)。平面形は不整形を呈し、検出長1.4m、深さ0.34mを測る。土壇番号を付けたが、包含層の可能性もある。しかし、後述する出土遺物は残りが良く、意図的に置かれたか、何らかの遺構に廃棄された遺物の可能性も考えられる。土層は一部2層であるが、ほぼ1層である。埋土は明褐色砂質土層が主体である。

第47図-1は、須恵器杯蓋である。口径17.2cm、器高2.3cmを測る。天井部外面は回転ヘラケズリ、他は回



第47図 SK468 (1)・SK479 (2~5) 出土遺物

転ナデ調整を施す。中村浩氏編年IV型式第1段階に相当する。須恵器以外では土師質土器の破片が数点出土している。このほか、トレンチ調査の際に出土している(川口宏海1995年)。出土遺物から概観すると、8世紀前半の時期と考えられる。

SK479

SK479は調査区北部に位置する(表1・図版20)。平面形は不整形を呈し、検出長0.82m、深さ0.35mを測る。

第47図一2は、土師質土器火入れである。口径11.6cmを測る。内外面とも回転ナデ調整、内面から外面口縁部は灰白色2.5Y8/2を呈す。口縁部は煤が付着している。3・4は、唐津焼碗である。3は、胎土目の皿である。口径5.3cm、器高3.7cm、高台径4cmを測る。高台は無軸である。内外面には灰釉が掛けられている。4は、碗である。高台径5cmを測る。内面は灰釉を掛け、外面も一部灰釉がみられる。高台は糸切りのままととなっている。3・4とも大橋康二氏編年(大橋1989年)I期に属する。5は、土師質土器皿である。口径10.2cm、器高1.6cmを測る。浅黄橙色10YR8/4を呈す。口縁部は直線的に延び、底部との境が明瞭に屈曲している。内面は口縁部に向かってナデ調整し、外面は指頭圧調整後にナデ調整を施す。IT(伊丹郷町期)・I型式A類に属する。

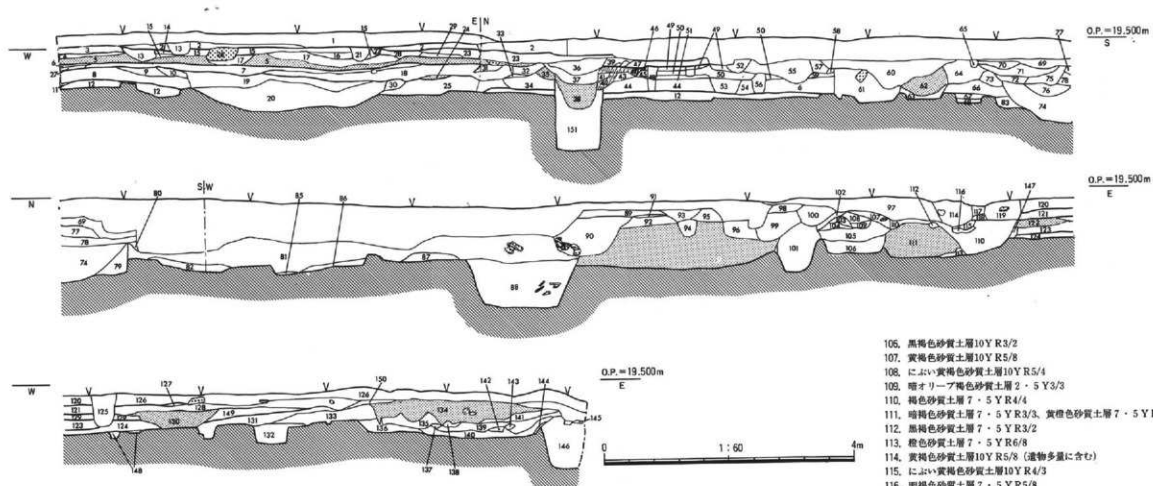
埴田以外の遺物としては、唐津焼皿、瀬戸・美濃焼灰釉折縁皿などがあり、そのうち唐津焼の碗・皿は高台の個体数で6個体を数える。これらの出土遺物から概観すると16世紀末~17世紀前半の時期と考えられ、III-1a~1b期に属する遺構である。

3. 第4次面の遺構と遺物

第4次面では17世紀後半~18世紀前半の遺構が中心である。調査区全体で遺構を検出した。敷地境を示すものはみられず、建物も復元はできないが、調査区東側の道路より西へ9mの範囲で獨立柱の柱穴が多数みられ、最長4間半の建物が想定できる。調査区東側の道路より4mの位置でSE07を検出した。西側では、第97次調査D-6区で検出した畑に似た堆積土(北壁15層褐色粘質土層10YR4/6)が全面にみられ、畝こそ残っていないものの畑であった可能性が高い。調査区北西部は、土壌中心で池状遺構(SK294・SK317)を検出していることから裏庭と想定できる。また、一部焼土層の広がりも確認された。この焼土層は北壁第17・23層(第48図)に相当する。上面の北西端部においては享保14年(1729)の火災と思われる18世紀前半の焼土処理土層SK256を検出していることから、一時期古い元禄12年(1699)もしくは、15年(1702)の火災に相当する可能性がある。

SE07

SE07は調査区東側道路より西へ4mに位置する(第49図・図版20)。平面形は円形で、直径0.8m、深さ



- | | | | |
|---|---|--|--|
| <p>1. 褐色砂質土層10Y R4/4</p> <p>2. 黒褐色砂質土層2・5 Y3/2</p> <p>3. 黄褐色砂質土層10Y R5/6 (炭化物、粘土多量を含む)</p> <p>4. 黄褐色砂質土層10Y R5/8</p> <p>5. 明赤褐色粘土層5 Y R5/6 (炭化物、粘土多量を含む)</p> <p>6. 明黄色土層10Y R6/8</p> <p>7. におい黄褐色土層10Y R5/4 (0.5cm大の礫多量を含む)</p> <p>8. オリーブ褐色砂土層2・5 Y4/6</p> <p>9. 明黄色土層10Y R6/6 (0.5-1cm大の礫多量を含む)</p> <p>10. 黄褐色土層10Y R5/6 (粘土多量を含む)</p> <p>11. 褐色砂質土層10Y R4/6</p> <p>12. 明褐色土層7・5 Y R5/6 (炭化物多量を含む)</p> <p>13. 黒褐色土層10Y R2/2 (炭化物多量を含む)</p> <p>14. におい黄褐色土層10Y R5/4 (炭化物、粘土多量を含む)</p> <p>15. オリーブ褐色土層2・5 Y4/3</p> <p>16. オリーブ褐色土層2・5 Y4/4</p> <p>17. 褐色砂質土層7・5 Y R4/4 (礫物)</p> <p>(炭化物、粘土、1-3cm大の礫多量を含む)</p> <p>18. 褐色砂質土層10Y R4/4 (炭化物、粘土、1-4cm大の礫多量を含む)</p> <p>19. におい黄褐色砂質土層10Y R6/4</p> <p>20. におい黄色砂礫層2・5 Y6/3 (3cm大の礫多量を含む)</p> <p>21. オリーブ褐色土層2・5 Y4/4</p> <p>22. 黄褐色土層2・5 Y4/6</p> <p>23. オリーブ褐色土層2・5 Y4/3</p> <p>24. におい黄褐色土層10Y R5/3</p> <p>(粘土、礫物、0.5cmの礫多量を含む)</p> <p>25. 褐色土層10Y R4/4</p> <p>26. におい黄褐色砂質土層10Y R6/3</p> <p>27. におい黄褐色砂礫層10Y R5/3 (5cm大の礫多量を含む)</p> <p>28. におい黄褐色砂礫層10Y R5/3 (3cm大の礫多量を含む)</p> <p>29. 浅黄褐色粘土層10Y R4/4</p> <p>31. 黒褐色土層10Y R2/3 (炭化物、粘土多量を含む)</p> <p>32. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6</p> <p>33. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4</p> <p>34. 褐色土層10Y R4/4</p> | <p>35. 褐色粘質土層10Y R4/6 (炭化物、粘土多量を含む)</p> <p>36. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/4</p> <p>37. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6 (礫物、2-10cm大の礫多量を含む)</p> <p>38. 褐色砂質土層7・5 Y4/6 (炭化物、粘土多量を含む)</p> <p>39. におい黄褐色砂質土層10Y R5/3 (遺物多量を含む)</p> <p>40. におい黄褐色砂質土層10Y R6/4 (炭化物多量を含む)</p> <p>41. 褐色土層10Y R4/6</p> <p>42. 明黄褐色砂質土層10Y R6/6 (炭化物多量を含む)</p> <p>43. 浅黄色砂質土層2・5 Y7/4</p> <p>44. におい黄色砂質土層2・5 Y6/4</p> <p>45. 黄褐色砂質土層10Y R5/6</p> <p>46. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/4</p> <p>47. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6</p> <p>48. におい黄色砂質土層2・5 Y6/3</p> <p>49. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4 (1-5cmの礫多量を含む)</p> <p>50. 褐色砂質土層10Y R4/6 (0.5-3cmの礫多量を含む)</p> <p>51. におい黄褐色砂質土層10Y R6/4</p> <p>52. におい黄褐色砂質土層10Y R5/3</p> <p>53. 褐色砂質土層10Y R4/6</p> <p>54. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4</p> <p>55. におい黄褐色砂質土層10Y R6/3</p> <p>56. におい黄褐色砂質土層10Y R7/3</p> <p>57. におい黄褐色砂質土層10Y R6/3</p> <p>58. 浅黄色砂質土層2・5 Y7/3</p> <p>59. におい黄色砂質土層2・5 Y6/3</p> <p>60. 暗灰黄色砂質土層2・5 Y5/2</p> <p>61. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4</p> <p>62. 褐色砂質土層10Y R4/6 (粘土多量を含む)</p> <p>64. におい黄褐色砂質土層10Y R6/3 (遺物、3-4cmの礫多量を含む)</p> <p>65. におい黄褐色砂質土層10Y R6/3</p> <p>66. におい黄褐色砂質土層10Y R6/4</p> <p>67. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4</p> <p>68. 褐色粘質土層10Y R4/6</p> <p>69. 暗褐色砂質土層10Y R3/3 (3-5cmの礫多量を含む)</p> | <p>70. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/3</p> <p>71. におい黄褐色砂質土層2・5 Y6/3</p> <p>72. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/3</p> <p>73. におい黄褐色砂質土層2・5 Y6/3</p> <p>74. 灰白色粘土層2・5 Y6/2 (3-5cmの礫多量を含む)</p> <p>75. 灰白色砂質土層2・5 Y7/1</p> <p>76. 灰白色砂質土層2・5 Y6/2</p> <p>77. 浅黄色粘質土層2・5 Y7/3</p> <p>78. 灰白色砂質土層2・5 Y8/2</p> <p>79. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/3</p> <p>80. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/3</p> <p>81. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6 (炭化物、粘土、礫多量を含む)</p> <p>82. 灰黄色粘質土層10Y R6/2</p> <p>84. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/3 (3-4cmの礫多量を含む)</p> <p>85. 黄褐色砂質土層10Y R5/8</p> <p>86. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6</p> <p>87. 明黄褐色砂質土層10Y R6/6</p> <p>88. 暗オリーブ褐色砂質土層2・5 Y3/3 (遺物多量を含む)</p> <p>89. 浅黄色砂質土層2・5 Y7/4</p> <p>90. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4 (遺物多量を含む)</p> <p>91. 明黄褐色砂質土層2・5 Y7/6</p> <p>92. におい黄褐色砂質土層2・5 Y6/4</p> <p>93. 褐色砂質土層10Y R4/4</p> <p>94. 黄褐色砂質土層10Y R5/6</p> <p>95. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/3</p> <p>96. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/3</p> <p>97. におい黄褐色砂質土層2・5 Y6/3</p> <p>98. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6</p> <p>99. 暗褐色砂質土層10Y R3/4</p> <p>100. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/4</p> <p>101. 明褐色砂質土層7・5 Y5/6</p> <p>102. 明黄褐色砂質土層2・5 Y6/8</p> <p>103. におい黄褐色砂質土層10Y R4/3</p> <p>104. 褐色粘質土層10Y R4/6</p> <p>105. オリーブ褐色砂質土層5 Y5/6</p> | <p>106. 黒褐色砂質土層10Y R3/2</p> <p>107. 黄褐色砂質土層10Y R5/8</p> <p>108. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4</p> <p>109. 暗オリーブ褐色砂質土層2・5 Y5/3</p> <p>110. 褐色砂質土層7・5 Y R4/4</p> <p>111. 暗褐色砂質土層7・5 Y R3/3. 黄褐色砂質土層7・5 Y R7/8</p> <p>112. 黒褐色砂質土層7・5 Y R3/2</p> <p>113. 褐色砂質土層7・5 Y R6/8</p> <p>114. 黄褐色砂質土層10Y R5/8 (遺物多量を含む)</p> <p>115. におい黄褐色砂質土層10Y R4/3</p> <p>116. 明褐色砂質土層7・5 Y R5/8</p> <p>117. におい黄色砂質土層2・5 Y6/3</p> <p>118. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/8</p> <p>119. 黄褐色砂質土層10Y R5/8 (遺物多量を含む)</p> <p>120. におい黄褐色砂質土層10Y R6/4</p> <p>121. 褐色砂質土層10Y R4/4</p> <p>122. 暗褐色砂質土層7・5 Y R3/3. 褐色砂質土層5 Y R6/8</p> <p>123. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4</p> <p>124. 明褐色粘質土層7・5 Y7/3</p> <p>125. におい黄色砂質土層2・5 Y6/3</p> <p>126. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4</p> <p>127. 赤褐色砂質土層5 Y R4/8. におい黄褐色砂質土層10Y R4/3</p> <p>128. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/3</p> <p>129. におい赤褐色5 Y R4/4. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4</p> <p>130. 褐色砂質土層7・5 Y R4/6. 褐色砂質土層5 Y R7/8</p> <p>131. 黄褐色砂質土層10Y R5/8</p> <p>132. 明赤褐色粘質土層5 Y R3/6. 黒褐色粘質土層5 Y R2/1</p> <p>133. 褐色砂質土層7・5 Y R4/4. オリーブ黄色砂質土層5 Y6/3</p> <p>134. におい赤褐色砂質土層5 Y R4/4. 褐色砂質土層5 Y R7/6 (炭化物多量を含む)</p> <p>135. 暗オリーブ褐色砂質土層2・5 Y3/3. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4</p> <p>136. 暗褐色粘質土層5 Y R3/6</p> <p>137. 褐色砂質土層10Y R4/6</p> <p>138. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4</p> <p>139. 褐色砂質土層5 Y5/4. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4</p> <p>140. 褐色砂質土層10Y R4/4</p> <p>141. におい褐色砂質土層2・5 Y4/6</p> <p>142. 明黄褐色砂質土層2・5 Y6/8</p> <p>143. におい黄褐色砂質土層10Y R2/4</p> <p>144. におい黄色砂質土層2・5 Y6/3</p> <p>145. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/3</p> <p>146. 黄褐色砂質土層10Y R5/8</p> <p>147. 明褐色土層7・5 Y R5/6</p> <p>148. におい黄褐色土層10Y R5/3</p> <p>149. 黄褐色土層10Y R5/6</p> <p>150. オリーブ褐色土層2・5 Y4/6</p> <p>151. 灰褐色粘質土層7・5 Y R5/3</p> |
|---|---|--|--|

第48図 B-2-1区北壁土層図

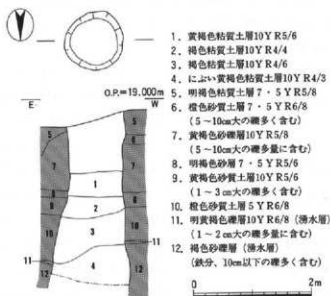
2.94m以上を測り、断面形は円錐に近い形で検出面より1.4m下から幅が広がっている。第11・12層は鉄分、礫を多く含むことから湧水層と思われる。また、SE07は掘立柱の柱穴群内に位置していることから、建物内部で使用されていた可能性がある。

出土遺物としては、瀬戸・美濃焼天目茶碗、土師質土器皿、瓦など数点出土していることから、17世紀後半頃の時期でⅢ-2 a 期に属する遺構と考えられる。

SK322

SK322は調査区西部に位置し、SK317と隣接している(表1)。平面形は検出長1.1m、深さ0.58mを測る。土層は10層を数え、1~1.5cmの幅で積み重なっている。色調は褐色系を呈す砂礫層である。この位置は、池状遺構など遺構が密集しており、裏庭に相当すると考えられ、SK322は生活廃棄物が多いことから廃棄土層と思われる。

第51図-1は、唐津系陶器器手碗である。高台径4.4cmを測る。高台登付は露胎。大橋康二氏の編年IV期に属する。2は、肥前磁器染付碗である。高台径4cmを測る。外面は、一重網目文が描かれており、高台登付は露胎である。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。3は、土師質土器焙烙である。口径25.6cmを測る。にんい黄橙色10Y R6/3を呈す。難波洋三氏分類(難波1992年)のE類に属する口縁部と底部が直立するタイプのものである。内外面口縁部から内面はヨコナア調整、外面底部は未調整で難れ砂痕がみられる。外面には煤が付着している。4は、丹波焼摺鉢である。口径(推)41.2cm、器高16.2cm、底径(推)21.4cmを測る。摺目は7本単位のクシ描きで、内面に鈍い稜をもたせる。外面体部に指頭匠痕がみられる。胎土は、橙色5Y R6/6を呈す。大平茂氏の編年(大平1991年)によるとⅥ期に属する。



第48図 SE07遺構図



第50図 SK294遺構図

挿図以外では、土師質土器皿、肥前磁器など多数出土している。このことから、出土遺物を概観すると17世紀後半の時期と考えられる。Ⅲ-2 a 期に属する遺構である。

S K 411

S K 411は調査区北壁西部に位置する(表1)。平面形は不整形で、検出長3.16m、深さ0.46mを測る。北側は調査区外へ延びている。土層は北壁第134~142層(第48図)にあたる。S K 411の上面では三和土を、さらに第2次面では焼土処理土壌を検出している。第2次面の焼土処理土壌S K 150は、享保14年(1729)の火災のものと思われ、その下にあたる三和土はそれ以前の18世紀初頭までの時期と考えられる。また、一部火災を受けた瓦などが含まれていることから、元禄12年(1729)もしくは元禄15年(1702)の火災を処理した土壌と思われる。このことにより、宮ノ前地区西側でも元禄年間の火災が広がっていたことになる。

第51図一5は、唐津焼器手碗である。口径9.6cm、器高6.1cm、高台径4.6cmを測る。高台登付は露胎で、砂が付着している。6は、丹波焼猪鉢である。口径(推)12.2cmを測る。摺目は7本のクシ目を施し、口縁部は直立し、外面に回転ナデによる2本の凹線が形成されている。大平茂氏の編年Ⅶ型式に属する。7は、均整唐草文軒平瓦である。文様区幅(推)11.6cm、瓦当部高3.9cm、文様区厚2.4cm、上周縁幅0.9cm、周縁高0.5cm、顎下部厚1.5cm、顎上部厚2.4cmを測る。瓦当部周縁部はヘラナデ調整、顎部はナデ調整、平瓦部凹面は左右にナデ調整、平瓦部凸面は未調整である。胎土は灰白色2.5Y8/2を呈し、焼成はやや良好である。出土遺物は多く、挿図以外のものとして姫野焼青緑釉皿などがある。

出土遺物から概観すると17世紀後半~元禄12年(1699)もしくは元禄15年(1702)までと考えられる。Ⅲ-2 a 期に属する遺構である。

S K 294

S K 294は調査区北側に位置する(第50図・図版20)。平面形は不整形を呈し、北側は調査区外へ延びる。検出長2.8m、深さ0.4mを測る池状遺構である。遺構内からは杭の抜き取り穴を確認している。S K 294より南側では畑の堆積土と思われる土を確認しており、それにともなった貯水池、あるいは火災の際の防火用水として用いられたとも考えられる。同様の遺構S K 317をS K 294より南側で検出しているが、出土遺物よりS K 294がS K 317より一時期古いと思われる。また、一度作り替えられた形跡があり、S K 294の周囲を囲むS K 293がそれにあたると思われる。S K 293より焼けた瓦が多く出土しており、上面のS K 293・S K 294では享保14年(1729)の焼土層が堆積していることから、これは元禄12年(1699)か元禄15年(1702)の火災に比定できる。

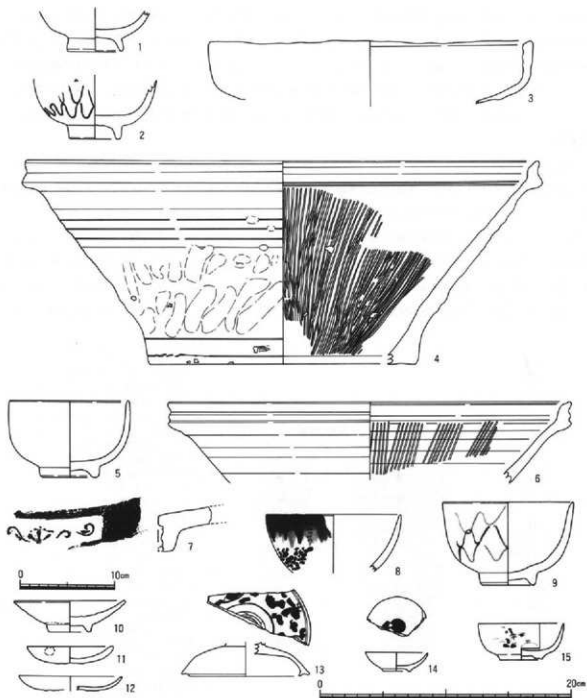
第51図一8・9は肥前磁器染付碗である。8は、口径10.8cmを測る。外面は手描きで雨降り文を描き、その上から型紙刷りで雨を表現した文様を施し、その下に牡丹文をコンニャク印判で施文している。9は、口径10.6cm、器高6.65cm、高台径4.4cmを測る。外面は一重網目文を描き、高台は露胎で離れ砂が付着している。大橋康二氏編年によると8はⅣ期、9はⅢ期に属する。挿図以外の遺物では大橋康二氏編年Ⅲ期に属する肥前磁器、丹波焼猪鉢が出土しており、S K 294は17世紀後半~末の時期と思われ、Ⅲ-2 a 期に属する遺構である。

S K 317

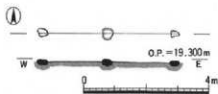
S K 317は調査区西側に位置する(表1・図版21)。平面形は不整形を呈し、東側は調査区外へ延びる。検出長2.1m、深さ0.46mを測るS K 294同様池状遺構である。埋土は1層で、北壁第74層灰黄色砂質土層2.5Y 6/2(第48図)にあたる。S K 294と同じく、遺構内からは杭の抜き取り穴を確認している。

第51図一10・13~15は、肥前磁器である。10は、白磁皿である。口径8.8cm、器高2.5cm、高台径3.3cmを測

る。見込みは蛇ノ目軸ハギ、外面体部下半から高台は無軸である。13は、染付蓋物の蓋である。口径10.2cmを測る。外面には草花文を描く。14は染付猪口である。口径4.9cm、器高1.5cm、高台径2.2cmを測る。見込みには染付が施され、高台畳付は露胎である。15は、染付蓋物である。口径6.8cm、器高2.9cm、高台径3.4cmを測る。外面は草花文を描く。内面口縁部端部及び、高台畳付は露胎である。これらは大橋康二氏の編年IV期に属する。11・12は土師質土器皿である。11は、口径6.8cm、器高1.4cmを測る。外面は指頭圧調整、内面はナア調整を施し、口縁部が内湾するタイプである。口縁部に灯芯痕が残る灯明皿である。12は、口径8.2cm、器高1.2cmを測る。外面は指頭圧調整、内面口縁部はココナア調整、内面底部はナア調整である。11と同じ



第51図 SK322 (1~4)・SK411 (5~7)・SK294 (8・9)・SK317 (10~15) 出土遺物



第52図 SB04遺構図

く、口縁部が内湾するタイプである。11・12共に、胎土はふい黄橙色10Y R7/4を呈し、IT（伊丹郷町期）2型式A類に属する。

出土遺物から概観すると18世紀前半と考えられる。III-2 a-2 b期に属する遺構である。

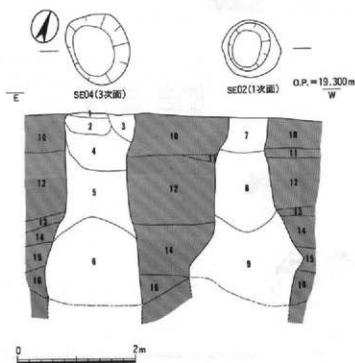
4. 第3次面の遺構と遺物

第3次面では18世紀前半～後半の遺構が中心である。上面とはほぼ同じ範囲の調査区東側道路より4間半(9m)の範囲で三和土がみられた。三和土は、一度張り替えられている。間口は判然としないが、調査区を「元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町絵図」にあてはめると、「味増ウリ五兵衛・長右衛門」の名がみられ、間口3間半と記されている。また、第2次面で検出したSB04(第52図)の礎石列の東端は絵図に記された調査区東側からの奥行「十二間一尺三寸」のラインと一致する。これを境にして2間×4間程度の建物が推定でき、絵図では「日用伝兵衛」「日用吉兵衛」の名が記入されている。三和土の西側からSB04との間では、土壌と井戸(SE04)を検出している。従って裏庭と考えられ、井戸は共同使用されていたと考えられる。

SE04

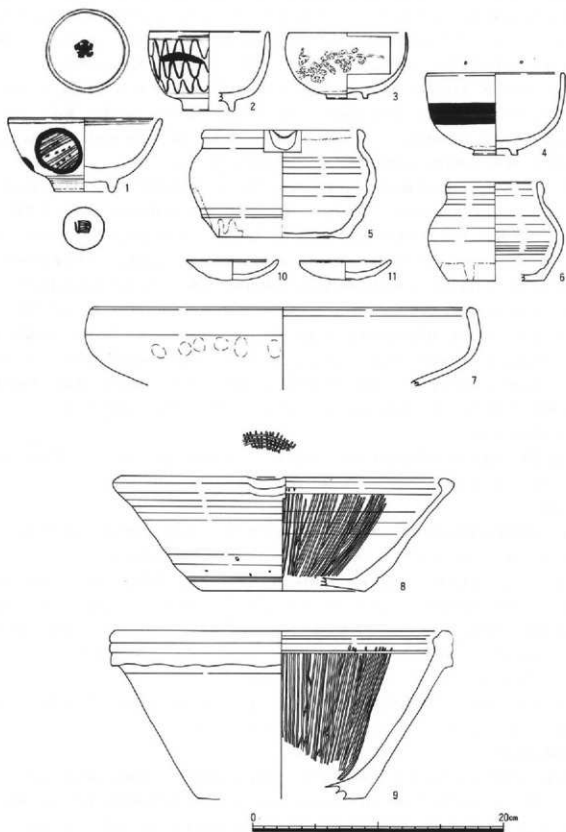
SE04は調査区南側中央部に位置する(第53図・図版21)。平面形は円形を呈し、直径1.2m、深さ2.1m以上を測る素掘りの井戸である。壁面はほぼ垂直で、検出面より約1.5m下より広がっている。土層断面を観察してみると、検出面より約2.5m下の第16層が鉄分を多く含んでおり湧水層の1つと考えられる。

第54図一・2は肥前磁器染付碗である。1は、口径12.2cm、器高5.9cm、高台径4.6cmを測る。丸窓文を描いた「くらわんか手」の碗である。見込みの五弁花は、コンニャク印判による。高台内には、銘がみられる。2は、口径9cm、器高6.4cm、高台径3.1cmを測る。外面には、一重網目文が描かれている。1・2ともに、高台畳付は露胎で、離れ砂が付着している。大橋康二氏編年によると1はV期、2はIII期に属する。3・



1. 褐色砂質土層 7・5 Y R4/6
(3cm大の礫多量に含む)
2. 暗褐色砂質土層 7・5 Y R3/4
(3cm大の礫多量に含む)
3. 暗褐色砂質土層 10 Y R3/4
(炭化物、焼土、3cm大の礫多量に含む)
4. 暗褐色砂質土層 10 Y R3/3
(5~7cm大の礫多量に含む)
5. 褐色砂質土層 10 Y R4/4 (3L層)
6. 黒褐色粘質土層 10 Y R3/2
(50cm大の石多く含む)
7. オリーブ褐色土層 2・5 Y 4/6
8. 灰質褐色粘質土層 10 Y R4/2
(遺物、5~10cmの礫多く含む)
9. 褐色粘質土層 10 Y R4/4
(5cm大の礫多く含む)
10. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/8
11. 橙色砂質土層 7・5 Y R6/8
(5~10cm大の礫多く含む)
12. 黄褐色砂層 10 Y R5/8
(5~10cm大の礫多量に含む)
13. 浅黄色粘土層 10 Y R6/4
14. 明褐色砂層 7・5 Y R5/6
15. 橙色砂質土層 5 Y R
16. 褐色砂層 10 Y R4/6 (湧水層)
(鉄分、10cm以下の礫多く含む)

第53図 SE02・04遺構図



第54圖 SE04出土遺物

4は京焼陶器碗である。3は、口径(推)9.4cm、器高5.4cm、高台径3.2cmを測る。外面に赤、緑で松竹梅文を描いている。4は、口径(推)10.8cm、器高6.6cm、高台径3.4cmを測る。全体に灰釉が掛けられ、外面は1.7cm幅の鉄釉で刷毛目文が描かれている。高台は無軸である。見込みめに3ヶ所目跡を残す。5は、丹波焼小壺である。口径(推)12cm、器高8.8cm、底径(推)10.4cmを測る。胎土は、橙色7.5Y R6/6を呈す。口縁部内面から外面体部全体に白色釉が施されている。内面は無軸である。6は、丹波焼お歯黒壺である。口径7.2cm、器高7.9cm、底径7.6cmを測る。口縁部内面より外面体部下半まで鉄釉が施される。内面には、お歯黒の鉄分が付着している。7は、土師質土器培格である。口径31cm、器高(推)6.2cmを測る。難波洋三氏の分類のE類に属する。内外面体部はヨコナデ調整、外面の口縁部と底部の境目は指頭圧調整、内面底部は不定方向にナデ調整、外面底部は未調整である。8は、丹波焼擂鉢である。口径(推)26.2cm、器高9.1cm、底径(推)13.1cmを測る。体部は底部からはほぼ直線的に開いて立ち上がり、口縁部を押さえ、内面に折り曲げる。胎土は2~3mm程度の砂を含む。外面体部は鉄釉が掛けられ、底部には砂が付着している。大平茂氏の編年IV型式に属す。9は、堺焼擂鉢である。口径26.3cm、器高(推)13.4cm、底径(推)13.2cmを測る。胎土は赤褐色2.5Y R4/8を呈す。外面は、底部際から口縁部外縁帯の直下まで左回転ヘラケズリ調整を施す。指目は9本のクシ目を施す。白神典之氏の分類I類(白神1990年)に属す。10・11は土師質土器皿である。10は、口径7.2cm、器高1.1cmを測る。内面は一定方向にナデ調整、外面は指頭圧調整したのちナデ調整している。11は、口径7.2cm、器高1.6cmを測る。内面は、一定方向にナデ調整、口縁部外面はヨコナデ調整を施す。口縁部には灯芯痕が残り、灯明皿として用いられている。10・11ともに口縁部が内湾するタイプである。胎土は浅黄褐色7.5Y R8/4を呈し、IT(伊丹郷町期)2型式A類に属する。押図以外の遺物は大槌編年IV期に属する肥前磁器、伊賀・信楽焼、屋瓦など大量に出土している。その他に、少数ではあるがテングニシなどの貝類がみられる。

出土遺物から概観すると17世紀後半のものを少量含むが、18世紀前半~後半を中心とし、一部19世紀初頭までのものがみられる。III-2b~3a期に属する遺構である。

S I 06

S I 06は調査区北部に位置する(第55図・図版21)胞衣壺である。平面形は円形を呈し、直径0.34m、深さ0.2mを測る。三和土を切るかたちでS I 06は存在するが、建物との関係は不明である。

第57図-1は土師質土器火消壺蓋である。口径15.4cm、器高4.2cm、つまみ径3.9cmを測る。口縁部を粘土紐を足して回転ナデ調整を施す。つまみはハリツケ後つまみ部とその周辺をヨコナデ調整している。天井部外面は離れ砂が付着している。2は、土師質土器火消壺である。口径11.7cm、器高17.15cm、底部13.6cmを測る。内外面を回転ナデ調整し、外面体部下面はヘラケズリを施す。外面底部は離れ砂が付着している。1・2とも、川口宏海氏の編年のII-2型式に属する(川口1989年-a)。

出土遺物から概観すると19世紀前半の時期と考えられ、III-3b期に属する。また、S I 06の壺内から茶褐色の圓形物が検出されている。これについては、現在分析中である。

S Y 05・S K 277

S Y 05は調査区北部に位置する(第56図・図版21)。平面形は楕円形を呈し、変底部の中央に穴を開け、逆さまに埋設した水琴窟である。西側に排水溝S K 277が設けられており、検出長0.81m、深さ0.4mを測る。S K 277は調査区西側に位置するS Y 05に付属する排水溝である。検出長約2.7m、深さ約0.5mを測る。S Y 05とS K 277の間は筒状の瓦管が置かれ、次に丸瓦が凹面を上にして置かれ、それらの周囲を約10cm~15cmの礫で固定している。この丸瓦凹面には「□十二」のヘラ書きがみられた。3つ目の瓦からは、平瓦が使われ、

ほぼ直線的に並べられている。瓦は全部で16枚検出した。

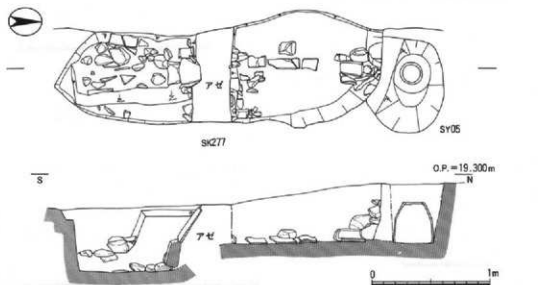
また、SY05が検出された調査区北側は土壌が多く、水琴窟は裏庭より検出されることが多いことから、この部分は裏庭であると思われる。

第57図一5は、丹波焼甕である。口径30.6cm、器高34.5cm、底径18.3cmを測る。胎土は、灰白色5Y8/3を呈す。内外面体部全体に灰釉を2度塗っている。外面は波状文が描かれている。左右2カ所に菊花文がハリツケされている。底部は無釉で砂が付着している。3は、肥前磁器染付碗である。高台径4cmを測る。外面は草花文が描かれ、見込みは蛇ノ目軸ハギを呈し、高台皿付は露胎である。大橋康二氏の福年IV期に属する。4は、唐津系陶器刷毛目文碗である。高台径4cmを測る。高台皿付は無釉で鯉れ砂が付着している。大橋康二氏の福年IV期に属する。6は、瓦管である。残存高12cm、直径12cmを測る。外面上部はヨコナデ調整、外面体部上部と下部は縦方向のヘラナデ調整後ヨコナデ調整、それ以外はヘラナデ調整、内面は未調整で粘土紐痕を残す。また、粘土板接合痕もみられる。

宮ノ前地区において、水琴窟が数多く出土するのは19世紀初頭以降である。南側のSK277を切ってSY07が設けられている。SY07は丹波焼甕を使用した18世紀末～19世紀中頃の土琴窟である。このことから、SY05はそれ以前の時期と考えられる。また、SY05の出土遺物は18世紀前半～後半であり、埋設されたのは18世紀後半の時期と考えられる。今までに確認したものよりも古い時期の水琴窟と考えられる。Ⅲ-2b期に属する遺構である。

SK190

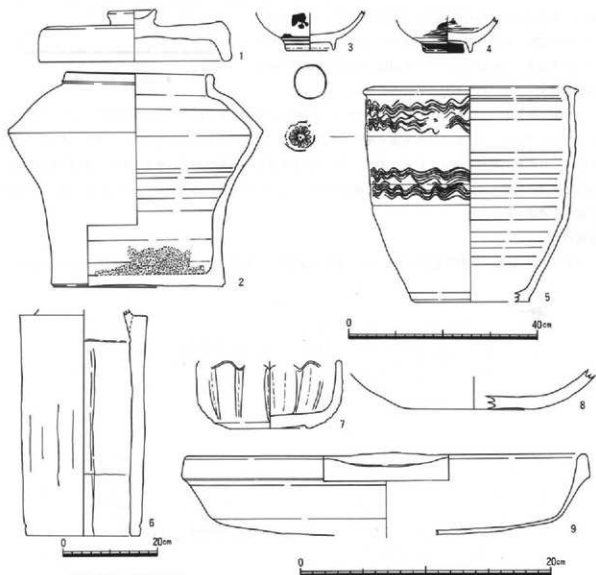
SK190は、調査区中央部北側に位置する(表1・図版21)。平面形は、不整形を呈す。検出長は3.92m、



第58図 SK277・SY05遺構図

深さ0.05mを測る。土層は焼土層1層で、出土遺物は多い。S K190の遺物の時期は、後述するように17世紀後半～19世紀前半と幅広い。しかし、S K190を切っているS K191から18世紀後半～19世紀前半の遺物が多数出土しており、S K191の遺物がS K190に混入しているものと考えられる。そのことを考慮に入れ18世紀後半以降の遺物を除いて考えると、大橋康二氏編年III～IV期に属する肥前磁器、唐津系陶器・器手碗、丹波焼播鉢といった18世紀前半までの遺物としてまとめて把握できる。従って、この土壌は享保14年(1729)の北少路村付近で80軒焼失した火災の際のものであると考えられる。また、調査区北側でも同時期の、焼土処理土壌S K256を検出しており、一帯に火災が広がっていたことがわかる。

第57図一7は、瀬戸・美濃焼鉢である。口径11.2cm、器高5.6cm、高台径6.6cm測る。内外面はへら削りによって成彩される。外面から内面全体にわたって緑釉を施す。高台は無軸である。1630年代の黄瀬戸である。8は、須恵器壺底部部。底径(推)11.2cmを測る。内面は不定方向にナデ調整、外面は回転ナデ調整がされている。9は、土師質土器焙烙である。口径16.8cm、器高(推)6.3cmを測る。胎土は黄橙色7.5Y R 8/6を呈す。難波洋三氏の分類G類に属する。内外面口縁部はヨコナデ調整、外面底部は未調整である。外面口縁部に細長い耳がハリツケされ、外面全体に煤が付着している。



第57図 S I06 (1・2)・S Y05 (3～5)・S K277 (6)・S K190 (7～9) 出土遺物

8は7世紀後半頃に比定でき、9は18世紀後半に相当するものであるが、前述した通りSK191から混入したものと考えられることから、SK190は17世紀後半～享保14年(1729)の時期と考えられる。Ⅲ-2 a 期に属する遺構である。

5・第2次面の遺構と遺物

第2次面では東側と北側で三和土を検出した。東側の三和土は範囲がはっきりととらえられないが、東側道路より5間(約10m)までは残存している。礎石は一部確認しているが、建物復元には至らず規模は不明である。北側部分の三和土も部分的に検出したのみで規模はわからない。SB04(第52図)は、東西に2間以上(4m以上)を測る、3次面で述べた建物礎石列である。この面でも建物は三和土の範囲がわかるのみで、復元するには至らない。

SK150

SK150は調査区東側に位置し、北側は調査区外へ延びる(表1・図版21)。平面形は長方形を呈し、長さ3.23m、幅2mを測る。土層は1層で、北壁土層図第134層暗オリーブ褐色砂質土層(第48図)にあたる。遺物は大量に出土しており、その中でも屋瓦が半分以上をしめている。遺物の中には火災痕を残すものも含まれており、享保14年(1729)の北小路村の大火災の焼土処理土壌と考えられ、第3次面で検出した焼土処理土壌と同じ時期のものである。

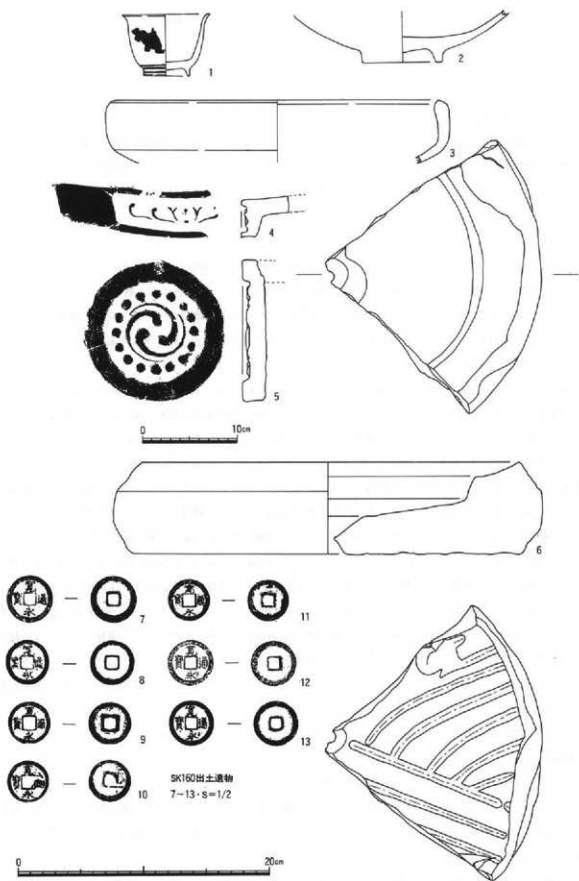
第58図-1は、肥前磁器染付湯呑碗である。口径7cm、器高5cm、高台径3.6cmを測る。口縁部は端反りで、外面はコンニャク印判により松葉文が施されている。高台畳付部分は露胎で離れ砂が付着している。内外面に付着物がみられる。大橋康二氏編年のIV期に属する。2は、埴野焼青緑釉皿である。口径6.4cmを測る。内外面は青緑釉が施され、見込みは蛇ノ目釉ハギがみられる。外面底部は無釉である。3は、土師質土器焙烙である。口径27cmを測る。内外面とも体部はヨコナア調整、内面底部はナア調整、外面底部は未調整、口縁部上部はヘラで面取りしている。外面には、煤が付着している。難波洋三氏の分類E類に属する。4・5は、屋瓦である。4は、均整草唐文軒平瓦である。上弧幅(残)11.6cm、文様区幅(推)15cm、瓦当部高4cm、文様区厚2.9cm、上周縁幅0.5cm、周縁高0.7cm、顎下部厚1.4cm、顎上部厚2.4cmを測る。瓦当面周縁部はヘラナア調整、顎下部はナア調整、平瓦部凹面は縦にヘラナア調整、瓦当部凸面は未調整で砂が付着している。5は、三ッ巴文軒丸瓦である。瓦当部径15.0cm、文様区径10.6cm、内区径7cm、周縁幅2.2cm、周縁高0.7cm、瓦当部高2.2cmを測る。左巻き三ッ巴文で連珠数16個を数える。周縁部はナア調整、瓦当部は周縁部に沿ってナア調整、瓦当部裏面は不定方向にナア調整を施す。4・5とも、胎土は灰白色を呈し、焼成は、4は良好、5はやや良好である。6は、石白の上白である。直径(推)30.6cm、高さ7.3cmを測る。花崗岩製で、下面には溝痕が中心に向かって5本単位で掘られている。

出土遺物から概観すると、17世紀末～享保14年(1729)頃と考えられる。Ⅲ-2 a 期に属する遺構である。

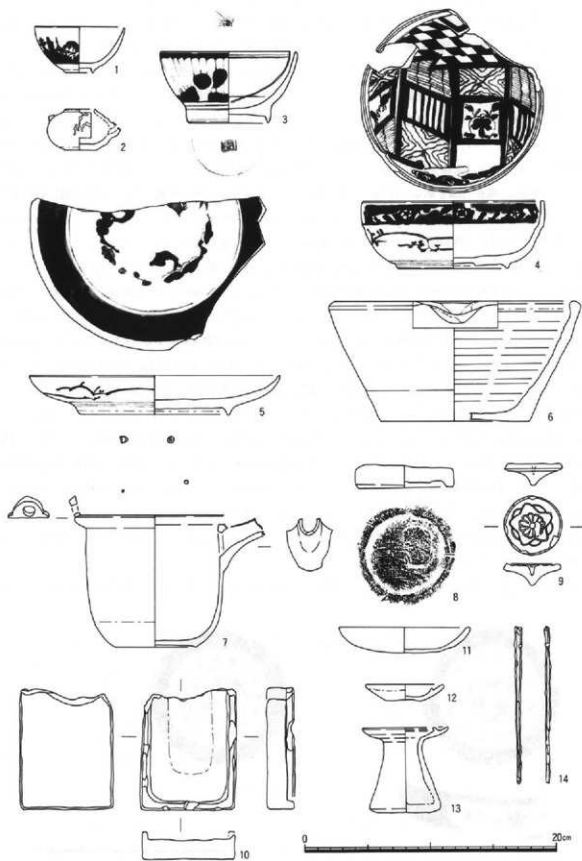
SK160

SK160は調査区東部に位置し、調査区外へ延びる(表1・図版21)。平面形は長方形を呈し、検出長4.4m、深さ0.62mを測る。埋土は4層を数える。1・3層は瓦を多く含み、遺物は大量に出土している。遺物の約1/2は屋瓦である。SK160は3次面の三和土を切っており、SB01以前の建物の建て替えの際の瓦溜土壌と思われる。

第58図-7～13は、銅銭で背文無の「新寛永通寶」である。直径は、7は2.3cm、1・8・12・13は2.4cm、9は2.5cm、10・11は2.2cmを測る。厚さはそれぞれ0.1cmである。



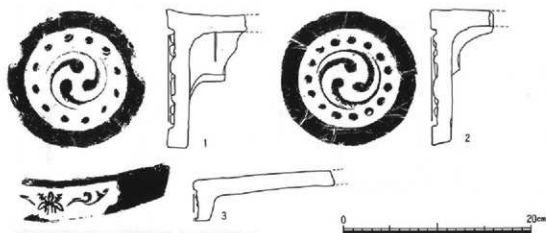
第54圖 SK150 (1~6)・SK160 (7~13) 出土遺物



第59圖 SK160出土遺物(1)

第59図-1・3-5は肥前磁器である。1は、染付猪口である。口径7.2cm、器高3.65cm、高台径7.2cmを測る。外面には、山水文が描かれている。高台畳付部分は露胎で、離れ砂が付着している。3は、広東型碗である。口径11cm、器高5.7cm、高台径6.4cmを測る。外面は蓮弁文に草花文を描いている。見込みには菊花文、高台内には「青」を現した銘がみられる。また、焼継ぎ痕もみられる。高台畳付は露胎である。4は、蛇ノ目凹型高台の鉢である。口径15.5cm、器高5.45cm、高台径8.7cmを測る。内面は藤内図、外面は連続唐草文が描かれている。5は、染付皿である。口径20cm、器高3.1cm、高台径12cmを測る。内面には松竹梅文、外面は唐草文が描かれている。高台畳付は露胎で高台内は目跡が2ヵ所残る。1・4・5は、大橋康二氏の編年IV期に属する。2は、土瓶のミニチュア製品である。口径3.3cm、器高2.5cm、底部2.6cmを測る。外面は白色釉を下半まで塗り、文様を鉄絵で描いている。底部内面は無軸である。6は、京焼片口鉢である。口径21cm、器高9.6cm、底径12cmを測る。内面には軸が掛けられているが、外面は無軸である。外面底部に砂が若干みられる。7は、丹波焼水注である。口径13cm、器高12cm、底径6.4cmを測る。内外面体部は鉄釉が施される。外面下半は無軸で煤が付着している。内面底部に2ヵ所の目跡を残す。8-9・11は、土師質土器である。8は、焼塩壺である。口径7.6cm、器高1.9cmを測る。外面上部は不定方向にナア調整、側面はヨコナア調整、内面には布目痕が残る。胎土は金雲母を含み、橙色7.5Y R6/6を呈す。小林謙一氏編年VII期（小林1992年）に属する。9は、鉢である。直径4.4cm、高さ1.7cmを測る。上型と下型の合わせ型により形成し、合わせ目をへら削り調整、外面上部より棒状工具により直径0.5cmの穿孔を有する。上部外面は型により菊花を刻む。全面に雲母がみられる。11は、皿である。口径10.6cm、器高2.1cmを測る。口縁部内外面はヨコナア調整、内面は一定方向にナア調整、外面は指頭圧調整後にナア調整を施す。胎土は灰白色10Y R8/2を呈す。口縁が内湾するタイプである。I T（伊丹郷町期）・2型式A類に属する。10は、石製硯である。幅7.5cm、高さ1.6cmを測る。花崗岩質の石材で、クリーム色10Y 9/5を呈する。愛媛県伊予市の虎間石か。12は、柿釉灯明受皿である。口径6.4cm、器高1.3cmを測る。外面底部は無軸である。ロクロ成形で内面及び外面体部は回転ナア調整、外面底部は右回転永切り痕が残る。13は、柿釉脚台付き灯明皿である。口径6.8cm、器高6.7cm、底径4.1cmを測る。内面脚台部は無軸である。脚台部と受皿部が別々にロクロ成形されている。また、脚台底部外面は右回転永切り痕を残す。14は、銅製品である。長さ12.5cm以上、幅0.5cmを測る。先端部に行く程細くなっていることから簪と思われる。

第60-1-3は、屋瓦である。1・2は、左巻き三ッ巴文軒丸瓦である。1は、瓦当部径14.7cm、文様区



第60図 SK160出土遺物(2)

径10.9cm、内区径7.5cm、周縁幅2cm、周縁高0.6cm、瓦当部高2cmを測る。連珠数12個を数える。瓦当面周縁部はナデ調整、丸瓦部凸面は前後にヘラナデ調整、文様区裏面端部は周縁に沿ってナデ調整、丸瓦部凹面は未調整で粗い布目痕を残す。2は、瓦当部径14.3cm、文様区径10.4cm、内区径7cm、周縁幅1.9cm、周縁高0.5cm、瓦当厚2cmを測る。連珠数14個を数える。調整方法は1とはほぼ同様で、瓦当面周縁部、瓦当部は縁に沿ってナデ調整、文様区裏面はナデ調整、丸瓦部凸面は前後にナデ調整、丸瓦部凹面は未調整で粗い布目痕を残す。3は、均整唐草文軒平瓦である。中心飾は、立沢高文上弧幅(推)26.4cm、文様区幅(推)14.4cm、瓦当部高4.1cm、文様区厚2.6cm、上周縁幅0.7cm、周縁高0.5cm、顎下部厚1.4cm、顎上部厚2.2cmを測る。瓦当面周縁部はヘラナデ調整、平瓦部凹面は左右にヘラナデ調整、顎下部はヘラナデ調整、顎部はナデ調整、平瓦部凸面は未調整である。1～3はともに、胎土は灰白色を呈し、焼成は良好である。この他SK160からは、大量の貝類が出土している。種類別に多い順に並べると、ハマグリ20個体以上、アカガイ・バイガイ15個体以上20個体未満となる。

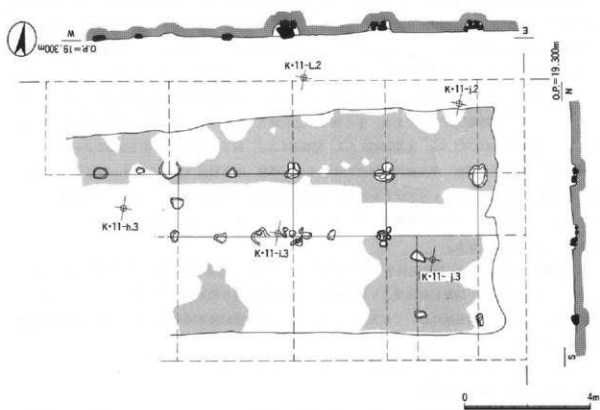
出土遺物から概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。SK160は大量の瓦が出土していることから、18世紀後半～19世紀初頭頃より伊丹町において総瓦葺きの屋根に作り替えられていったものと思われる。また、他の調査区においても瓦が多く出土するのは18世紀後半頃からである。Ⅲ-3a期に属する遺構である。

6. 第1次面の遺構と遺物

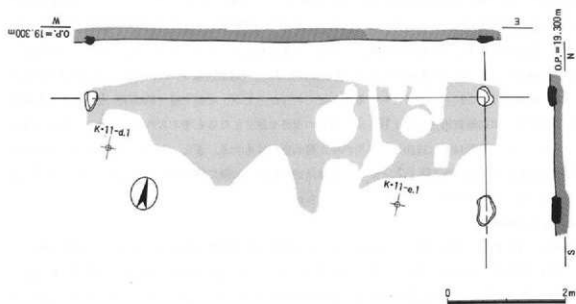
この面では、宮ノ前商店街通りに面して建つ既存建物(第2次三和土面)とその前身と考えられるSB01第1次三和土面(三和土の張り替え)を中心として、それに伴う井戸・便槽などがセットでとらえられた。SB01に伴う井戸はSE02である。井戸椀瓦を使用し、18世紀前半～現代の遺物が出土した。また、丹波焼甍を用いた便槽SW01も18世紀後半～現代の遺物が出土し、SB01に伴う便槽である。SB01第1次三和土面に伴うものとしては、SE03・SU167・SU225がある。SE03は素掘りで18世紀後半～19世紀後半の遺物が出土している。SU167・SU225は2基一組の木桶を用いた便槽である。このうち、SU167はSW02の直下であり、作り替えられたことが明らかである。SU167・SU225ともに19世紀前半の遺物が出土している。井戸・便槽が位置するのは建物の西側で、西側には裏庭が広がっていたものと考えられる。北西部は、文化年間(1804～17年)成立と推測される「文化改正伊丹之図」(巻頭図版1)に、東西方向の路地が記入されている。調査では、これを面的にとらえることはできなかったが、北壁土層(第48図)を観察すると第16層褐色砂質土層、第14層黄褐色砂質土層とが、路地の道路土層にあたるものと考えられる。これは、第1次面SB01の直下であり、享保14年(1729)の火災の焼土層の直上にあたる。また、ここに設けられている丹波焼甍の便槽SW82は18世紀後半であることから、路地は18世紀後半以降に設置され、文化年間を経て第1次面SB03が建てられる明治時代までに廃絶したと考えられる。

SB01第1次三和土面

SB01第2次三和土(上層三和土)以前の三和土が商店街通りより西へ15mまでみられた。それらから、東西に奥行は7間半(約13m)、間口は南北に4間(約8m)もしくは4間半(約9m)の範囲が推定できる。南側の三和土の下のSK160は18世紀後半～19世紀初頭の時期と考えられる。また、第2次面の三和土を切る遺構SK60は19世紀後半のものであることから、SB01第1次三和土面は19世紀前半頃に敷設されたと考えられる。Ⅲ-3b期に属する。



第61図 SB01遺構図



第62図 SB03遺構図

SB01・SS151

SB01は、既存建物である(第61図・図版22)。宮ノ前商店街通りに面して間口は南北に約4間半(9m)、奥行は6間(約11m)を測る。中央1間を通り庭として、両側に居室を設ける中土間空町屋である。調査区中央で検出したSW01、SW02は、大谷焼甕を使用した便所でSB01に伴うものである。SK151は調査区東側に位置する。平面形は円形を呈し、直径0.88m、深さ0.16mを測る。SS151は1次面のSB01に伴う礎石である。

第65図一1は、肥前磁器青磁段重蓋である。口径10.6cm、器高2.5cmを測る。口縁部内面は露胎である。大橋康二氏の福年IV期に属する。2は、丹波焼お歯黒重蓋である。底径6.4cm、残存高4cmを測る。内面にはお歯黒の鉄分が付着している。

出土遺物の時期は18世紀前半～後半と考えられる。同じくSB01に伴う礎石遺構SS148、SS157からは18世紀後半～19世紀初頭までのものが出土している。SB01は19世紀前半に建てられ、19世紀中頃以降に第2次三和土(上層三和土)が敷きなおされたと考えられる。III-3b期に属する。

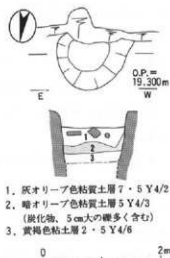
SB03

SB03は調査区北側に位置する(第62図)。残存状況が悪く詳細は不明である。東西約3.5間(7m)、南北1間以上(約2.2m以上)を測り、三和土と礎石を確認した。SB03に伴う遺構として大谷焼便槽SW04(19世紀末～20世紀初頭)がある。また、SB03の三和土を切ってSK01(明治～大正)が設けられている。従って、SB03は19世紀末～大正頃の建物である。IV期に属する。

SE03

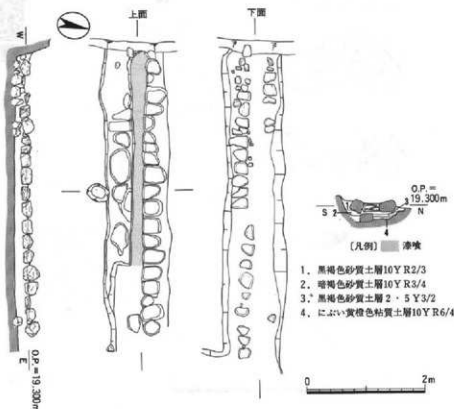
SE03は調査区南壁中央部に位置する(第63図・図版22)。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.28m、深さ1m以上を測る。断面形はほぼ垂直である。湧水層は確認することができなかった。遺物も数点しか出土していない。SE03は素掘りの井戸で出土遺物からも井戸枠を使用したSE02よりも古いものと思われる。第2次面の建物に伴うものと考えられる。

第65図一3は、肥前磁器染付蓋である。口径9.6



1. 灰オリープ色粘質土層 7・5 Y4/2
2. 暗オリープ色粘質土層 5 Y4/3 (炭化強、5cm大の硬多く含む)
3. 黄褐色粘土層 2・5 Y4/6

第63図 SE03遺構図



- (凡例) ■ 漆喰
1. 黒褐色砂質土層 10 Y R2/3
 2. 暗褐色砂質土層 10 Y R3/4
 3. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2
 4. 濃い黄褐色粘質土層 10 Y R6/4

第64図 SD01遺構図

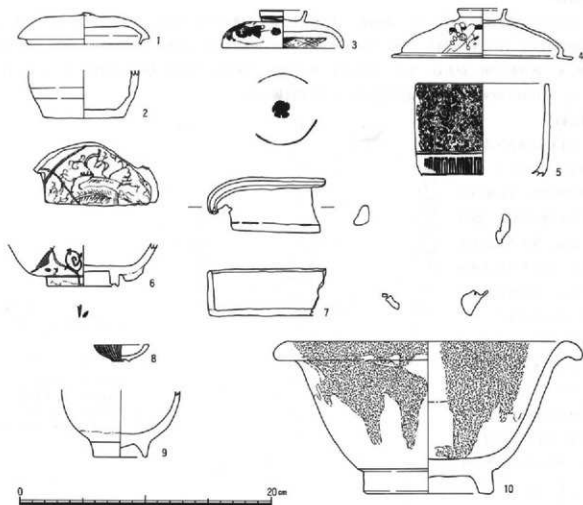
cm、器高3cm、つまみ径3.8cmを測る。外面は草花文、内面口縁部は四方棒文、見込み部分はコンニャク印判手法により五弁花が施される。つまみ端部は露胎である。大橋康二氏編年IV期に属する。4は、伊賀・信楽焼系鍋蓋である。口径15cm、器高4cm、つまみ径4cmを測る。外面には白土のイッチン掛けによって梅花を描いており、一部緑釉、鉄釉がみられる。

出土遺物から概観すると18世紀後半～19世紀後半と考えられる。III-3a～3b期に属する遺構である。

SE02

SE02は、調査区南側中央部に位置する(第53図・図版22)。平面形は円形を呈し、直径0.82m、深さ3.02m以上を測る。断面形は下部にいくほど広がっており、検出面から約1.5m程のところで大きく広がる。井戸枠は3段巻いており、遺物は大量に出土している。検出面より約2.5m下の第16層より鉄分、礫を多く含む湧水層を確認した。

第65図-5は、瀬戸・美濃焼磁器碗である。銅板摺で唐草文が染付されている。口径10cmを測る。内面口縁部は露胎である。6は、関西系染付碗である。高台径2.8cm、残存高4cmを測る。中国製品を模写したものである。内外面に染付が施され、一部赤色も使用されている。高台は輪形の中にさらに一本溝の入った二重高台で無軸である。高台内には朱書がみられ、焼継ぎ痕も見られる。外面体部には、焼成時に重ね焼きする際に下の製品の一部分が付着している。7は、柿軸蟹盃である。高さ4.7cm、幅4.4cmを測る。体部と底部は分



第65図 SS151 (1・2)・SE03 (3・4)・SE02 (5～7)・SD01 (8～10) 出土遺物

割成形し、ハリツケ後ヨコナデ調整している。外面底部は布目疵を残す。SE02からも若干ではあるが、バイガイ・アカガイ・アワビなどの貝類が出土している。

出土遺物から概観すると19世紀後半～現代と考えられる。III-3b期～IV期に属する遺構である。

SD01

SD01は調査区東端に位置し、屋敷割りを示す石積みの溝である(第64図・図版22)。検出長5m、内法幅0.25m、掘形幅約1m、深さ0.45mを測る。この溝は1度造り替えられている。当初は溝(下面)は0.2m前後の小振りの石材を用い、内法幅0.25mの規模を持っている。その後、これを埋め0.3m前後の花崗岩石を用いた溝(上面)に造り替える。新しい溝の底は漆喰が塗られている。石積の上面には一部コンクリートが塗られ、近代まで機能していたことがわかる。

第65図-8は、掘形より出土した肥前磁器白磁紅皿である。口径4.4cm、器高1.3cm、高台径1.4cmを測る。型押し成形で外面は露胎である。大橋康二氏の編年V期に属する。9は、溝最下部から出土した唐津系陶器碗である。腰部・高台を残して鉄軸が施され、高台は削り出し輪高台である。釉調は、黒色7.5Y R1.7/1を呈している。大橋康二氏編年(大橋1989年)II期に属する。10は、上面の溝の埋土から出土した瀬戸・美濃焼鉢である。口径21.6cm、器高14.2cm、高台径10cmを測る。内面は灰釉、外面は刷毛目で鉄軸を塗り、口縁部から内外に白色釉を施し、三方から緑釉を流し掛けている。高台は無釉だが高台内は鉄軸が施される。内面4カ所に胎土目が残る。

溝構築時期は掘形出土品から18世紀末～19世紀前半と考えられる。また、一部コンクリートが認められることから近代まで使われていたと考えられる。III-3～IV期に属する遺構である。

7. まとめ

このように、B-2-1調査区では5時期の遺構面をとらえることができた。第5次面は7世紀後半～17世紀後半、第4次面は17世紀後半～18世紀前半、第3次面は18世紀前半～後半、第2次面は18世紀後半～19世紀前半、第1次面は19世紀前半～近代の時期と考えられる。7世紀後半～8世紀前半までの遺構面を確認でき、第4次面で検出した畑の埋土、第3次面で検出した古い水琴窟SY05を検出したことは大きな成果である。また、元禄12年(1691)もしくは元禄15年(1702)及び享保14年(1729)の火災痕を確認することができた。このことは、調査区内に位置するDトレンチにおいても報告されており、火災の広まりを知る好資料であった。建物は第1次面以外では復元できないが、三和土の検出により建物の存在を確認できた。また、多くの貝類も出土しており、当時の食生活をうかがうことのできる好資料も得ることができた。

第4節 第51次調査B-2-2区

B-2-2区は、『天保十五年(1844)伊丹郷町分間絵図』(第212図)によると、「北少路村」と「昆陽口村」の2村にまたがっていることが分かる。『元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(第212図)では、畑地に相当することが分かる。調査区北側はB-3区、南東端はB-2-1区、南側は、前回藤井他『岡岡城跡・伊丹郷町IV』で報告した第78次調査B-8区とそれぞれ接している。調査面積は、205㎡である。

1. 基本層序

遺構面は、4面検出した。地山面は、西側が高く、O.P.=+19.100m前後を測り、東側に向かって傾斜する。B-2-1区と接する東端では、O.P.=+18.800m前後を測る。B-2-1区東端では、O.P.=+18.900m前後であり、B-2-2区東端付近では、谷地形をなしていることが分かる。

地山直上層に黄褐色砂質土層(第67図第140・58層、現地表面より約70cm下)、その上に暗オリーブ褐色土層(第67図第81層、現地表面より約50cm下)が見られる。その上層には、享保14年(1729)の焼土層と思われる褐色砂質土層(第67図第6・52層、現地表面より約40cm下)が堆積している。さらにその上層には、三和土層黄褐色土層(第67図第121層、現地表面より約20cm下)が見られる。

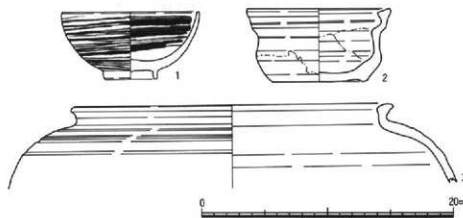
2. 第4次面の遺構と遺物

第4次面の遺構は、大半が重複のため上層で遺構掘削できなかったものである。この面本来のものは、中央部SK825・826、SP310・313~316、後述する第3次面のSD15(II期有岡城期から17世紀後半)など少数である。出土遺物もほとんどない。後述する第3次面との関係から、この面の時期は、江戸時代以前と思われるが、建物の痕跡なども見られず、宅地としての利用はなかったものと考えられる。

SK839

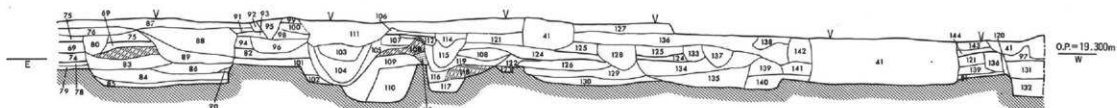
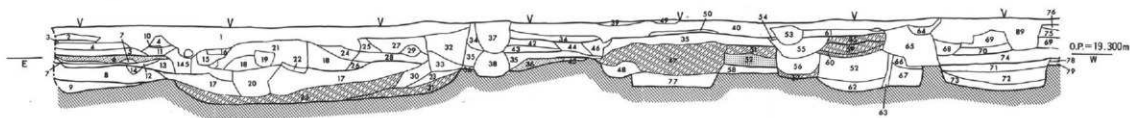
SK839(表1)は、本来3次面の遺構である。調査区中央南壁沿いに位置する。平面形は、不整形を呈し、長さ1.26m、幅0.42m以上、深さ0.29mを測る。

第66図-1は、唐津系陶器刷毛目文碗である。口径10.8cm、器高5.4cm、高台径4.0cmを測る。見込みは蛇ノ目釉ハギを施し、離れ砂が付着している。高台畳付にも離れ砂が付着している。大橋康二氏の編年による



第66図 SK839出土遺物

と、IV期に属すると考えられる(大橋1989年)。2・3は、丹波焼。2は、鉢である。口径11.6cm、器高5.8cm、底径7.4cmを測る。口縁部内面から外面体部にかけて、塗土が施されている。火入れとして使用していたのか、内面見込みから体部



1. コンクリート
2. 褐色砂質土層10Y R4/4
3. オリーブ黒色粘質土層5 Y3/2
4. 浅黄色砂質土層5 Y7/3 (整地層)
5. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6 (整地層)
6. 褐色砂質土層10Y R2/2
7. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
8. 褐色砂質土層10Y R4/6
9. 土に黄褐色粘質土層7・5 Y5/4
10. 黄色砂質土層2・5 Y7/8
11. 暗灰色粘質土層2・5 Y4/3
12. 褐色砂質土層5 Y R6/8 (整地層)
13. 黄色粘質土層10Y R5/8
14. 黄褐色土層2・5 Y5/6
15. 暗灰色粘質土層2・5 Y4/2 (遺物多量を含む)
16. 明黄褐色粘質土層2・5 Y6/6
17. 赤褐色粘質土層5 Y R4/6 (粘土多量を含む)
18. 土に黄褐色粘質土層7・5 Y R5/3
19. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/3
20. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/4 (遺物多量を含む)
21. 暗赤褐色粘質土層5 Y R3/3 (炭化物, 3~6cm大の礫多量を含む)
22. 黄褐色粘質土層10Y R7/8
23. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/3
24. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6
25. 土に黄褐色粘質土層10Y R4/3
26. 褐色粘質土層7・5 Y R4/6
27. 褐色砂質土層10Y R4/6
28. 灰色粘質土層5 Y7/2
29. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/3
30. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4
31. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5 Y3/3
32. 明黄褐色粘質土層2・5 Y7/6
33. 明黄褐色粘質土層2・5 Y6/8
34. 土に黄褐色粘質土層5 Y R5/3
35. 褐色砂質土層10Y R4/6
36. 黄褐色粘質土層10Y R6/6
37. 黒褐色粘質土層5 Y R2/1
38. 土に黄褐色粘質土層10Y R5/3 (10cm大の礫多量を含む)
39. 黄色土層2・5 Y7/8
40. 土に黄褐色粘質土層10Y R4/3
41. 脱粒

42. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
43. 褐色粘質土層7・5 Y R4/4
44. 土に黄褐色粘質土層10Y R5/3
45. 明黄褐色粘質土層2・5 Y6/8
46. 土に黄褐色粘質土層2・5 Y6/4
47. 灰褐色粘質土層10Y R2/2 (3~10cm大の礫多量を含む)
48. 褐色砂質土層10Y R4/4
49. 灰黄褐色粘質土層10Y R5/2
50. 暗褐色粘質土層10Y R3/4
51. 土に黄褐色粘質土層10Y R4/3
52. 褐色砂質土層10Y R4/4
53. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
54. 明黄褐色粘質土層10Y R6/6
55. オリーブ褐色土層2・5 Y4/3 (3~10cm大の礫多量を含む)
56. 明黄褐色粘質土層2・5 Y7/6
57. 褐色粘質土層7・5 Y R2/1 (炭化物多く含む)
58. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
59. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
60. 黒褐色粘質土層10Y R2/3
61. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6
62. 土に黄褐色粘質土層10Y R4/3
63. 黄褐色粘質土層10Y R5/3
64. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/6
65. 暗灰色粘質土層2・5 Y5/2
66. 土に黄褐色粘質土層2・5 Y6/4
67. 土に黄褐色粘質土層10Y R5/3
68. 土に黄褐色粘質土層10Y R4/3
69. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4
70. 土に黄褐色粘質土層10Y R5/3
71. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6
72. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/3 (4~5cm大の礫多量を含む)
73. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/3
74. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6
75. 明黄褐色粘質土層2・5 Y6/6
76. 明黄褐色粘質土層2・5 Y6/8
77. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
78. 褐色粘質土層10Y R4/6
79. 明黄褐色粘質土層10Y R4/6
80. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
81. 土に黄褐色粘質土層10Y R4/4 (8~8cm大の礫多量を含む)

81. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6
82. 土に黄褐色粘質土層10Y R5/4
83. 黄褐色粘質土層10Y R5/3
84. 褐色粘質土層10Y R4/6
85. 暗褐色粘質土層10Y R4/4
86. 土に黄褐色粘質土層10Y R5/4
87. 褐色粘質土層10Y R4/4 (0.5~3cm大の礫多量を含む)
88. 明褐色土層7・5 Y R6/6 (1~10cm大の礫多量を含む)
89. 暗褐色粘質土層7・5 Y R6/6
90. 褐色粘質土層10Y R4/4
91. 土に黄褐色粘質土層2・5 Y6/3
92. 褐色粘質土層10Y R4/4
93. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6 (粘土多量を含む)
94. 土に黄褐色粘質土層10Y R4/3
95. 暗褐色粘質土層10Y R3/3
96. オリーブ褐色土層2・5 Y4/6 (3~15cm大の礫多量を含む)
97. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/6
98. 土に黄褐色粘質土層2・5 Y6/3
99. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/3
100. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6 (粘土多量を含む)
101. 褐色土層10Y R4/6 (0.5~1cm大の礫多量を含む)
102. 土に黄褐色粘質土層10Y R5/3
103. 土に黄褐色粘質土層10Y R6/4 (粘土多量を含む)
104. 暗褐色粘質土層10Y R2/3
105. 褐色粘質土層10Y R4/4 (粘土多量を含む)
106. 土に黄褐色粘質土層10Y R4/3
107. 褐色粘質土層10Y R4/4
108. 黄褐色土層2・5 Y5/4
109. 褐色粘質土層10Y R4/4 (粘土多量を含む)
110. 土に黄褐色粘質土層10Y R5/4
111. 土に黄褐色粘質土層10Y R4/3
112. 褐色粘質土層10Y R4/4 (暗地層)
113. 褐色粘質土層10Y R4/4 (炭化物, 粘土多量を含む)
114. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5 Y3/3
115. 褐色土層10Y R4/4

116. 土に黄褐色粘質土層10Y R4/3
117. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4 (粘土多量を含む)
118. 暗灰色粘質土層2・5 Y4/2 (炭化物多く含む)
119. 土に黄褐色粘質土層10Y R4/3
120. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/3
121. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6 (炭化物多く含む)
122. オリーブ褐色土層2・5 Y4/4
123. 暗褐色粘質土層10Y R4/6
124. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/3
125. オリーブ褐色土層2・5 Y6/4
126. 暗褐色粘質土層10Y R3/4
127. 土に黄褐色粘質土層10Y R5/3 (粘土多量を含む)
128. 明黄褐色土層2・5 Y4/2 (粘土多量を含む)
129. 暗オリーブ褐色粘質土層2・5 Y3/3
130. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/4
131. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
132. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6
133. 褐色粘質土層10Y R4/6 (炭化物多量を含む)
134. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4
135. 土に黄褐色粘質土層10Y R4/3 (炭化物多量を含む)
136. 土に黄褐色粘質土層10Y R5/4 (粘土多量を含む)
137. 土に黄褐色粘質土層10Y R4/3 (2~6cm大の礫, 炭化物, 粘土多量を含む)
138. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
139. 褐色土層10Y R4/6
140. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/6 (4~8cm大の礫多量を含む)
141. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4
142. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/4
143. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6
144. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/4
145. 黄褐色土層2・5 Y5/3

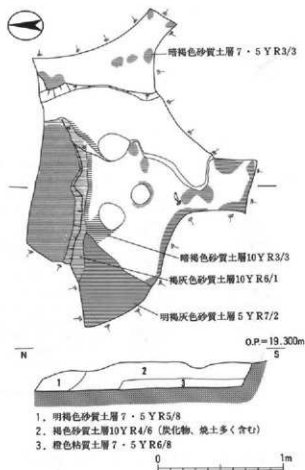


にかけて釉が変色している。3は、甕である。口径(推)24.0cmを測る。内外面に塗土が施されている。図化しなかったが、他に京焼風陶器碗や肥前磁器染付碗(大橋氏福年IV期)などが、出土している。

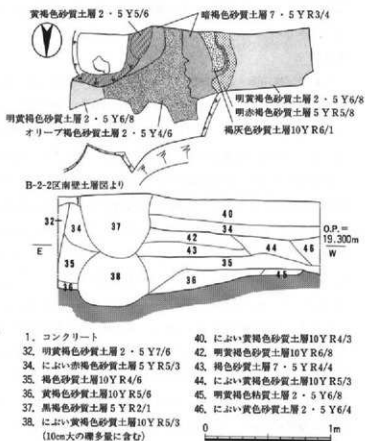
出土遺物を概観すると、17世紀末~18世紀前半と考えられる。Ⅲ-2 a 期に属する遺構である。

3. 第3次面の遺構と遺物

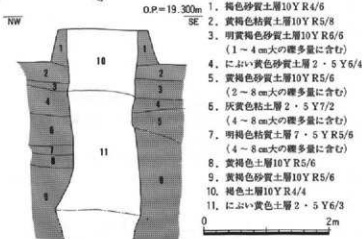
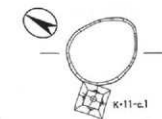
第3次面でも建物は復元できなかったが、調査区中央に南北に延びるSD19(表1)を検出した。この溝は、北側のB-5区SD05に続くものであることが分かった。B-5区SD05の埋土から焼土が検出され、出土遺物の年代観から、元禄12年(1699)あるいは元禄15年(1702)の火災痕ではないかと考えられ、SD19では、焼土は見られなかったが、同時期に埋めもどされた可能性が高い。さらにSD05は、「元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹町絵図」(第212図)によると、町代佐兵衛の屋敷東端のラインと一致し、地割溝と考えられ、SD19も同様と思われる。さらに、絵図によると、SD19より東側は、猪名野神社参道沿いの町屋(庄右衛門や源左衛門)にあたると思われるが、溝から東側に17~20m程の空白ができ、省略されていることが分かった。この溝を境に、東西ともゴミ穴と思われる土壌が集中しており、この辺りは、裏庭ではないかと考えられる。また、調査区東側で炉が2基(SX04・05)検出されている。調査しきれなかった第2次面の遺構である。西端の南北に延びる溝は、第2次面で検出されたSD15の完掘した形状である。本来この溝は、第4次面の遺構であるが、西端では堆積層が1層少なく、第2次面と第3次面を同一面でもとらえた。詳細は、第2次



第88図 SX04遺構図



第89図 SX05遺構図



第70図 SE09遺構図

ており、非常に堅い。SX04・05とも、出土遺物はなく、用途も不明であるが、高温を必要とする鍛冶炉などが考えられる。製品は全く出土しなかった。鑄型が見られないことから、鍛造用の鍛冶炉の可能性もある。窯壁片の出土したSK750の出土遺物の年代観から、17世紀後半～18世紀前半と考えられる。III-2 a期に属する遺構である。

SE09

SE09 (第70図・図版28) は、調査区東側より検出した。本来は、第2次面の遺構と思われる。後述する第1次面では、この井戸の近辺に便槽用甕SW10・11が見られることから、この辺りは、東側の建物の裏庭にあたりと考えられる。平面形は円形を呈し、直径1.2m、深さ3.0m以上を測る。素掘りの井戸である。壁面には、やや凹凸が見られる。第5層は大小の礫が多く、鉄分の沈殿は見られないが、湧水層と思われる。

第71図1～3は、肥前磁器である。1は、染付鉢である。口径(推)13.6cm、器高4.1cm、高台径8.0cmを測る。見込みには草花文、外面には連続唐草文が描かれている。高台内には、一重方形形内に溝が見られる。大橋康二氏の編年IV期に属する。2は、染付端反碗である。口径(推)9.8cm、器高5.4cm、高台径(推)3.8cmを測る。口縁部に一部黒く焼けているところがある。外面に山水文が描かれ、高台内に銘款が見られるが、不明である。大橋康二氏の編年IV期に属する。3は、染付小瓶である。直口で、口径1.7cm、器高12.4cm、高台径4.8cm、体部最大径6.9cmを測る。内面は、口縁下部まで無釉である。外面は、体部下半に團縁をめぐらせ、上部を蛸唐草文でうめる。大橋康二氏の編年V期に属する。4は、携焼摺鉢である。口径(推)35.0cmを測る。胎土に0.1～0.4cmの小石を含む。摺目は、8本単位である。口縁部付近に及んだ余分な摺目を除くために、口縁部にナデ調整を行っている。外面は、口縁部外縁帯直下からロクロ右回転のヘラケズリが施されている。白神典之氏の分類II類に属する(白神1990年)。5は、軒平瓦である。上弧幅(推)22.0cm、瓦当部高4.0cm、文様区幅13.0cm、文様区厚2.6cmを測る。文様は、退化した均整唐草文で、中心飾が花冠、端文様はY字状若葉が加わる。瓦当部及び平瓦部の凹面は横方向のナデ調整、上下両層縁はヘラナデ調

面で述べることにする。

SX04・05

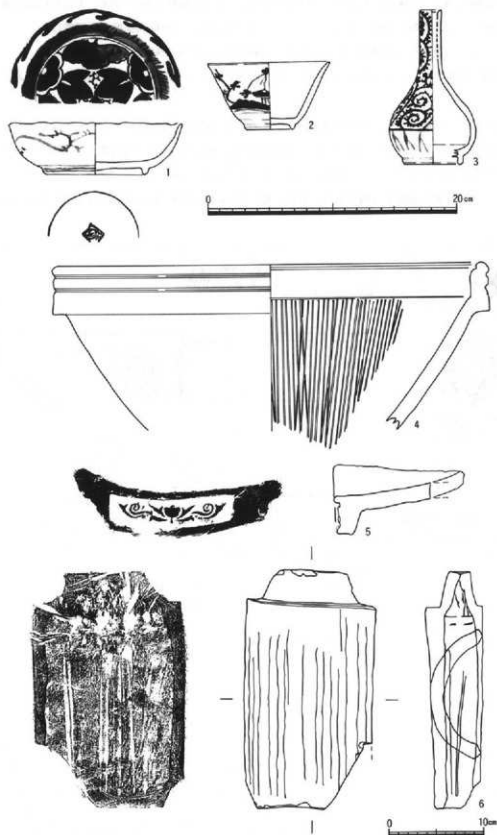
SX04・05 (第68・69図・図版28)

とも、調査区東側で検出した。炉である。建物との関係は不明である。

SX04は、不整形を呈し、長さ1.93m、幅1.73m、深さ0.21mを測る。

SX05は、不整形を呈し、長さ1.93m、幅1.10m、深さ0.20mを測る。

どちらも上部は削平され、底部のみ残存していた。底部は浅いU字形を呈し、非常に堅く焼きしまっている。SX04の南側には、炭化物・灰が薄く堆積していた。後述するSK750から、これらの炉の窯壁と思われる窯壁片が出土している。窯壁片は、還元焰を受けたと見えて青灰色を呈し



第71圖 SE 09出土遺物

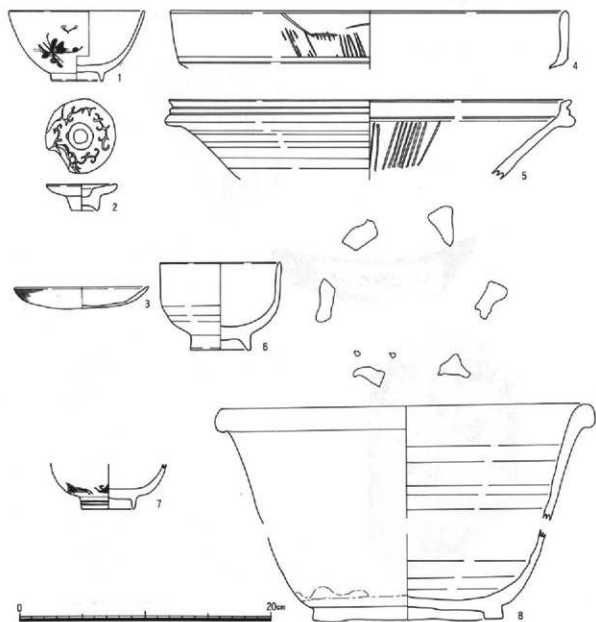
整、顎下部から平瓦部との接合部分までナデ調整、平瓦部凸面は未調整である。6は、丸瓦である。全長25.5cm、丸瓦部幅13.8cm、玉縁部長3.75cm、玉縁部高4.75cm、玉縁部幅10.55cmを測る。丸瓦部凸面は縦方向にヘラナデ調整で、前後端部は面取りが施されている。丸瓦部凹面には甲板調整板、両側端はヘラケズリ調整が施されている。玉縁部凸面は横方向のナデ調整、玉縁部凹面には布袋紐跡が見られる。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。III-3 a 期に属する遺構である。

S K 798

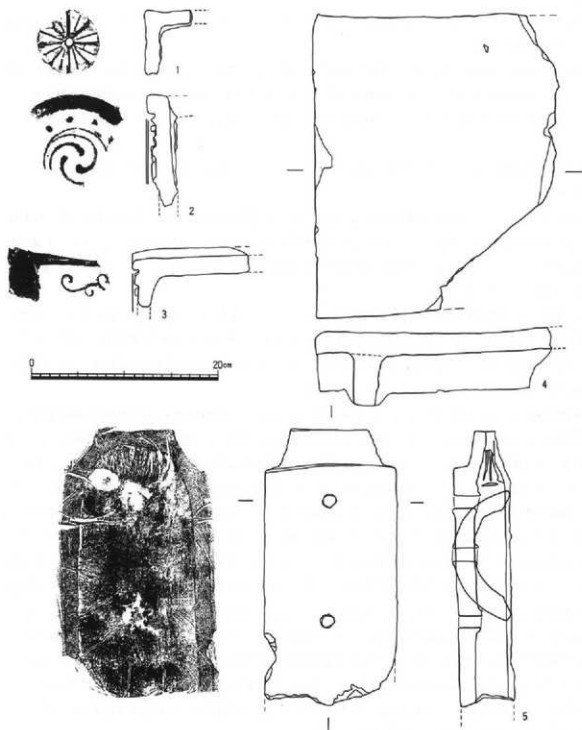
S K 798 (表1・図版28) は、調査区東端に位置する。池状遺構と考えられる。平面形は不整形を呈し、長さ3.27m以上、幅1.7m、深さ0.11mを測る。遺構東側は、調査区外に延びる可能性がある。南西側には、石列の溝S D 20が見られることから、庭池の一部であった可能性がある。

第72図一1は、肥前磁器染付碗である。口径(推)10.8cm、器高5.6cm、高台径4.2cmを測る。見込みに産



第72図 SK798 (1~4)・SK771 (5・6)・SK750 (7・8) 出土遺物

れ砂が付着している。外面に幾何学文が描かれている。大橋康二氏の編年IV期に属する。2は、ミニチュア土製品である。器種は不明である。口径5.6cm、器高2.1cm、高台径2.6cmを測る。文様は型押しで、体部と高台部は、別々に型押しにより作られた後、接合されている。接合部は、ヨコナデ調整されている。高台部に煤が付着している。表面全体に雲母が見られる。用途は不明である。3・4は、土師質土器である。3は、皿である。口径10.8cm、器高1.8cmを測る。胎土は、明褐色7.5Y R7/2を呈す。手ずくね成形で、口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整、外面は指頭圧調整を施している。口縁部から外面にかけて煤が



第73図 SK750出土遺物

付着していることから、灯明皿として使用していたと考えられる。I T (伊丹郷町期)・1 型式B類に分類される皿である。4は、焙烙である。口径(推)32.0cmを測る。胎土は、にぶい橙色5 Y R 7/4を呈す。口縁部内外面はヨコナデ調整、口縁部外面に櫛状工具で左上がりに掻き上げた跡がある。内面底部は未調整で、離れ砂痕が見られる。内外面に雲母が見られ、外面全体に煤が付着している。難波洋三氏の分類C類に属する(難波1992年)。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀前半と考えられる。III-2 a 期に属する遺構である。

S K 771

S K 771 (表1)は、調査区中央南壁沿いに位置する。平面形は不整形を呈し、長さ1.2m以上、幅0.4m以上、深さ0.5mを測る。

第72図-5は、丹波焼播鉢である。口径(推)32.2cmを測る。播目は、7本単位である。口縁部から外面にかけて施釉されている。大平茂氏の編年VI型式に属する(大平1992年)。6は、唐津系陶器器手碗である。口径(推)9.7cm、器高7.0cm、高台径4.8cmを測る。他に、図化しなかったが、京焼風陶器碗なども出土している。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀前半と考えられる。III-2 a 期に属する遺構である。

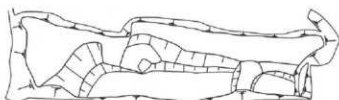
S K 750

S K 750 (表1)は、調査区東側南壁沿いに検出した。平面形は不整形を呈し、長さ3.11m以上、幅1.66m、深さ0.28mを測る。上層からは、S X 04の窯壁と思われる窯壁片が、多数検出された。また、大量の瓦類も出土している。一部瓦葺きの建物を取り壊した時の廃棄土壌と思われる。従って、炉は一部瓦葺きの建物内に存在していたと考えられる。

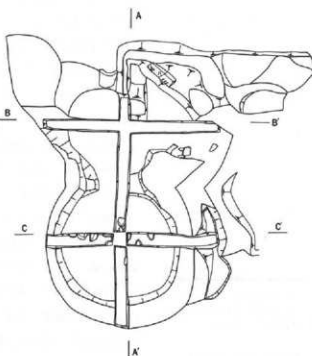
第72図-7は、肥前磁器染付碗である。高台径4.2cmを測る。大橋康二氏の編年IV期に属する。8は、伊賀・信楽焼陶器鉢である。口径(推)28.0cm、高台径15.4cmを測る。胎土に0.1cm程の礫を含む。見込みに6カ所、砂目が付着している。内外面には灰釉が施され、さらにその上、内面体部中程から外面にかけて青緑釉が施されている。これは19世紀後半～末の混入品である。

第73図-1～5は、瓦類である。1は、菊花文道具瓦である。瓦当部径6.9cm、瓦当部厚0.95cmを測る。瓦当部上部から丸瓦部凸面にかけてナデ調整、瓦当部下部はナデ調整、瓦当部裏面周縁部は、周縁に沿ってナデ調整、瓦当部裏面中央部は、不定方向のナデ調整、丸瓦部凹面はナデ調整が施されている。2は、軒丸瓦である。瓦当部径(残)12.0cm、丸瓦部は欠損している。胎土に0.1cm以下の礫を含む。内区に左巻き三ツ巴文に圏線をなし、外区に連珠文を配する。巴文の頭部は小さく、尾部は長い。圏線に尾部の先端が接する。連珠は小さい。瓦当部裏面は、不定方向のナデ調整が施されている。3は、軒平瓦である。全長(残)12.4cm、瓦当部上弧幅(残)11.7cm、瓦当部高(残)5.05cmを測る。文様は、唐草文である。瓦当部から平瓦部凹面にかけてナデ調整、周縁上部及び左周縁はヘラナデ調整、瓦当部裏面はナデ調整、瓦当部と平瓦部凸面との接合部分はナデ調整、平瓦部凸面は未調整である。4は、道具瓦である。高さ8.7cm、幅32.4cmを測る。体部凸面はナデ調整、凸面端部は横方向にヘラナデ調整である。突起部はハリツケられている。体部凹面と脚部の接合部には、ナデ調整が施されている。凹面の接合部以外は、未調整である。5は、軒丸瓦である。全長(残)29.2cm、丸瓦部幅13.95cm、玉縁部長4.95cm、玉縁部幅10.95cm、玉縁部高4.55cm、釘穴径1.3～1.4cmを測る。丸瓦部凸面はナデ調整、凹面には布目痕が見られ、両側端部はヘラによる面取りが施されている。玉縁部凸面はナデ調整、凹面には布袋痕が見られる。

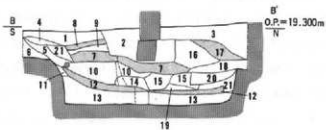
出土遺物を概観すると、18世紀前半～中頃と考えられる。III-2 b 期に属する遺構である。



B-5 sv01(1階敷)



B-2-2 sv697(1階敷)



1. 淡黄色粘土層 2・5 Y6/4
2. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8
3. にごり黄褐色粘質土層10 Y R4/3
4. 褐色粘質土層10 Y R4/4
5. 黄褐色土層10 Y R5/6
6. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6 (粘土多量に含む)
7. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
8. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6



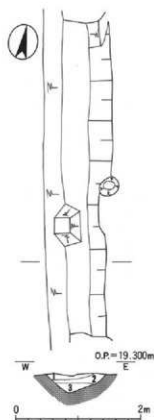
9. 褐色砂質土層10 Y R4/6
10. 褐色砂質土層10 Y R4/4
11. (炭化物多量に含む)
12. 明黄褐色粘質土層10 Y R3/2
13. (粘土、炭化物多量に含む、表面)
14. 明黄褐色粘質土層10 Y R6/8
15. 明黄褐色砂質土層 7・5 Y5/6
16. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3 (1cm以下の層多量に含む)

1. 褐色砂質土層10 Y R4/6
2. 褐色砂質土層10 Y R4/4
3. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
4. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
5. 黄褐色粘質土層10 Y R5/8
6. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
7. にごり黄褐色粘質土層10 Y R5/4 (粘土多量に含む)
8. 褐色粘質土層10 Y R4/4 (粘土多量に含む)
9. 褐色粘質土層10 Y R4/6
10. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
11. 褐色粘質土層10 Y R4/4
12. にごり黄褐色粘質土層10 Y R4/3 (炭化物多量に含む)
13. 褐色粘質土層10 Y R4/4
14. 褐色粘質土層10 Y R4/6
15. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
16. にごり黄褐色粘質土層10 Y R5/4
17. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 (粘土多量に含む)
18. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
19. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
20. 褐色粘質土層10 Y R4/6
21. 明黄褐色粘質土層10 Y R6/6

1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
2. 黒褐色砂質土層10 Y R3/2 (粘土、炭化物多量に含む)
3. 明黄褐色砂質土層10 Y R6/8
4. 明褐色砂質土層 7・5 Y5/6
5. 黄褐色砂質土層10 Y R5/6



第74図 SV697・SV01遺構図



1. 明褐色砂質土層 7・5 Y R 5/8
2. 黄褐色砂質土層 10 Y R 5/6
3. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/8

第75図 SD15遺構図

である。

出土遺物を概観すると、16世紀後半と考えられる。この溝は、北はB-3区SD08（16世紀後半に埋没）、第167次調査B-16区SD100（未報告）へ、南は第78次調査B-8区（17世紀後半まで再利用、「有岡城跡・伊丹郷町IV」報告）SD04へと続く溝である。II期に属する遺構である。土層を観察すると、初期堆積土第3層と上層に大別できる。下層からは、有岡城期の出土遺物第78図-1・2・4が出土した。上層からは、第78次調査B-8区で17世紀後半の遺物出土する。すなわちこの溝は、有岡城期に掘削され、江戸期に再利用されたものと考えられる。また、17世紀後半には、溝は埋没している。「元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図」、「寛政八年（1796）伊丹郷見絵図」には、この溝の場所に南北方向の道が描かれており、この溝は、この道路の初期の側溝であったと考えられる。「天保十五年（1844）伊丹郷町絵図」では、この道はなくなっている。

SV697

SV697（第74図・図版28）は、調査区東端に位置する。東西2基1組の竈と思われる。西半分は、調査区外で、第63次調査B-5区SV01となる。平面形は双円形を呈す。長さ2.26m、東側の直径約1.0m、残存高0.2mを測る。焚き口は南側と考えられる。燃焼室は、東側と西側では、底部の形が異なるが、粘土が貼られている。底面には灰が残り、壁面は赤褐色に焼けている。また、この竈の直下から、もう1基の竈が検出された。この竈は、上の竈に壊され、一部を残すのみである。おそらく再構築されたものであろう。

4. 第2次面の遺構と遺物

第2次面は、調査区中央北側に三和土が検出されているが、これに伴う礎石などは見当たらず、建物の全容は確認できなかった。しかし、西側では、ゴミ穴と思われる土坑が集中している部分と、そうでない部分があり、集中している部分は裏庭、少ない部分は建物部分であったことが考えられる。また、大規模な火災を示す焼土処理土壇（SK633・670・678・730など）が見られる。中でもSK633-678は、出土遺物から享保十四年（1729）の火災の処理土壇と考えられる。東端からは、第63次調査B-5区へ続く竈SV697、西端では、南北へ延びる有岡城期から続くSD15を検出している。

SD15

SD15（第75図・図版29）は、調査区西端を南北に走り、調査区外へ延びる溝である。本来第4次面の遺構である。検出長4.16m、幅（残）1.0m、深さ0.22mを測る。

第78図-1・2・4は、備前焼である。1は、壺である。胎土は、黄灰色2.5Y6/1を呈す。体部外面には、波状文が施されている。間壁忠彦氏の編年V期に属する（間壁1991年）。2は、鉢である。口径（推）15.0cmを測る。口縁部外面に一条の凹線を施す。体部外面には、ナデ調整が施されている。4は、擋鉢である。底径（推）16.2cmを測る。胎土に0.1~0.3cmの白色礫を含む。内面は、櫛目状のもので擋目を施す。擋目は、放射状のものと斜めのものが入り交差している。外面体部はナデ調整、外面底部は未調整

第78図-3は、唐津焼鉢である。甕の下の包含層から出土した。甕が築かれる前の遺物である。高台径(推)8.0cmを測る。外面下半と高台は無釉である。内面には、灰釉が施され、見込みには胎土目跡が見られる。高台は削り出しで、削りが浅い。また、高台畳付にも目跡が見られる。8は、九瓦である。全長(残)14. cm玉縁部長3.25cmを測る。九瓦部凸面は縦方向にヘラナデ後ナデ調整、凹面は印板のタキキ痕が見られる。玉縁部凸面は横方向のナデ調整、凹面には布袋紐痕が見られる。玉縁部凹面両側端は、水平に近いナデ調整が施されている。にぶい黄橙色10Y R7/3に変色している部分がある。

出土遺物を概観すると、18世紀末～19世紀前半と考えられる。III-3 a 期に属する遺構である。

SK724

SK724(表1)は、調査区中央部北壁沿いに位置する。平面形は不整形を呈し、長さ1.4m以上、幅0.93m以上、深さ0.58mを測る。

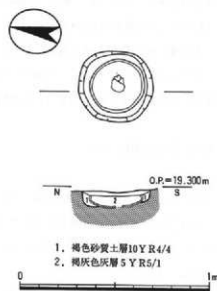
第78図-5は、肥前磁器染付碗である。口径(推)9.8cm、器高7.1cm、高台径4.0cmを測る。外面に一重網目文が描かれている。大塚康二氏の編年III期に属する。図化しなかったが、他に嬉野焼碗・京焼風陶器碗・唐津系陶器兵器手碗などが出土している。

出土遺物の年代観から、17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。III-2 a 期に属する遺構である。

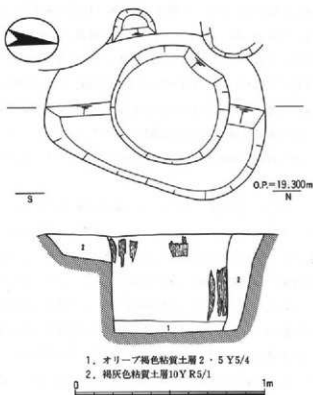
SK678

SK678(表1・図版28)は、調査区中央部北壁沿いに検出された。焼土処理土壌である。平面形は、不整形を呈し、長さ2.26m以上、幅1.20m以上、深さ0.62mを測る。三和土の直下に存在する。

第78図-6は、肥前磁器白磁皿である。口径8.6cm、器高2.1cm、高台径3.3cmを測る。見込みは、蛇ノ目粒ハゲで離れ砂が付着している。高台及び外面下半は、無釉で離れ砂が付着している。7は、嬉野焼灰釉碗で



第76図 SK642遺構図



第77図 SU613遺構図

ある。口径(推)12.0cm、器高4.6cm、高台径4.2cmを測る。見込みから外面体部中程まで灰釉が施されており、高台までは無釉である。見込みには、蛇ノ目輪ハギが見られ、口縁部は薄く焼けている。図化しなかったが、他に唐津系陶器刷毛目文碗・肥前磁器染付碗(大橋康二氏の編年IV期)なども出土している。

出土遺物の年代観から、17世紀後半～18世紀前半と考えられる。このことから、享保14年(1729)の北少路村の大火災の際の焼土処理土壌と思われる。これによって、第2次面のこの付近の三和土は、享保14年(1729)以降に設けられたことが判明する。III-2 a 期に属する遺構である。

S K 642

S K 642(第76図・図版29)は、調査区中央部北側に位置する。平面形は、円形を呈し、直径0.49m、深さ0.08mを測る。三和土を切って、土師質土器焙烙を埋置した遺構である。底部は、打ち欠いて穴を開けている。内部には灰がつまっていた。掘りごたつの火床の可能性も考えられるが、性格は不明である。

第78図-9は、土師質土器焙烙である。口径27.7cm、器高(推)6.3cmを測る。胎土は、橙色5 Y R 7/6を呈す。口縁部内外面はヨコナエ調整、内面体部から底部にかけてナエ調整、外面体部から底部にかけて未調整で雫れ砂が残る。内面底部・外面全体に煤が付着している。外面底部には、薬が付着している。難波洋三氏の分類E類に属する。

出土遺物の年代観から、18世紀後半と考えられる。III-2 b 期に属する遺構である。

S K 663

S K 663(表1)は、調査区西側に位置する。平面形は不整形を呈し、長さ1.5m、幅1.44m、深さ0.54mを測る。

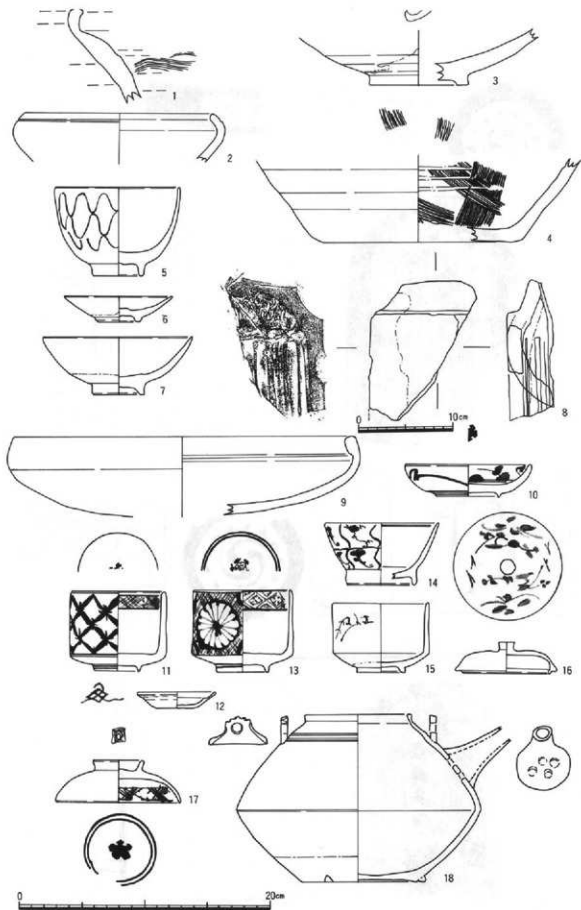
第78図-10・11は、肥前磁器である。10は、染付皿である。口径(推)11.0cm、器高2.55cm、高台径(推)5.0cmを測る。内面には簡略化された唐草文、見込みには手描きの五弁花が描かれている。外面には、折れ松葉文が描かれている。大橋康二氏の編年IV期に属する。11は、染付筒型碗である。口径(推)7.6cm、器高6.4cm、高台径(推)3.6cmを測る。内面口縁部には四方禪文が見られ、見込みには手書きの五弁花が見られる。外面には七宝文、外面下部には簡略化された宝袋文が描かれている。大橋康二氏の編年V期に属する。12は、柿輪灯明皿である。口径(推)6.4cm、器高1.3cm、底径3.2cmを測る。受けを持つタイプである。内面から外面口縁部まで施釉されている。底部に左回転切り痕が見られる。他に、肥前磁器染付碗(丸窓文、大橋康二氏の編年IV期)・京焼系陶器碗などが見られる。

出土遺物を概観すると、18世紀中頃～後半と考えられる。III-2 b 期に属する遺構である。

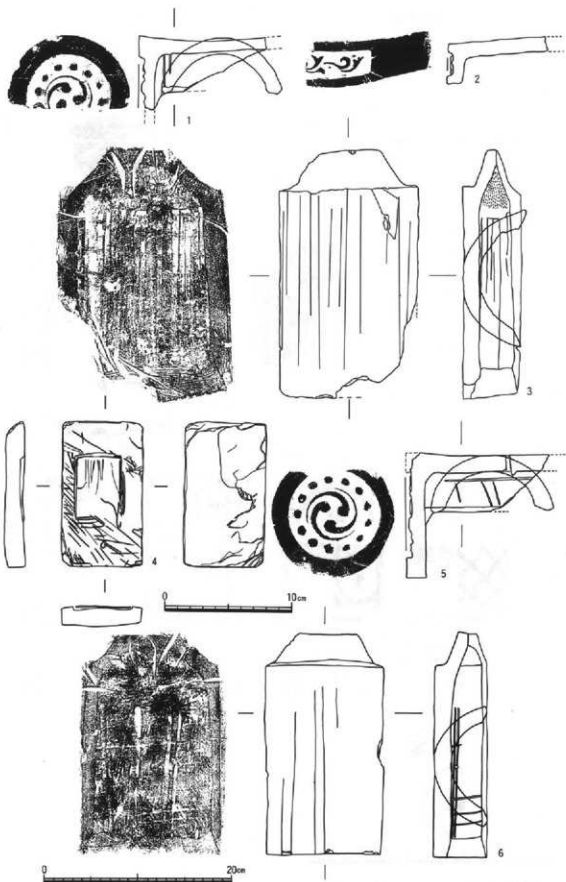
S U 613

S U 613(第77図・図版28)は、調査区東側に位置する。最初は土壌で捉えられていたが、埋桶遺構であった。裏庭と考えられるところにあり、便槽桶かと思われる。この辺りに存在した建物に伴う遺構と思われる。掘形の平面形は不整形を呈すが、埋桶部分は円形を呈す。掘形は長さ1.15m、幅0.86m、深さ0.51mを測り、埋桶部分は直径0.66m、深さ0.46mを測る。内面には付着物が見られるが、不明である。

第78図-13・16・17は、肥前磁器である。13は、染付筒型碗である。口径(推)7.7cm、器高6.55cm、高台径(推)4.0cmを測る。外面には菊花文と源氏車文が見られる。内面口縁部には四方禪文、見込みには手書きの五弁花が見られる。大橋康二氏の編年V期に属する。16は、染付蓋物の蓋である。口径8.2cm、器高2.5cm、つまみ径1.4cmを測る。外面には、草花文が見られる。蓋と身が接する部分は露胎で、雫れ砂が付着している。17は、青磁染付碗の蓋である。口径(推)9.8cm、器高3.4cm、つまみ径3.8cmを測る。つまみ内には二重方形枠内に満福の銘款が見られ、内面には四方禪文、見込みには五弁花が見られる。大橋康二氏の編年IV期



第78图 SV697 (3·8)·SD15 (1·2·4)·SK724 (5)·SK678 (6·7)·
SK642 (9)·SK663 (10-12)·SU613 (13·16·17)·SK681 (14·15-18) 出土遗物



第79回 SK681 (1-3)・SK722 (4-6) 出土遺物

に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ-3 a 期に属する遺構である。

S K 681

S K 681 (表1) は、調査区東側中央に位置する。平面形は、円形を呈す。直径0.84m、深さ0.46mを測る。

第78図一14は、肥前磁器広東型碗である。口径(推)9.2cm、器高5.0cm、高台径(推)5.6cmを測る。小型で、器壁は薄手である。外面には、仙芝祝寿文が描かれている。大橋康二氏の編年V期に属する。15は、京焼系陶器筒型碗である。口径(推)7.8cm、器高5.5cm、高台径4.0cmを測る。内面から外面にかけて灰釉が施されているが、外面下半から高台にかけて無釉である。外面には、草文が描かれている。18は、伊賀・信楽焼鉄釉土甌である。口径(推)8.6cm、器高(推)13.4cm、底径9.1cmを測る。器形は算盤玉形、注口は鉄釉口形である。注口、肩の耳はハリツケ、脚も三足ハリツケられている。口縁先端部は露胎、内面にも鉄釉が施されているが、一部掛けられていない部分もある。胴部下半から底部は無釉、底部には煤が付着している。

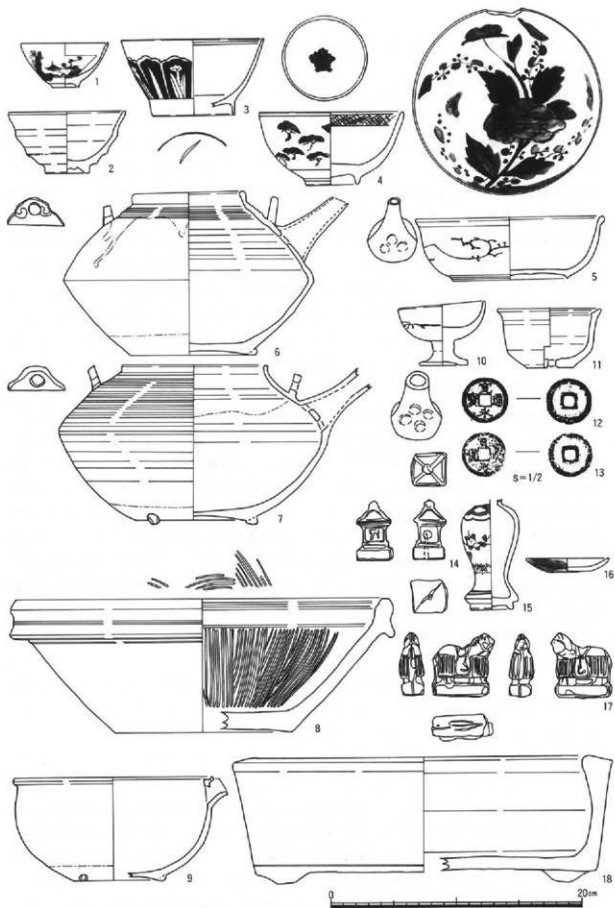
第79図一1は、軒丸瓦である。瓦当部下半部が欠損している。瓦当部径13.3cm、周縁幅は、2.2cmである。胎土に0.1cm程の礫を含む。瓦当文様は、内区に左巻三ツ巴文、外区に連珠文を配する。連珠数は8個まで確認できる。巴文の頭部は大きく、尾部は細長く、先端は接しきみである。瓦当周縁部は、周縁に沿ってヘラナデ調整、一部ナデ調整が施されている。丸瓦部凸面は前後方向にヘラナデ調整、凹面は布目痕が見られる。丸瓦部凹面両側端は、ヘラケズリによる面取りが施されている。瓦当部裏面には丸瓦部との接合の際のクシ目が見られる。2は、軒平瓦である。全長(残)10.4cm、文様区厚4.3cmを測る。胎土に0.1cm程の礫を含む。文様は均整唐草文である。中心飾は欠損しており不明であるが、端文様は芽状突起をもつ若葉である。瓦当周縁部は横方向にヘラナデ調整、裏面は平瓦部との接合部分まで横方向にナデ調整が施されている。瓦当周縁部は周縁に沿ってナデ調整、顎下部は周縁に沿ってヘラナデ調整が施されている。平瓦部凹面はナデ調整、凸面は未調整である。3は、丸瓦である。全長26.6cm、丸瓦部幅14.9cm、高さ6.15cm、厚さ1.75cm、玉縁部長3.8cm、玉縁部幅14.75cm、玉縁部高4.9cmを測る。丸瓦部凸面は縦方向にヘラナデ調整、凹面には布目痕と印板のタタキ痕が見られ、両側縁は縦方向にヘラケズリ調整が施されている。玉縁部凸面は横方向のナデ調整、凹面には布袋縫跡が見られる。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ-3 a 期に属する遺構である。

S K 722

S K 722 (表1・図版28) は、調査区中央部に位置する。屋根瓦を中心に遺物が多く出土している。平面形は不整形を呈し、長さ2.38m、幅2.08m、深さ0.70mを測る。覆土は4層に区分でき、第2層・第4層は瓦片を多量に含んでいた。第3層は、オリープ褐色2.5Y4/6を呈する炭化物層である。

第79図一4は、硯である。砥石を削り作っている。材質は、粘板岩である。長方形を呈し、全長11.7cm、幅6.5cm、高さ1.4cmを測る。色調は淡黄色5Y8/3を呈する。海は、浅く削り作られている。5は、軒丸瓦である。全長(残)15.3cm、瓦当部径13.3cm、文様区径8.2cm、内区径10.3cm、周縁幅2.1cm、瓦当部厚2.1cmを測る。瓦当文様は内区に左巻き三ツ巴文、外区に連珠文を配する。連珠数は、13個である。瓦当周縁部は周縁に沿ってナデ調整、周縁側面及び瓦当部裏面周縁部も周縁に沿ってナデ調整が施されている。丸瓦部凸面は縦方向にヘラナデ調整、凹面には布目痕が見られる。凹面両側端は、縦方向にヘラケズリ調整が施されている。丸瓦部に、釘径0.45cmの穿孔が1カ所見られる。瓦当部と丸瓦部を接合後、指頭圧調整している。6は、丸瓦である。全長24.3cm、丸瓦部幅12.65cm、高さ5.45cm、厚さ1.8cm、玉縁部長3.5cm、玉縁部幅10.35

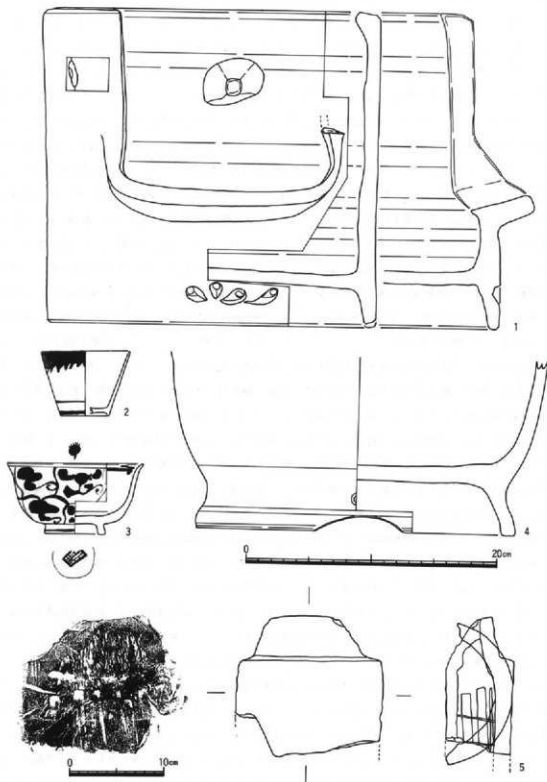


第90图 SK722出土遗物

cm、玉縁部高4.45cmを測る。丸瓦部凸面は縦方向にヘラミガキを行っている。凹面には布目痕があり、さらに甲板調整が施されている。凹面両側縁はヘラケズリ調整が、前縁縁は横方向にヘラケズリ調整が施されている。玉縁部凸面にはナデ調整、凹面には布袋紐痕が見られる。

第80図一1は、肥前磁器染付小坏である。口径7.0cm、器高4.5cm、高台径2.2cmを測る。ほぼ完形である。外面に山水文が描かれている。2は、萩焼蓋灰釉茶碗である。口径(推)9.6cm、器高4.9cm、高台径3.6cmを測る。外面下半から、高台にかけて無軸である。横崎彰一氏の編年によると、小碗V期A—b類に属する(横崎1990年)。3—5・10・15は、肥前磁器である。3は、広東型染付碗である。口径(推)11.2cm、器高6.0cm、高台径(推)6.4cmを測る。薄手の作りのものである。外面には、蓮弁の中に、花文と尖棒形が描かれ、交互に連続した文様が見られる。また、高台内には、焼継ぎ跡が見られる。大橋康二氏の編年V期に属する。4は、染付碗である。口径11.4cm、器高5.8cm、高台径4.0cmを測る。器壁は厚く、ほぼ完形である。外面には松文、内面口縁部には斜格子文、見込みにはコンニャク印刺五弁花が見られる。大橋康二氏の編年IV期に属する。5は、染付鉢である。口径14.7cm、器高4.9cm、高台径9.6cmを測る。口縁部は外面に反り、先端はやや丸みを帯びている。蛇ノ目凹形高台である。外面には連続唐草文、内面底部には一輪の牡丹花と蕾が描かれている。大橋康二氏の編年IV期に属する。10は、染付仏器具である。口径7.1cm、器高5.2cm、高台径3.8cmを測る。器壁は厚手である。体部外面には、草文が描かれている。高台内外面は、釉が施されておらず、体部が赤くなっている。また、口縁部には数カ所欠けている部分があり、別の用途に利用されたのではないかと考えられる。大橋康二氏の編年V期に属する。15は、色絵神酒徳利である。口縁部は欠損、残存高8.9cm、底径(推)3.0cmを測る。器形は瓶子形である。外面肩部には宝珠文、胴部には松竹梅文が描かれている。大橋康二氏の編年V期に属する。6・7・9は、伊賀・信楽焼である。6は、鉄釉土瓶である。口径8.6cm、器高13.0cm、底径9.25cmを測る。算盤玉形で、注口は鉄鈹口形を呈する。注口、脚、肩の双耳ともハリツケである。外面口縁端部から外面下半にかけて鉄釉が施され、下半から底部は無軸である。外面上半には、一部灰釉が流し掛けされている。胴部突出部分には、ヘラによる面取りが施されている。7は、灰釉土瓶である。口径11.5cm、器高12.8cm、底径8.7cmを測る。算盤玉形で、注口は鉄鈹口形を呈す。三足の脚をハリツケる。肩に双耳をハリツケる。外面口縁端部から底部より1cm上まで灰釉が施され、底部は無軸である。内面は口縁部より4cm程下まで灰釉が施されており、一部底部まで流れている。また、内面には煤が付着している。9は、行平鍋である。口径(推)15.8cm、器高8.3cm、底径6.5cmを測る。内面から外面下半まで、灰釉が施されている。底部の無軸部分には、煤が付着している。口縁端部の断面形はL字形を呈し、露出である。底部には三足の脚をハリツケる。8は、栗焼摺鉢である。口径(推)29.6cm、器高10.6cm、底径(推)14.0cmを測る。摺目は9本単位、楕円状のもので、底部際から口縁に向けて入れられている。見込みの摺目は、三角形になると考えられる。口縁部外縁帯の張りが大きい。外面底部際から口縁部外縁帯直下まで、左回転のヘラケズリ調整、口縁部内外面ともナデ調整が施されている。外面底部は未調整、内面には焼成時の重ね台の跡(半径4.5cm)が見られる。白神典之氏の分類II期に属する。11は、土師質土器薬瑠である。口径8.2cm、器高4.6cm、底径3.7cmを測る。内外面とも鉄釉が施されている。中心の灯芯立ては欠損、行灯などの底板の釘に差し込むための穴のみが見られる。12・13は、寛永通寶である。どちらも鑄造地は不明であるが、古寛永である。12は銭径2.5cm、銭厚0.15cm、13は銭径2.4cm、銭厚0.13cmを測る。14・17はミニチュア土製品である。14は、箱庭道具である。合わせ型成形の神輿である。型抜き後、合わせ目をヘラで削り、調整している。側面には、鳥居と丸文がそれぞれ2面ずつ型どられている。底部は未調整で、直径0.3cm、奥行き2.1cm程の穿孔を有する。乾煤を早くし、焼成時の割れを防ぐための空気孔と考えられる。17は土人形である。

合わせ型成形の神馬である。型抜き後、合わせ目をヘラで削り、調整している。頭部は欠損しているが、胴部には馬具をつけている。16は、柿輪灯明皿である。口径6.5cm、器高1.1cm、底径3.1cmを測る。外面口縁部直下から内面にかけて、施軸されている。ロクロ成形で、外面底部には、右回転の承切り痕が見られる。外面に煤が付着している。18は、土師質土器角火鉢である。一辺30.2cm、器高10.2cmを測る。方形である。側



第41図 SK722(1)・SK710(2~5)出土遺物

面下半に体部と底部を接合した跡が見られ、軽くヨコナア調整されていることから、体部と底部は別々に成形された後、接合されたものと考えられる。底部外面に離れ砂が見られることから、底部は粘土板成形で、後体部を接合したと思われる。口縁部はナア調整、内面体部はヨコ方向のナア調整、内面底部はナア調整が施されている。外面底部には、脚が4足ついている。すべてハリツケ後、縁をナア調整している。内面には、煤が付着している。

第81図一は、土師質土器風伊である。口径26.3cm、器高25.2cm、底径25.8cmを測る。体部から脚部まで直立したものである。底部には離れ砂が見られ、体部・脚部とも外面はヨコナア調整、内面には粘土紐痕とヨコナア調整が見られる。底部は粘土円板、体部は外型作り粘土紐輪積み成形したものと考えられる。風口部・脚部は、別々に作成され、体部に付けられている。また、内面には型作りの中実の突起をハリツケし、ナア調整を施している。3本の突起を有すると思われるが、口縁部が欠損しているため2本の突起しか確認できない。その間には直径2.1cmの円孔が施されている。口縁部はヘラケズリ後ナア調整で、ヘラで面取りが施されている。脚部外面の前面上には巴文の透かしが見られる。外面には赤彩が施されている。

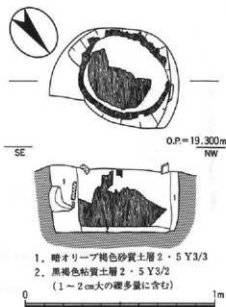
この遺構は、遺物が多く出土している。後述する計測結果からも分かるように、特に土甕の数が多く、何か特別な意味をもつ遺構かと思われる。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。III-3 a～b期に属する遺構である。

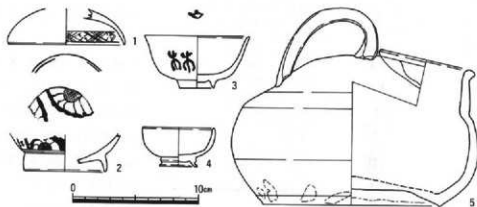
SK710

SK710(表1)は、調査区中央に位置する。平面形は不整形を呈し、長さ3.56m、幅1.54m、深さ0.60mを測る。

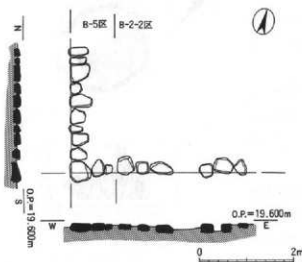
第81図二は、肥前磁器染付蕎麦猪口である。口径(推)7.2cm、器高5.1cm、高台径3.8cmを測る。口縁は、少し楕円形を呈している。外面口縁部には、雨降り文が描かれている。大橋康二氏の編年IV期に属する。3は、瀬戸・美濃焼染付端反型碗である。口径(推)10.8cm、器高5.1cm、高台径(推)4.8cmを測る。口縁



第82図 SU630遺構図



第83図 SU630(1・2)・SK731(3-5)出土遺物



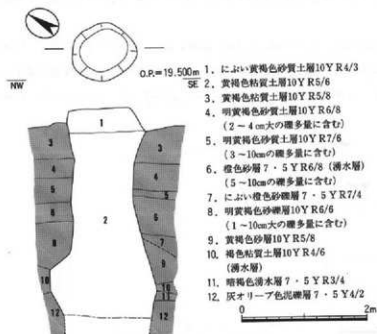
第84図 S B01 (B-2-2区)・S B02 (B-5区) 遺構図

を施したものと考えられる。5は、丸瓦である。全長(残)15.0cm、丸瓦部幅14.85cm、高さ7.2cm、玉縁部幅12.45cm、玉縁部長4.3cm、玉縁部高5.6cm、厚さ1.8cmを測る。丸瓦部凸面は縦方向にヘラナデ調整、凹面には布目痕と甲板のタタキ痕が見られる。両側縁は内傾する広いヘラケズリを行っている。玉縁部凸面は横方向のナデ調整、凹面には布袋紐跡が見られる。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。III-3 a-b期に属する遺構である。

S U 630

S U 630 (第82図・図版29)は、調査区中央に位置する。土壌でとらえたが、埋桶遺構であった。掘形の平面形は不整形を呈し、長さ0.67m、幅0.51m、深さ0.35m、内矩は直径0.49m、深さ0.3mを測る。裏底にあ



第85図 S E 08遺構図

端部は、やや尖りぎみである。外面には立派な草花文が描かれている。見込みにも草花文らしきものが見られる。高台内には、変形字を方形枠内に書き込んだものが見られる。服部郁氏の瀬戸村染付編年表(服部1994年)によると、2期に属する。4は、土師質土器丸火鉢である。高台径24.6cmを測る。外型作り粘土紐輪積み成形である。体部外面はヨコナデ調整、体部内面はヨコナデ調整を施す。底部外面には離れ砂が見られ、底部内面はナデ調整が施されている。脚部には製作時に半円形に削られたところが2カ所あり、その間に直径0.9cmの円孔が開けられている。脚部内外面にはヨコナデ調整が施されている。脚部と体部のハリツケ後、ヨコナデ調整

たるところにみられ、便槽桶と考えられる。桶内埋土は、黒褐色砂質土層2.5Y3/2である。

第83図-1・2は、肥前磁器である。1は、青磁染付蓋である。口径(推)9.4cmを測る。内面口縁部には四方櫛文が見られる。大橋康二氏の編年IV期に属する。2は、広東型染付碗である。高台径(推)6.6cmを測る。外面には菊花文、見込みには円形の中に半菊文が描かれている。他に、土師質土器焙烙(難波洋三氏の種類G類)も見られる。

出土遺物の年代観から、18世紀末～19世紀初頭と考えられる。III-3

a 期に属する遺構である。

S K 731

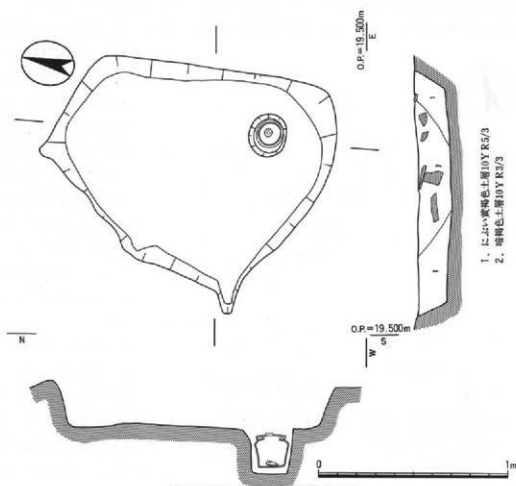
S K 731 (表1) は、調査区東側に位置する。平面形は不整形を呈し、長さ0.9m、幅0.86m、深さ0.11mを測る。

第83図一3は、瀬戸・美濃焼染付碗(新製焼)である。口径(推)8.4cm、器高4.2cm、高台径2.8cmを測る。外面に、呉須で福寿文が描かれている。口縁先端には、口錆が施されている。服部郁氏の瀬戸村染付編年表3期に属する。4は、京焼系陶器碗である。口径(推)5.65cm、器高3.1cm、高台径3.0cmを測る。内面から外面上半にかけて、灰釉が施されている。外面下半から高台にかけては、無釉である。高台側面は凹凸が著しい。5は、産地不明鉄輪浅瓶である。口径7.4cm、器高12.5cm、底径14.0cmを測る。ほぼ完形である。口縁部から外面底部際まで鉄輪が施されている。内面と底部外面は、無釉である。底部外面には、円状に砂が付着している。上部の把手はハリツケである。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～後半と考えられる。III-3 b 期に属する遺構である。

5. 第1次面の遺構と遺物

第1次面は、江戸時代後期～近代の生活面である。第1次面西側は近代の建物の基礎によって上層が攪乱



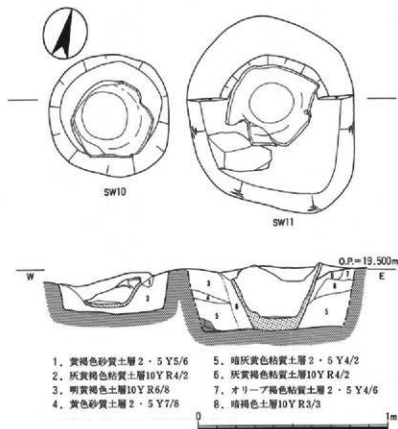
第86図 S I 510遺構図

されたが、部分的に礎石が残り、さらに、西側道路より4.25mまで三和土が見られ、桁行4間・梁行3間半の建物があったことを想定できる。また、三和土を切って、胞衣壺S1510を検出した。三和土の東側では便桶と思われるSU525・526、井戸SE08が検出されたことにより、その東側は、裏庭と考えられる。調査区中央部は、幕末から明治時代の生活面が残り、礎石が幾つか並ぶが、B-5区南側では、これに伴う基礎遺構SD01・02を検出した。SD01・02内には、集石遺構が見られ、これらは建物の壁の基礎地盤と考えられる。しかし、この建物は、南側で、この溝を切って検出した井戸SE02の年代観が19世紀中頃から後半であり、この建物はそれまでになくなったものと考えられる。また調査区東側では、石列SB01(第84図)が検出された。B-4区の土蔵建物の基礎の一部である。B-5区でもその一部が検出され(SB02)、土蔵の全容を知ることができた。それによると、東西4.33m×南北4m以上の土蔵となる。

SE08

SE08(第85図・図版29)は、調査区中央に位置する。平面形は、円形を呈し、直径0.48m、深さ3.34m以上を測る。素掘りの井戸である。第6層と第10層・第11層は橙色砂層7.5YR6/8、褐色粘質土層10YR4/6、暗褐色土層7.5YR3/4で湧水層である。断面形は、下部が少し膨らんでいる。

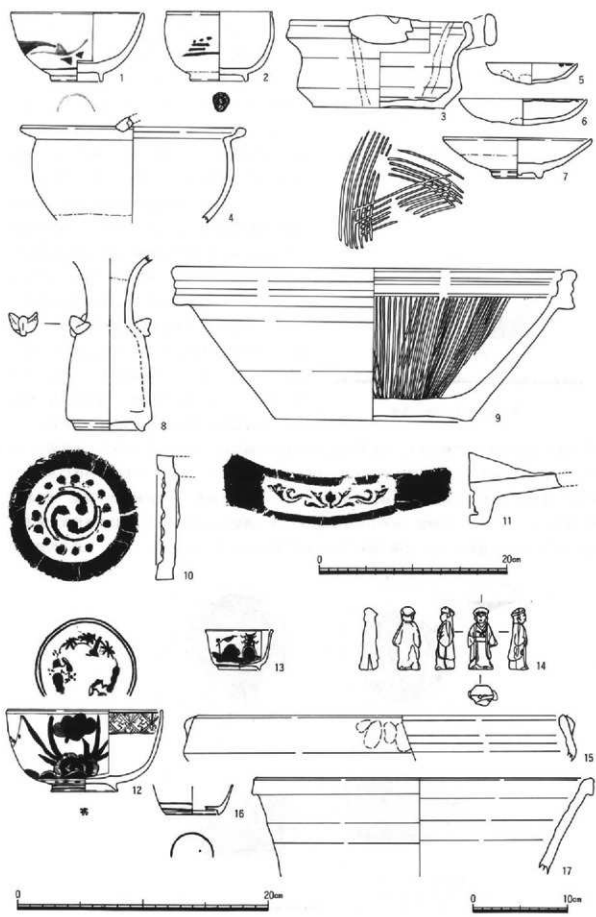
第88図-1は肥前磁器染付碗である。口径(推)10.6cm、器高5.6cm、高台径(推)4.2cmを測る。外面には草文が描かれているが、呉須の発色は悪い。内面見込みには、蛇ノ目釉ハギが見られる。高台畳付は露胎で、砂が付着している。大橋康二氏の編年IV期に属する。2は、京焼風陶器碗である。口径(推)8.6cm、器高5.6cm、高台径4.6cmを測る。外面には呉須で、山水文が描かれている。底部外面は、無釉である。高台内には「清水」と印銘が施されている。3は、丹波焼鉢である。口径(推)14.3cm、器高7.6cm、底径10.5cmを



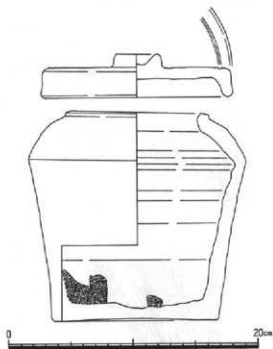
- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 | 5. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2 |
| 2. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R4/2 | 6. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R4/2 |
| 3. 明黄褐色土層 10 Y R6/8 | 7. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 |
| 4. 黄色砂質土層 2・5 Y7/8 | 8. 暗褐色土層 10 Y R3/3 |

第87図 SW10・11遺構図

測る。口縁部に把手がハリツケられている。口縁部及び把手に一部灰釉が施されている。4は、伊賀・信楽焼鉄胎土鍋である。口径(推)17.8cmを測る。内面から外面下半まで鉄釉が施されている。底部の無釉部分には、煤が付着している。口縁部には、把手がハリツケられている。5・6は、土師質土器皿である。どちらも口縁部に煤が付着していることから、灯明皿として使用されていたと考えられる。5は、口径(推)7.4cm、器高1.8cmを測る。胎土は、ふい色7.5YR7/3を呈する。手づくね成形で、外面は指頭圧調整、内面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整が施されている。IT(伊丹郷町期)・1型式A類であ



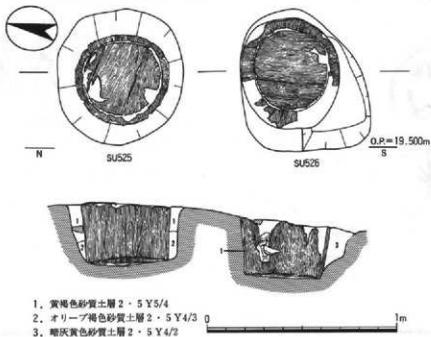
第88圖 SE08 (1~11)・S I 510 (12~15)・SW11 (16・17) 出土遺物



第89図 S I 510出土遺物

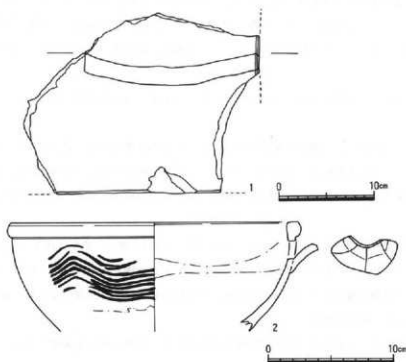
る。6は、口径(推)10.3cm、器高2.1cmを測る。胎土は、浅黄橙色7.5Y R8/3を呈す。手づくね成形で、外面は指頭圧調整、内面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整が施されている。IT(伊丹郷町期)・2型式A類に分類される皿である。7は、窯野焼青緑釉皿である。口径(推)12.0cm、器高3.2cm、高台径4.0cmを測る。内面に青緑釉が施され、見込みは蛇ノ目軸ハギになっている。8は、肥前磁器青磁花瓶である。口縁部欠損、残存高14.1cm、高台径5.4cmを測る。内面口縁部下から底部及び高台畳付は無釉である。外面肩部に耳をハリツケている。10は、堺焼擂鉢である。口径31.9cm、器高11.4cm、底径7.8cmを測る。口縁部から外面にかけて、全体的に堅く焼き締められている。擂目は左回りで8本単位、櫛状のもので内面底部際から口縁に向かって施されている。口縁部は回転ナデ調整を行い、擂目を整えている。見込みには、三角形の擂目が見られる。口縁部外縁帯直下から底部際まで左回転ヘラケ

ズリ調整、外面底部は未調整である。白神典之氏の分類II類に属する。10は、軒丸瓦である。丸瓦部は、欠損している。瓦当部径13.3cm、文様区径10.05cmを測る。瓦当文様は内区に左巻き三ツ巴文、外区に連珠文を配する。連珠数は15個である。瓦当周縁部は周縁に沿ってヘラケズリ調整、周縁側面はナデ調整、瓦当部表面は周縁に沿ってヘラケズリ調整、裏面中央は不定方向にナデ調整が施されている。11は、軒棧瓦である。全長(残)9.2cm、上弧幅22.5cm、文様区幅13.5cm、文様区厚2.6cm、瓦当部高2.7cmを測る。文様は均整唐草



1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y 5/4
2. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 4/3
3. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y 4/2

第90図 S U 525・526透構図



第91図 SU526 (1)・SD12 (2) 出土遺物

文である。中心飾は花冠十号で、Y字状若葉が端文様に加わるものである。雲母粉が付着している。瓦当周縁部及び周縁部上側面はヘラナデ調整、頸下部から瓦当部裏面、平瓦部との接合部分までヘラナデ調整、平瓦部凹面はナデ調整、凸面は未調整である。

出土遺物を概観すると、18世紀前半～後半と考えられる。III-2期に属する遺構である。

S I 510

S I 510 (第86図・図版29) は、調査区東北部に位置する。三和土を切って出土した。平面形は不整形を呈し、長さ2.96m、幅2.38m、深さ0.17mを測る。さらに、遺構内南側に陶衣製の土師質土器火消壺が埋置される。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.2m、深さ0.23mを測る。

第88図-12・13は、肥前磁器である。12は、染付碗である。口径(推)12.6cm、器高6.55cm、高台径5.4cmを測る。やや深手で、高台は「ハ」の字に開く。見込みには松竹梅文、内面口縁部には四方禪文が描かれている。外面には水波草花文が見られる。高台内には幾何学的な銘款が見られる。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年IV期に属する。13は、染付酒杯である。口径5.2cm、器高3.2cm、高台径3.2cmを測る。外面には主文様として中国風の楼閣が、副文様として山水が描かれている。大橋康二氏の編年IVに属する。14は、ミニチュア土製品・土人形である。合わせ型成形の人形である。合わせ目をヘラで削り、底部には直径0.3cm程の空気孔が開けられている。表面には雲母粉が付着している。小袖の上にやや長めの羽織りを着て、頭巾をかぶった男性の人形である。15は、土師質土器焙烙である。口径(推)14.5cmを測る。胎土は浅黄褐色10 Y R 8/4を呈する。口縁部内外面はヨコナデ調整、口縁部外面には指頭圧調整も見られる。口縁端部には把手が貼り付けられている。外面には煤が付着している。難波洋三氏の分類E類に属する。

第89図-1・2は、土師質土器である。1は、火消壺の蓋である。口径14.5cm、器高3.45cm、つまみ径3.3cmを測る。天井部外面は離れ砂痕が残り、周縁には一条の沈線を通らせる。つまみは円形で中央がくぼむ。ハリツケした後、その周辺をヨコナデ調整している。2は、火消壺である。口径10.35cm、器高16.65cm、底

径12.9cmを測る。外型作り粘土紐輪積み成形である。外面底部には離れ砂痕が見られる。肩部は内湾し、底部に近付くほどすぼまって、体部との境が明瞭となったものである。外面肩部から体部にかけて、丁寧なヨコナデ調整、内面には強いヨコナデ痕が見られる。川口宏海氏の編年Ⅱ-1型式（川口1989年-a）に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀後半と考えられる。Ⅲ-2 b期に属する遺構である。

SW11

SW11（第87図・図版29）は、調査区東側に位置する。近代の便槽用埋塞と考えられる。SW10と東西に並んで検出された。どちらも掘形の平面形は、円形を呈する。SW10は内径の直径0.43m、深さ0.15m、掘形の直径0.63m、深さ0.2m、SW11は、内径の直径0.5m、掘形の直径0.57m、深さは内径、掘形とも0.34mを測る。

第88図-16は、肥前磁器染付蕎麦猪口である。底径（推）4.3cmを測る。器壁は薄手である。高台内には、銘款らしきものが見られる。高台皿付は露胎である。17は、大谷焼甕である。口径（推）50.4cmを測る。内面から外面にかけて鉄釉が施されている。内面には、付着物が見られるが、成分は不明である。川口宏海氏の分類3型式に属する（川口1990年）。

出土遺物を概観すると、19世紀末～20世紀初頭と考えられる。Ⅳ期に属する遺構である。

SU526

SU526（第90図・図版29）は、調査区西側に位置する。SU525と南北に並んで検出した、2基一組の便槽槽と思われる。SU526の平面形は不整形を呈し、内径の直径は0.52m、掘形は長さ0.75m、幅0.64m、深さは内径・掘形とも0.31mをはかる。桶内埋土は、オリーブ色砂質土層5Y6/6である。SU525の平面形は円形を呈し、内径の直径は0.5m、掘形の直径0.66m、深さは内径、掘形とも0.33mを測る。桶内埋土は、暗褐色土層10YR3/3である。

第91図-1は、瓦葺である。凹面は横方向のヘラナデ調整、さらに周縁を縁に沿ってナデ調整する。凸面は未調整である。他に、肥前磁器青磁染付碗、漂焼燗鉢（白神典之氏の分類Ⅱ期）などが見られる。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ-3 a期に属する遺構である。

SD12

SD12（表1）は調査区西側道路沿いに検出した。下層のSD15の後身で、江戸期に再利用された溝である。検出長は6.92m、幅0.23m、深さ0.17mを測る。流路方向は、高さの違いから、北から南へと流れていたものと思われる。

第91図-2は、唐津系陶器刷毛目文片口鉢である。口径（推）23.0cmを測る。外面下半には鉄釉、口縁部内外面には灰釉が施されている。口縁端部は無釉である。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀前半と考えられる。Ⅲ-2 a期に属する遺構である。

6. まとめ

B-2-2区では、18世紀後半以降の遺構を中心に、16世紀後半～20世紀初頭までの遺構を検出した。年代を辿ってまとめると、16世紀後半頃に、西側の道路の側溝SD15が造られていることが分かった。この溝は、北側はB-3区SD08、南側はB-8区SD04に続くことがわかった。

17世紀後半になると、調査区中央に地割溝SD19が造られる。この溝は、17世紀末頃に埋め戻されたが、この地割は、現代まで続く。また、調査区東側に検出したSX04・05は、17世紀後半～18世紀前半の遺構で

ある。その東隣りのSK750から窯壁片と大量の瓦を検出したことから、一部瓦葺きの建物内に鍛冶炉があったのではないかと考えられる。このような炉遺構は、D-2区(SX302)でも検出した。

調査区西側では、焼土処理土壌SK678を検出した。出土遺物から、享保14年(1729)の火災の際のものと思われる。「元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹町絵図」(第212図)では、畑地となっているが、享保14年の焼土処理土壌があることから、1729年以前から建物があったと考えられる。また、この上面に三和土を検出した。18世紀後半の胎衣壺SI510に切られており、このことから、1729年以降も建物があったと思われる。また、この三和土の東側は廃棄土壌が集中しており、裏庭と考えられる。この裏庭から、18世紀後半～19世紀初頭までの廃棄土壌を多く検出した。さらに後述する道路が、19世紀初頭にこの裏庭部に敷かれる。

「文化改正伊丹之図」(第218図)によると、B-3区からB-2-2区にかけて、L字形の道路が見られる。B-2-2区では、調査区中央を南北に通ると考えられる。道路にあたると思われる部分は、それに相当する面が攪乱を受けており、直接これを検出することができなかった。しかし、第1次面ではこの部分に19世紀後半以前の遺構はなく、下の第2次面では19世紀初頭以前の遺構しか存在しない。よって、19世紀初頭から中頃に道路が存在していたと考えられる。19世紀後半には道路はなくなり、その後、既存建物が建てられることがわかった。

調査区東側では、瓦葺きの建物以降は、上面の遺構によって攪乱されていたためわからないが、18世紀後半～19世紀初頭の建物遺構を、調査区北側B-5区で検出し、当調査区の北壁から4m南のところまで延びていたと思われる。また、その南側では、廃棄土壌を多く検出したことにより、裏庭だったと思われる。その後、この建物は、19世紀後半にはなくなっており、それ以降に、調査前の既存建物が建てられたと思われる。

第5節 第51次調査B-3区

B-3区は、官ノ前商店街通りからは西側の裏手にあたる。「天保十五年(1844)伊丹郡町分間図」(第212図)(八木哲浩1982年)によると、昆陽口村に属する。また、「元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郡町絵図」(第212図)では、調査地区南側は畑地にあたり、北側は「善兵衛」を屋敷主とし、町代で借家人の「佐兵衛」の屋敷地に相当することが分かる。調査面積は180㎡である。

1. 基本層序

遺構面は、3面確認することができた。調査区は西側にいくほど地山が高くなり、東に向かって傾斜している。地山面は西端でO.P.=+19.100m、東端でO.P.=+18.850mである。これに伴い、地山直上層及びその上層は東に行く厚みを増している。北壁土層断面図(第92図)を観察すると、第3次面は地山に直接掘りこまれている。第2次面はその上層(第92図-第10・36層など)で、オリーブ褐色土層(現地表面より約40cm下)。本来、第3次面と第2次面の間にはもう1面あったのだが、時間の都合上掘り残し、その下面で同時に採えた。第2次面(第10層)の上面には、焼土層(第28層)が見られる。第1次面はさらにその上層(第92図-第1・23層)で、暗褐色粘質土層の上面である。

2. 第3次面の遺構と遺物

第3次面の地山上面では、調査区中央より西側にかけて、15世紀中頃～16世紀後半の伊丹城期から有岡城期にかけての遺構と思われる溝SD06と、有岡城期の溝SD07・08を検出した。ただ、この溝以外の遺構は先述したが、第2・3次面の間で採らえるべきであった遺構である。調査区北側からは、その第2・3次面の間の面の建物SB06(第94図)の礎石の根石と思われる、礎石列SS151・152・165を検出した。SB06の建物規模は正確には不明であるが、この礎石列が約1間・1.5間(3.0m)の間隔で直線的に並んでいる事などから、梁行2.5間(4.9m)以上を測る建物が西側へ向かって建てられていた可能性がある。

SS165

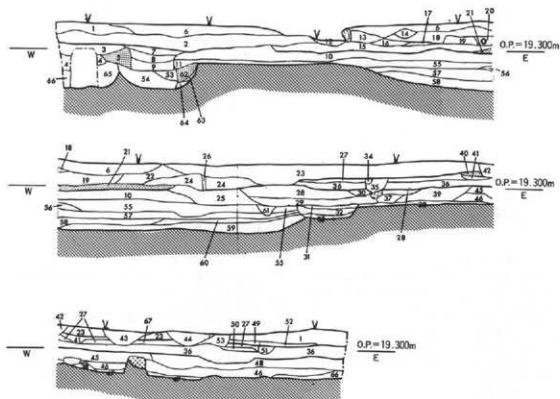
SS165(表1・図版37)は、調査区東端中央に位置する、SB06の礎石の根石と思われる遺構である。平面形は円形を呈し、直径0.71m、深さ0.2mを測る。遺構内には15cm前後の石を詰めている。SS165を含む礎石列の方位はN-11°-Wを示す。後述するSD08の主軸方位はN-13°-Wを示し、現行道路はN-17°-Wを示す。この事よりSS165を含む礎石列は、現行道路よりSD08の方位に近い事が分かる。従ってこの地点では、SB06の建っていたと思われる18世紀中頃の境に、4°前後地割りに変化があったと考えられる。

第95図は、塚焼燻鉢である。内面体部の摺目は9本単位で左回りに施されている。外面は口縁部外縁帯付近まで回転ヘラケズリを施している。白神典之氏の分類(白神1990年)のI類に属する。

出土遺物から概観すると18世紀中頃の遺構と考えられる。この事より、SS165はIII-2a期に属する。従ってSB06はIII-2a期に属する建物であると思われる。

SD06

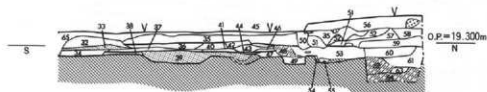
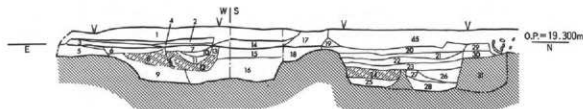
SD06(第96図・図版37)は、調査区中央を南北に伸びる溝である。検出長8.3m、幅6.5m、深さ0.5mを測る。埋土は4層を数え、黄褐色粘質土層が主体である。壁面両端はゆるやかに傾斜し、自然の落ち込みのようであるが、南端は「コ」の字形に終わる。従って、人工的なものと思われる。溝は調査区北側へと続いており、本調査区の北側地区B-1-3区の調査時に検出された溝へと続くものと思われる。このB-1-



1. オリーブ色砂質土層 5 Y5/4 (木根多量に含む)
2. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3 (炭化物、木根多量に含む)
3. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
4. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/3 (炭化物多量に含む)
5. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6 (炭化物、粘土多量に含む)
6. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y4/2 (木根、1cm大の礫多量に含む)
7. 浅黄色砂質土層 2・5 Y7/4
8. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
9. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/3 (炭化物多量に含む)
10. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4 (0.5-1cm大の礫多量に含む)
11. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/8
12. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2 (木根、炭化物多量に含む)
13. 暗オリーブ色砂質土層 5 Y4/3 (炭化物多量に含む)
14. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/4 (2-5cm大の礫多量に含む)
15. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4
16. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
17. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/4
18. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4 (炭化物多量に含む)
19. 浅黄色砂質土層 2・5 Y7/4
20. 黒褐色粘質土層 2・5 Y3/2
21. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6 (粘土多量に含む)
22. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 (1cm大の礫炭化物多量に含む)
23. 暗褐色砂質土層 2・5 Y3/3 (1-2cm大の礫多量に含む)
24. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4
25. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6 (炭化物多量に含む)
26. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
27. 黄褐色砂質土層 10 Y R6/8 (0.5-1cm大の礫多量に含む)
28. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/6 (炭化物、粘土多量に含む)
29. におい黄褐色粘質土層 10 Y R5/4 (炭化物、粘土多量に含む)
30. におい黄褐色砂質土層 10 Y R5/4 (1-5cm大の礫多量に含む)
31. におい黄褐色粘質土層 10 Y R5/3
32. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 (粘土多量に含む)
33. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6 (粘土多量に含む)
34. におい黄褐色砂質土層 10 Y R5/4
35. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 (木根多量に含む)
36. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4 (炭化物多量に含む)
37. 明黄褐色砂質土層 10 Y R6/8 (1-2cm大の礫多く含む)
38. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6
39. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/3 (炭化物多量に含む)
40. 浅黄色砂質土層 2・5 Y7/4 (粘土多量に含む)
41. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
42. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 (1-3cm大の礫多量に含む)
43. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 (炭化物、1cm大の礫多量に含む)
44. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4 (炭化物多量に含む)
45. 褐色砂質土層 10 Y R4/4
46. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 (1-4cm大の礫多量に含む)
47. におい黄褐色粘質土層 10 Y R5/4
48. におい黄褐色砂質土層 10 Y R5/3 (2-6cm大の礫多量に含む)
49. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/3
50. 浅黄色砂質土層 2・5 Y7/4
51. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 (渣物多量に含む)
52. 灰黄色粘土層 2・5 Y6/2
53. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6
54. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/8
55. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
56. 明黄褐色粘質土層 10 Y R6/8
57. におい黄褐色粘質土層 10 Y R5/4
58. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y5/2
59. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4
60. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
61. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
62. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 (炭化物多量に含む)
63. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6
64. におい黄褐色粘質土層 10 Y R4/3
65. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R4/2
66. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 (炭化物多量に含む)
67. 灰黄色土層 2・5 Y6/2



第92図 B-3区北壁土層図



1. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/4
2. 黄褐色砂質土層 7・5 Y R5/8 (0.5cm大の礫多量に含む)
3. 暗灰黄色土層 2・5 Y5/2 (5cm大の礫多く含む、整地層)
4. 浅黄色粘土層 2・5 Y7/3 (土間)
5. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
6. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/6
7. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y7/6
8. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2 (炭化物多量に含む)
9. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/8
10. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
11. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/6
12. 暗オリーブ色土層 2・5 Y3/3 (遺物、炭化物多量に含む)
13. 暗オリーブ色土層 2・5 Y3/3, 黄褐色土層 2・5 Y5/4
14. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
15. 黄褐色土層 2・5 Y5/4
16. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4
17. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3
18. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
19. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
20. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3
21. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 (炭化物多量に含む)
22. 褐色砂質土層 10Y R4/4
23. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3
24. 黒色粘質土層 2・5 Y2/1 (炭化物多量に含む)
25. 黄褐色粘質土層 10Y R5/6
26. オリーブ粘質土層 5 Y5/4
27. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8
28. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2
29. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
30. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8
31. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/8
32. 浅黄色砂質土層 2・5 Y7/4 (1cm大の礫多量に含む)
33. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4 (炭化物多量に含む)
34. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/6 (遺物、4cm大の礫多量に含む)
35. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3
36. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/3 (2~4cm大の礫多量に含む)
37. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
38. 黄褐色土層 10Y R5/6
39. 褐色砂質土層 10Y R4/6 (炭化物、礫多量に含む)
40. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
41. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/4
42. 黒褐色粘質土層 2・5 Y3/2 (2~3cm大の礫多量に含む)
43. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/6 (1cm大の礫多量に含む)
44. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/6 (土間)
45. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6
46. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
47. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8
48. 黄褐色粘質土層 10Y R5/6 (炭化物多量に含む)
49. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/6
50. 灰黄色砂質土層 10Y R5/2
51. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
52. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/3
53. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
54. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3
55. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8
56. オリーブ色砂質土層 5 Y5/4 (木根多量に含む)
57. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/4
58. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3 (炭化物、木根多量に含む)
59. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4
60. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
61. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/3 (炭化物多量に含む)
62. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 (遺物、炭化物多量に含む)
63. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8
64. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 (炭化物多量に含む)
65. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/3 (攪乱)

第93図 B-3区西壁土層図

3区での溝底の高さは、O.P. = +18,500m、本調査区ではO.P. = +18,600mで、流路方向は北→南である。

第98図一1・2は、瀬戸・美濃焼である。1は、天目茶碗である。口径(推)9.55cmを測る。内外面共に鉄釉が掛けられ、外面下半部には化粧掛けが施されている。2は、大海茶入である。口径(推)6.2cmを測る。内外面共に灰釉を施す。1・2共に、井上喜久男氏(井上1992年)の大窯編年II b期に属する。3・4は、土師質土器皿である。3は、口径(推)12.8cmを測る。胎土は、灰白色2.5Y 8/2を呈す。内外面共にヨコナテ調整。内面全体に煤が付着している。4は、口径8.1cm、器高1.6cmを測る。胎土は、橙色10Y R 8/3を呈す。内面はナデ調整。外面は指頭圧調整の後、ナデ調整を施している。5・7は、瓦質土器である。5は、

羽釜である。外面体部はヘラケズリ調整が施され、鈿部はハリツケている。外面鈿部より下には煤が付着している。7は、硯である。残存長5.45cm、幅4.4cm、高さ1.5cmを測る。6は、備前焼摺鉢である。外面口縁部から内面にかけて、自然釉が掛かる。体部は口縁部外縁帯直下までヘラケズリを施している。間壁忠彦氏(間壁1966年)の編年IV期に属する。

出土遺物から概観すると、15世紀中頃～16世紀後半の遺構と考えられる。I～II期に属する。

SD07

SD07(第97図・図版37)は、調査区を東西に伸びる溝である。溝は、調査区西側から東側のSD08へと流れる。検出長6.1m、幅0.6m、深さ0.25mを測る。埋土は2層で、黄褐色土層が主体である。溝の東端はSD06の直上で終わり、SD06を切って造られていることから、SD06を埋めた後に掘られたと思われる。流路方向は東→西である。

第98図一8は、丹波焼摺鉢である。口径33.0cm、器高15.9cm、底径12.95cmを測る。摺目はヘラによる一本引きで、口縁上部から約5.5cm位下の所まで引かれている。片口を有し、その内面付近にヘラにより「又」と刻まれている。外面体部は指頭圧調整後にナデ調整、外面口縁部は左方向ナデ調整が施されている。底部は未調整。胎土は、橙色5YR7/8を呈す。岡崎正雄氏(岡崎1989年)の分類の1aに属し、16世紀中頃の遺物であると思われる。10は、瀬戸・美濃焼皿である。口径10.6cm、器高2.6cmを測る。全体に灰釉が施され、見込みに厚く溜まっている。高台内には目痕が残る。井上喜久男氏の大窯編年II b期に属する。

出土遺物の年代観は16世紀中頃～16世紀後半であるが、周辺の遺構との関連からII期の、有岡城期の遺構と考えられる。

SD08

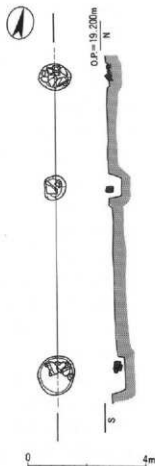
SD08(第97図・図版37)は、調査区西側端を南北に伸びる溝である。幅0.7m、深さ0.3mを測る。遺構の断面形はV字を呈する。埋土は4層を数え、どの層にも弱冠カーボンが含まれている。溝は、上記のSD07と80°の角度で交わり、さらに南側の調査区外へと伸びて、B-2-2区SD15、B-8区SD04につながる。SD04は、III-2 a期の17世紀後半まで再利用されている。しかし、ここでは16世紀後半のうちに埋没している。西側の道路に沿って設けられていることから、この地域でも有岡城期に町割が施行されたことが判明した。流路方向は北→南である。

第98図一9は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。内外面共に鉄釉を施す。井上喜久男氏の大窯編年II a期に属する。

出土遺物の年代観は16世紀前半～中頃であるが、他地区の出土遺物も考え合わせると、II期の有岡城期の遺構と考えられる。

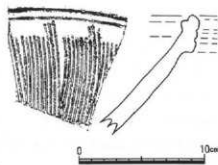
SK222

SK222(表1・図版38)は、調査区中央に位置する焼土処理土壌である。平面形は方形を呈し、検出長5.6m、幅3.2m、深さ0.6mを測る。埋土は4層を数え、最下層は多量の瓦片を含んでいる。本来2次面の遺構であるが、上層の覆土が厚く、検出できなかったものである。



第94図 SD06遺構図

第98図—11—13は、肥前磁器である。11は、染付仏飯具である。口径(推)4.3cm、器高4.8cm、底径2.4cmを測る。外面体部には、桐文の線描きの部分を墨紙摺で表し、葉の部分を濃筆で塗り潰している。底部は挟り込みになっている。底部畳付は無軸である。12は、青磁染付筒型碗である。口径7.2cmを測る。内面口縁部に四方禰文を描く。13は、染付碗蓋である。口径(推)9.8cm、器高3.0cm、つまみ径4.0cmを測る。外面体部には草花文、つまみ周辺には雲気文を描く。内面見込みにはコンニャク印判による五弁花、内面口縁部には四方禰文が描かれている。つまみ上部には離れ砂が付着している。11—13は、大橋康二氏(大橋1989年)の編年IV期に属する。14は、京焼系陶器、染付蓋物である。口径(推)9.6cmを測る。内外面共に灰釉が施されている。外面下半部と口縁蓋受部は無軸である。15は、瀬戸・美濃焼志野織部三角瓶である。外面は全体に長石釉を掛けられ、貫入が入る。体部は三角形を呈しているが、底部は円形である。底部畳付は無軸である。口縁部は少し広がり、受け口になると思われる。高台径5.4cmを測る。高台畳付部は無軸である。16は、堺焼摺鉢である。口径(推)33.2cmを測る。口縁部にまで及んだ摺目を、回転ナデによって消している。内面体部の10本単位で、左回りに施される。外面は口縁外縁帯直下まで、左回転ヘラズリが施されている。白神典之氏の分類I類に属する。17は、均整唐草文軒平瓦である。17は、全長(残)12.6cm、瓦当部高3.8cm、文様区厚2.1cm、周縁上・下幅0.8cm、周縁高0.45cm、顎上部厚2.3cm、顎下部厚1.5cmを測る。平瓦部凹面はナデ調整、凸面は未調整である。18は、均整唐草文軒棧瓦。全長(残)7.1cm、下弧幅23.8cm、文様区幅14.4cm、瓦当部高4.0cm、文様区厚2.6cm、周縁上部幅0.6cm、周縁高0.6cm、顎上部厚1.4cmを測る。平瓦部凹面は丁寧なナデ調整、凸面は未調整である。20は、棧瓦である。全長25.3cm、広端幅(残)18.3cm、狭端幅(残)16.2cm、厚さ1.7cmを測る。凹面はヘラナデ調整、凸面は未調整で、布目痕が残る。



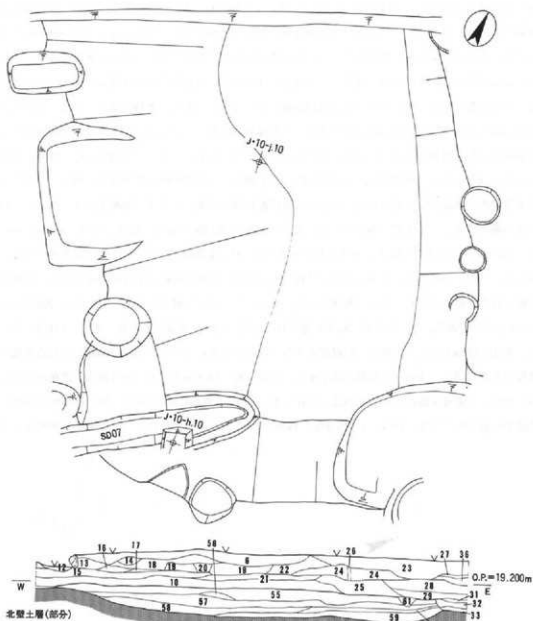
第99図 SS 165出土遺物

図化はしなかったが、棧瓦なども出土している事から、18世紀後半—19世紀初期の遺構と考えられる。III—3 a 期に属する。

S X 147

S X 147 (第99図・図版38)は、前述のS K 222の南側より検出した、方形の池状遺構である。検出長2.75m、幅1.9m、深さ0.75mを測る。北側の壁はゆるやかに傾斜し、南側の壁は直立している。埋土を観察すると、最下層にはオリープ黒色粘質土層(第99図—4層)が約50cmにわたって堆積しており、帯水していたと思われる。遺構内からは、枕穴を確認した。遺構東壁には、直径70—80cmの木材を二本上下に胴木として並べ、その上に直径20—30cm程の石が2—3段積まれている。当初は、遺構西壁にも同様の石積みがあったのではないと思われる。遺物は大量に出土している。本来は第2次面と第3次面の間の面の遺構である。同様の遺構が今回報告の他地区からも確認されている。

第100図—1—10は、肥前磁器である。1—4は染付碗である。1は、口径10.4cm、器高5.4cm、高台径4.5cmを測る。外面体部には草花文を描く。高台畳付部は無軸で、離れ砂が付着している。2は、口径(推)8.3cm、器高3.05cm、高台径4.8cmを測る。外面体部には竹垣に千重菊花文、口縁内部には筆文、見込みには松竹梅文が描かれている。高台畳付は無軸である。3は、口径7.5cm、器高4.0cm、高台径2.8cmを測る。外面体部には、コンニャク印判による菊花文が描かれている。高台畳付は無軸である。4は、口径9.0cm、器高5.0cm、高台径3.4cmを測る。外面体部には草花文を描く。呉須の発色はあまり良くない。高台畳付は無軸である。5—6は、白磁碗である。5は、口径12.0cm、器高5.85cm、高台径4.0cmを測る。見込みには、蛇ノ目軸ハギが施

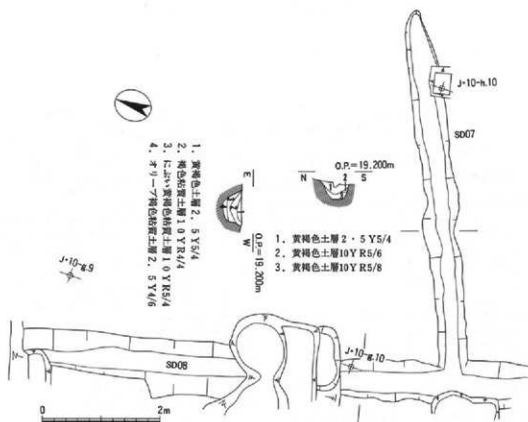


- | | |
|---|---|
| 6. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y4/2 (木根、1cm大の礫多量に含む) | 26. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 |
| 10. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4 (0.5~1cm大の礫多量に含む) | 27. 黄褐色砂質土層 10 Y R6/8 (0.5~1cm大の礫多量に含む) |
| 12. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2 (木根、炭化物多量に含む) | 28. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/6 (炭化物、焼土多量に含む) |
| 13. 暗オリーブ色砂質土層 5 Y4/3 (炭化物多量に含む) | 29. におい黄褐色粘質土層 10 Y R5/4 (炭化物、焼土多量に含む) |
| 14. におい黄褐色砂質土層 2・5 Y6/4 (2~5cm大の礫多量に含む) | 31. におい黄褐色粘質土層 10 Y R5/3 |
| 15. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4 | 32. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 (焼土多量に含む) |
| 16. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 | 33. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6 (焼土多量に含む) |
| 17. におい黄褐色砂質土層 2・5 Y6/4 | 36. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4 (炭化物多量に含む) |
| 18. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 (炭化物多量に含む) | 55. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6 |
| 19. 浅黄褐色砂質土層 2・5 Y7/4 | 57. 明黄褐色粘質土層 10 Y R6/8 |
| 20. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2 | 58. におい黄褐色粘質土層 10 Y R5/4 |
| 21. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6 (焼土多量に含む) | 59. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y5/2 |
| 22. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 (1cm大の礫炭化物多量に含む) | 60. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4 |
| 23. 暗褐色砂質土層 2・5 Y3/3 (1~2cm大の礫多量に含む) | 61. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 |
| 24. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4 | |
| 25. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 (炭化物多量に含む) | |

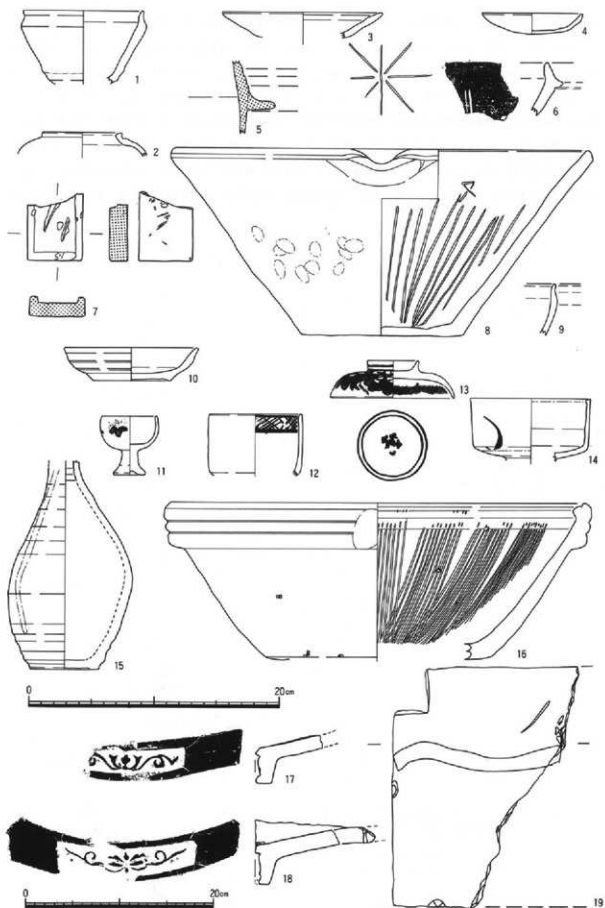
0 2m

第96図 SD06遺構図

され、重ね焼き痕が見られる。高台畳付は離れ砂が付着しており、無軸である。6は、口径12.0cm、器高5.5cm、高台径4.5cmを測る。見込みには、蛇ノ目軸ハギが施され、重ね焼き痕が見られる。高台畳付は離れ砂が付着しており、無軸である。7は、青磁染付碗である。口径10.0cm、器高5.0cm、高台径4.0cmを測る。見込みには、手描きの五弁花が描かれている。高台畳付は無軸である。8は、染付八角皿である。口径(推)12.6cm、器高3.1cm、高台径6.7cmを測る。外面体部には唐草文、見込み全体には蔓文が描かれている。高台内には「太明年製」の銘が見られる。高台畳付は離れ砂が付着しており、無軸である。9は、染付皿である。口径13.4cm、器高3.0cm、高台径7.4cmを測る。内面体部は唐草文、見込みにはコンニャク印判文による五弁花が描かれ、蛇ノ目軸ハギが見られる。高台畳付は離れ砂が付着しており、無軸である。10は、青磁染付碗蓋である。口径10.0cm、器高3.1cm、つまみ径4.3cmを測る。口縁部内面に四方瘡文を描く。つまみ内部には、二重方形内に渦槿の銘が見られる。つまみ上部は離れ砂が付着しており、無軸である。1・3～10は大橋康二氏の編年IV期、2はV期に属する。11・12は、京焼系陶器碗である。11は、口径(推)10.8cm、器高5.6cm、高台径3.8cmを測る。体部は内外面共に灰釉が施され、底部際から高台にかけては無軸である。内面見込みには、三点の目痕が見られる。12は、口径(推)9.4cm、器高3.1cm、高台径5.5cmを測る。外面体部に色絵で松・竹文を描いている。高台は無軸である。13は、ミニチュア鉢である。口径3.0cm、器高1.6cm、高台径1.0cmを測る。体部には、透明釉と緑釉が施されている。14は、丹波焼片口鉢である。口径14.7cm、器高6.4cm、底径8.75cmを測る。内面は、口縁部直下から鉄釉が施されている。内面口縁部から外面底部にかけては無軸である。15は、伊賀・信楽焼土鍋である。口径(推)14.6cmを測る。内外面共に鉄釉が施されている。18・19は、土師質土器皿である。18は、口径(推)7.6cm、器高1.5cmを測る。外面は指頭匡調整、内面はナデ調整が施されている。19は、口径9.8cm、器高2.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整が施

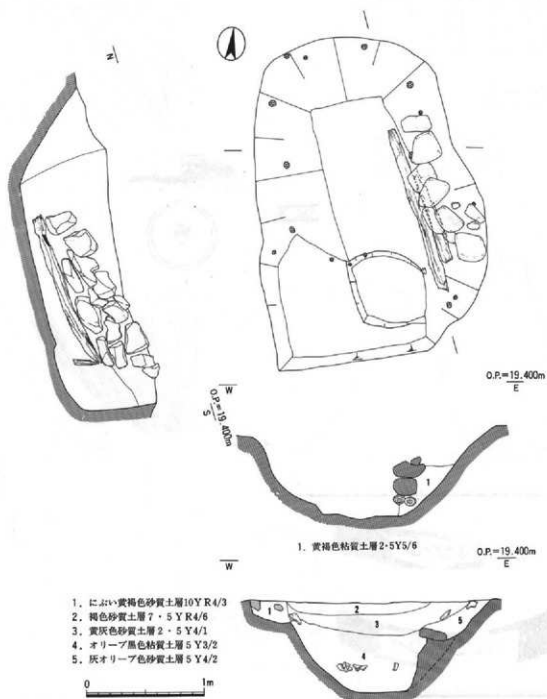


第97図 SD07・08遺構図

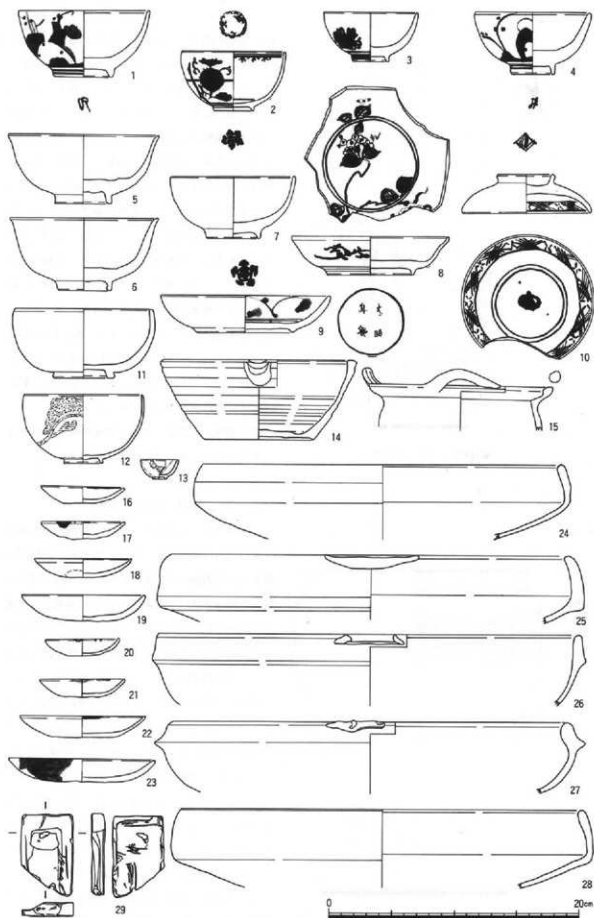


第98圖 SD06 (1~7)・SD08 (9)・SD07 (8・10)・SK222 (11~19) 出土遺物

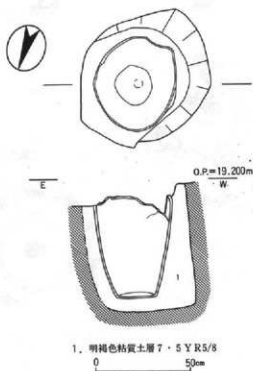
されている。外面底部には指頭圧痕が残る。16・17・20～23は、土師質土器灯明皿である。16・17・20～22はいずれもロクロ成形である。底部には右回転糸切痕が見られる。口縁部に灯芯痕が残る。16は、口径(推)6.6cm、器高1.5cmを測る。17は、口径6.6cm、器高1.4cmを測る。20は、口径5.95cm、器高1.4cmを測る。21は、口径6.9cm、器高1.45cmを測る。22は、口径(推)10.0cm、器高1.7cmを測る。23は、口径(推)11.7cm、器高1.8cmを測る。外面は指頭圧調整、内面はナデ調整、口縁部は内外面共にヨコナデ調整が施されている。全体に煤が付着している。口縁部に灯芯痕が残る。18は、第4章第5節の川口宏海氏の分類IT(伊丹郷町期)・1型式A類、19・23はIT(伊丹郷町期)・1型式B類に属する。24～28は、土師質土器焙烙である。いずれも底部外型作り成形である。24・28は、内面底部はナデ調整、口縁部は内外面共にヨコナデ調整、外



第98図 SX147遺構図



第100图 S X 147出土遗物



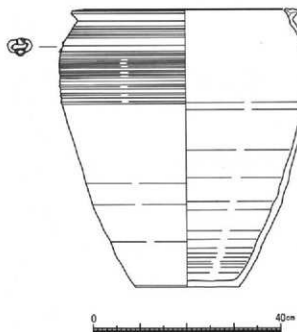
第101図 SW04遺構図

面底部は未調整で、難れ砂が見られる。24は、口径(推) 28.6cmを測る。外面底部には煤が付着している。28は、口径(推) 31.9cmを測る。25~27は、外面口縁部に耳が貼り付けられている。外面底部は未調整で、難れ砂が見られる。25は、口径 31.0cmを測る。内外面共に回転ナデ調整である。26は、口径(推) 33.6cmを測る。内面から外面口縁と底部の境まで、ナデ調整が施されている。外面底部には煤が付着している。27は、口径(推) 31.4cmを測る。内面底部はナデ調整、口縁部は内外面共にヨコナデ調整である。24・25・28は、難波洋三氏(難波1992年)の分類E類、26・27はG類に属する。29は、石製碗である。幅4.1cm、高さ1.0cmを測る。表面に削られた痕が見られる事から、砥石として転用されていたと思われる。粘板岩製で、灰白色2.5GY8/1を呈する。

出土遺物から概観すると18世紀中頃~18世紀末と考えられる。III-2 b期に属する。

3. 第2次面の遺構と遺物

この面では、3カ所で三和土を検出した。調査区南西隅から検出した三和土(SB05)の範囲は、調査区西側道路より1.5mほど入った所から約1.5間(3.2m)四方である。間口付近(西側)には電SV10-SV13が設けられている。前述したSB06は本来第2次面と第3次面の間の遺構面に当たるが、このSB06上面付近に当たる所より、三和土(SB07)を検出した。約1間(1.9m)四方残存している。調査区南東隅からは、約2間(4.4m)×約3間(6.4m)の三和土(SB08)を検出した。これらは全て建物を復元するには至らなかった。前述したSK222の上に、道路と思われる遺構SX11が検出された。この道路は、調査区中央で90°折れ、南へと続く。砂利を敷き、堅く築き固められている。検出長は東西8m、南北4.7m、幅約1間(2m)を測る。道路の南端は、南側の調査区であるB-2-2区の方へと続くものと思われるが、B-2-2区では検出できなかった。主な遺構は、



第102図 SW04出土遺物

18世紀前半～後半頃のⅢ-2 b期に属する。

SW04

SW04 (第101図・図版38) は、調査区北西隅から検出した埋燬遺構である。掘形は直径0.55m、深さ0.65mを測る。どの建物に伴う物かは不明であるが、開口付近に位置する。便槽燬か。

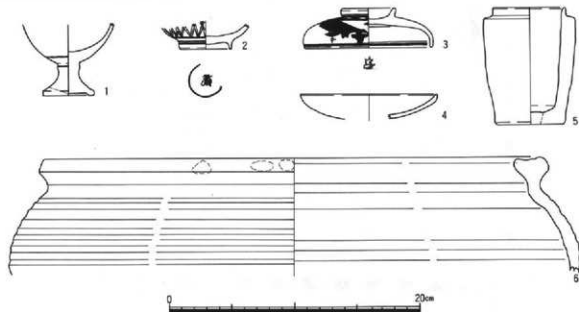
第102図は、丹波焼甕である。口径21.7cm、器高59.5cm、底径11.0cmを測る。口縁部上面には、3条の沈線を巡らせている。肩部には、不遊環を張り付けている。内外面共に塗土が施されており、外面体部には自然釉が掛かる。口縁部は焼き歪みのため、ひどく湾曲している。

この甕の生産年代は18世紀前半と考えられる。Ⅲ-2 a期に属するものと考えているが、使用年代を示す出土遺物に恵まれなかった。

SK72

SK72 (表1) は、調査区北西部から検出した、方形の焼土処理土壌である。検出長5.8m、幅2.6m、深さ0.45mを測る。これは周辺の地区にも見られる、享保14年(1729年)の火災の跡を処理したものと思われる。建物の床下に位置する。

第103図-1～3は肥前磁器である。1は、染付仏飯具である。底径4.2cmを測る。底部は輪高台で、無釉である。2は、染付碗である。高台径4.0cmを測る。外面体部は二重網目文が描かれている。高台内には渦福の銘が記されている。全体的に特色気味である。高台畳付部は無釉で、離れ砂が付着している。3は、染付碗蓋である。口径10.5cm、器高3.2cm、つまみ径4.1cmを測る。外面体部には、山水文・松文が描かれている。つまみ上部は無釉である。1～3は、大橋康二氏の編年IV期に属する。4は、土師質土器灯明皿である。口径11.0cmを測る。内面はナデ調整、外面は指頭圧調整後ナデ調整が施されている。全体に煤が付着している。川口宏海氏の分類IT(伊丹町期)・1型式B類に属する。5は、土師質土器焼塩壺である。底径5.15cmを測る。外面は左回転ナデ調整されており、底部は内側から粘土板で塞がれている。内面には布目痕、底部には板目が残る。全体に煤が付着している。小林謙一氏の編年(小林1992年) V期に属する。6は、丹波焼甕である。口径(推) 35.2cmを測る。口縁上面部には2条の沈線が施されている。内外面共に塗土が施され、外面には自然釉が掛かっている。



第103図 SK72出土遺物

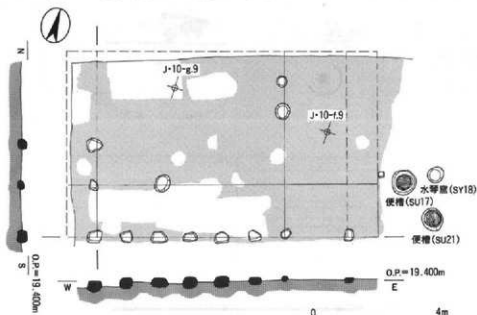
出土遺物の中には周辺遺構からの混入遺物もあると思われるが、概観すると、17世紀末～享保14年（1729年）と考えられる。Ⅲ-2 a 期に属する。

4. 第1次面の遺構と遺物

調査区北西部、南東部は掘乱が深く、2時期の遺構が同時に捉えられた。主な遺構は19世紀初頭～後半頃のⅢ-3 b 期のもを中心としている。この面では本来第2次面であるものも含めて、4カ所で三和土を確認する事ができ、4棟の建物があったことが分かる。調査区北西に位置するSB01の北西隅から三和土を検出した。水琴窟SY15・18や、埋樋遺構SU17・21はこのSB01に伴うもので、SU21の辺りがSB03との境界になるのではないかとと思われる。SB03は調査区北東に位置する。SB01との境界と思われる所から約3間（5.7m）四方に三和土を検出した。礎石と思われるものもあるが、建物を復元するには至らなかった。SB02は調査区南西に位置し、間口（西側）から3間（6m）の範囲に三和土を検出した。竈SV01・03はこのSB02に伴うものと思われる。礎石や柱穴は確認されなかった。調査区南東部からは、調査区東端から3間（6m）の範囲で三和土面を検出した。竈SV04はこのSB04に伴う物である。調査区中央から検出された井戸SE02は、出土遺物より19世紀前半～後半頃の遺構と考えられ、この井戸周辺の建物の所有者が異なる人間である場合は、共同の井戸の可能性もある。SB04も建物を復元するには至らなかった。

SB01

SB01（第104図・図版38）は、西側の現行道路に面し、桁行3間（5.88m）、梁行4.5間（8.82m）を測る礎石建物である。調査区南側の東西に並ぶ礎石列から北側に、1間の幅で通り庭があったと思われる。この通り庭を抜けた奥（東側）には、便桶SU17・21や、水琴窟SY15・18、雨落ち溝と思われるSD01などがあることから、1間ほどの庭が付属していたのではないかとと思われる。後述するが、東側の1間（1.97m）程は後に建て増しをし、その際にSY18やSD01を作ったのではないかと考えられる。SB01の礎石下に切られているSK61からは、伊賀・信楽焼土鍋、瀬戸・美濃焼磁器染付碗、など19世紀前半～中頃の遺物が出土していることから、SB01はこれ以降に建てられたと思われる。昭和36年（1961年）の航空写真（図版1）を見ると、SB01の位置には建物が建っておらず、これ以前にSB01は無くなったことが分かる。Ⅲ-3 b



第104図 SB01遺構図

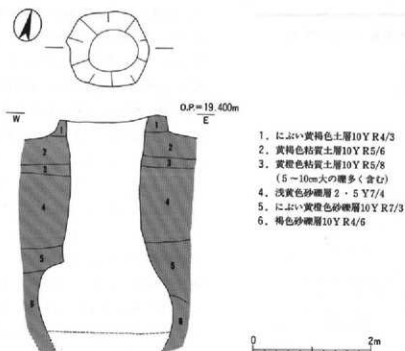
期-IV期の建物である。

SE01

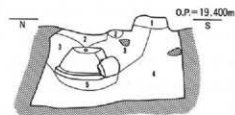
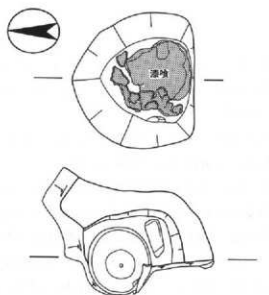
SE01(第105図・図版38)は、調査区中央より南から検出した。平面形は円形の、素掘りの井戸である。直径1.4m、深さは4mまで確認したが、底に達せず、湧水層は確認することができなかった。井戸は下半にゆくと、急に膨らむ。SB02に伴うものか。遺物は大量に出土した。

第109図-1は「寛永通寶」である。直径2.5cm、厚み0.1cmを測る。「寛」の貝の字は八字であり、背文を持たない新寛永通寶である。2は、「一銭銅貨」である。青銅製で、直径2.3cm、厚み0.1cmを測る。

第108図-1・3・4・6~8・10・11・13は、肥前磁器である。1は、染付仏飯具である。口径7.3cm、器高4.9cm、底径3.7cmを測る。外面体部には笹文を描く。底部は無軸で、周辺部を輪高台状に残し、中央部を半球状にやや深く削り取っている。3は染付御神酒徳利である。口径1.8cm、器高11.2cm、高台径3.9cmを測る。外面体部には始唐草文を描く。内面体部、高台畳付は無軸である。4は、色絵碗である。口径8.0cm、器高4.4cm、高台径2.9cmを測る。外面体部には意絵松竹梅文・鶴文が描かれ、その周辺には白抜きで唐草文、高台際には蓮弁文が描かれている。また、内面口縁部には雷文、見込みには捻花文が描かれている。高台内には「天明成化年製」の銘が見られる。高台畳付は無軸である。6は、染付碗である。口径10.1cm、器高5.2cm、高台径3.2cmを測る。外面は、磨した「壽」の文字が連続して描かれている。見込みにも同様の「壽」の文字が見られる。高台畳付は無軸である。7は、染付蕎麦猪口である。口径(推)7.8cm、器高6.15cm、底径6.2cmを測る。外面体部には扇文、口縁内部には四方禪文、見込みには手描きの五弁花が描かれている。口縁部は輪花型になっている。底部は蛇ノ目凹型高台である。8は、染付碗蓋である。口径9.2cm、器高2.9cm、高台径3.65cmを測る。外面体部には梅・月・雲文、見込みには梅・雲文が描かれている。13は、染付碗である。口径10.4cm、器高5.8cm、高台径4.1cmを測る。外面体部には梅・月・雲文、見込みには梅・雲文が描かれている。体部には焼き継ぎ底が残る。高台には焼成後に朱で文字が書かれている。焼き継ぎ屋が書いたものか。8の蓋とセットになると思われる。10は、染付小鉢である。口径(推)10.2cm、器高6.5cm、高台径6.1

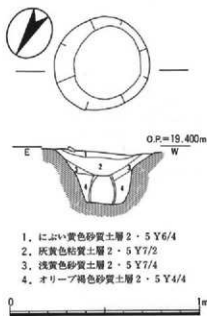


第105図 SE01遺構図



1. 褐色砂質土層 10 Y R 4/6
2. 淡黄褐色砂質層 10 Y R 8/4
3. 褐色土層 10 Y R 4/4 (炭化物・焼土多く含む)
4. 褐色粘質土層 7・5 Y R 4/4 (炭化物多量に含む)
5. 黒褐色砂質土層 2・5 Y 3/2

第106図 SY15遺構図



1. におい黄色砂質土層 2・5 Y 6/4
2. 灰黄色粘質土層 2・5 Y 7/2
3. 淡黄色砂質土層 2・5 Y 7/4
4. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 4/4

第107図 SY18遺構図

cmを測る。外面体部には梅花地文に松・竹文、見込みには牡丹文を描く。高台は蛇ノ目凹型高台になっており、高台内には「富貴長春」の銘が見られる。11は、瑠璃釉輪花鉢である。口径(推)9.8cm、器高7.0cm、高台径6.0cmを測る。内外面共に瑠璃釉が掛けられている。高台畳付は無釉である。7・10は各2個体ずつ出土した。1・4・7・10・11は大橋康二氏の編年IV期、3・6・8・13はV期に属する。2は、肥前系染付六角小鉢である。高台径(推)5.2cmを測る。外面体部には亀文・花文、高台際には宝文が描かれている。高台畳付は無釉である。5は、産地不明赤絵碗である。口径(推)8.8cm、器高4.95cm、高台径3.4cmを測る。外面体部には花卉文が描かれている。中国製赤絵を模していると思われる。高台畳付は無釉である。9は、産地不明染付輪花猪口である。口径(推)9.0cm、器高6.2cm、高台径3.8cmを測る。外面体部には花文が描かれている。高台畳付は無釉であるロクロ成形後に口縁部をカットしている。これは3個体出土した。12は、紀州男山焼碗である⁽¹⁾。口径(推)7.9cm、器高6.4cm、高台径4.0cmを測る。高台内には典須により「南紀男山」と描かれている。高台畳付は無釉である。男山焼は、文政頃(1818~1830)に和歌山県有田郡広川町広と、広八幡宮裏地で焼かれた藩窯である。明治11年(1878年)に廃業した。14は、瀬戸・美濃焼碗である。口径(推)11.4cm、器高6.3cm、高台径(推)4.2cmを測る。外面体部には、海浜風景文が描かれている。15は、萩焼小碗である。口径7.6cm、器高4.9cm、高台径3.5cmを測る。内面は薬灰釉、外面は長石釉の上に、鉄釉を横方向に施したピラ掛けが施されている。高台は溝巻き状高台になっている。檜崎彰一氏(檜崎1990年)の分類小碗VII類V期に属する。16~18・22~24は、伊賀・信楽焼である。16は、水注である。口径(推)6.6cm、器高5.0cm、高台径8.1cmを測る。内外面共に、鉄釉が施されている。口縁蓋受部と体部外面下半部から高台にかけては無釉である。高台畳付には墨書により、「口上□」と書かれている。17~18は土鍋蓋である。17は、口径(推)17.5cm、器高4.0cm、つまみ径4.8cmを測る。内外面共に口縁部を除いた部分に、橙色の化粧土を塗り、その上から薬灰釉を掛けている。外面は、橙色の化粧土と薬灰釉の間に、イッチン掛



第108圖 SE01出土遺物(1)



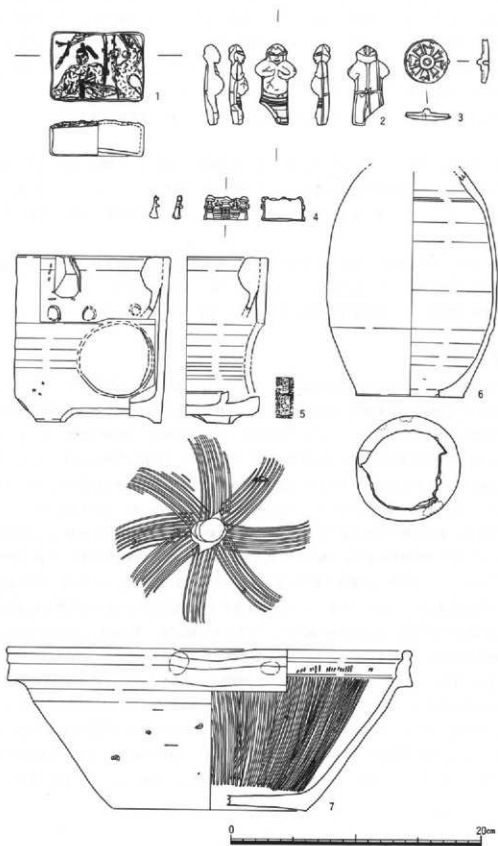
第109図 S E 01出土遺物(2) し、注口には灯芯痕が残る。22・23は、灯明皿である。22は、口径6.2cm、器高1.1cm、底径2.9cmを測る。外面口縁部から内面底部には、灰釉が施されている。23は、口径10.6cm、器高2.3cm、底径3.3cmを測る。外面口縁部から内面底部には、灰釉が施されている。内面には、二本の沈線と三点の目痕が見られる。口縁部には、灯芯痕が見られる。19は、柿輪灯明皿である。口径6.6cm、器高1.3cmを測る。内面底部から外面口縁部にかけて透明釉が施されている。外面底部には、右回転糸切痕が見られる。口縁部には灯芯痕が見られる。20は、柿輪灯明皿である。口径6.8cm、器高1.2cmを測る。外面口縁部から内面に掛けて、透明釉が施されている。外面底部には、右回転糸切痕が見られる。口縁部には、煤が付着している。21は、土師質土器灯明皿である。口径6.8cm、器高1.5cmを測る。内面はナデ調整、外面は指頭調整、口縁部はヨコナデ調整が施されている。口縁部には灯芯痕が見られる。川口宏海氏の分類IT・1型式A類に属する。25は、丹波焼徳利である。底径8.9cmを測る。外面は塗土が施され、内面は無釉である。

第110図一1は、肥前磁器染付水注である。縦5.5cm、横7.55cm、高さ2.9cm、厚さ0.3cmを測る。上面の文様は型押しされ、呉須と鉄軸によって彩色されている。側面角はヘラによる面取りがされている。上面にある2つの穴は、成形後に空けられている。底部は露胎で、布目が残る。片側面が無釉であることから、焼成時は側面を下にして焼成されていたことがわかる。上面文様は菅原道真か。2～4は、ミニチュア土製品である。2は、相模取人形である。高さ6.5cm、幅3.3cm、厚さ1.45cmを測る。合わせ型による成型で、つなぎ目をヘラズリにしている。全面に雲母が見られる。3は、独楽である。高さ、輻共に3.5cm、厚さ0.9cmを測る。型造りによる成型で、側面はヘラズリされていない。全面に雲母が見られる。4は、箱庭道具である。縦2.9cm、横3.6cm、厚さ0.65cmを測る。型造りによる成型で、上部のみヘラズリを施している。全面に雲母が見られる。宇治の平等院か。5は、京都栗田焼涼炉⁽¹⁾である。口径12.2cm、器高13.3cmを測る。胎土は淡黄色2.5Y8/3を呈する。また、ここからは、同じ製品ではないが、別個体の涼炉が出土している。その涼炉の胎土は黄味白色2.5Y9.0/2.0を呈している。外面は右回転ナデ調整。体部下半部に、楕円形の窓を有す。口唇は内に突出し、突出部上に小突起を有している。小突起はハリツケ後にヘラズリを施している。内面底部は、ハリツケ後にヘラナデ調整を施す。外面底部には板状の3足を有している。足は、ハリツケ後にヘラズリが施されている。体部には、「栗田」・「錦光山」の二つの印が押されている。栗田焼は、京都栗田(東山区)付近で焼かれた陶器の総称である。「錦光山」は栗田焼陶家の旧家の一つである。栗田口に窯を築いたのは正保年間(1644～1615年)で、「錦光山」の名を用いるようになるのは元禄年間(1688～1704年)からである。

出土遺物から概観すると18世紀末～19世紀末と考えられる。III-3 b期に属する。

SY15

SY15(第106図・図版38)は、S B 01の裏手に位置する水琴窟である。掘形の直径0.46m、深さ0.29mを測る。明石焼播鉢を逆さにして水琴窟として利用している。上面には漆喰が見られる。S B 01の裏手に位置する。



第110图 SE01 (1~5) · SY18 (6) · SY15 (7) 出土遺物

第110図一7は、明石焼楕体である。口径30.8cm、器高12.9cm、底径15.4cmを測る。外面は口縁部外縁帯直下より底部にかけて、正位で右回転（逆位でクロロ左回転）のヘラケズリが施されている。内面口縁部には、回転ナデが施されている。口縁部付近にまで及んだ播目を回転ナデによって消している。内面体部の播目は13本単位で右回りに施されている。内面見込みの播目は、8本単位である。見込みの播目は放射状で、中央に、直径1.6cmの穿孔を施している。白神典之氏の分類Ⅱ型式に属する。

出土遺物から概観すると18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。Ⅲ-3 a 期に属する。

SY18

SY18（第107図・図版38）もSY15と同様で、SB01の裏手に位置する水琴窟である。掘形の直径0.51m、深さ0.27mを測る。丹波焼の徳利を逆さにして水琴窟として利用している。SY15より東側に位置しており、前述したように、SB01はSY18が設けられた19世紀前半頃に裏側（東側）1間分を建て増した可能性がある。

第110図一6は、丹波焼徳利である。底径8.6cmを測る。外面体部には、鉄軸が施されている。底部には直径6.5cmの穿孔が施されている。もとはもう少し小さな穴であった可能性もある。

出土遺物から概観すると19世紀前半～中頃と考えられる。Ⅲ-3 b 期に属する。

5. まとめ

今回のこの調査区では3面の遺構面を確認した。第3次面は15世紀中頃～16世紀後半、第2次面は18世紀前半～後半、第1次面は19世紀前半～近代の時期と考えられる。第3次面では1期の伊丹城期からⅡ期の有岡城期（15世紀中頃～16世紀後半）にかけての溝を検出した。SD06は、本調査区北側のB-1-3区でも確認されており、今回の調査区でその溝の南端が分かった。また、SD07はSD06を切っており、SD06を埋めた後に掘られたと思われる。SD07につながるSD08は、上層の遺構に潰されており、はっきりとは確認できなかったが、南側で調査したB-2-2区で検出されたSD15へと続くものと思われる。このSD08、SB06の礎石列、現行道路の軸方位のずれによって、18世紀中頃に境に4'前後の地割りの変化があったことが分かった。第3次面調査区中央から検出した焼土処理土壌SK222は、18世紀後半から19世紀初頭にかけての遺構であるが、この時期の火事は文献では見られず、今回の調査によってこの辺りに18世紀後半から19世紀初頭の間に火事があったことがわかった。この焼土処理土壌SK222の真上からは道路遺構SX11を検出した。この道路は文化年間（1804～1818）成立の、『文化改正伊丹之図』（第218図）に記されている、鋸形に折れる道路に相当するのではないかとと思われる。上層遺構によって潰されており、道路幅は正確にはわからないが、1間（1.9m）程であったと想定される。この道路の下面のSK222と上面遺構の年代により、19世紀初～前半の間だけ存在していた道であると思われる。このSX11直上のSE01からは、男山焼碗や、栗田焼涼炉などの伊丹では珍しい製品が出土した。この井戸を使用していた人々の性格が伺われる出土遺物である。建物についてはSB01以外のものは復元には至らず、途中17世紀代の建物については明瞭な遺構を検出することができなかった。この様に、この調査区では伊丹城期から、近代にかけての遺構を確認することができた。

註

- (1) 肥前系磁器を生産していた。
- (2) 加藤磨九郎編『原色陶器大辞典』淡文社、1972年。

第6節 第63次調査B-5区

B-5区は、猪名野神社参道西側、B-1-4区とB-2-2区の間に位置する。『天保十五年(1844)伊丹郡町絵図』(第212図)によると、「北少路村」にあたり、『元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郡町絵図』(第212図)には、町代佐兵衛の南側の畑地に比定する。調査面積は112㎡である。

1. 基本層序

遺構面は4面検出した。地山直上に、部分的に地山に似た黄褐色粘質土層が5cm程度堆積し(第112図第10層現地表面より60cm下)、そこからは7世紀後半～8世紀前半頃の遺物が出土した。その上には、第4次遺構面のオリブ褐色粘質土層(第112図第7層現地表面より42cm下)、その上層には、第2次遺構面の褐色粘質土層(第112図第3層・第57層現地表面より28cm下)、さらにその上には、整地層(第112図第2層現地表面より15cm下)、第1次面の三和土(第112図第1層現地表面より10cm下)が見られる。

2. 第4次面の遺構と遺物

第4次面では調査区中央付近より、多くの柱穴を検出した。建物は復元できなかったが、みんな直径4～5cm、深さ25～40cm位の大きさのもので、一様に黄褐色砂質土の埋土をもつ。さらに、その一つの柱穴から16世紀代の土師質土器皿が出土し、この時代に独立柱建物が存在していたと考えられる。また、調査区東側では、南北に多数連なる櫓列と考えられる遺構を検出した(SA01)。これは、街区の背割線上に当たり、屋敷境の櫓列と考えられる。調査区中央から西側は、17世紀代の廃棄土壌が多く検出した。さらに、SK152からは、奈良時代の須恵器甕小片が出土した。

SA01

SA01は、調査区東端に位置する(第113図・図版44)。直径0.2～0.4m、深さ0.05～0.1mの柱穴が1m間隔で南北に並んでいる。遺物は出土しなかったが、埋土は一様にオリブ褐色砂質土を呈する。この土層は、まわりの調査結果から、16世紀末～17世紀後半のものと思われる。これもそのころの遺構であろう。Ⅲ-1b期～Ⅲ-2a期に属する。

SK175

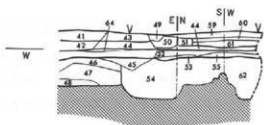
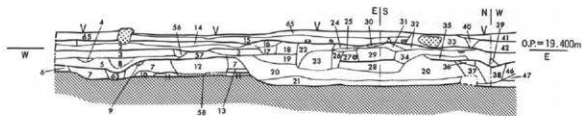
SK175は、調査区南側より検出した(表1)。平面形は長方形を呈し、長辺2.12m、短辺1.36m、深さ0.44mを測る。

第114図-1は、肥前白磁塔口である。口径7.4cm、器高5cm、高台径4cmを測る。端反型の口縁である。高台壘付は露胎である。2は、唐津系陶器器手碗である。口径9.4cm、器高6.6cm、高台径4.6cmを測る。全体的に施釉されているが、高台壘付は露胎である。大橋康二氏の編年(大橋1989年)で、1はIV期、2はIII期に属する。3は、土師質土器塔口である。口径29.4cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプである。調整は、口縁部内外面はヨコナテ調整、内面底部にはナテ調整を施し、外面底部は未調整である。外面全体に煤が付着している。難波洋三氏の分類(難波1992年)E類に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～末と考えられる。Ⅲ-2a期に属する。

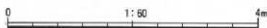
3. 第3次面の遺構と遺物

第3次面では、建物に直接つながる礎石などは検出できなかった。しかし、中央部と東側で竈を検出し、



1. 黄褐色土層 2・5 Y5/4
2. 褐色土層 10 Y R 4/6
3. 褐色土層 10 Y R 4/4 (炭化物、2cm大の礫多量に含む)
4. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 4/3
5. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4 (鉄土、炭化物多量に含む)
6. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4
7. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/6
8. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
9. におい黄褐色砂質土層 10 Y R 6/4
10. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/6
11. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6
12. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4 (炭化物多量に含む)
13. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4
14. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4
15. におい黄色砂質土層 2・5 Y 6/4 (1~3cm大の礫多量に含む)
16. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4
17. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4
18. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
19. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 4/3
20. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/3 (2~5cm大の礫多量に含む)
21. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4 (0.5~5cm大の礫多量に含む)
22. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 4/3
23. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4
24. におい黄色砂質土層 2・5 Y 6/4
25. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/6
26. 暗褐色粘質土層 10 Y R 3/3
27. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4/2
28. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4 (1cm大の礫多量に含む)
29. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
30. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/6
31. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4
32. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4
33. 暗褐色粘質土層 10 Y R 3/3 (1~3cm大の礫多量に含む)

34. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 3/3
35. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
36. 黄褐色砂質土層 2・5 Y 5/4
37. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 4/3 (炭化物多量に含む)
38. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/3
39. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4
40. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4
41. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/6 (1~4cm大の礫多量に含む)
42. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/6 (1~4cm大の礫多量に含む)
43. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3 (1~2cm大の礫多量に含む)
44. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/8 (1~3cm大の礫多量に含む)
45. 暗褐色粘質土層 10 Y R 3/4
46. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/6
47. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4 (1~3cm大の礫多量に含む)
48. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 4/3
49. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4
50. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/3
51. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 3/3
52. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/6
53. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6
54. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4/2
55. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4
56. 黄褐色砂質土層 2・5 Y 5/4
57. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4
58. 暗褐色粘質土層 2・5 Y 3/1
59. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 3/3
60. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3
61. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4
62. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/4
63. オリーブ褐色土層 2・5 Y 4/6
64. 灰オリーブ粘質土層 7・5 Y 5/3
65. 表土



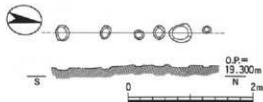
第112図 B-5区北壁・西壁土層図

建物の存在が考えられる。検出した竈 S V 01は、B-2-2区で検出した S V 697の残り部分であり、これで竈全体を掘むことができた。また、その北側では S V 04を検出したが、S V 01よりは時代が新しく、規模も小さい。さらに、北西部に検出した S D 07・08や、中央付近に位置する S D 10は埋土などから耕作用溝と思われる。その他に、屋敷境の溝や池などが出土した。

S V 03・05

S V 03・05は、調査区中央北側に位置する(第115図・図版44)。どちらの竈も上面の遺構に攪乱されてお

り、正確にとらえることができなかった。SV03の大きさは、平面形は半円形を呈し、検出長0.58m、深さ0.24m、を測る。SV05は、平面形は不整形を呈し、検出長0.37m、深さ0.24mを測る。どちらも出土遺物から同時期のものと考えられ、位置的にも近く、また、焚口もSV03は南側、SV05は西側と思われる、同時期に使用されていたと考えられる。さらに、今回は残存部がわずかなため、遺構図を載せていないが、これらの東側より竈を検出した(SV06~08)。出土遺物から18世紀後半と考えられ、SV03・05よりは一時期古い竈であることがわかった。おそらく、SV07・08は2基1組の竈と思われるが、SV06は同時期に使用していたかは不明である。



第113図 SA01遺構図

第122図一3は、肥前白磁器碗である。高台径4cmを測る。高台が低く、体部は湾曲が強い。また、高台台付は露胎で離れ砂が付着している。大橋康二氏の編年IV期に属する。これは、SV03の出土遺物である。

出土遺物を概観すると、18世紀末と考えられ、III-3 a 期に属する遺構である。

SV02

SV02は、調査区北壁付近中央部に位置する(第116図・図版44)。2基1組の半地下式竈である。北側の燃焼室の大きさは、直径0.56m、深さ0.25m、南側は直径0.54m、深さ0.2mを測る。燃焼壁には薄く粘土が張られている。また、これらの西側のSX119は、これらにともなう焚口である。この竈はSV06~08を切って作られており、作り替えられたと思われる。

第122図一1は、髹漆撥鉢である。口縁部のつくりは、外縁帯の幅が広くて張りも大きい。また、外面は、口縁部外縁帯やや下まで、回転ヘラケズリが施されている。内面の摺目は9本単位である。小片で検出しにくいのが、白神典之氏の分類(白神1990年)I類に属する。2は、軒平瓦である。全長(残)6.25cm、瓦当部高3.9cm、文様区幅2.2cm、周縁上部幅0.7cm、左側縁幅5.5cm、顎下部厚1.4cmを測る。調整は、瓦当周縁部はヘラナデ調整、顎下部・瓦当裏面はナデ調整を施し、平瓦部凹部は縁をナデ調整、凸部は未調整である。文様は、第1唐草と子葉の端部が太くY状に開いているタイプのものである。また、瓦当面には雲母が付着している。

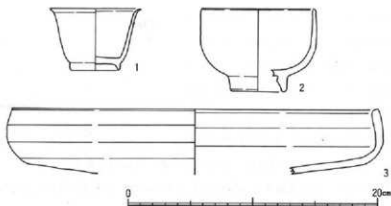
出土遺物を概観すると、18世紀後半~19世紀初頭と考えられ、III-3 a 期に属する遺構である。

SX119

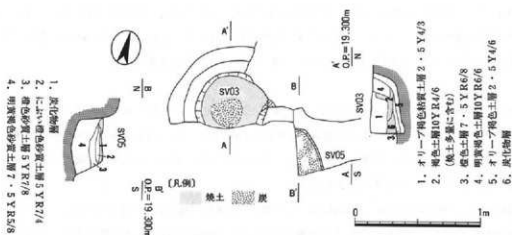
SX119は、SV02の西側隣りに位置する(第116図・図版44)。SV02の焚口部である。平面形は不整形を呈し、検出長さ2.16m、幅1.2m、深さ0.3mを測る。

第123図一6は、土師質土器皿である。口径9.4cm、器高2.7cmを測る。胎土は淡黄色2.5YR8/3を呈し、体部は厚手で、体部の張りが強い。手づくね成形で、調整は、口縁部内外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整を施し、外面底部には指頭匠痕がみられる。また、口縁部に灯芯痕がみられることから、灯明皿として使用していたと思われる。IT(伊丹郷町期)・2型式B類に属する。7は、肥前磁器染付碗である。口径10.2cm、器高4.6cm、高台径3.6cmを測る。体部は半球型で、高台が低い丸碗タイプのものである。また、全体的に体部は黒帯びている。外面の文様は竹・梅文である。高台台付は露胎である。8は、肥前磁器青磁鉢である。口径16.2cm、器高6.9cm、高台径9.6cmを測る。高台は、蛇ノ目凹型高台で、少し離れ砂が付着している。大橋康二氏の編年では、7はIV期、8はV期に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀後半~19世紀初頭と考えられる。III-3 a 期に属する遺構である。



第114図 SK175出土遺物



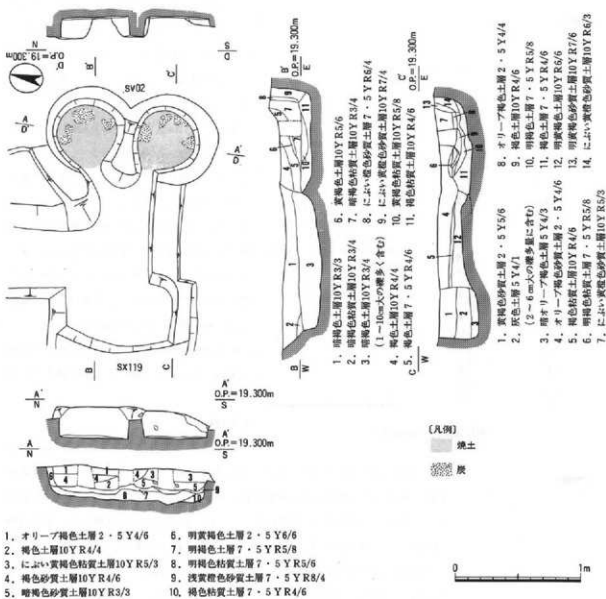
第115図 SV03・05遺構図

SE02

SE02は、調査区南壁沿い中央に位置する（第117図・図版44）。平面形は円形を呈し、直径1.02mを測る。素掘りの井戸で、第4層と第6層では鉄分が沈着していたため湧水層と思われる。この井戸は、上部が攪乱されていたため、上面で検出できなかった。また、遺構の年代観から後述する調査区南側に位置するB-2-2区から延びる建物に伴うものと考えられる。

第122図-4は、磁器赤絵碗である。口径9.2cm、器高4.8cm、高台径2.5cmを測る。文様は、ぼけの花か？赤色顔料で描かれており、枝は鉄釉・緑釉が、萼には金色顔料が施されている。産地は不明である。5・6は、瀬戸・美濃焼磁器である。5は、銅版摺絵染付湯炊である。口径6.6cm、器高6.4cm、高台径3.7cmを測る。外面の文様は、丸文に草花文が描かれている。高台畳付は露胎である。6は、仏飯具である。口径7cm、器高6cm、底径4.8cmを測る。首部が細長く、口縁部が広くて浅い。外面全体に瑠璃釉、内面は透明釉が施され、底部は無釉である。7は、信楽焼銅緑釉御神酒徳利である。口径1.5cm、器高8.9cm、底径2.9cmを測る。胴上部が張り胴下部が狭くなっている瓶子型徳利である。底部は無釉である。8は、軒杖瓦である。全長(残)9.3cm、下弧幅24.5cm、右周縁部幅6.2cm、下周縁部幅0.5cm、瓦当部高3.9cm、文様区幅2.4cm、顎下部厚1.5cmを測る。調整は、瓦当面はへラケズリ調整、瓦当部と平瓦部の接合部はナデ調整を施している。また、平瓦部凸部と凹部は未調整である。文様は、中心飾りは三ツ巴文で尾部は短い。第一唐草は先端部がY状に開き、第二唐草は芽状の突起を持つ。瓦当面には雲母が付着している。

出土遺物を概観すると、19世紀中頃～19世紀末と考えられる。Ⅲ-3b期からⅣ期に属する。



第116図 SV02・SX119遺構図

SD04

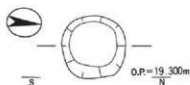
SD04は、調査区北西隅に位置し、SD05に通じる溝である(第118図)。検出長9m、幅0.32m、深さ0.06mを測る。東側はSD05に通じるが、西側は調査区外にまだ延びると考えられる。また、後に述べるがSD05はSD06とつながり、これらは地割溝と考えられる。

第122図一9は、土師質土器焙烙である。胎土は橙色7.5Y R7/6を呈する。口縁部と体部がやや直立するタイプのものである。底部型作りで、外面に指頭瓦痕がみられ軽くナデを施している。また、内面の調整はヨコナデ調整である。外面には煤が付着している。難波洋三氏の分類B類である。

出土遺物を概観すると、17世紀後半と考えられる。III-2 a期に属する。

SD05

SD05は、調査区西側に位置する(第119図・図版45)。南北に延びる溝で、調査区外に延びると思われる。検出長5.2m、幅0.4m、深さ0.13mを測る。この溝の南が東西に延びるSD06と接する。『元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹町絵図』(第212図)の町代佐兵衛の屋敷東端ラインと一致し、地割溝であることが判明し



1. 褐色土層10Y R4/4
2. 褐色粘質土層7・5 Y R6/8
3. 1. におい黄褐色砂礫層10Y R6/4 (5~15cmの礫多く含む)
4. 暗褐色砂礫層10Y R3/3 (湧水層)
5. 黄褐色砂礫層10Y R5/6 (10~30cmの礫多く含む)
6. 1. におい黄褐色砂礫層10Y R4/3 (湧水層)
7. 黄褐色粘土層2・5 Y5/6
8. 明黄褐色砂礫層2・5 Y7/6



第117図 SE02遺構図

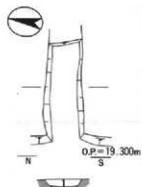
た。また、その地割は現代まで変わっていない。さらに、これの埋土から焼土が検出し、出土遺物の年代観から、元禄12年(1699)もしくは元禄15年(1702)大火災の際の痕ではないかと考えられる。

第122図—10は、肥前磁器色絵碗である。高台径4.6cmを測る。体部は薄手で、やや黒帯びているが丁寧に作られている。外面の文様は草花文が描かれ、鮮明である。11は、唐津焼皿である。高台径4.4cmを測る。外面底部は無釉で、内面には灰釉が掛けられている。また、見込みは蛇ノ目輪ハギを施し、その内と高台畳付に砂目痕がみられる。大橋康二氏の編年では、10はⅢ期、11はⅣ期に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀後半~17世紀末頃と考えられ、Ⅲ-2 a期に属する遺構である。

SK134

SK134は、調査区南東隅に位置する(第120



1. 1. におい黄褐色土層10Y R5/4



第118図 SD04遺構図

図)。平面形は不整形を呈し、長さ1.5m、幅1.4m、深さ0.62mを測る。焼土処理土壌である。この調査区内には建物の存在がみられないため、東側か西側の建物が火災に遭いここに処理したと思われる。また、出土遺物の年代観から、元禄12年(1699)もしくは元禄15年(1702)大火災の際の処理土壌と思われる。

第122図—12・13は、肥前磁器である。12は、染付猪口である。口径6.4cm、器高4.5cm、高台径1.6cmを測る。体部がラッパ状に開き、口縁部が外へ反っている。外面の文様は草花文で、高台畳付は露胎である。13は、染付皿である。口径13.8cm、器高3.8cm、高台径4.4cmを測る。体部が大きく外へ張り出す浅皿タイプである。内面に唐草文が描かれ、見込みには蛇ノ目輪ハギを施している。高台は無釉である。12・13とともに、大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。14~16は、土師質土器である。14・15は、焼壺臺と蓋である。14臺は、口径6.2cm、器高2cmを測る。粘土円盤をつくり、口縁部外面にヨコナエ調整を施し、外面上部には若干であるが指頭圧痕がみられる。内面は指頭圧調整後、ヨコナエしている。15は、口径5.6cm、器高8cm、底径3.7cmを測る。成形は、粘土紐輪積みで、調整は、口縁部内外面はヨコナエ調整、外面体部から底部にかけて指頭圧痕がみられる。また、内面底部は志棒による凹みと思われるものが見られる。両角まり氏の分類(両角1990年)B-8-γ型に属する。16は、焙烙である。口径25.4cmを測る。胎土は橙色7.5Y R7/6を呈する。口縁端部は内面にやや傾き、体部と底部の境目付近の張りが強い。調整は、口縁部内外面はヨコナエ調整、内面底部はナデ調整を施し、外面底部は型作り成形で、離れ砂砥が残る。髭波洋三氏の分類E型に属する。17は、信楽焼鉢である。底径16.4cmを測る。外面は丁寧に回転ヘラズリを施し、口縁部から内面にかけて鉄化性が見られる。内面体部の描

土円盤をつくり、口縁部外面にヨコナエ調整を施し、外面上部には若干であるが指頭圧痕がみられる。内面は指頭圧調整後、ヨコナエしている。15は、口径5.6cm、器高8cm、底径3.7cmを測る。成形は、粘土紐輪積みで、調整は、口縁部内外面はヨコナエ調整、外面体部から底部にかけて指頭圧痕がみられる。また、内面底部は志棒による凹みと思われるものが見られる。両角まり氏の分類(両角1990年)B-8-γ型に属する。16は、焙烙である。口径25.4cmを測る。胎土は橙色7.5Y R7/6を呈する。口縁端部は内面にやや傾き、体部と底部の境目付近の張りが強い。調整は、口縁部内外面はヨコナエ調整、内面底部はナデ調整を施し、外面底部は型作り成形で、離れ砂砥が残る。髭波洋三氏の分類E型に属する。17は、信楽焼鉢である。底径16.4cmを測る。外面は丁寧に回転ヘラズリを施し、口縁部から内面にかけて鉄化性が見られる。内面体部の描

目は6本単位で、見込みは円形に施している。ロクロは左回転である。

第123図-1は、丹波焼甕である。口径19.6cm、器高25.6cm、底径15.2cmを測る。口縁端部は平坦で、断面がT字形を呈する。口縁部から外面全体に鉄釉が掛けられ、内面は塗土が施されている。外面底部は無釉である。また、肩部には不遊環が張り付けられている。

出土遺物を概観すると、17世紀後半と考えられる。III-2 a 期に属する。

S X 132

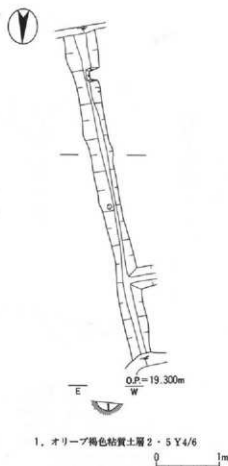
S X 132は、調査区東側でS K 134を切って作られた池状遺構である(第121図・図版45)。平面形は不整形を呈し、長さ3.1m、幅1.7m、深さ0.62mを測る。周囲を10~30cm大の石を2段積み、その隙間に小石を嵌めていた。

第123図-2は、肥前磁器染付碗である。口径9.4cm、器高5cm、高台径3.4cmを測る。器形は高台が低く半球形の小碗である。内外面に水裂文が描かれている。高台畳付は露胎である。

3は、丹波焼鉢である。口径13cm、器高6.9cm、底径10.2cmを測る。口縁部から外面体部にかけて灰釉されている。4は、左巻き三ツ巴文軒丸瓦である。全長(残)6.3cm、瓦当部径14cm、文様区径10.2cm、内区径9.2cm、周縁部幅1.8cmを測る。調整は、

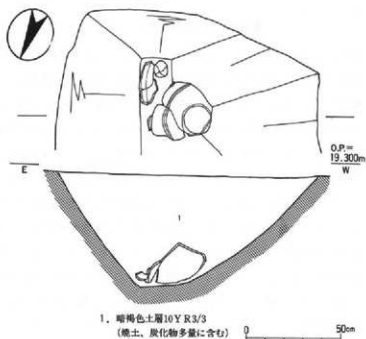
周縁部は周縁に沿ってナデ調整、瓦当裏面はナデ調整、瓦当裏面周縁部は周縁に沿ってナデ調整を施している。さらに、瓦当部と丸瓦部の接合部は丁寧なナデ調整がみられ、丸瓦部凸部は縦方向にヘラミカキ調整、丸瓦部凹部には布目波がみられる。瓦当面には雲母が付着している。5は、土師質土器焙烙である。口径30.8cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプのものである。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整を施し、外面底部は型作りで未調整である。難波洋三氏の分類E類に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀末~18世紀前半と考えられる。III-2 a 期に属する。



1. オリブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6

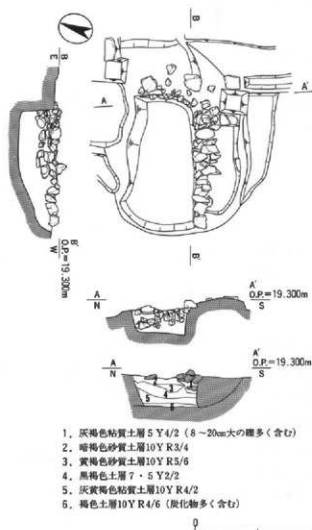
第119図 S D05遺構図



1. 暗褐色土層 10 Y R 3/3

(焼土、炭化物多量に含む)

第120図 S K 134遺物出土状況(部分)



第121図 SX132遺構図

1は、口径10.4cm、器高5.6cm、高台径4.1cmを測る。全体的に厚手で粗製のいわゆる「くらわんか手」と呼ばれるものである。呉須の発色も悪い。文様は草花文が描かれ、一部鉄輪を施している。高台登付は露胎で砂が付着している。また、高台内には「成化年製」の銘がみられる。2は、口径10.4cm、器高5.1cm、高台径4.9cmを測る。全体的に薄手で、呉須の発色も良好だが、滲んでいるようになっている。文様は竹文である。高台登付は露胎である。1・2ともに大橋康二氏の編年IV期に属する。3は、渠焼青鉢である。口径28.6cm、器高11.1cm、底径14cmを測る。口縁部の端部の内面にわずかな凸帯を施し、外面にもやや弱い凹帯がみられる。外面の調整は、回転ヘラケズリを底部際から口縁部外縁帯やや下まで施している。内面の描目は11本単位で、ロクロは右回転である。白神典之氏のカテゴリI類に属する。4は、黒色粘板岩製硯である。幅6.7cm、厚さ1.1cmを測る。上部しか残っていないが、ムコウノクリ・ウミ（海）が丁寧に作られている。また、体部には刃物傷のようなものがみられ、砥石として転用されたと思われる。産地は不明である。5は、瓦質土器鉢である。方形の鉢で、長辺14.1cm、短辺11.8cm、器高8cmを測る。粘土板ハリツケ成形で、その後ナデ調整をかるく施している。さらに、別に成形した表面をハリツケし、ヘラで模様を施している。また、鑿目には指頭圧痕がみられる。底部に離れ砂が付着する。底部に直径1.5cm位の穴を開けていることから、植木鉢として使用していたと思われる。6は、瀬戸・美濃焼灰釉緑釉流し陰刻流水文水甕である。口径28.3cm、器高15.3

4. 第2次面の遺構と遺物

第2次面は、北壁より南へ7.5m付近、すなわち第3次面のSD06のあたりまで、井戸や多くの廃棄土塊を検出し、この辺りは裏庭だったと思われる。18世紀後半～19世紀前半の遺構を中心に検出した。その他に、南側で検出したSD01・02内に、5～10cm程のぐり石が出土し、この溝状遺構内に集石遺構SS54・79・196を検出した。SS54とSS79はそれぞれ5m（2間半）の間隔であり、柱位置の根石と考えられる。それらは、建物の壁の基礎地業と考えられる。この基礎は地割から、南側の建物の北端部（B-2-2区）と思われる。また、出土遺物から本来は第1次面に属すると考えられる。

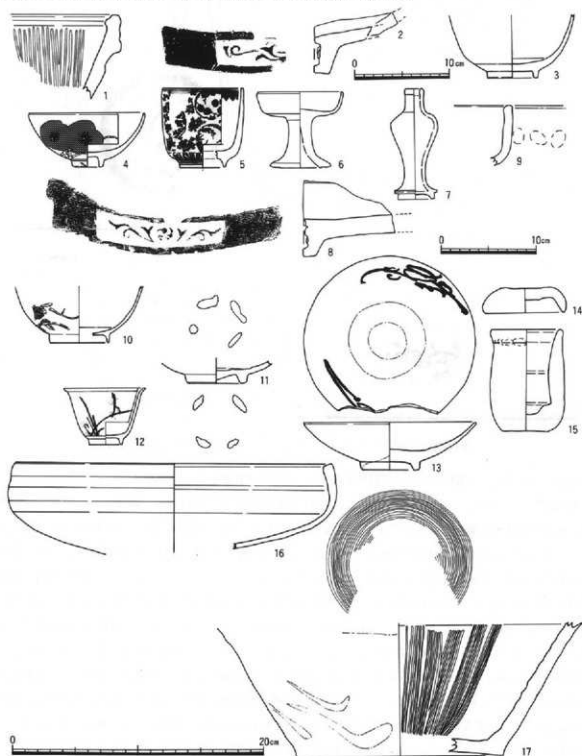
SE01

SE01は、調査区北東隅に位置する（第124図・図版45）。平面形は楕円形を呈し、長さ1.7m、幅1.4m、深さ4.9mを測る。素掘りの井戸である。上層の埋土に焼土や炭化物土（第2・4・6・9・10層）が堆積する。この中の出土遺物の年代観が18世紀後半で、この頃この辺りで火災があり、その際に埋め戻されたと思われる。

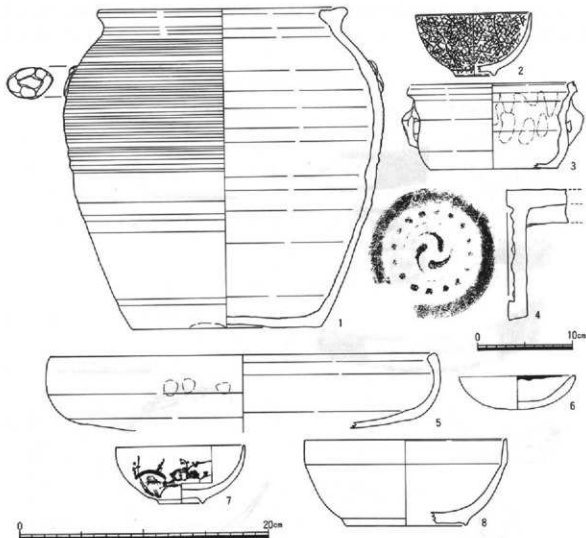
第125図一・2は、肥前磁器染付碗である。

cm、高台径29.2cmを測る。口縁端部は内傾する。高台登付はやや広く、外側に丸みがある。藤澤良祐氏の本業焼編年Ⅲ段階10期に属する。これは、その他の遺物に比べると時期がことなり、上層からの混入遺物と思われる。

第126図—1は、丹波焼壺である。口径12cmを測る。首節はやや直立気味になっており、口縁部外面から体部にかけて自然釉が施されている。16世紀中頃のもので伝世品と思われる。



第122図 SV02 (1・2)・SV03 (3)・SE02 (4~8)・SD04 (9)・SD05 (10・11)・SK134 (12-17) 出土遺物



第123回 SK134 (1)・SX132 (2~5)・SX119 (6~8) 出土遺物

以上の出土遺物は下層部のもので、18世紀前半から中頃の年代観と考えられる。

第126図一2~4は、肥前磁器である。2は、染付仏飯具である。口径6.8cm、器高5.8cm、底径4cmを測る。外面の文様は半菊文が描かれており、底部は無軸である。3は、染付蓋である。口径10.2cm、器高2.8cm、つまみ径4.4cmを測る。体部はやや薄手である。呉須の発色は良好で、文様も丁寧に描かれている。外面に草花文と蝶文、内面口縁部には四方障文、内面に花文がみられる。また、つまみ内に二重方形枠内に横福の銘が描かれている。4は、染付皿である。口径10cm、器高3.6cm、高台径7.45cmを測る。呉須の発色も良好で、非常に丁寧に細かい文様を描いている。内面の文様は唐草文・草花文がみられ、外面は連続唐草文である。2~4は、大橋康二氏の編年IV期に属する。5・6は、ミニチュア土製品である。5は、残存高4.9cm、最大幅5.6cmを測る。長い振り袖の着物を着、後ろに垂らした帯を締め、両手を膝において正座している婦人像である。合わせ型成形で、合せ目をヘラケズリを施し、帯部に朱軸の痕がみられる。また、底部には、直径1.4cm、深さ4cmの穿孔がある。6は、残存高7.5cm、最大幅4.4cmを測る。着物のうえに打掛を着、左手で着物の裾をもち、右手を添えている女性立像である。合わせ型成形で、合せ目を丁寧にヘラケズリを施している。底部には直径1.5cm、深さ5.5cmの穿孔がある。7は、一銭である。直径2.2cm、厚さ0.2cmを測る。この遺物は、他のものにくらべると新しく混入と思われる。8は、丸瓦である。全長(残)12.5cm、高さ6.5cm、

玉縁幅12.5cm、厚さ2cmを測る。調整は、丸瓦部凸部は縦方向にヘラミガキ調整、前端部と玉縁部凸面はヨコナデ調整。丸瓦部凹面には布目痕がみられ、その上から縦方向に印板調整を施している。玉縁部凹部にも布目痕がみられる。玉縁部先端部と丸瓦部側縁は、ヘラケズリにより面取りを施している。

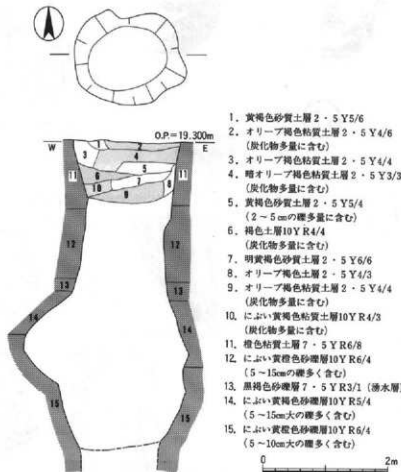
以上の遺物は、上層に堆積していた炭化物層からの出土遺物である。出土遺物を概観すると、18世紀前半～19世紀初頭と考えられる。また、上層の炭化物土とともに出土した遺物の年代観から、18世紀後半～19世紀初頭にこのあたりで火災があったことがわかった。III-2期からIII-3a期に属する遺構である。

SK43

SK43は、調査区中央付近に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ1.92m、幅1.16m、深さ0.42mを測る。廃棄土壌で遺物が多量に出土した。

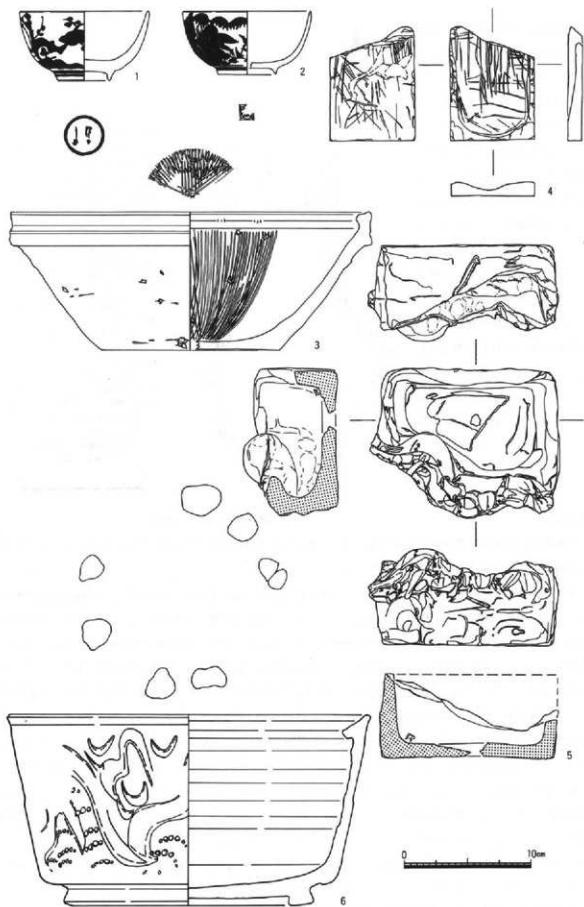
第127図-1は、中国製青花鉢である。口径14.6cm、器高6.8cm、高台径6.8cmを測る。口縁部は端反りする。呉須の発色が鮮明で、文様も丁寧に描かれている。文様は内外面に仙芝祝寿文を描く。また、高台内に印銘がみられ、高台壘付は露胎である。景德鎮窯のものである。2は、肥前陶胎染付端反鉢である。外面に唐草文が描かれ、見込みにコンニャク印判による五弁花が施されている。高台壘付は露胎である。3は、肥前磁器染付皿である。口径23.6cm、器高5.3cm、高台径12.6cmを測る。これも口縁部が外側へ張り出す端反型である。内面の文様は丁寧に描かれ、呉須の発色も良好である。内面に鳥草文を内面口縁部に雲文が描かれている。高台内にハリ痕がみられ、高台壘付は露胎である。2は、大橋康二氏の編年IV期、3は、V期に属する。4は、京焼系陶器である。口径6.7cm、器高9.1cm、底径6.2cmを測る。外面底部以外に灰釉を掛けている。また、肩部に耳がみられ、双耳と思われる。5は、土師質土器乗燵である。口径7cm、器高3.4cm、底径3.7cmを測る。全面に黒色釉が掛けられている。内面の芯立は体部成形後、ハリツケられ接合部をナデ調整している。また、底部には穿孔がみられる。これは、行灯や提灯、灯籠の底板に打ち付けてある釘に差し込むための穴である。6は、粘板岩製の近江高島碁である。長さ13.6cm、幅4.5cm、高さ1.6cmを測る。細長いタイプのもので、丁寧に作られている。また、裏面に「大極上本高島石」の刻銘がみられる。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられ、III-3a期に属する遺構である。

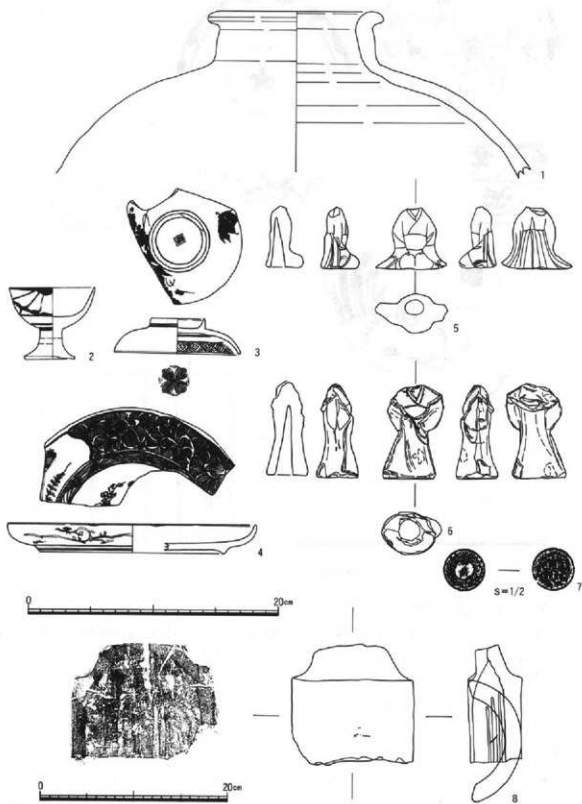


第124図 SE01遺構図

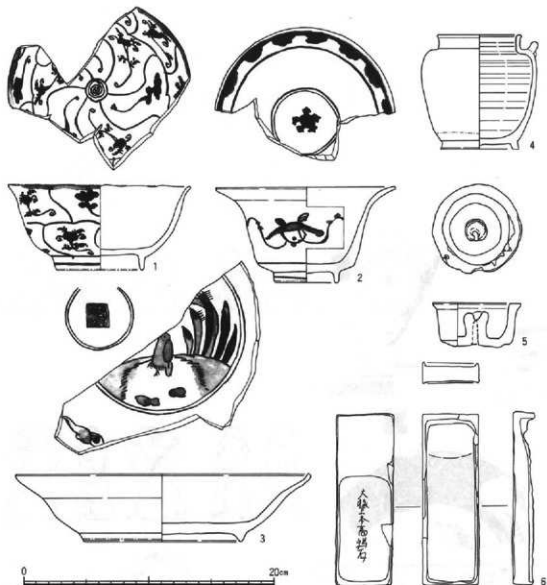
1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
2. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
(炭化物多量を含む)
3. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
4. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3
(炭化物多量を含む)
5. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
(2～5cmの礫多量を含む)
6. 褐色土層 10Y R4/4
(炭化物多量を含む)
7. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/6
8. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/3
9. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
(炭化物多量を含む)
10. 黄褐色粘質土層 10Y R4/3
(炭化物多量を含む)
11. 褐色粘質土層 7・5 Y R6/8
12. 黄褐色砂礫層 10Y R6/4
(5～15cmの礫多く含む)
13. 黒褐色砂礫層 7・5 Y R3/1 (湯水層)
14. 黄褐色砂礫層 10Y R5/4
(5～15cmの礫多く含む)
15. 黄褐色砂礫層 10Y R6/4
(5～10cmの礫多く含む)



第125圖 SE01下層出土遺物



第126图 SE01下層(1)・SE01上層(2~8)出土遺物



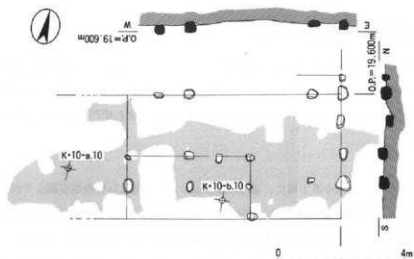
第127図 SK43出土遺物

5. 第1次面の遺構と遺物

第1次面では、中央付近で三和土と礎石を検出した。北側隅では3～5cm程度の石を敷き固めた面を検出した。この砂利敷面はB-1-4区南端でも検出した。「文化改正伊丹之図」(第128図)によると、この部分は東西方向の路地が描かれており、おそらく、それに当たるものと思われる。また、東南端に検出した石列SB02は、B-4区の土蔵建物の基礎である。この石列は、B-2-2区北端・B-4区南西端で検出し、合わせると、東西4.33m、南北4m以上となり、この土蔵は2間×2間の規模であることがわかった。

SB01

SB01は、調査区中央付近に位置する(第128図)。桁行2間半(東西約4.992m)以上、梁行2間半(南北約4.992m)以上を測る。10cm大の花崗岩を根石とする礎石建物である。第2次面の廃棄土壌(SK40・SK41)の上面に三和土が敷かれており、19世紀前半以降に建てられたと考えられる。第2次面で検出した便槽桶SU02・03は、この建物に伴うものと思われ、SU03は、木桶から大谷焼甕に作り替えられていた。IV期に属する。



第126図 S B01遺構図

6. まとめ

B-5区は、17世紀代から近代の遺構を検出した。年代ごとに変遷を述べると、17世紀代は畑地だったとおもわれる。また、この頃作られた屋敷境溝(SD05)は、元禄7年の絵図(第212図)をみると、町代佐兵衛の屋敷は奥行き9間半とあり、この東端と一致する。さらに、東側のSA011は、同絵図の源左衛門屋敷地西端と一致することがわかった。そうすると、その間の記述が省略されていたことがわかった。これらの地割りは現代まで変わらず存在する。18世紀に入ると、猪名野神社参道から昆陽口村に通じる東西方向の道が北側に作られ、その道沿いに建物が建ち、調査区は廃棄土壌や井戸・池などが検出したことから、これら建物の裏庭部だったと思われる。さらに、18世紀後半には、中央付近に電屋が存在していたが、18世紀末に火災に遭いこれらはなくなってしまった。これ以後、裏地開発により、19世紀初頭に路地がつくられ、ここには礎石建物S B01が建てられた。また、第2次面で検出した建物の壁の基礎地業の補足説明をくわえると、この遺構は南側の建物の北端部にあたることがわかった。また、この遺構を切ってつくられた井戸SE02の年代親から19世紀前半にはなくなっていることがわかった。そうすると、南側の既存建物はそれ以後に建てられたと思われる。以上の様に、調査区は狭かったが、18世紀後半の藪屋の存在や地割溝を検出できたことは大きな成果であった。

第7節 第97次調査B—13区

B—13区は、尼崎から産業道路に通じる昆陽口通りに面し、『天保十五年(1844)伊丹郷町分間絵図』(第212図)よると「昆陽口村」にあたることかわかる。さらに、『元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郷絵図』(第212図)には、屋敷主本百姓六右衛門、住人は日用人(日雇い)孫右衛門と記された地点に比定する。

1. 基本層序

遺構面は、4面検出した。地山直上層に、第3次遺構面(第130図第24層現地表面より60cm下)、その上には、第2次遺構面(第130図第23層現地表面より50cm下)が堆積する。この2層は良く似た土色である。その上層には、火災を受けた三和土層(第130図第20層現地表面より30cm下)が堆積し、その上に、焼土混じりの整地層(第130図第19層現地表面より20cm下)がみられる。さらに上層に、第1次遺構面(第130図第17層現地表面より10cm下)を検出した。

2. 第4次面の遺構と遺物

第4次面では三和土は検出されなかった。遺構検出も少なく、調査区中央に数カ所柱穴がみられただけである。

S B 01

S B 01は、掘立柱建物である(第131図)。桁行1間半(南北3.18m)以上、梁行1間(東西2.12m)以上の規模で、道路からかなり奥まったところにあることから、主屋でない可能性が高い。また、1間が7尺(2.12m)と考えられ、16世紀代の建物では1間が7尺とするもの多く、出土遺物は小片だったので図化しなかったが、16世紀末頃の土師質土器皿が出土し、この頃の年代観と思われる。Ⅲ—1 a 期に属する。

3. 第3次面の遺構と遺物

第3次面は廃棄土壌が、中央より南側を中心に検出し、また、地口付近には数カ所柱穴がみられたことから、三和土は検出されなかったが、間口より中央付近まで建物が建っていた可能性がある。

S K 40

S K 40は、調査区中央部に位置する(表1)。平面形は長方形を呈し、長さ約2m、幅約1m、深さ約0.5mを測る。また、この遺構内に円形の落ち込みがみられ、そこから備前焼大甕片が出土しており、S K 40は埋壺の掘形と考えられる。

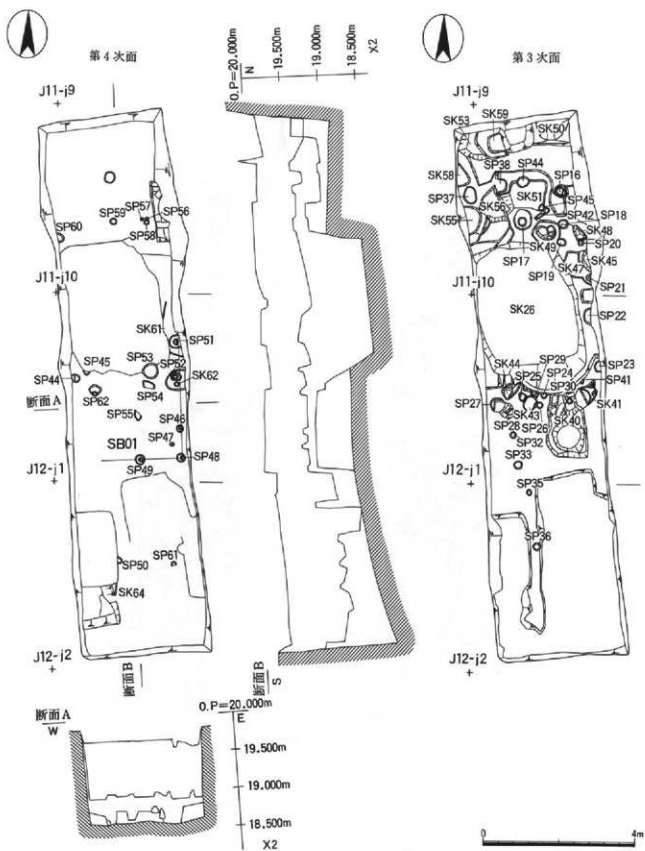
第132図—3は、備前焼大甕である。底径32cmを測る。外面体部は指頭瓦調整後、底部から上部に向かってヘラズリ調整を施している。内面体部は右上がりのナデ調整がみられる。また、外面体部には塗土が掛けられている。間壁忠彦氏の編年(間壁1990年) V 期に属する。小片で図化しなかったが、その他に、中国製青花皿、土師質土器皿などが出土した。

出土遺物を概観すると、16世紀末—17世紀前半と考えられ、Ⅲ—1 b 期に属する遺構である。

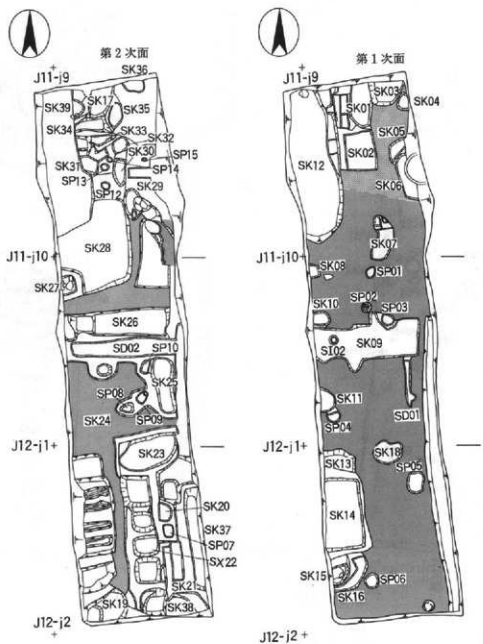
S K 54

S K 54は、東壁沿い北側に位置する(表1)。平面形は長方形を呈し、長さ3m、幅2m、深さ0.3mを測る。埋土は1層で、遺物が比較的まとまって出土した。

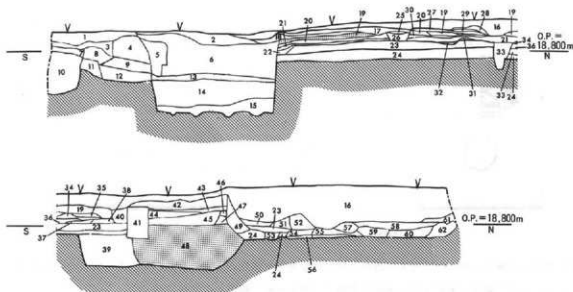
第132図—1は、土師質土器皿である。口径10cm、器高1.8cmを測る。底部と体部の境が明瞭で、口縁部が



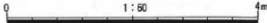
第128图 B-13区第4次面·3次面遗構全体图



第129图 B-13区第2次面・1次面遺構全体図



1. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
2. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4
3. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6
4. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
(遺物、焼土、炭化物、10~20cm大の礫多く含む)
5. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8
6. 黄褐色砂質土層10Y R5/3
7. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
8. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2
9. 褐色粘質土層10Y R4/4
(炭化物、焼土多く含む)
10. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
11. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4
12. 暗褐色粘質土層10Y R3/3
(炭化物、焼土多く含む)
13. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
(遺物、炭化物、焼土多く含む)
14. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2
15. におい黄褐色粘質土層10Y R6/4
16. 隈灰
17. 暗黄褐色砂質土層10Y R6/6
18. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
19. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
(炭化物多く含む)
20. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8
(炭化物、焼土多く含む)
21. 褐色粘質土層?・5 Y R4/6
22. 褐色砂質土層10Y R4/6
23. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
24. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
25. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4
26. 灰黄褐色砂質土層10Y R5/2
(炭化物、焼土多く含む)
27. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3
28. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
29. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8
30. 黄褐色砂質土層10Y R7/8
31. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
(炭化物多く含む)
32. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
(炭化物多く含む)
33. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6
34. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
35. 褐色粘質土層10Y R4/6
36. 黄色粘質土層 2・5 Y7/8
37. におい黄色粘質土層 2・5 Y6/4
38. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
39. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8
(炭化物多く含む)
40. におい黄色粘質土層 2・5 Y6/4
41. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4
42. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6
43. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
44. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
45. 暗灰色粘質土層 2・5 Y5/2
46. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
47. 暗褐色粘質土層10Y R3/4
48. 黒褐色粘質土層 2・5 Y3/1
49. 褐色粘質土層10Y R4/6
50. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
51. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
52. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
53. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6
54. 褐色粘質土層10Y R4/4
55. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
56. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8
57. 褐色粘質土層10Y R4/6
58. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y5/2
59. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3
60. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4
61. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4
62. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
(粘土混入)



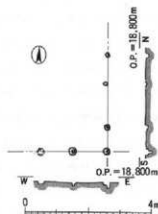
第130図 B-13区西壁土層図

内面に向いている。外面は指頭圧調整、体部内面はヨコナデ調整、底部内面はナデ調整がみられる。IT(伊丹町期)1型式A類に属する。2は、肥前磁器染付碗である。高台径3.8cmを測る。体部外面の文様は呉須の発色が良好で、草花文が描かれている。また、高台内「太明年製」の銘がみられる。大橋康二氏の編年(大橋1989年)IV期に属する。

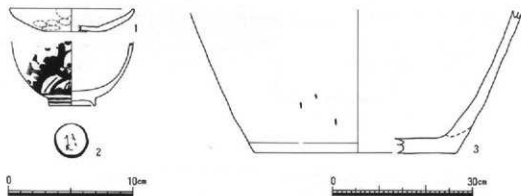
出土遺物を概観すると、17世紀末~18世紀前半と考えられ、III-2 a 期に属する遺構である。

SK26

SK26は、調査区ほぼ中央付近に位置する(表1・図版49)。平面形は長方形を呈し、長さ4 m、幅4.5 m、深さ0.88 mを測る。焼土処理土壌である。非



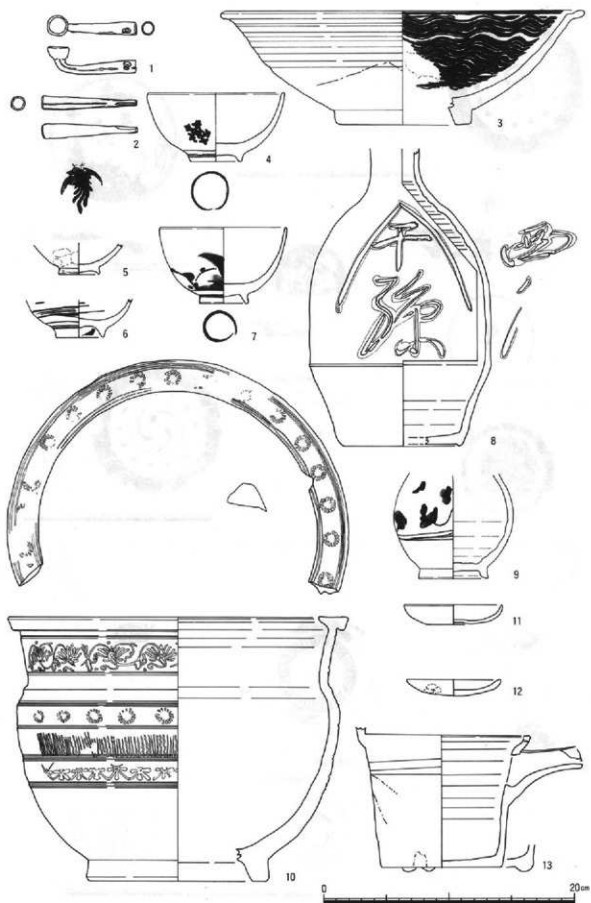
第131図 SB01遺構図



第132図 SK54 (1・2)・SK40 (3) 出土遺物

常に大きい土塊で、埋土には火災に遭ったために変色した遺物が多量に含まれており、火災の大きさをうかがえる。この土塊は、本来は第2次面の遺構で、覆土が厚く検出できなかった。

第133図一1・2は、銅製煙管である。1は、雁首部である。首部6.5cm、火皿部の直径1.6cmを測る。脂返しが大きく湾曲するタイプを「河骨形」というが(古泉弘1983年)、これは湾曲がやや弱い。古いタイプのものは、火皿部と首部の接合部に補強帯がみられるが、これにはみられない。また、薄板を丸めた時の接合痕もみられる。古泉弘氏の編年(古泉1983年)IV期に属する。2は、吸口部である。吸口長7.6cm、吸口部に直径1cmの穿孔を有する。肩部は無いタイプで、体部には接合痕がみられる。古泉弘氏の編年IV期に属する。3・6は、唐津系陶器刷毛目文である。3は、鉢である。口径28.4cm、器高9cm、高台径10.8cmを測る。内面全体に白色釉を流し掛けし、口縁部外面から体部中程まで鉄釉が掛けられている。また、見込み目砂目痕がみられる。6は、碗である。高台径3.1cmを測る。全体的に白色釉が掛けられている。高台畳付は露胎である。4・5・7・9は、肥前磁器である。4・7は、染付碗である。4は、口径10.8cm、器高5.5cm、高台径9cmを測る。見込み部に蛇ノ目輪ハギが施されている。体部外面の文様は、コンニャク印判による五弁花文がみられるが、呉須の発色が悪く黒味を帯びている。7は、口径10cm、器高6.1cm、高台径3.9cmを測る。体部外面に描かれている草花文は、呉須の発色がやや黒味を帯びているが、比較的良好である。また、高台畳付には、砂が付着している。5は、染付酒杯である。高台径3.2cmを測る。見込み部に描かれているのは、鳳凰文で、呉須の発色が鮮やかである。9は、染付花瓶である。高台径5.6cmを測る。外面体部には唐草文が描かれおり、内面と高台畳付は無釉である。10は、唐津系陶器三島手鉢である。口径27.3cm、器高20.6cm、高台径13.4cmを測る。外面体部及び口縁部上面の文様は、印判による除刻に白象嵌が施されている。3~7、9~10は、大橋康二氏の編年IV期に属する。8は、丹波焼徳利である。底径9.5cmを測る。外面は回転ヘラケズリ調整しており、胴部は下ぶくれ気味である。底部には胎土目が付着している。外面体部はヘラケズリにより文字が施されている。11・12は、土師質土器皿である。11は、口径7.9cm、器高1.6cmを測る。粘土円盤を手ずくね成形しており、外面体部は指頭圧調整、内面体部はヨコナデ調整が施されている。また、底部と体部の境が明瞭で、口縁部が内湾する。口縁部には、灯芯痕がみられ灯明皿として使用していたと考えられる。12は、口径7.5cm、器高1.4cmを測る。11と同様の調整痕が施されている。器形は、体部から口縁部にかけて緩やかに外側に傾いている。全体的に煤が付着しており、11と同様に灯明皿として使用していたと考えられる。11・12ともにI T (伊丹郷町期) 1型式A類に属する。13は、瀬戸・美濃焼鉄釉鉢子である。底径9.5cmを測る。全体的に鉄釉を掛け、外面体部には、白色釉を二度掛けしている。また、底部には脚が三足みられる。



第133图 SK26出土遺物



第134图 SK26 (1) · SK28 (2-7) · SK22 (8-10) · SK34 (11-14) 出土遗物

第134図一1は、左巻き三ツ巴文軒丸瓦である。瓦当部径15.2cm、文様区径10.6cm、内区径8.1cm、周縁幅2.2cmを測る。連珠数は16個を数える。周縁部は円周に沿ってナデ調整がみられ、ヘラによって面取りが施されている。瓦当部と丸瓦部の接合部は、内外面ともにナデ調整をおこなっている。

また、出土遺物が大量に出土したため、産地別・用途別構成比を作成した。産地別で一番多かったのは、肥前系であった。また、用途別をみると食器類が一番多く、食器類の肥前系の締める割合が大きいことがわかった。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。出土遺物の時代から考えて、享保14年(1729)の北少路村大火災の焼土処理土壌と思われる。III-2 a 期に属する遺構である。

4. 第2次面の遺構と遺物

第2次面は、礎石・礎石痕を検出できなかったが、地口から10.7mの範囲で三和土を検出し、この辺りまで建物があったと考えられる。また、北側の遺構は18世紀中頃～18世紀後半で、南側の遺構は19世紀前半～19世紀中頃と少し時期差があり、北側は南側より新しい面が中間に存在することがわかった。

S K 28

S K 28は、調査区中程に位置する(表1)。平面形は正方形を呈し、一辺2.4m、深さ0.85mを測る。この遺構は、焼土処理土壌で、位置的にも焼土処理土壌S K 26とやや重なり、同じ遺構と考えていたが、出土遺物や埋土から2回目の大火災の痕であることがわかった。

第134図一2～4は、肥前磁器である。2は、染付皿である。口径13.5cm、器高3.9cm、高台径8cmを測る。文様は、内面体部は草花文、見込み部にはコンニャク印判による五弁花文を施している。外面体部は連続唐草文、高台内には渦福の銘が描かれている。また、呉須の発色は悪く黒色を帯びている。高台畳付は露胎である。波佐見系のもと考えられる。3は、青磁染付碗である。口径12cm、器高6.7cm、高台径5cmを測る。内面口縁部に四方摩文、見込み部には河骨文を、高台内には渦福の銘が描かれている。高台畳付は無軸である。4は、染付端反り皿である。口径15.4cm、器高3.5cm、高台径9cmを測る。内面全体に山水文を描き、外面体部には山文を施している。高台は蛇ノ目凹形高台である。2～4は、大橋康二氏の編年IV期に属する。5・7は、土師質土器である。5は、焼塩釜の蓋である。口径7.8cm、器高2cmを測る。上面はナデ調整を施し、外面体部はヨコナデ調整がみられる。また、内面には布目痕がある。7は、焙烙である。口径31cmを測る。口縁部と底部の境が突出するタイプである。外面口縁部から内面体部までヨコナデ調整を施している。外面全体に煤が付着している。難波洋三氏の分類F類に属する。6は、左巻き三ツ巴文軒丸瓦である。全長(残)5cm、瓦当部径13.9cm、文様区径10.2cm、内区径6.9cm、周縁幅1.9cmを測る。連珠数は13個である。周縁部は円周に沿ってナデ調整、瓦当部と丸瓦部の接合部凹部には指頭圧調整がみられる。

出土遺物を概観すると、18世紀中頃～18世紀後半と考えられ、III-3 a 期に属する遺構である。

S K 22

S K 22は、調査区南側に位置する(表1・図版49)。平面形は不整形で、長辺3.7m以上、短辺1m以上を測る。埋め塼を据え付けていた跡が4カ所検出し、ここは入口に近いことから、商業用の作業場の可能性があり、粗屋や油屋ではないかと思われる。

第134図一8～10は、肥前磁器である。8は、白磁紅皿である。口径5.2cm、器高1.2cm、高台径1.55cmを測る。型押し成形で外面底部は無軸である。9は、染付碗である。高台径3cmを測る。呉須の発色が良好で、外面体部の文様は、青海波文が描かれている。焼離れ痕がみられ、高台畳付きは露胎である。10は、広東型

碗の染付蓋である。口径10cm、器高2.8cm、つまみ径5.4cmを測る。外面全体に唐草文が描かれている。8～10は、大橋康二氏の福年V期に属する。よって、18世紀末～19世紀初頭と考えられる。III-3 a 期に属する遺構である。

S K 34

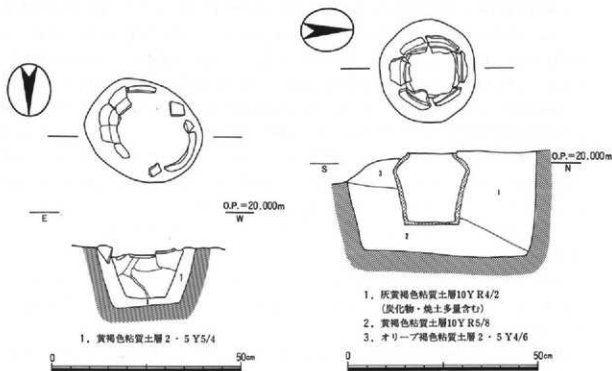
S K 34は、調査区北側に位置する(表1)。これは、調査区域外に延びており、遺構の全形は検出できなかった。長辺0.92m、短辺0.36m、深さ0.28mを測る。

第134図-11・12は、肥前磁器である。11は、蓋物の染付蓋である。口径10.2cm、器高4.1cm、つまみ径3cmを測る。外面には山水文、内面体部は四方禪文、内面中央には松竹梅文が描かれている。12は、染付仏飯具である。口径6.2cm、器高3cm、底径4.1cmを測る。外面体部には蜻蛉草文が描かれている。底部は無釉である。11・12ともに、大橋康二氏の福年V期に属する。13・14は、土師質土器である。13は、ミニチュア土製品の泥面子である。長辺3.5cm、短辺3.4cm、厚さ0.9cmを測る。型押し成形で、裏面には指頭圧痕がみられ、側面にはヘラケズリ調整が施されている。また、全体的に雲母がみられる。14は、乗燭である。口径7.25cm、器高3.7cm、底径4.1cmを測る。鉄軸が全体に掛けられている。中心に芯立ては、体部成形後、ハリツケシナア調整を施している。また、底部には、行灯や提灯、灯籠の底板に差し込むための穴がみられる。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀中頃と考えられ、III-3 b 期に属する遺構である。

5. 第1次面の遺構と遺物

第1次面では、間口から11.8mの範囲で三和土を検出した。また、それより奥は砂礫層を堅く敷きつめた三和土面となっており、地口が変わっていない間は間口2間半、奥行き6間の建物だったことが考えられる。中央付近西側と、南側入口沿いに胎衣壺が出土し、北部東壁沿いには、近年まで使用されていた井戸が存在することから、主屋建物の構造は、建物西側は座敷・奥座敷があり、東側が通り庭ではなかったかと考えら



第135図 S I 01遺構図

第136図 S I 02遺構図

れる。

S I 01

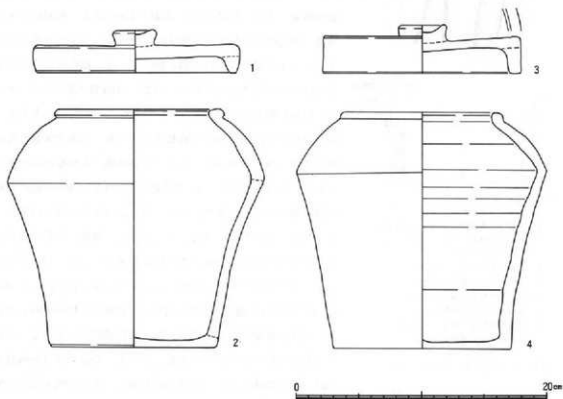
S I 01は、南壁沿い東側より検出した（第135図・図版49）。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.3m、深さ0.15mを測る。ここから出土した火消壺は、陶衣壺と考えられる。上述したように、他の出土例と合わせて考えると、東側が通り庭の可能性が高い（川口1989年一b）。

第137図一1は、土師質土器火消壺の蓋である。口径15.3cm、器高3.5cm、つまみ径3.1cmを測る。調整は、粘土円盤に、粘土紐輪積み成形し、外面体部から内面に回転ナデ調整を施している。体部上面にはハナレ砂が付着している。2は、火消壺である。口径13cm、器高19.1cm、底径13cmを測る。粘土円盤に粘土紐輪積み外型成形し、外面体部は回転ナデ調整を施し、別に粘土紐輪積み外型成形した肩部をハノツケし、内面まで回転ナデを施している。底部にはハナレ砂が付着している。川口宏海氏の編年（川口1989年一a）II-1期に属する。よって、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。III-3a期に属する遺構である。

S I 02

S I 02は、調査区中央やや西側より検出した（第136図・図版49）。掘形の平面形は円形を呈し、直径0.2m、深さ0.22mを測る。これもS I 01と同様で、陶衣壺遺構と考えられる。S I 01の出土状況と合わせて考えると、座敷下に埋められていたと思われる。

第137図一3は、土師質土器火消壺の蓋である。口径15.7cm、器高3.85cm、つまみ径3.5cmを測る。S I 01とはほぼ同タイプである。上面端に沈線を施している。4は、火消壺である。口径12cm、器高19cm、底径14cmを測る。これもほぼS I 01と同タイプを呈し、口縁部先は面取りを施している。川口宏海氏の編年II-1期に属する。よって、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。III-3a期に属する遺構である。

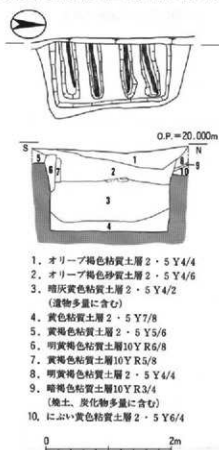


第137図 S I 01 (1・2)・S I 02 (3・4) 出土遺物

SX14

SX14は、西壁沿いや南側に位置する(第138図)。平面形は長方形を呈し、長さ1.8m、幅1m、深さ1.4mを測る。底部に木が敷かれてあった。また、現地表面から0.7mまで、砂で埋めもどされており、地下室ではなかったかと思われる。

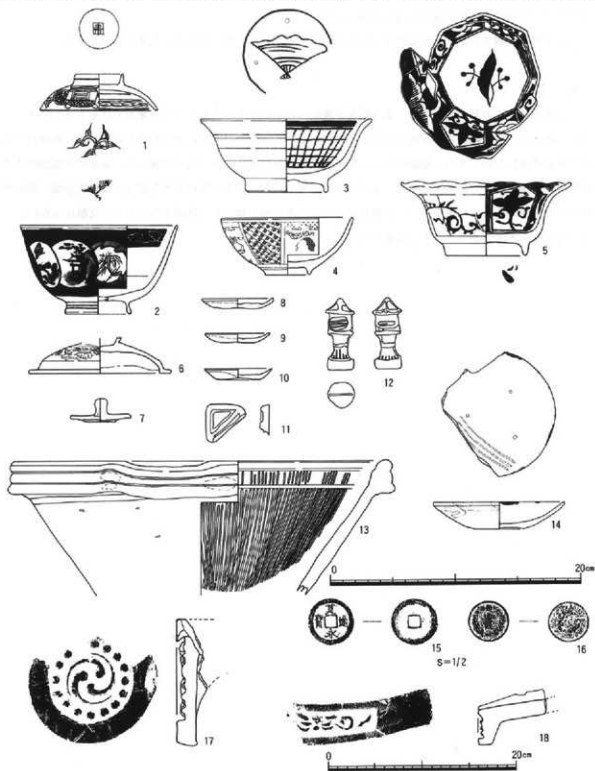
第139図—1～5は、肥前磁器である。1は、蓋物の染付蓋である。口径9.4cm、器高2.9cm、つまみ径3.9cmを測る。呉須の発色は良いが、透明釉はやや白濁している。外面体部には御所単文、菊文・唐草文が描かれ、内面口縁部は渦文、内面体部には唐草文がみられる。つまみ内には「青」の銘がみられる。2・3は、染付端反型碗である。2は、口径12.5cm、器高7.1cm、高台径5.3cmを測る。呉須の発色が良好で濃い。外面体部の文様は、丸文が描かれ、丸文の中には鶴文・山水文や、竹文・千鳥文がみられる。口縁部内面に墨弾きによる波濤文が描かれている。高台畳付は露胎である。3は、口径13.8cm、器高6.4cm、高台径5.4cmを測る。呉須の発色は悪く淡い。内面体部に格子文、見込みに扇文が描かれている。また、高台は蛇ノ目凹形高台で、見込みに足付キハマの痕がみられる。4は、色絵碗である。口径10.4cm、器高4.6cm、高台径3.6cmを測る。外面体部の模様は、曜弧文・網目文が描かれている。高台畳付は露胎である。5は、染付輪花鉢である。口径13.6cm、器高5.8cm、高台径6.2cmを測る。文様は、内面体部は区画割り草花文、見込みに草文、外面体部には連続唐草文が描かれている。高台畳付は露胎である。1～5は、大饒康二氏の編年V期に属する。6・14は、伊賀・信楽焼である。6は、土鍋蓋である。口径11.4cmを測る。外面はトビカンナを施し、さらに、ほぼ全体に鉄釉を掛け、白土のいっちゃん掛けによって草花文を描いている。また、一部に緑釉がみられる。14は、灯明皿である。口径10.4cm、器高2.2cm、底径4cmを測る。外面口縁部から内面にかけて灰釉が掛けられている。見込みに3本単位の櫛目と3カ所のピン痕が認められる。また、口縁部内外面に灯芯痕がみられる。7は、軟質陶器蓋である。口径3.1cm、器高3.1cmを測る。外面はつまみと体部の接合部に回転ナデを施すが、内面はヘラケズリ痕を残す。また、つまみの一部に灰釉を掛けている。器形からみて急須の蓋ではないかと考えられる。8～12は、土師質土器である。8～10は、棹軸灯明皿である。8は、口径5.6cm、器高0.7cmを測る。外面口縁部から内面にかけて施釉されている。内面の体部と底部の境に溝状の落込みがある。また、外面底部に左回転糸切り痕がみられる。9は、口径5.2cm、器高0.7cmを測る。外面底部に左回転糸切り痕がみられ、無軸である。内外面口縁部に煤が付着している。10は、口径5.4cm、器高0.7cmを測る。施釉の状態や器形調整は8と同様である。内面全体に煤が付着している。11・12は、ミニチュア土製品である。11は、泥面子である。長さ3.1cm、幅3.1cm、厚さ0.7cmを測る。型押し成形で、表面には指頭瓦痕がみられる。12は、灯籠である。器高5.7cm、最大幅2.5cmを測る。型合わせで合わせ目をヘラケズリ調整している。全面に雲母が残存する。13は、堺焼指鉢である。口径30cmを測る。胎土は明赤褐色5YR6/6を呈す。ロクロの回転は右回転である。内面体部の櫛目は9本単位である。口縁部外縁帯は、外へやや大きく張り出し断面が三



1. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
2. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
3. 暗灰色粘質土層 2・5 Y4/2
(遺物多量に含む)
4. 黄色粘質土層 2・5 Y7/8
5. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
6. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/8
7. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/8
8. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y4/4
9. 暗褐色粘質土層 10 Y R 3/4
(粘土、炭化物多量に含む)
10. におい黄色粘質土層 2・5 Y6/4

第138図 SX14遺構図

角形に近い。また、沈線も2本で表現している。外面体部の回転ヘラケズリは、口縁部外縁帯や下まで施している。白神典之氏の分類（白神1990年）Ⅲ類に属する。15・16は、銭貨である。15は、寛永通寶である。直径2.5cm、厚さ0.2cmを測る。新寛永通寶で背文はみられない。16は、半銭銅貨である。直径2.2cm、厚さ0.15cmを測る。この銭貨は、明治39年に大阪造幣局で発行されたものである。しかし、この半銭は、明治40年以降には、小型化している。これは小型化される前のものである。また、この銭貨は、他の遺物と時代観が違



第139図 SX14出土遺物

うので混入と思われる。17は、左巻き三ツ巴文軒九瓦である。瓦当部径13.5cm、内区径7.5cm、周縁幅2.2cmを測る。周縁部の調整は、周縁に沿ってヨコナデ調整を施している。連珠数は16個である。18は、均整唐草文軒平瓦である。全長(残)7cm、上周縁幅0.7cm、下周縁幅0.7cm、右周縁幅5.8cm、文様区厚2.2cmを測り、顎上部厚2.4cm、顎下部厚1.5cmである。瓦当周縁部はヨコナデ調整、顎部はナデ調整、平瓦部凸面はヨコナデ調整で、平瓦部凹面は未調整である。その他に、10種類の貝類が出土し、中には陸産のマルタニシが出土するなど、当時の食生活を知る好資料を得られた。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀中頃と考えられ、III-3b期に属する遺構である。

6. まとめ

このように、このB-13区では、調査範囲が狭かったが、いろいろな大きな成果をあげることができた。まず、第1に、17世紀前半の建物の変遷を得られたことは、伊丹郷町の町屋の変遷を知るうえで好資料であることは間違いない。また、建物においても、胎衣壺や地口近くに出土した埋甕など、部屋の内部構造を想定でき、今後につながる効果を得た。また、享保14年(1729)の北少路村大火災痕と、18世紀中頃～18世紀後半頃の2回の火災痕を検出した。2回目の火災は、その他の地区でも検出されており、文献にはないが、この付近で大火災が遭ったことは間違いないだろう。

第8節 第51次調査D-2区

D-2区は、猪名野神社参道沿いの東側に位置する。「元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町絵図」(第212図)には、屋敷主庄右衛門、住人は日用人長兵衛、その裏に、日用人弥兵衛・糸引人の助衛門の後家、さらにその裏に日用人八兵衛が居住していた部分に当たると考えられる。また、「天保十五年(1844)の伊丹郷町分間絵図」によると、昆陽口村と北少路村の一部と思われる地点である。

また、今回の調査地区は調査面積が狭いため、中央の屋敷境溝を挟み、西側をD-2区、東側をD-2-2区として調査した。

1. 基本層序

遺構面は4面検出した。地山直上にオリブ褐色粘質土層(第141図第69層現地表面より100cm下)、その上層に、D-2区の第3次遺構面層(第141図第22層現地表面より40cm下)が堆積し、東側では、D-2-2区の第3次遺構面層(第141図第74層現地表面より40cm下)がみられる。またそれらの直上層に、第2次遺構面層(第141図第41・79層現地表面より30~40cm下)、さらにその上に、整地層(第141図・第47・84層現地表面より10~20cm下)を検出した。その上層に、第1次面の三和土層(第141図第19・81層現地表面より5cm下)が堆積していた。調査面積は240m²である。

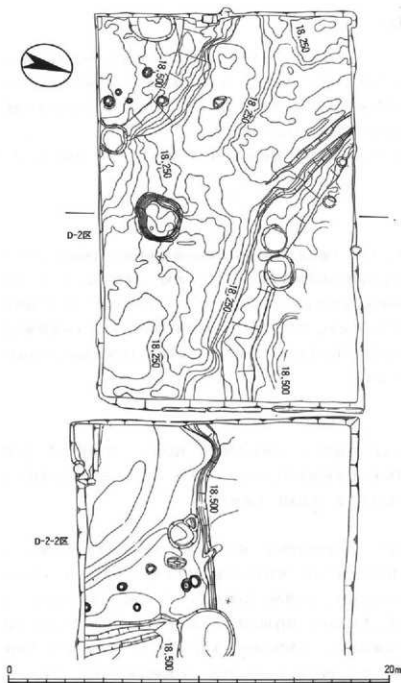
2. 第4次面の遺構と遺物

第4次面では、柱穴群(S P430~434)を検出した。これらの埋土が一律にオリブ色砂質土で、この埋土は、まわりの調査結果から、16世紀末~17世紀後半のものとなっており、これらもそのころの遺構と考えられる。また、道路に沿って16世紀後半の溝(S D401)を検出した。

S D401

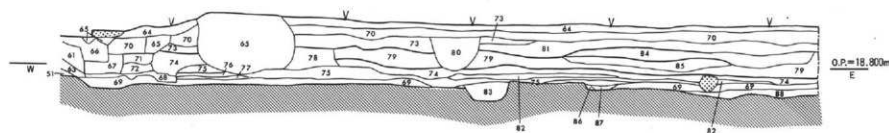
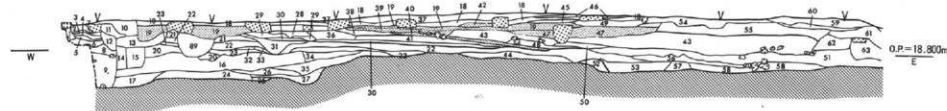
S D401は、調査区中央付近で検出した(第140図・図版55)。検出長13m、幅1.8m、深さ0.6mを測る。この溝は、北側の調査区D-6区(S D202)、D-4区(S D301)に続く溝である。この溝は、D-6区では幅0.6mであるが、D-4区では幅1.6mとなり、この調査区では幅が広がって、北西から南東に斜行し、南東部はD-2-2区からまだ南部に続くと思われる。耕作用の溝か?と思われるが、17世紀代には埋められている。また、溝の幅が広がった北側肩部から、土師質土器を多量に出土した。土師質土器は、当時儀礼で使い捨てられることが多く、これもその一例と考えられる。ただ、この地域は城下町にあっており、町人との間の出来事であることが注目される。

第143図一1~3は、中国製品である。1は、青花碗である。口径12cmを測る。体部は非常に薄手で、体部の張りがやや強い。呉須の発色は鮮明で梅鶯文が丁寧に描かれている。景德鎮窯の製品である。2は、端反型皿である。口径12.9cm、器高2.85cm、高台径7.5cmを測る。外面に唐草文が描かれ、見込みに文様が見られる。高台畳付は露胎である。小野正敏氏の分類(小野1982年)染付皿B1群VI類に属する。3は、白磁端反型皿である。口径11.8cm、器高2.8cm、高台径6.4cmを測る。これは、第27次調査S F02で法量分類A類に属する(川口1992年)。4は、丹波焼播鉢である。小片で観察は難しいが、口縁部に軽クナア調整を施している。5は、須恵器である。内面には同心円文、外面には縦方向に刷毛目文がみられる。器形は甕と思われる。6は、中須恵器である。魚住窯のコネ鉢か。底径11.8cmを測る。外面体部は、軽クヨコナア調整し、内面体部はナア調整を施し、底部と体部の境に指頭瓦痕がみられる。外面底部は平垣だが内面が凹んでいるので



第140図 S D401遺構図

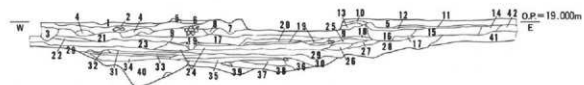
高台風にみえ、右回転糸切り痕がある。7～12は、土師質土器皿である。すべて手ずくね成形である。7は、口径7.8cm、器高1.6cmを測る。胎土は灰白色2.5Y8/3を呈し、器高は低く、口縁部は内弯する。調整は、内面はヨコナデ調整、外面には指頭圧調整を施している。AR（有岡城期）・2型式A類に属する。8は、口径9cm、器高2cmを測る。胎土は浅黄橙色10Y R8/3を呈し、口縁部は直線的に伸びる。調整は、内面は右回転のメキナデ調整、外面は指頭圧調整を施している。これも灯芯痕がみられる。AR（有岡城期）・1型式B類に属する。9は、口径7.8cm、器高1.9cmを測る。胎土は灰白色2.5Y8/3を呈し、器高は低く、口縁部は直線的に伸び、内面底部が盛り上がっている、ヘそ皿である。調整は、内面体部は丁寧にヨコナデ調整、外面体部は軽くヨコナデ調整を施している。また、口縁部に灯芯痕があることから灯明皿として使用していたと思われる。AR（有岡城期）・2型式A類に属する。10は、口径11.6cm、器高2cmを測る。胎土は浅黄橙色10Y R8/3を呈し、口縁部が直線的に伸びるタイプのものである。調整は内面はヨコナデ調整、外面に指頭圧調整を施している。AR（有岡城期）・1型式B類に属する。11は、口径9.2cm、器高2cmを測る。胎土はふい黄橙色10Y R7/3を呈し、口縁部は直線的に伸びるが、やや張りがある。口縁部内外面は丁寧にヨコナデ調整がみられ、外面は指頭圧調整を施している。AR（有岡城期）・1型式A類である。12は、口径12.5cmを測る。胎土は浅黄橙色10Y R8/3を呈し、底部と体部の境が明瞭で、口縁部は直線的に伸びている。調整は、内面はナデ調整、外面口縁部はヨコナデ調整を施し、外面底部には指頭圧調整がみられる。AR（有岡城期）・1型式C類に属する。そのほかに、ここでは多量の土師質土器皿が出土しこれを型式分類した（本書第4章第5節を参照）。その結果、AR（有岡城期）・2型式B類へそタイプとAR（有



1. 黄褐色砂質土層10Y R5/6
2. におい黄褐色砂質土層10Y R6/4
3. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4
4. におい黄褐色砂質土層10Y R6/4
5. におい黄褐色砂質土層10Y R7/3
6. 黄褐色砂質土層2・5 Y3/2
7. 暗灰色砂質土層2・5 Y5/2
8. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4
(7cm大の礫多量を含む)
9. 褐色砂質土層10Y R4/4
10. におい黄褐色砂質土層2・5 Y6/3
11. 浅黄褐色砂質土層2・5 Y7/4
12. におい黄褐色砂質土層10Y R6/4
13. におい黄褐色砂質土層2・5 Y6/4
14. 黄褐色砂質土層10Y R5/6
15. におい黄褐色砂質土層10Y R6/4
16. 褐色砂質土層10Y R4/6
17. 黄褐色砂質土層10Y R5/6
18. 黒色砂質土層N1.5/0
19. 黒褐色粘質土層10Y3/1
(粘土多量を含む)
20. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6
21. におい黄褐色砂質土層10Y R6/4
22. 暗灰色粘質土層2・5 Y4/2
オリーブ色粘質土層5 Y5/4
23. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4
(7cm大の礫多量を含む)
24. 褐色砂質土層10Y R4/6
25. 褐色砂質土層7・5 Y R4/4
26. 暗灰色粘質土層2・5 Y4/1
27. 暗灰色粘質土層2・5 Y6/2
28. 明黄褐色粘土層10Y R5/8
におい黄褐色砂質土層10Y R4/3
29. 黒褐色砂質土層10Y R2/2
30. 暗褐色粘土層7・5 Y R5/8
31. 黄褐色砂質土層10Y R5/8
32. 暗灰色粘質土層2・5 Y4/2
33. 褐色粘土層10Y R4/6
34. 黄褐色砂質土層10Y R5/6
35. 暗灰色粘質土層2・5 Y6/2
36. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6
37. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4
38. におい黄褐色砂質土層2・5 Y6/4
39. におい黄褐色砂質土層2・5 Y6/4
40. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
41. 黒褐色粘土層10Y R2/1
42. 暗褐色粘土層10Y R4/3
(粘土多量を含む)
43. 黄褐色砂質土層7・5 Y R3/1
44. 黒褐色砂質土層10Y R3/2
45. 暗褐色粘土層7・5 Y4/1
(粘土多量を含む)
46. 暗褐色粘土層10Y R3/3
47. 暗灰色粘質土層10Y R4/3
(粘土多量を含む)
48. オリーブ色砂質土層5 Y5/4
49. オリーブ黒色砂質土層5 Y3/1
50. 浅黄褐色粘質土層2・5 Y7/4
51. 灰色砂層5 Y4/1
52. 暗オリーブ褐色砂質土層2・5 Y3/3
53. 黄褐色粘土層7・5 Y R4/6
54. 灰色粘土層5 Y4/1
55. 黄褐色粘土層2・5 Y4/1
56. におい黄褐色粘土層10Y R4/3
57. 暗灰色粘質土層10Y R4/3
58. 暗灰色粘質土層2・5 Y4/1
59. 暗灰色粘質土層2・5 Y3/3
60. 灰白色灰層N8/0
61. 灰オリーブ色砂質土層5 Y4/2
62. オリーブ黄褐色粘土層5 Y6/4
63. 暗灰色粘質土層2・5 Y5/2
64. 灰土
65. 堆土
66. 暗オリーブ灰色粘質土層2・5 Y4/1
67. 灰オリーブ色砂質土層7・5 Y4/2
68. 灰色粘土層10Y5/1
69. オリーブ粘土層5 Y5/4
70. オリーブ黒色砂質土層10Y3/1
71. 暗緑灰色砂質土層7・5 G Y3/1
72. 暗オリーブ灰色粘質土層5 G Y4/1
73. 灰オリーブ色砂質土層7・5 Y4/2
74. オリーブ黒色砂質土層10Y3/2
(1-5cm大の礫多量を含む)
75. 暗緑灰色粘土層10G Y3/1
76. 暗緑灰色粘土層7・5 G Y4/1
77. オリーブ粘土層2・5 Y4/3
78. 灰色粘土層5 Y4/1
79. オリーブ黒色砂質土層7・5 Y3/2
80. 暗オリーブ色砂質土層2・5 Y4/3
(5-10cmの礫多量を含む)
81. 暗オリーブ色砂質土層5 Y3/3
82. 暗オリーブ灰色粘質土層2・5 G Y3/1
83. 褐色粘土層10Y R4/4
84. オリーブ黒色砂質土層7・5 Y3/1
85. 暗灰色粘質土層2・5 Y4/2
86. 暗灰色粘質土層5 Y4/4
87. 赤褐色粘土層5 Y R4/8
88. 暗灰色粘質土層2・5 Y4/2
89. 暗灰色粘質土層N3/0
(灰化物多量を含む)
90. 黄褐色粘土層10Y R5/6
91. 暗灰色砂質土層2・5 Y4/1
92. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/3
93. 黒褐色砂質土層2・5 Y3/2

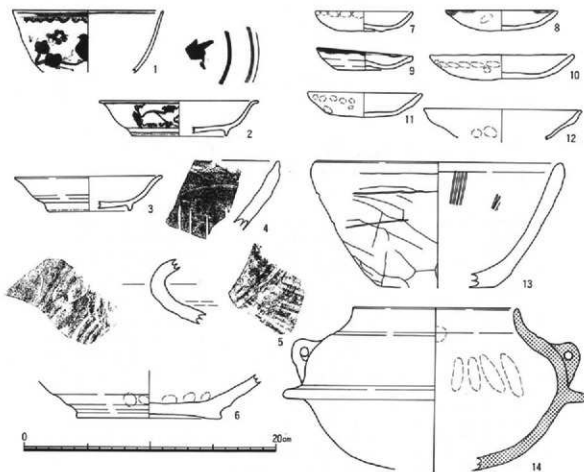


第141図 D-2区・D-2-2区北断土層図

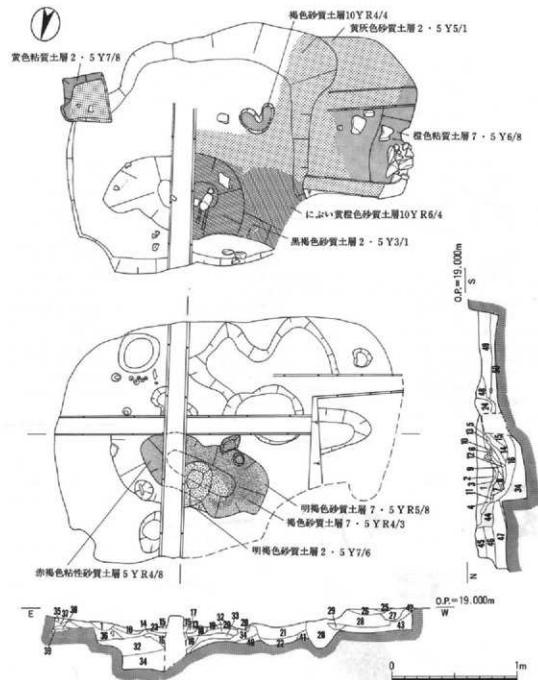


- | | | |
|---|--------------------------|---|
| 1. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3 | 15. 黒褐色砂質土層 10 Y R3/2 | 29. 暗灰色砂質土層 2・5 Y4/2 |
| 2. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2
(炭化物を多く含む) | 16. 灰黄褐色砂質土層 10 Y R4/2 | 30. 暗灰色粘土層 2・5 Y4/2 |
| 3. 暗灰色砂質土層 2・5 Y5/2 | 17. 褐色粘土層 10 Y R4/6 | 31. 褐色粘土層 7・5 Y R4/6
にふく黄褐色粘質土層 10 Y R4/3 |
| 4. 暗灰色砂質土層 2・5 Y4/2 | 18. 暗褐色砂質土層 10 Y R3/4 | 32. 褐色粘土層 10 Y R4/6 |
| 5. 黄褐色砂質土層 10 Y R5/6 | 19. 黒褐色砂質土層 7・5 Y R3/2 | 33. 灰黄褐色粘土層 10 Y R4/2 |
| 6. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3
(2~4cmの礫多く含む) | 20. 褐色砂質土層 7・5 Y R4/6 | 34. 暗褐色砂質土層 7・5 Y R5/6
にふく黄褐色砂質層 10 Y R5/3 |
| 7. 褐色粘土層 10 Y R4/6 | 21. 灰褐色砂質土層 2・5 Y4/3 | 35. 黄褐色粘土層 10 Y R5/6 |
| 8. オリーブ褐色砂質土層 10 Y R4/6 | 22. 灰粘質土層 5 Y4/1 | 36. 黒褐色砂質土層 10 Y R3/4
にふく黄褐色砂質土層 10 Y R5/4 |
| 9. 黄褐色粘土層 10 Y R5/8 | 23. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3 | 37. にふく黄褐色粘土層 10 Y R5/4 |
| 10. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/1 | 24. 灰黄褐色粘土層 10 Y R4/2 | 38. 明褐色粘土層 7・5 Y R5/8 |
| 11. 灰白色砂質土層 10 Y R3/1 | 25. にふく黄褐色粘土層 10 Y R4/3 | 39. 明褐色粘土層 7・5 Y R5/6 |
| 12. 暗褐色砂質土層 10 Y R3/3 | 26. 褐色砂質土層 10 Y R4/4 | 40. 褐色粘土層 10 Y R4/6 |
| 13. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6 | 27. 明褐色粘土層 7・5 Y R5/8 | 41. 褐色土層 10 Y R4/6 |
| 14. 明黄褐色土層 10 Y R6/8 | 28. 褐色砂層 10 Y R4/4 | 42. 灰黄褐色砂質土層 10 Y R5/2 |
| 15. 褐色砂質土層 10 Y R4/4 | 28. にふく黄褐色砂質土層 10 Y R4/3 | |
| 16. 褐色粘質土層 10 Y R4/4 | | |

第142図 S D401土層図



第143図 S D401出土遺物



- | | | |
|-------------------------|-------------------------|------------------------|
| 1. 黄褐色砂質土層10Y R5/6 | 18. 褐色砂質土層10Y R4/6 (地土) | 34. 明褐色粘質土層7・5 Y R5/8 |
| 2. 灰色灰層5 Y4/1 | 19. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4 | 35. 黄褐色砂質土層10Y R5/8 |
| 3. 灰黄色灰層2・5 Y6/2 | 20. 黒褐色砂質土層10Y R2/2 | 36. 褐色粘質土層10Y R4/4 |
| 4. 暗灰黄色灰層2・5 Y4/2 | 21. 黒褐色砂質土層7・5 Y R3/1 | 37. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/4 |
| 5. 暗灰黄色灰層2・5 Y4/2 | 22. 黒褐色砂質土層5 Y R2/1 | 38. におい黄褐色10Y R5/4 |
| 6. 明黄褐色砂層2・5 Y6/8 | (鉄分が多く含まれ) | 39. 黄褐色粘質土層10Y R5/6 |
| 7. 灰褐色砂層7・5 Y R5/2 | 23. 黒色砂質土層7・5 Y R2/1 | 40. 褐色粘質土層7・5 Y R4/6 |
| 8. 黒色砂層10Y R1/7/1 | 24. 黒色砂質土層10Y R2/1 | 41. 褐色粘質土層7・5 Y R4/4 |
| (鉄粒状のものを多く含む) | 25. 暗黄褐色砂質土層2・5 Y5/2 | 42. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3 |
| 9. 暗褐色砂層7・5 Y R3/4 | 26. 黄褐色砂質土層10Y R5/6 | 43. オリブ褐色粘質土層2・5 Y4/4 |
| 10. 褐色砂質土層10Y R6/1 | 27. 明赤褐色砂質土層5 Y R5/8 | 44. におい黄褐色砂質土層10Y R5/4 |
| 11. 暗褐色砂質土層10Y R3/3 | 28. 黒褐色砂質土層5 Y R3/1 | 45. におい黄褐色砂質土層10Y R5/3 |
| 12. 暗灰色砂質土層10Y R5/1 | 29. 黒褐色砂質土層5 Y R3/1 | 46. 暗褐色砂質土層10Y R3/3 |
| 13. におい黄褐色砂質土層10Y R4/3 | 30. 褐色粘土層10Y R4/6 | 47. 黒褐色砂質土層10Y R2/3 |
| 14. 暗黒色砂質土層2・5 Y R1.7/1 | 31. 暗灰黄色粘質土層2・5 Y4/2 | 48. オリブ褐色砂質土層2・5 Y4/4 |
| 15. 黒褐色砂質土層10Y R2/3 | 32. 褐色粘質土層7・5 Y R4/4 | 49. 褐色砂質土層10Y R4/4 |
| 16. 赤褐色粘質砂質土層5 Y R4/8 | 33. 暗褐色粘土層10Y R3/4 | 50. 褐色粘質土層7・5 Y R4/6 |
| 17. 黒褐色砂質土層7・5 Y R2/2 | 黄褐色粘質土層2・5 Y R5/3 | |

第144図 SX302遺構図

岡城期) 2 型式 C 類が多いことがわかった。13は、土師質土器燗鉢である。口径19.6cm、器高9.9cm、底径9cmを測る。成形は粘土紐輪積み成形で、外面はヘラケズリ調整、内面はナデ調整を施している。内面の指目は使用のためわずかにしか残っていない。14は、瓦質土器茶釜である。口径13cmを測る。成形は、粘土紐輪積み成形。その後、鈔部をハリツケし、口縁部内外面はヨコナデ調整、鈔上部から外面口縁部にはヘラミカギ調整を施している。鈔部下より底部は未調整である。内面の指頭圧は、鈔部ハリツケの際に付けられたと思われる。肩部にみられる耳部は、ハリツケで、穿孔は棒を刺している。外面底部には煤が付着している。そのほか、動物遺体が出土した。中型犬で、種類は雄の柴犬である(大阪府立弥生文化博物館の宮崎寿史氏の御教示による)。死後溝に埋まったと思われる。

一部古い時期のものもあるが、16世紀後半と考えられる。II期に属する。

3. 第3次面の遺構と遺物

第3次面では第4次面で検出した溝SD401はなくなり、西側塔名野神社参道側から6mの付近まで、柱穴痕が集中していた。これらの柱穴の内SP316は、唐津焼胎土皿や丹波焼燗鉢などが出土し、17世紀前半の時代観と思われ、その他も柱穴の年代もその頃である。建物を復元できなかったが、それらの東側では井戸SE301を検出したことから建物の存在があると思われる。主に、17世紀代の遺構が検出した。

S X 302

S X 302は、調査区南西隅に位置する(第144図・図版55)。炉遺構である。長さ2.7m、幅1.95mの長方形状内で炉遺構を検出した。遺構の残存状態が悪かったが、断ち切りの際底部を確認できた。焼成室の大きさは長さ0.9m、深さ0.22mを測る。底部には厚さ8cm程の赤色に塗した粘土(第144図第16層)が敷かれており、さらに、その上層に硬くしまった黒色の鉄粉が堆積していた(第144図第8・22層)。また、この炉から出たと思われる鉄滓が、第4次面で検出したSD401の上面から出土した。何を制作していたかはわからないが、角釘片が一点出土した。この遺構の東側から、フイゴの羽口が数個出土しており、小鍛冶関係の遺構と考えられる。遺物が少量しか出土しなかったが、切り合いの遺構の年代観から、III-1 b 期に属すると考えられる。

SE301

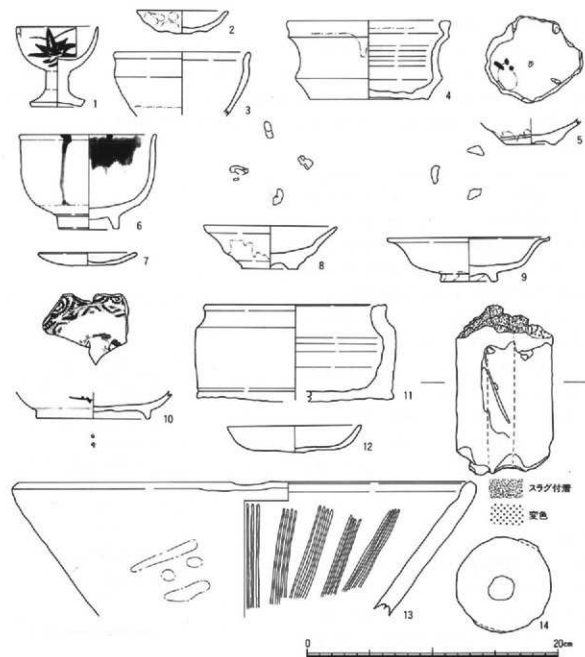
SE301は、調査区中央東側に位置する(第145図・図版55)。平面形は不整形を呈し、長径1.32m、深さ5.1mを測る。茶振りの井戸である。掘土は15層である。そのうちの第3・4・8層は焼土層である。出土遺物もほとんどは、これらの土層から出土した。また、湧水層は確認できなかった。



第145図 SE301遺構図

第146図—1は、肥前磁器染付仏飯具である。口径6.5cm、器高6.4cm、底径4cmを測る。外面の文様は紅葉文が描かれている。底部は無軸である。大橋康二氏の編年（大橋1989年）Ⅲ期に属する。2は、土師質土器皿である。口径7.3cm、器高1.8cmを測る。胎土は象牙色2.5Y9/2を呈し、口縁部は直線に伸びるが、体部に張りがある。手すくね成形で、外面調整は指頭圧調整、内面はヨコナデ調整を施している。口縁部に灯芯痕がある。3は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。口径11cmを測る。小片で観察しにくいのが、内外面に鉄釉が掛けられている。藤澤良祐氏の大窯編年（藤澤1986年）3期に属する。4は、丹波焼鉢である。口径12.8cm、器高6.3cm、底径9.4cmを測る。外面口縁部に施釉が掛けられている。このタイプの鉢は、火入れとして使われていたと考えられており、これもその様に使用していたと思われる。

また、この井戸からは、多量のシジミが出土した。出土したシジミは、ヤマトシジミ・マシジミの2種類



第146図 SE301 (1~4)・SD301 (5~7)・SD303 (9~14) 出土遺物

で、おそらく、伊丹近郊の川で採集していたと思われる(赤松1996年)。当時の住人の食生活を示す好資料である。

出土遺物を概観すると、1部古いものもあるが、17世紀後半～18世紀初頭まで使用していたと考えられる。Ⅲ-2 a 期に属する遺構である。

S D301

S D301は、調査区南側中央付近に位置する(表1)。長さ6.3m以上、幅0.8m、深さ0.07mを測る。浅い溝状遺構として掘削したが包含層と考えられる。

第146図-5は、唐津焼碗である。高台径3.9cmを測る。内面から高台部付近まで石灰釉が掛けられている。底部は無釉である。大橋康二氏の編年Ⅱ-1期に属する。6は、豊前高取焼碗である。口径11cm、器高7.5cm、高台径4.8cmを測る。器高が高く、高台胎部は張り強い。また、口縁部は外側へ反っている。内面は黒色釉が掛けられ、口縁部から外面は霏灰釉が施されている。高台は無釉である。高取焼は、福岡県の豊取山の麓に、慶長5年(1600)に築窯し、その後窯場の移転を繰り返したが、藩窯として続いた。また、遠州好みの七窯の一つにあげられている。7は、土師質土器皿である。口径8cm、器高1cmを測る。口縁部が直線的に伸び、器高が低いタイプのものである。I T(伊丹郷町期)・1型式A類に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀前半と考えられ、Ⅲ-1 b 期に属する遺構である。

S D303

S D303は、S D301の北側に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ3.84m以上、幅2.54m、深さ0.45mを測る。第2次面で検出したS D202の下面に位置する。これも包含層と思われる。

第146図-8～9は、唐津焼皿である。8は、胎土目皿である。口径10.8cm、器高3.4cm、高台径4.4cmを測る。体部下部は厚みがあり、口縁部が直線的に伸びるタイプのものである。内面から外面体部にかけて灰釉が掛けられている。9は、溝線皿である。口径13cm、器高3.5cm、高台径4.6cmを測る。内面から高台部上まで灰釉が掛けられている。8は、大橋康二氏の編年Ⅰ期、9はⅡ-1期に属する。10は、肥前磁器染付皿である。底径9cmを測る。高台は蛇ノ目形高台を呈し、「富貴長春」の銘がみられる。また、見込みに草花文、内面体部には胡唐草文を描き、外面体部には唐草文がみられる。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。これはその他の出土遺物より少し新しいため、上面遺構の混入と思われる。11は、備前焼鉢である。口径14.4cm、器高7.7cm、底径15.6cmを測る。全体的に重みがあり、丁寧に作られている。12は、土師質土器皿である。口径10.6cm、器高2.1cmを測る。口縁部と底部の境がはっきりし、器厚は薄い。手ずくね成形で、内面口縁部はヨコナデ調整を施しているが、外面は未調整である。全体的に煤が付着している。I T(伊丹郷町期)・2型式A類に属する。13は、丹波焼罍鉢である。口径36cmを測る。口縁部と体部が直角になすタイプで、外面体部は、軽くナデ調整を施し、ユビオサエ痕がみられる。内面の罍目は4本単位である。大平茂氏の編年Ⅰ期に属する。14は、フイゴの羽口である。全長(残)13.5cm、幅7.5cmを測る。外面の調整はナデ調整、中央にある孔形は、直線的である。胎土中の砂礫の量が非常に多い。砂礫が混入されているのは、先端部の耐火性を上げるために意図的になされたものであり、小鍛冶の羽口の特徴と考える(伊藤1992年)。

出土遺物を概観すると、17世紀前半～17世紀後半と考えられる。Ⅲ-1 b 期に属する遺構である。

4. 第2次面の遺構と遺物

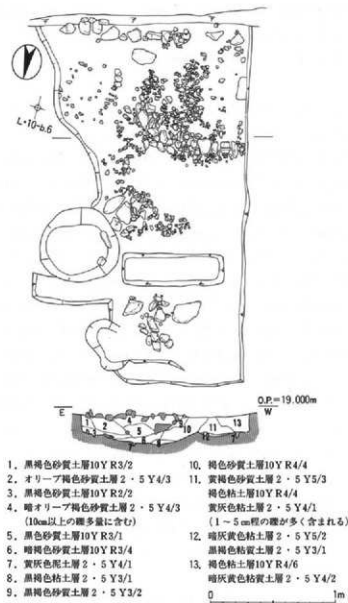
第2次面は、建物に直接むすびつく遺構は検出できなかった。調査区東側で便槽桶(D-2-2区S U207)を検出し、北側でも便槽桶(D-2-2区S U306)を出土した。さらに、東側では池状遺構や廃棄土壌を検

出したことから、間口より6mのところまでの規模の建物が建っていたと想定できる。また、調査区中央で黄灰色砂や、礫を敷きつめ、硬くしめた通り底SX411を検出した。これは、1次面で検出した建物に伴うものである。

S X 201

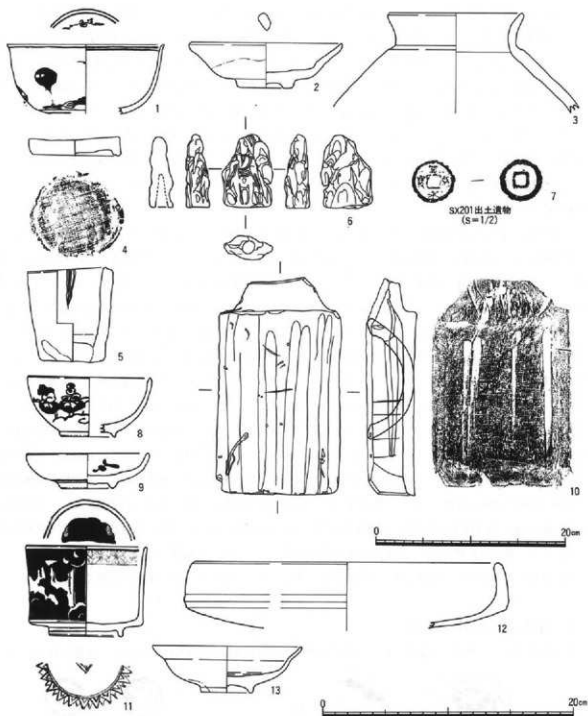
S D 201は、調査区北東隅に位置する(第147図・図版55)。平面形は不整形を呈し、長さ5.88m、幅3.1m、深さ0.45mを測る。遺構の周りを、長さ30cm、幅20cm程石を2段積みし、これら内の底部には、5~15cmの位の石を敷かれていた。埋土の最下層は、黄灰色泥土(第147図第7層)が堆積していたので、池ではないかと考えられる。

第148図-1は、肥前磁器染付碗である。口径12.8cmを測る。体部は薄手で、口縁端部がやや反っている。呉須の発色も鮮明で丁寧に染文が描かれている。2は、唐津焼胎土目皿である。口径12.4cm、器高4.6cm、高台径3.6cmを測る。外面口縁部から内面にかけて灰釉が掛けられ、外面底部は無釉である。大饅頭二氏の編年では、1はIV期、2はII-1期に属する。3は、丹波焼壺である。口径10.6cmを測る。口縁部は外側へ反っている。また、外面肩部には自然釉がみられる。14世紀代のもと思われ、伝世品と考えられる。4~6は、土師質土器である。4は、焼塩壺の蓋である。口径7cm、器高1.5cmを測る。調整は、口縁部はヨコナデ調整を施し、内面には布目底がみられる。5は、焼塩壺である。口径6.8cm、器高4.4cm、底径5.2cmを測る。板状粘土を巻いて体部を成形し、底部は内側から粘土塊によって、充填し、外側から同時に押圧した跡がある。口縁部はナデ調整を施し、内面体部に布目底がみられる。両角まり氏の分類C1-d-1類に属する(同角1996年)。6は、西行土人形である。器高5.9cm、幅4cmを測る。岩山に懸掛ける修行僧のようにみえる。右手に杖を持ち、左手には数珠を持っている。合せ型成形で、合せ目をヘラケズリ調整している。また、底部には直径0.9cm、深さ2.5cmの穿孔がみられる。7は、寛水通寶である。直径3.1cm、厚さ0.1cmを測る。古寛水通寶で、「寛」字の画末尾が「ス」である。また、背文は見られない。



第147図 SX201遺構図

出土遺物を概観すると、一部古い時期のものもみられるが、17世紀末~18世紀



第148図 SX201 (1-7)・SK202 (8-13) 出土遺物

中頃と考えられ、Ⅲ-2 a 期に属する。

SX202

SX202は、調査区南東に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ1.5m、幅1.34m、深さ0.57mを測る。調査時は土塊として掘削していたが包含層と考えられる。

第149図-1~2は、肥前磁器である。1は、赤絵碗である。高台径5.2cmを測る。見込みに彫り込みがあり、器厚は薄手である。外面の文様は赤地に金色軸で唐草文を描き、見込みには牡丹唐草文がみられる。高台内には銘があり、焼継ぎ痕もみられる。2は、染付香油壺である。高台径5.6cmを測る。胴丸形のタイプであ

る。外面の文様は綾間山水文である。高台畳付は露胎で離れ砂が付着している。大橋康二氏の編年では、1・2は、IV期に属する。3は、備前焼小壺の蓋である。直径7.95cm、器高1cmを測る。外面は丁寧に回転ナデし、つまみ部を接着後、そのまわりをへらで文様を施している。4は、伊賀・信楽焼灯明受皿である。口径12.3cm、器高2.25cm、底径4.8cmを測る。外面口縁部から内面にかけて灰釉を掛けている。受け部に半月状の切り込みがある。5は、寛永通寶である。直径3cm、厚さ0.1cmを測る。新寛永通寶で、背文はみられない。6は、土師質土器乗燗である。口径2cm、器高1.65cm、底径4.6cmを測る。型押し成形で、外面は軽くヨコナデ調整している。中央の芯立てはハリツケ後、ナデ調整を施している。また、端部には煤が付着している。

出土遺物を概観すると、18世紀前半～18世紀後半と考えられ、III-2 a期に属する遺構である。

S K 202

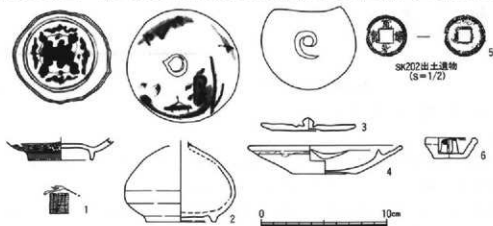
S K 202は、調査区中央東側に位置する(表1)。平面形は円形を呈し、直径1.17m、深さ0.52mを測る。

第148図-8～9・11は、肥前磁器である。8は、染付碗である。口径10cm、器高4.4cm、高台径4.8cmを測る。高台が低く、半球形の丸碗タイプである。外面の文様は草花文である。9は、染付皿である。口径9.91cm、器高2.8cm、高台径4.3cmを測る。見込みに蛇ノ目軸ハギがみられ、内面体部に草文が描かれている。高台畳付は露胎である。11は、染付筒型碗である。口径9.8cm、器高7.2cm、高台径6cmを測る。口須の発色が良好で、外面体部に松景文が描かれ、内面口縁部に七宝文、高台脇部に鋸歯文が描かれている。また、高台内の二重方形枠内に溝幅がみられる。8～9・11は、大橋康二氏の編年IV期に属する。10は、丸瓦である。全長22.7cm、丸瓦部長19.5cm、玉縁部長3.2cm、丸瓦体部幅17cm、厚さ1.1cmを測る。調整は、玉縁部凸面はヨコナデ調整、凹面には布目がみられる。丸瓦部は凸面は縦方向にへらナデ調整し、凹面は縦方向に叩板によるタタキとコビキB痕がみられる。12は、土師質土器焙烙である。口径24.8cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプのものである。口縁部内外面にヨコナデ調整、内面底部はナデ調整を施し、外面底部は未調整である。外面には煤が付着している。難波洋三氏の分類E類に属する。13は、唐津系陶器皿である。口径11.9cm、器高3.7cm、高台径4cmを測る。口縁部は外側へ伸びるタイプのものである。内面から外面まで灰釉を掛けているが、高台は無釉である。見込みに蛇ノ目軸ハギがみられる。大橋康二氏の編年IV期に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀末～18世紀前半と考えられる。III-2 a期に属する遺構である。

5. 第1次面の遺構と遺物

第1次面では、三和土が一部みられた。礎石も検出し、既存建物(S B 01)に伴うものと思われる。この



第149図 SX 202出土遺物

三和土の下部の整地層（第141図第70層）を切って作られた廃棄土壌（SX103第141図第80層）の出土遺物の年代が、18世紀後半～19世紀初頭なので、それ以降に敷かれたと思われる。その他には、東側では便槽壺（SW01・02）を検出した。したがって参道に面したSB01は、東側は裏となっていたと考えられる。第2次面で検出したSX411はSB01の南側の建物に伴うものである。

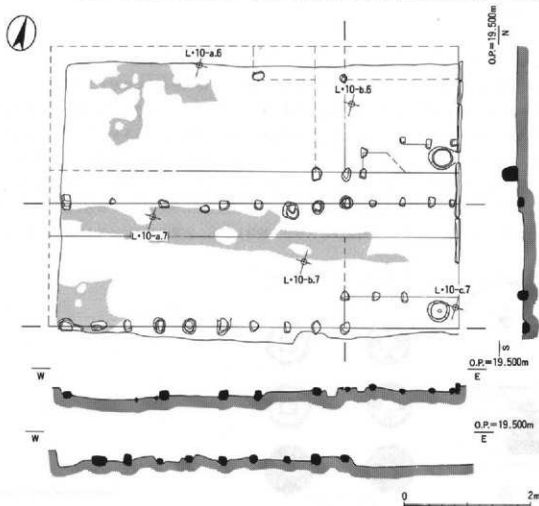
SB01

SB01は、調査区西側から中央付近に位置する（第150図）。桁行4間（南北約8m）、梁行6間半（東西約12.9m）を測る。既存建物である。2戸1棟の棟続きの建物であった。この建物は、第2次面で検出した池（SD201）を埋め、その上面に三和土を敷かれているため、建物の規模を拡大したことがわかる。また、池（SD201）の上限期が18世紀中頃で、それ以外の下面遺構（SD201）の切り合いから考えて19世紀前半以降に建てられている事がわかった。さらに、建物の東側の裏底部にそれぞれ便槽壺を検出した。そのうち北側の便槽壺の西側には、水琴窟（SY01）を検出し、便所使用後の手洗いの排水処理として使われていたと考えられる。この礎石建物は、III-3b期からIV期に属する。

SX106

SX106は、調査区西隅に位置する（表1）。平面形は不整形を呈し、長さ4.2m、幅3.4m、深さ0.22mを測る。廃棄土壌で同時代のものがまぎって出土した。

第151図-1は、肥前磁器染付筒型碗である。口径8.4cm、器高6.9cm、高台径4.8cmを測る。やや大型の碗



第150図 SB01遺構図

で、外面の文様は松文が描かれ、見込みには手書きによる五弁花がみられる。また、高台内には二重方形枠内に崩れた渦福が描かれ、高台登付は露胎である。大橋康二氏の編年IV期に属する。2は、土師質土器皿である。口径6.7cm、器高1cmを測る。内外面に回転ナデ調整が施され、底部には糸切り底がみられる。また、口縁部には灯芯痕がみられ、灯明皿として使用していたと思われる。3は、瀬戸・美濃焼ヒダ皿である。口径7.3cm、器高1.7cm、高台径3.2cmを測る。口縁部がヒダ状に波うっており、内外面には灰釉が掛けられている。高台登付は露胎である。4～5は、寛永通寶である。4は、直径3.5cm、厚さ0.1cmを測る。5は、直径3.6cm、厚さ0.1cmを測る。どちらも、新寛永通寶で、背文はみられない。6は、紋切銭である。直径4cm、厚さ0.3cmを測る。舞職人の作ったものと思われており、歌舞伎役者の頭文字または定紋を彫り込んだものである。この銭の表面には「金」の文字が彫られている。18世紀中頃以降盛んに作られた。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～18世紀末と考えられ、III-3 a 期に属する。

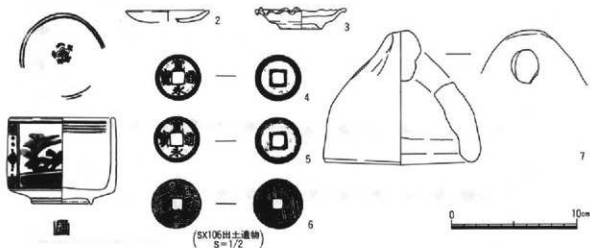
SP113

SP113は、調査区中央北側に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ0.88m、幅0.67m、深さ0.44mを測る。

第151図一7は、瓦灯傘である。底径11.9cm、器高10.7cmを測る。体部下を粘土紐輪積み成形で、上部をハリツケした後、外面を丁寧にナデ調整し、上部を棒状のもので穿孔している。そのほかに、大橋康二氏の編年IV期に属する肥前磁器色絵碗や、丹波焼壺などが出土し、18世紀前半～18世紀後半のものと考えられる。III-2 b 期に属する。

6. まとめ

今回の調査では、16世紀後半から昭和までの遺構を検出した。時代を追って変遷をまとめて言うと、16世紀後半頃は、北側から南側に延びる落ち込み状の溝が存在していた。これはD-6区・D-4区から続く溝である。D-6区・D-4区では道路に沿って幅約2mの規模で設けられているが、D-2区から幅を広げて南東方向に向かいD-2-2区で南に折れる。また、大量の土師質土器皿がこの溝が広がる地点に廃棄されているのは、この場所が祭祠的な場所として考えられていたためであろう。土師質土器皿は何らかの祭に伴う儀礼に用いられたものと考えられる。17世紀代に入るとSD401は埋め戻され、鍛冶屋関係の施設が建っていたと思われる。17世紀末～18世紀前半に入ると、建物が建ち、東側の裏庭には池(SD201)が作られて



第151図 SP113 (7)・SX106 (1～6) 出土遺物

いた。その後、池（SD201）は、第2次面で検出した建物（第1次面とほぼ同じ規模）が建てられる際に、建物の規模を拡大するためなくなってしまった。さらに、19世紀前半には既存の2戸1棟の建物が建てられた。このように、既存建物以外は、はっきりと建物の規模を窺むことはできなかったが、16世紀後半の溝を検出できたことで、溝の広がりを知ることができた。また、大量の遺物が出土したことにより、この溝の年代を知ることができ、よい結果を得られた。

第9節 第63次調査D-2-2区

D-2-2区は、D-2区の東隣りに位置する。調査面積が狭いため、調査区中央の屋敷境溝を挟み2分割し、西側をD-2区、東側をD-2-2区とした。

1. 基本層序

遺構面は第4面検出した。また、基本層序はD-2区と同じである(第141図)。調査面積は108㎡である。

2. 第4次面の遺構と遺物

第4次面では、D-2区で検出したSD401(第143図・図版60)の続きを調査区西南隅で検出した。その他に、東側で柱穴群が数カ所みられ、掘立柱建物があったと思われる。

3. 第3次面の遺構と遺物

第3次面では、直接建物につながる遺構は検出しなかったが、多数の廃棄土壌(SX305・SP309)がみられた。検出した土壌は、主に18世紀前半のものであった。その他に、調査区中央付近で16世紀後半代の遺物が出土したSE301(第152図)を検出した。

SX305

SX305は、調査区西北隅に位置する(表1)。平面形は長方形を呈し、長辺1.3m、短辺0.8m、深さ0.4mを測る。廃棄土壌で17世紀末～18世紀前半頃の遺物がまぎらって出土した。

第153図-1は、肥前磁器染付碗である。口径11cm、器高6.1cm、高台径4.8cmを測る。外面の文様はコンニャク印判によって、唐花文が描かれている。高台畳付は露胎である。2は、京焼風陶器碗である。口径9.3cm、器高6cm、高台径5cmを測る。外面に山水文を描いている。高台脇から高台内まで無軸である。大橋康二氏の編年(大橋1989年)では、1はⅢ期、2はⅣ期に属する。3は、土師質土器里である。口径7.8cm、器高1.55cmを測る。手ずくね成形で、内外面に布目痕がみられ、その後、内面はナデ調整、外面には指頭圧調整を施している。また、口縁部に灯芯痕がみられ、灯明皿として使用していたと思われる。IT(伊丹町町期)1型式A類に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀末～18世紀前半と考えられ、Ⅲ-2a期に属する。

4. 第2次面の遺構と遺物

第2次面でも、建物遺構は検出できなかった。この面でも18世紀代から19世紀初頭の廃棄土壌(SX203・202)を数カ所検出した。

SP212

SP212は、調査区北側中央に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ0.92m、幅0.9m、深さ0.54mを測る。柱穴痕としてとらえたが、廃棄土壌である。

第155図-1は、肥前磁器染付碗である。口径10cm、器高5.4cm、高台径3.9cmを測る。高台は低く、体部も薄手で、丸碗タイプのものである。呉須の発色は良好で、外面の文様はコンニャク印判によって草花文を描いている。2は、唐津系陶器刷毛目文碗である。口径11cm、器高4.7cm、高台径4.2cmを測る。内外面全体に白土化粧によって刷毛目文様を施している。高台畳付は露胎である。3は、肥前磁器里である。口径8.6cm、器高

2.4cm、高台径3.6cmを測る。小皿タイプのもので、見込みには蛇ノ目輪ハギがみられる。大橋康二氏の編年では、1～3はにIV期に属する。4・9は、土師質土器である。4は、皿である。口径7.25cm、器高1.7cmを測る。手すくね成形で、調整は、口縁部内外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整を施し、外面には指頭庄調整がみられる。I T (伊丹郷町期) 2型式A類に属する。9は、焙烙である。口径26.6cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプのものである。調整は、口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整で、外面底部は型作りで未調整である。7は、備前焼壺である。口径15cmを測る。口縁部内面に受け状のものがあり、口縁端部は外反している。また、口縁部内面から外面にかけて黒色土物が掛けられている。10は、銅製火箸である。長さ17cm、直径0.4cmを測る。基部から先端部にむかって細くなっている。

出土遺物を概観すると、17世紀末～18世紀前半と考えられる。III-2 a期に属する。

S U 207

S U 207は、調査区西側中央に位置する(第154図)。掘形の平面形は楕円形を呈し、長さ1.58m、幅1.24m、深さ0.54mを測る。埋槽遺構である。おそらく、西側の建物に伴うものと思われる。また、第3次面でも北西隅に同様の遺構を検出しており(S U 306)、時期的にも差がなく、西側建物S B 02に伴うものと思われる。

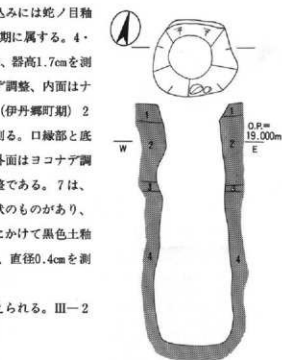
第155図-5・6は、肥前磁器である。5は、広東型染付碗である。口径10.4cm、器高6cm、高台径5.3cmを測る。体部は薄手で、呉須の発色も良好である。文様も丁寧に描かれている。外面の文様は草花文が描かれ、見込みには「寿」の銘がみられる。高台畳付は露胎である。6は、染付蓋である。口径9.4cm、器高2.8cm、つまみ径5cmを測る。タイプからみて、広東型碗の蓋と思われる。外面の文様は桜間山水文である。内面には岩文が描かれている。5・6は、大橋康二氏の編年V期に属する。8は、備前焼鉢である。口径12.8cm、器高7.3cm、底径12.5cmを測る。筒型の鉢である。外面底部に刻印がある。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられ、III-3 a期に属する遺構である。

5. 第1次面の遺構と遺物

第1次面では、3時期の遺構を検出した。1期目は、前代に引き続き裏庭であった時期である。多くの廃棄土城や井戸を検出し、調査区中央付近では2基1組の竈も検出したことから、裏庭に竈屋が建てられていたのではないかと考えられる。

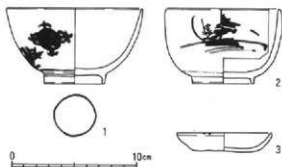
2期目は、調査区全体に三和土が敷かれた時期である。三和土が敷かれた時期は、下面の遺構(S X 101・102)の年代が9世紀中頃なので、19世紀後半以降である。



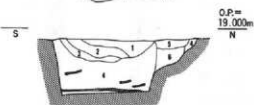
1. オリーブ褐色粘土層 2・5 Y4/4
2. 黄土層 2・5 Y7/8 (細多く含む)
3. 褐色粘土層 10 Y R4/6
4. 暗灰色砂質土層 2・5 Y4/2



第152図 SE 301遺構図



第153図 SX 305出土遺物



1. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3
(粘土・炭化物多く含む)
2. 暗褐色砂質土層 10 Y R3/3
3. 黒褐色砂質土層 10 Y R2/3
4. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2
(遺物・炭化物多量に含む)
5. 灰オリーブ色砂層 7・5 Y6/2
6. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/8

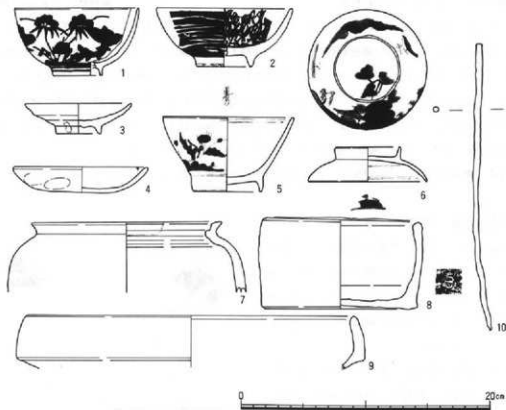
第154図 SU207遺構図

3期目は、既存建物の時期である。検出した建物は、D-4区で検出したSA02を北端とし、年代もこの建物を作る際に埋められた溝(SD01)の年代観から、第2次大戦前に建てられたことが分かっている。以上のように、第1次面では3時期の遺構を検出した。

SV01-C

SV01-Cは、調査区中央やや東側に位置する(第156図・図版60)。上面の電を作り替える際に、壊されており全体を掘むことができなかった。燃焼室の検出長は0.75m、深さ0.3mを測る。燃焼室壁には粘土が張られており、埋土から瓦や赤く変色した礫を検出したことから、これらは燃焼室壁の基礎補強材として使用していたと思われる。また、これに伴う電が検出していないことから、単独半地下式電と思われる。

第157図-1は、軒棧瓦である。軒丸部は、瓦当部径6.3cm、文様区径3.2cm、周縁幅1.4cm、瓦当部厚1.5cmを測る。軒平部は、全長21.4cm、瓦当部高2.8cm、文様区厚1.9cm、周縁上部0.8cm、顎下部厚1.1cmを測る。軒平部凸面は縦及び横方向にヘラミガキ調整を施す。凹面は未調整で離れ砂



第155図 SP212 (1・4・7・9・10)・SV207 (5・6・8) 出土遺物

が付着し、金属クシによる7本単位のクシ目が、直線及び波状に施されている。2は、寛永通寶である。直径2.5cm、厚さ0.1cmを測る。新寛永通寶で、背文はみられない。3は、肥前磁器色絵碗である。口径8.8cm、器高4.7cm、高台径3.1cmを測る。小型の丸碓タイプのものである。外面に赤地に白抜きによる陰刻の唐草文・草花文が描かれている。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年V期に属する。4は、瀬戸・美濃焼染付燗碗である。口径10.8cm、器高5.2cm、高台径4.1cmを測る。外面の文様は貝文、内面口縁部に雷文が描かれ、見込みに貝文がみられる。服部郁氏の編年（服部1994年）2期第10小期に属する。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀中頃と考えられ、Ⅲ-3 b 期に属する。

S V 01-A

S V 01-Aは、S V 01-Cの西側に位置する（第156図・図版60）。この西側に検出したS V 01-Bとは、2基1組の半地下式の竈である。燃焼室の直径0.8m、深さ0.26mを測る。S V 01-Cと同様大型の竈で、S V 01-Cを切ってつくられているため、作り替える際規模を拡大したと思われる。燃焼室壁は厚さ10cm位の粘土を張り、基礎補強材として瓦や10cm大の礫石が設置していた。燃焼口は南側と思われ、焚口には多量の炭化物が堆積していた。出土遺物の年代観から、S V 01-Cの方が一時期古く、この竈を作り替える際に、西側へ移動し、2基1組の半地下式の竈を作ったと思われる。

第157図-1は、肥前磁器御神酒徳利である。口径0.9cm、器高10.4cm、高台径2cmを測る。瓶子型徳利である。外面の文様は蛸唐草文で、高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年V期に属する。6は、万古糸蓋である。口径6.9cm、器高2.3cmを測る。上面の文様は、中央部は印判で網目文を、縁部はへらによって文様を施している。内面の指頭疔痕はその際に付けられたと思われる。上面とつまみ部は、型押しした木葉形のもの張り付けている。その他の出土遺物とあわせて考えると、19世紀中頃と考えられる。Ⅲ-3 b 期に属する遺構である。

S V 01-B

S V 01-Bは、S V 01-Aの西側に位置する（第156図・図版60）。燃焼室の直径0.75m、深さ0.25mを測る。構造はS V 01-Aと同様である。

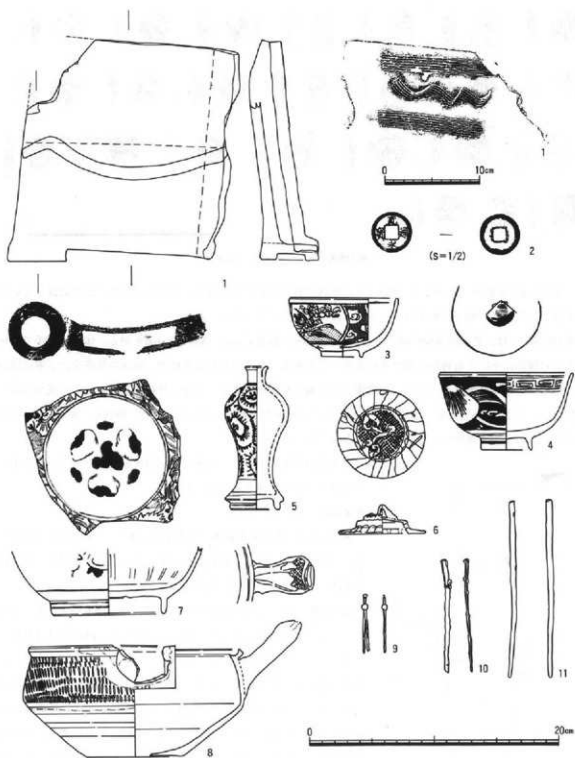
第157図-7は、肥前磁器染付鉢である。高台径8.8cmを測る。呉須の発色は良好で、丁寧に描かれている。内面体部の文様は草花文で、外面体部には唐草文がみられる。内面はひだ状になっており、高台は蛇ノ目凹型高台である。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の編年V期に属する。8は、伊賀・信楽焼行平である。口径16.6cm、器高8.7cm、底径7.6cmを測る。体部には注口がみられ、握手部と注口に鉄輪が掛けられ、内面には灰釉が掛けられている。また、外面体部には塗土が施され、トビカンナ文を施す。9～11は、金属製品である。9～10は、銅製かざしである。9は、長さ1.65cm、幅0.5cmを測る。10は、長さ2.47cm、幅0.5cmを測る。11は、箸か？長さ14.2cm、直径0.5cmを測る。

第158図-1～30は、土師質土製品芥子面子である。面子の小型のものを芥子面子といい、這い子ともいう。初めは指の腹に唾でつけて簡易な指人形として用いた。19世紀初頭に、穴一等の賭博遊びが禁じられると、銭貨の代わりに地面に投げ、代用品として使用していた（松井1991年）。すべて型押し成形で、裏面に指頭疔痕がみられる。種類は、奴・ヒラメ・いか・かに・貝・稲束・蜜柑・瓜・桃・打ち出の小づち・瓢箪・菊・花・算盤・大入り袋などである。このように芥子面子が多量に出土するのは珍しい。

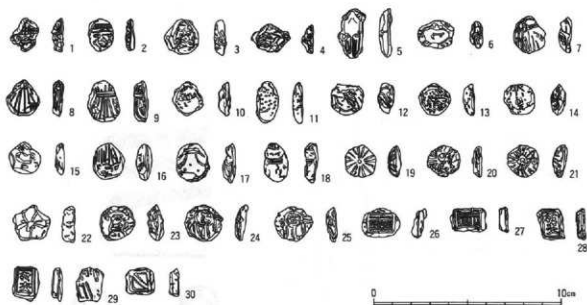
出土遺物を概観すると、19世紀中頃と考えられる。

S E 02

S E 02は、調査区南東隅に位置する（第159図・図版60）。平面形は長方形を呈し、長辺1.51m、短辺1.46



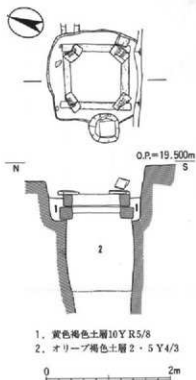
第157图 SV01-C (1~4) · SV01-A (5 · 6) · SV01-B (7~11) 出土遺物



第158図 SV01-B出土遺物

m、深さ1.6mを測る。長さ1m、幅0.1mの棒状の石を方形に2段置き、その上の四隅に瓦を設置していた。本来はここから井戸杵瓦が積まれているが、ここでは残っていないかった。

第160図-1は、肥前磁器染付碗である。口径9.4cm、器高5.1cm、高台径3.4cmを測る。体部は薄手で、体部から口縁部にかけて直線的に伸びているタイプである。呉須の発色は良好で、外面の草花文は丁寧に描かれている。見込みに層文がみえる。大橋康二氏の福年V期に属する。2は、井戸杵瓦である。全長19.8cm、幅17.4cm、厚さ3.7cmを測る。体部にクサビ形のタタキ目を2列入れている。また、側面に「金岡瓦宗」の刻印がみられる。出土遺物は広範囲の年代のものが出土した。



1. 黄色褐色土層10Y R5/8
2. オリーブ褐色土層2・5 Y4/3

第159図 SE02遺構図

出土遺物を概観すると、19世前半～20世紀前半と考えられ、III-3 b期からIV期に属する遺構である。

S X 108

S X 108は、調査区北東隅に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、検出長4m以上、幅1.38m以上、深さ0.14mを測る。調査時は遺構で取り上げたが、整地層である。

第160図-3は、京焼系広東型碗である。高台径6cmを測る。磁器でこのタイプのものはあるが、陶器では珍しい。高台畳付は露胎である。4は、丹波焼壺である。底径4cmを測る。外面に全体に白化粧土が掛けられている。いわゆる白丹波である。6は、肥前磁器染付鉢である。口径21cm、器高9.6cm、高台径8cmを測る。体部はやや厚手を呈し、呉須の発色は悪い。外面の文様は折れ松葉文、内面は松竹梅文が描かれ、見込みは花唐草文が見られる。大橋康二氏の福年IV期に属する。

また、ここでは土師質土器皿を多量に出土したため、法量グラフを作成した。その結果、成形は手すくねで、口径は10～12cm、器高2cm前後の比較的大型ものが、多く出土した。

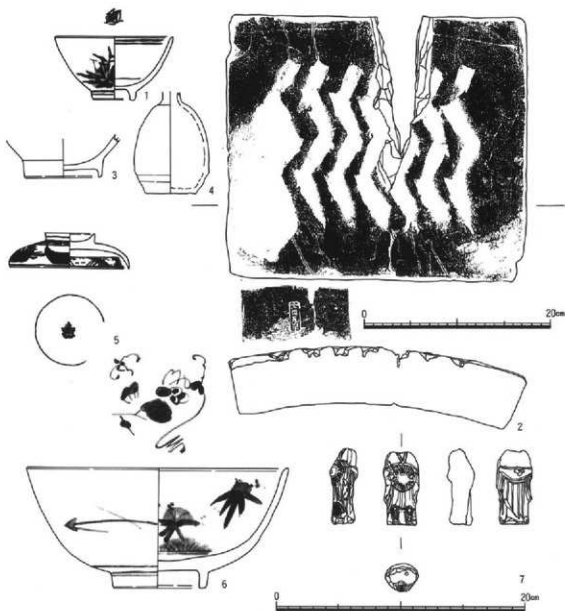
出土遺物を概観すると、18世紀中頃～19世紀前半と考えられる。III-3 b 期に属する。

S X 104

S X 104は、調査区中央に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ2.02m、幅1.72m、深さ0.72mを測る。

第160図-5は、肥前磁器染付蓋である。口径9.6cm、器高2.8cm、つまみ径4cmを測る。外面には草花文、内面口縁部には四方博文が描かれている。内面中央に「寿」の文字がみられる。高台登付は露胎である。大橋康二氏の編年IV期に属する。7は、ミニチュア土製品人形である。残存高6.5cm、幅2.5cmを測る。合わせ型成形で、合わせ目をヘラケズリ調整している。底部には穿孔がみられる。西行像と思われる。西行像は、腰痛まじない・盗難防除など俗信的な意味があった。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。III-3 a 期に属する。



第160図 SE02 (1・2)・SX108 (3・4・6)・SX104 (5・7) 出土遺物

6. まとめ

D-2-2区では、19世紀後半以前の建物遺構は検出できなかった。16世紀後半は、SD401の東側に柱穴群があり掘立柱建物が建っていた可能性がある。17世紀代になると、西側建物の裏庭部にあたり、18世紀代にも引き継がれる。19世紀前半には、一部に竈が作られ、竈屋が建てられていたのではないかと考えられる。しかし、19世紀後半に入ると、三和土が全面にみられ、敷地いっぱいに建物が建てられたと思われる。おそらく、裏地を宅地として利用する必要に迫られたためであろう。20世紀に入ると調査前にあったD-4区東側のSA02につながる既存建物が建てられることとなったと考えられる。そのほかに、この調査区では、多くの具類が出土した。19世紀前半の廃棄土壌(SX104)からはバイガイが144個一括で出土するなど当時の食文化を知るうえで好資料を得た。

第10節 第63次調査D—4区

D—4区は、猪名野神社参道沿いに面し、『天保十五年(1844)伊丹郷町分間』(第212図)よると、「北少路村」にあたることがわかる。『元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(第212図)には、屋敷主と一兵衛、住人長兵衛、その南側は糸引人惣右衛門後家、その東側は日用人(日雇い)太兵衛と記された地点に比定する。

1. 基本層序

遺構面は、西側で3面、東側で4面検出した。地山直上層に、オリーブ褐色砂質土層(第161図第8層現地表面より50cm下)、また東部にみられる地山に似た黄褐色粘質土層(第161図第33・第56層現地表面より約32cm下)は、東部第3次遺構面にあたる。さらに、5~10cm大の礫が多量に含む整地層(第161図第21・第31・第55層現地表面より20cm下)が調査区全体的にみられる。また、東部に堆積している黄灰色砂質土層(第161図第54層現地表面より15cm下)は、東部第2次遺構面にあたる。その上層に、第2次面で検出した焼土層(第161図第15層現地表面より約10cm下)がみられる。この焼土層は、出土遺物から(第172図)、享保十四年(1729)の北少路村の大火災の際の焼土層と考えられる。さらに、その上層に、第1次遺構面(第161図第16層現地表面より約8cm下)が堆積している。

2. 第4次面の遺構と遺物

第4次面は、落込み状遺構より東側に存在した。第3次面西側と同時期である。礎石・礎石痕や柱穴は、中央付近に集中していた。しかし、断片的で遺物の復元はできなかった。

S X 404

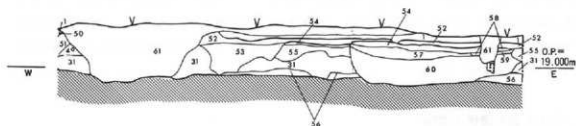
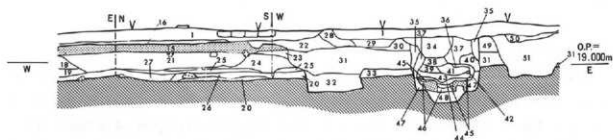
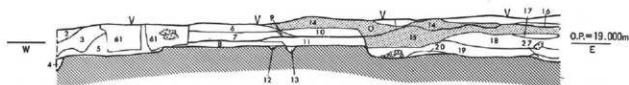
S X 404は、調査区中程東側に位置する(表1)。平面形は楕円形を呈し、長さ1.36m、幅1m、深さ0.3mを測る。この遺構は、本来第2次面のもと思われる、遺構内からは遺物が多量に出土した。

第162図—1は、京焼系急須の蓋か。口径5.4cm、器高1.6cmを測る。外面とつまみに灰釉が掛けられ、表面には、鉄釉で草文が描かれている。3は、肥前磁器染付碗である。口径9.8cm、器高5.1cm、高台径4cmを測る。体部が厚手で外面体部に草花文が描かれている、いわゆる「くらわんか手」と呼ばれるものである。高台登付は無軸である。大橋康二氏の編年(大橋1989年)IV期に属する。2は、ミニチュア土製品である。奴形土人形である。高さ4cm、幅2.1cmを測る。型造り成形で、合わせ目はヘラケズリを施している。底部には直径0.3cm、深さ2.4cmの穿孔がみられる。外面全体に雲母が付着している。奴人形は、鑑賞を目的とするものもあるが、子供の健康を願う信仰を目的としても使用された。4は、丹波焼摺鉢である。口径33.8cm、器高8cm、底径10.4cmを測る。口縁端部はやや外上方に張り出し、内面口縁部に鈍い稜をもたせている。内面体部の描目は8本単位である。見込みの描目は「+」字形につけた後、外周に円を描いている。外面体部にユビオサエ痕がみられる。大平茂氏の編年(大平1992年)VI期に属する。

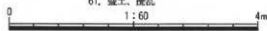
出土遺物を概観すると、18世紀前半~18世紀後半と考えられる。III—2b期に属する遺構である。

S X 402

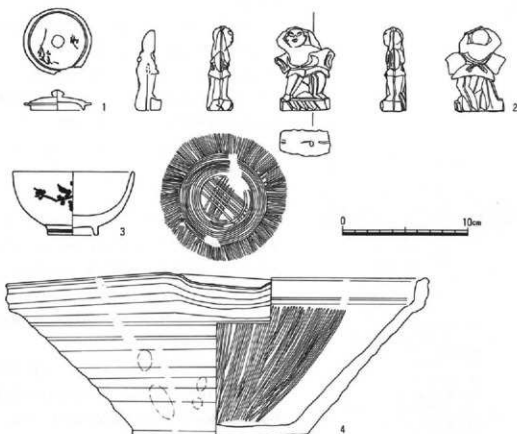
S X 402は、調査区中程南東側に位置する(第163図・図版65)。平面形は方形を呈し、長辺1.2m、短辺0.7m、深さ0.6mを測る。版築状技法を用いて埋められた遺構である。厚さ5~10cm程の粘土を互いに色を変えて丁寧に積み重ねている。使用目的は不明である。S X 402は単独で存在し、このような遺構は、この付近では



- | | | |
|---|---|---|
| <p>1. 表土層</p> <p>2. 黒褐色砂質土層 7・5 YR3/2
(粘土多く含む)</p> <p>3. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/1
褐色粘土層 7・5 YR4/6
暗灰色砂質土層 N3/0</p> <p>4. 暗灰色粘質土層 2・5 Y4/2</p> <p>5. オリーブ灰色砂質土層 2・5 GY5/1
オリーブ黄色砂質土層 5 Y6/3
黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3
暗灰色砂質土層 2・5 Y4/2
黒色砂質土層 N2/0</p> <p>6. 暗オリーブ色砂質土層 5 Y4/3</p> <p>7. 褐色粘土層 7・5 YR4/6</p> <p>8. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3</p> <p>9. 灰オリーブ色砂質土層 5 Y4/2</p> <p>10. 暗灰黄色砂礫層 2・5 Y5/2
(3~4 cm大の礫多く含む)</p> <p>11. におい黄褐色砂質土層 10 YR4/3
褐色粘土層 10 YR4/6</p> <p>12. 灰黄褐色粘質土層 10 YR4/2</p> <p>13. におい黄褐色砂質土層 10 YR5/4
褐色粘土層 7・5 YR4/6</p> <p>14. 黒褐色砂質土層 7・5 YR3/2
(粘土多量に含む)</p> <p>15. 黒色砂質土層 N2/0
黒褐色砂質土層 2・5 Y3/2</p> <p>16. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3</p> <p>17. 黄褐色粘土層 2・5 Y5/4
暗灰色砂質土層 2・5 Y4/2</p> <p>18. 灰黄褐色砂質土層 10 YR4/2</p> <p>19. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3</p> <p>20. 褐色粘土層 7・5 YR4/6
におい黄褐色砂質土層 10 YR4/3</p> | <p>21. オリーブ褐色砂礫層 2・5 Y4/4
(5 cm大の礫多量に含む)</p> <p>22. オリーブ黒色砂質土層 5 Y3/1</p> <p>23. オリーブ黒色砂質土層 7・5 Y3/1</p> <p>24. オリーブ黒色砂質土層 5 Y3/2</p> <p>25. におい黄褐色砂質土層 10 YR4/3</p> <p>26. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/3</p> <p>27. 灰黄褐色砂質土層 10 YR4/2
赤褐色粘土層 5 YR4/6</p> <p>28. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y4/2</p> <p>29. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6</p> <p>30. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/1</p> <p>31. 暗オリーブ褐色砂礫層 2・5 Y3/3
(5~10 cm大の礫多量に含む)</p> <p>32. 褐色砂質土層 10 YR4/1
(2~5 cm大の礫多く含む)
褐色砂質土層 10 YR4/4</p> <p>33. 黄褐色粘土層 10 YR5/8
褐色粘土層 10 YR5/1</p> <p>34. 灰オリーブ色砂質土層 5 Y4/2</p> <p>35. 黄灰色粘土層 2・5 Y5/1
明黄褐色粘土層 2・5 Y6/6</p> <p>36. 明赤褐色粘質土層 2・5 YR5/6</p> <p>37. 明赤褐色粘土層 2・5 YR5/8</p> <p>38. 灰褐色砂質土層 7・5 YR4/2
灰黄褐色砂質土層 10 YR4/2
におい黄褐色粘土層 2・5 Y6/4
赤褐色粘土層 2・5 YR4/6</p> | <p>39. 赤褐色粘土層 2・5 YR4/6
灰オリーブ粘土層 5 Y5/3</p> <p>40. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y5/2</p> <p>41. 灰オリーブ色砂質土層 5 Y5/2</p> <p>42. 明赤褐色粘質土層 5 YR5/8</p> <p>43. 灰オリーブ粘土層 5 Y5/3</p> <p>44. 黒色粘土層 N2/0
赤褐色粘質土層 5 YR4/8</p> <p>45. 明赤褐色粘質土層 5 YR5/6</p> <p>46. 黄褐色粘土層 10 YR5/6
黄褐色粘質土層 2・5 Y5/1</p> <p>47. オリーブ黄色粘土層 7・5 Y6/3</p> <p>48. 黄灰色砂礫層 2・5 Y5/1</p> <p>49. 灰褐色砂質土層 2・5 Y4/1</p> <p>50. 黒褐色砂質土層 10 YR3/1</p> <p>51. 灰黄褐色砂質土層 10 YR4/2
(遺物、碎礫片多く含む)</p> <p>52. 黒褐色砂質土層 2・5 Y3/1</p> <p>53. 明褐色粘土層 7・5 Y5/8
灰黄褐色砂質土層 10 YR4/2</p> <p>54. 褐色砂質土層 10 YR4/1
明黄褐色粘土層 10 YR6/6</p> <p>55. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/1</p> <p>56. におい黄褐色粘質土層 10 YR4/3</p> <p>57. 黒褐色砂質土層 10 YR3/1</p> <p>58. 明黄褐色粘土層 2・5 Y6/6</p> <p>59. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y4/2</p> <p>60. オリーブ黒色砂質土層 7・5 Y3/2
(遺物多く含む)</p> <p>61. 盛土、掘込</p> |
|---|---|---|



第161図 D-4区北掘土層図



第162図 SX404出土遺物

あまりみられず、酒蔵建物の礎石の地割みにみられただけである。出土遺物は17世紀末～18世紀前半のものが出土している。Ⅲ-2 a 期に属する。

3. 第3次面の遺構と遺物

第3次面は、調査区中央より検出した、池状遺構を境に様相が異なる。上述したように、東側は4面あり、西側は東側の第4次面と同時期である。西側は、S D301から池状遺構の間において、柱穴や礎石が数箇所みられ、S B01・S B02が建てられていたことがわかった。東側は、検出した遺構の年代観から本来第2次面の遺構と考えられるものが多く、本来の第3次面の時期のものは、第2次面の遺構によってほとんどつぶされたと考えられる。「元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町絵図」によると、東側は建物が建てていたことがわかっているが、調査ではそれに伴う礎石・礎石痕は検出できなかった。

S B01

S B01は、掘立柱建物である(第164図・図版65)。柱間を京間の6尺5寸とし、桁行1間(南北1.969m)以上、梁行1間(東西1.969m)以上の規模である。おそらくまだ伸びると考えられ、規模的には2×2程の小さい建物と思われる。Ⅲ-1 b 期に属する。

S B02

S B02は、礎石建物である(第165図・図版65)。桁行1間(南北1.969m)以上、梁行1間(東西1.969m)以上である。礎石の中には、石塔の基壇を礎石として転用しているものがあつた。S B01とは、隣接しているがS B02の方が新しいがあまり時期差はないと思われる。Ⅲ-1 b 期に属する。



第163図 S X 402遺構図

1. ぶい黄褐色砂礫層10Y R6/3
(1~3cm大の礫多量を含む)
2. ぶい黄褐色砂礫層10Y R5/4
(1~2cm大の礫多量を含む)
3. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
4. ぶい黄色粘質土層2・5 Y6/4
5. 明褐色粘質土層7・5 Y R5/6
6. オリープ褐色土層2・5 Y4/3
(炭化物多量を含む)
7. 褐色土層10Y R4/4
8. ぶい黄色粘質土層2・5 Y6/3
9. 褐色粘質土層10Y R4/6
(炭化物多量を含む)
10. 明褐色粘質土層7・5 Y R5/8
11. オリープ褐色粘質土層2・5 Y4/6
12. 明黄色土層10Y R6/6
13. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
14. 明黄色粘質土層10Y R6/8
15. オリープ色粘質土層5 Y6/6

には指頭瓦がある。内面に布目がみられる。4は、丹波焼播鉢である。口径18.3cm、器高7.5cm、高台径10cmを測る。底部には高台を持ち、口縁端部は平坦になっている。外面体部のユビオサエはみられず、丁寧に回転ナデを施している。内面体部の播目は6本単位である。また、内面から外面体部にかけて鉄軸が掛けられており、高台内は無釉である。大平茂氏の編年X期に属する。5は、丸瓦である。全長(残)18.1cm、玉縁部幅11.5cm、玉縁部長3.5cm、厚さ1.6cmを測る。側縁は面取りを施し、玉縁部はナデ調整、体部凸面は縦方向にヘラミガキ調整されている。凹面は布目や棒状のタクキがみられる。

第169図-1は、唐津系陶器刷毛目文鉢である。高台径は13.7cmを測る。内面に白土釉を全面に掛け、ハケ塗り文様を描いている。外面は無釉である。2は、男焼播鉢である。口径34.6cm、器高13.8cm、底径16cmを測る。胎土は赤褐色を呈し、内面口縁下部に凹縁を施している。口縁部外縁帯は外へ張っており、底部際から口縁部外縁帯の直下まで回転ヘラケズリ調整を施している。内面体部の播目は9本単位である。白神典之氏の分類(白神1990年)II類に属する。3は、土師質土器焙烙である。口径37cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプである。調整は、口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整を施し、外面底部は未調整である。外面底部に煤が付着している。難波洋三氏の分類(難波1992年)E類に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀後半~19世紀初頭と考えられる。III-3 a 期に属する遺構である。

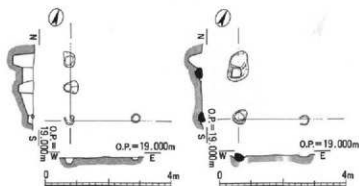
SD301

SD301は、西壁沿いに位置する(第166図・図版65)。長さ9m以上、最大幅1.6m以上、深さ0.74mを測る。この溝は北側はD-6区SD200に、南側はD-2区のSD401に続く。北側は西側道路に沿っているが、調査区南側付近で南東方向に進路を変えている。出土遺物は、小片で図化しなかったが、16世紀後半の瓦が出土し、他の調査区でも同時代のものがみられることから、この時代のものである。

SU309

SU309は、調査区中央やや西側に位置する(第167図)。平面形は不整形を呈し、長さ3.7m、幅2.5m、深さ0.62mを測る。この埋桶遺構は、廃棄土壌内で検出した。桶底部は残っていたが、体部は残存上部がわるく、図化できなかった。また、この遺構は本来第2次面のものであり、覆土が厚く検出できなかった。

第168図-1~2は、肥前磁器である。1は、広東型碗の蓋である。口径9.8cm、器高3.1cm、つまみ径7.8cmを測る。外面体部に海浜文、内面には船文が描かれている。大橋康二氏の編年V期に属する。2は、猪口である。口径7.6cm、器高5.65cm、高台径4.8cmを測る。外面体部にコンニャク印判によって若松文を描き、高台内には銘がみられる。高台登付は露胎である。大橋康二氏の編年IV期に属する。3は、土師質土器焼壺の蓋である。口径8.3cm、器高1.95cmを測る。形押し成形で、上面端は円周に沿ってナデ調整、体部



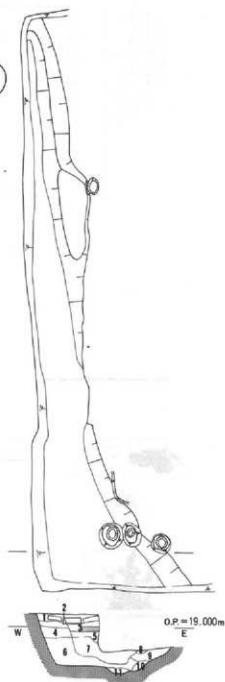
第184図 SB01遺構図

第185図 SB02遺構図

S X 304

S X 304は、調査区東南側に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ1.7m、幅1.62m、深さ0.54mを測る。

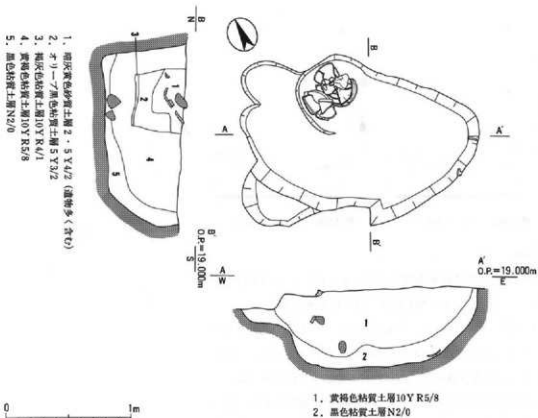
第171図一1~4・6は、肥前磁器である。1は、広東型染付碗である。口径11.2cm、器高6.1cm、高台径6.6cmを測る。見込みが窪み、体部は薄作りである。外面体部の文様は河骨文、見込みにも河骨文が描かれている。高台畳付は露胎である。2は、染付碗である。口径8.6cm、器高4.4cm、高台径3.2cmを測る。外面体部に丸文の中に「寿」が描かれている。高台畳付は露胎である。3は、染付手塩皿である。口径6.2cm、器高1.4cm、高台径4cmを測る。型造り成形で、高台畳付は露胎である。内面に船文が描かれている。4は、染付深皿である。口径14.2cm、器高4.3cm、高台径7.4cmを測る。呉須の発色がやや黒帯びている。内面いっばいに松文を描き、外面体部には連続唐草文がみられる。6は、紅入れである。口径2.4cm、器高0.6cm、底径1cmを測る。蓋を伴うものである。口縁には紅が付着している。底部は無軸である。1・6は、大橋康二氏の編年V期、2~4は編年IV期に属する。5は、備前焼小壺である。口径7cm、器高6.4cm、底径4cmを測る。内面口縁部から外面底部にかけて、丁寧に塗土が施されている。口縁部の形から蓋を伴うものと考えられる。7~9は、伊賀・信楽焼灯明具である。7は、受皿である。口径11.6cm、器高2.2cm、底径5.4cmを測る。外面口縁部から内面全体に灰釉が掛けられ、それ以外は無軸である。8は、白付タンコロである。口径5.2cm、器高5.1cm、底径4.2cmを測る。乗偏と同種であり、中央に灯明芯をたてる灯心立てがつけられている。外面全体に鉄釉が掛けられており、底部は無軸である。また、底部には、直径0.4cm、深さ1.5cmの穿孔があり、これは、行灯や提灯の底板に打ち付けてある釘に差し込むための穴である。9は、皿である。口径12.4cm、器高2.2cm、底径5.2



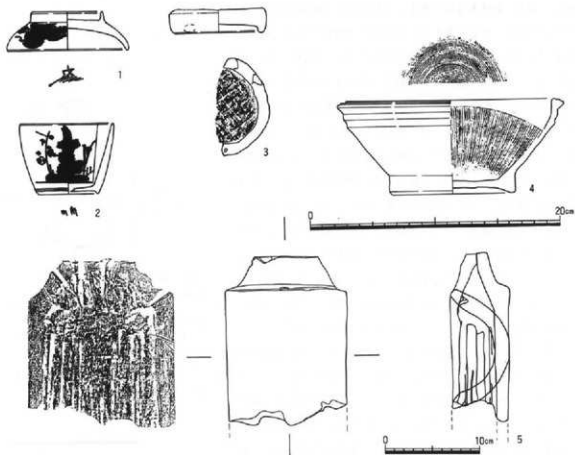
第186図 SD301遺構図

1. 黄褐色土層10Y R5/8
2. 褐色粘土層10Y R4/6、褐色粘質土層4/4
3. 黒褐色土層2・5 Y3/2 (炭化物多量を含む)
4. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
5. 明褐色砂質土層7・5 Y R5/6・褐色粘質土層10Y R4/4
6. におい黄褐色粘質土層10Y R5/3
7. 暗褐色土層10Y R3/4
8. におい黄褐色砂層10Y R6/4・赤褐色土層5 Y R4/6
9. 褐色土層10Y R4/4

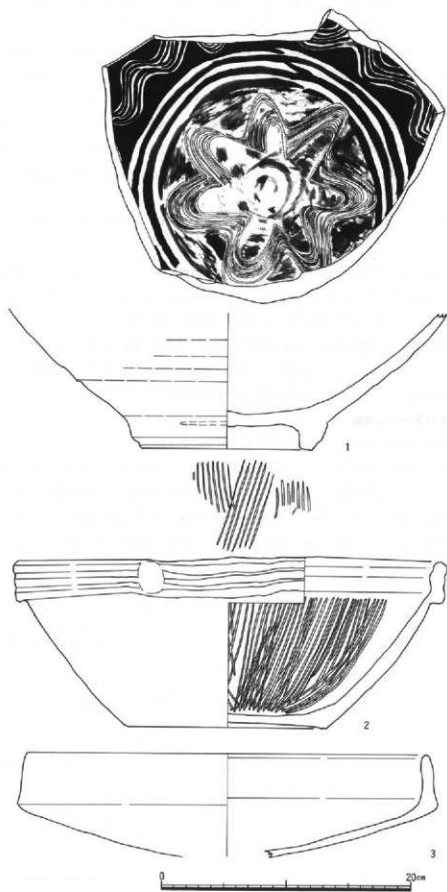




第167圖 SU309遺構圖



第168圖 SU309出土遺物(1)



第169圖 SU309出土遺物(2)

cmを測る。これも7と同様に軸が掛けられ、見込みに3本の櫛目と型押しした菊文を張付けている。10・12は、土師質土器である。10は、皿である。口径12.4cm、器高3.5cmを測る。体部は厚手で、内面はナデ調整、外面は指頭圧調整を施している。外面底部に煤が付着している。IT（伊丹町期）2型式B類に属する。12は、風炉である。底径12.7cmを測る。小型のタイプである。体部の成形は、粘土紐輪積み成形で、内外面をナデ調整を施している。その後、体部に粘土紐輪積み成形によって脚部をハリツケ、内外面にナデ調整を施している。また、外面全体に赤色土を塗付する。脚部に3カ所穿孔がみられる。11は、銅製火管である。長さ28.9cm、厚さ0.6cmを測る。16・17は、「寛永通寶」である。16は、直径3.8cm、厚さ0.1cmを測る。新寛永通寶で表面に「文」の字がみられる。17は、直径3.3cm、厚さ0.1cmを測る。新寛永通寶で、背文はみられない。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられ、Ⅲ-3 a 期に属する遺構である。

S X 301

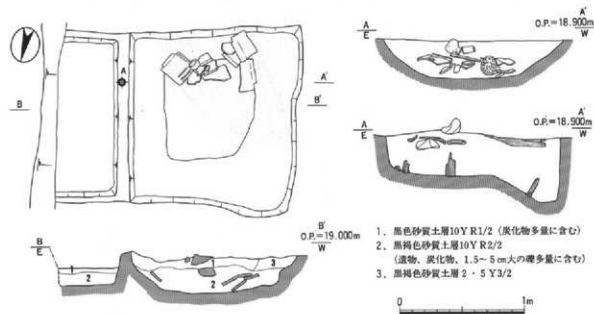
S X 301は、調査区南東隅角に位置する(第170図)。平面形は長方形を呈し、長辺2 m、短辺1.34 m、深さ0.28 mを測る。遺構内壁には板が部分的だが残っており、全体的に張られていたと思われ、おそらく、地下室ではないかと考えられる。また、遺構内からは多量の遺物が出土した。

第171図-20は、瀬戸・美濃焼黄瀬戸釉茄子形向付である。長さ12.8cm、器高9.9cm、幅5.75cmを測る。外面底部以外は、軸が掛けられている。体部先には型押しした額をハリツケしている。出土遺物の年代観は、18世紀末～19世紀前半と考えられ、Ⅲ-3 a 期に属する遺構である。

包含層3次面精査時出土遺物

この出土遺物は、調査区中央から東側より出土したものである。

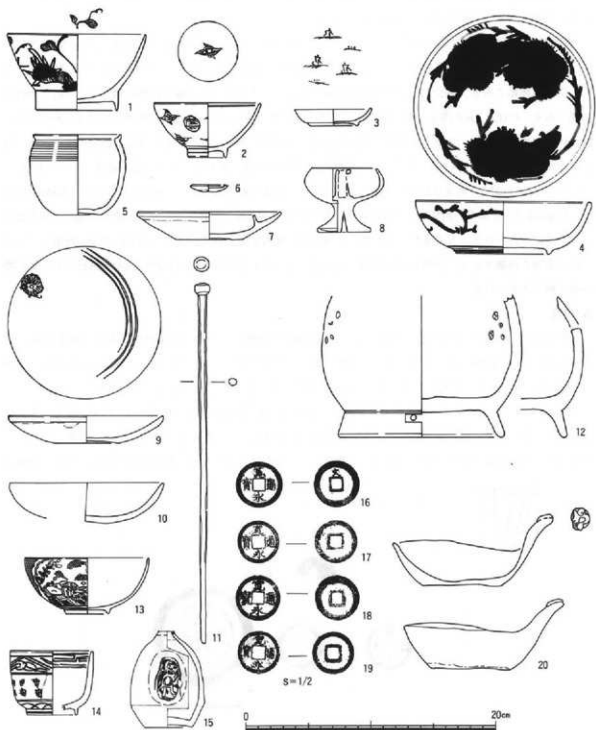
第171図-13は、肥前磁器色絵碗である。口径10cm、器高4.5cm、高台径3.4cmを測る。体部は薄手で、半球のような丸碗である。赤地に白抜きした唐草文と、丸文に青波文、窓内には兎草岩文が描かれている。大橋康二氏の編年V期に属する。14は、瀬戸・美濃焼湯飲碗である。口径6.6cm、器高5.1cm、高台径3.8cmを測る。内外面に文様が描かれているが、所々滲んでいる。高台畳付は露胎である。15は、丹波焼小瓶である。



第170図 S X 301遺構図

底径3.8cmを測る。外面体部に印押し、「仙人」の文様を施している。また、外面底部以外に灰釉を掛けている。18・19は、「寛永通寶」である。18は、直径3.5cm、厚さ0.1cmを測る。19は、直径3.3cm、厚さ0.1cmを測る。18・19共に、新寛永通寶で、背文はみられない。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀中頃と考えられる。



第171図 S X 304 (1～12・16・17)・S X 301 (20)・
包含層第3次面精査時 (13～15・18・19) 出土遺物

4. 第2次面の遺構と遺物

第2次面では、三和土は検出できなかった。また、上面の三和土を作られる際に、削平されており、直接建物に結びつくものは検出せず復元できなかった。しかし、北壁沿い中央付近より竈を検出したことから、この辺りまで建物が建っていた可能性がある。

焼土層出土遺物

この焼土層は、北壁沿い西側から中央付近にかけて検出した。第1次面の三和土面を取除くとすぐにみられた。範囲は、第2次面全体図をみていただきたい。

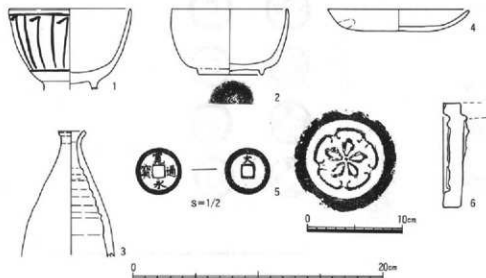
第172図-1は、肥前磁器染付碗である。口径9.8cmを測る。呉須の発色は悪く、体部も全体的に厚手である。大橋康二氏の編年IV期に属する。2は、京焼風陶器碗である。口径9.4cm、器高5.3cm、高台径2.9cmを測る。高台は無軸である。高台内に印銘がみられる。これも、大橋康二氏の編年IV期に属する。3は、丹波焼徳利である。口径2.1cmを測る。外面全体に丁寧に塗土が掛けられている。また、意図的かどうかかわからないが、体部が歪んでいる。4は、土師質土器皿である。口径11.15cm、器高1.8cmを測る。内面はナデ調整、外面は指頭圧調整を施している。IT（伊丹郷町期）1型式B類に属する。5は、寛永通寶である。直径3.7cm、厚さ0.1cmを測る。新寛永通寶の文銭である。6は、木瓜文軒丸瓦である。瓦当部径10.1cm、文様区径8.1cm、周縁幅1.5cmを測る。調整は、瓦当周縁部・瓦当裏面周縁部は、周縁に沿ってナデ調整を施し、瓦当裏面はナデ調整がみられる。瓦当部に、丸瓦部との接合部に榫目が施されている。瓦当面に雲母が付着している。

出土遺物を概観すると、18世紀初頭と考えられる。したがって享保14年（1729）の北少路村の大火災の際の焼土層と考えられる。

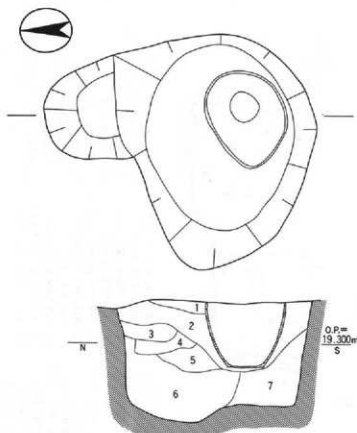
S V 222

S V 222は、北壁沿い中央付近より検出した（第173図・図版66）。半地下式竈遺構である。全長2.2m、燃焼室直径1.2m、深さ0.9mを測る。焚口は南側である。燃焼室底部には、長さ40cm、幅20cmの切り石が2個（内1つは、凹型）が、南北に平行に並べてあり、焚口に近くなるにつれて、灰が多く堆積していた。

第175図-5は、竈の基礎石である。長さ36cm、幅20cm、高さ30cmを測る。断面形は三角形を呈し、上面には切込みが施されている。竈を補強するために底部に設置するものと思われる。6は、寛永通寶である。直径3.2cm、厚さ0.1cmを測る。新寛永通寶で、背文はみられない。8・9は、肥前磁器である。8は、初期伊



第172図 焼土層出土遺物



1. 暗オリーブ色粘土層 5 Y 4/3
黄褐色粘土層 2・5 Y 5/6
黒色灰層 2・5 Y 2/1
灰白色灰層 N 8/0
2. 黒褐色粘質土層 2・5 Y 3/2
3. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y 4/2
(2~3cmの礫を多く含む)
4. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 3/3
褐色粘土の擾乱層 10 Y R 4/4
5. 黒褐色砂質土層 10 Y R 3/2
(4~5cmの礫を多く含む)
6. オリーブ黒色砂質土層 7・5 Y 3/2
7. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y 4/3

第174図 S X 221遺構図

2行で表されている。大橋康二氏の編年IV期に属する。2は、景德元寶である。直径4.5cm、厚さ0.1cmを測る。景德元寶は、中国銭で、真宗の景德元年(1004)に鑄造したものである。これは、中国銭をコピーした、鋳銭と思われる。

出土遺物を概観すると、17世紀末~18世紀前半と考えられる。III-2 a期に属する遺構である。

S X 218

S X 218は、調査区東壁付近中央寄りに位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ1.86m、幅0.58m、深さ0.36mを測る。埋土は1層で、炭化物が多量に含み、遺物も比較的多く出土し、廃棄土壌と思われる。

第175図-3は、「寛永通寶」である。直径3.6cm、厚さ0.1cmを測る。新寛永通寶で、背文はみられない。

4は、瀬戸・美濃焼磁器染付端反型碗である。口径8.9cm、器高3.8cm、高台径2.8cmを測る。外面に草花文が描かれており、口縁部に口鋸が施されている。服部郁氏の編年(服部1994年)第3期に属する。10~14は、

第176図は、丹波焼甕である。底径19.6cmを測る。体部外面に、鉄釉の化粧掛けし、その上から灰釉を流し掛けしている。内面は、横方向に灰釉をハケ塗りをして施している。外面底部は露胎で、離れ砂が周縁に付着している。この甕は、18世紀前半頃のものと考えられるが、この埋土に切られていた廃棄土壌の年代観は、17世紀末~18世紀前半のものと考えられ、この埋土はそれ以降につくられたことがわかり、甕自体は古いが、甕と同時期に使用していたと思われる、18世紀前半~18世紀中頃と考えられる。III-2 b期に属する遺構である。

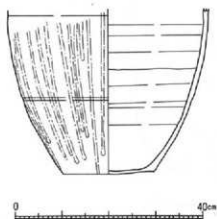
S X 206

S X 206は、調査区西側中程に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ1.16m、幅1m、深さ0.1mを測る。比較的浅い遺構であるが、埋土は3層みられ、最上層の焼土層からは、遺物や壁土が出土した。

第175図-1は、肥前磁器染付鉢である。口径14.8cm、器高7.8cm、高台径7cmを測る。全体的に得手であり、染付の呉須の発色も良好である。文様は、外面体部に桜流水車文、内面口縁部には四方樺文が描かれている。また、見込みには牡丹唐草文、高台内には「富貴長春」が



第175图 S X 206 (1·2)·S X 218 (3·4·10~16)·
 S X 222 (5·6·8·9)·包含层(7)出土遗物



第176図 SX221出土遺物

肥前磁器である。10・11は、色絵段重である。11は、段重の身である。口径14cm、器高5.7cm、高台径6.95cmを測る。区画割りに紗綾形・雷文を描き、枠内には水仙文と、もう一つは赤地に唐草文を白抜きし、丸文に兎文と波文を描いている。また、体部と底部の境目の段差部は無軸である。高台内に朱書がみられる。10は、段重の蓋である。口径13cm、器高4.3cmを測る。文様は、身部と同様である。12は、染付蓋である。口径9.2cm、器高3.1cm、つまみ径3.6cmを測る。端反型碗に伴うものと思われる。外面の文様は、仙芝祝寿文である。13は、染付端反碗である。口径10.4cm、器高5.95cm、高台径4.2cmを測る。文様は、仙芝祝寿文が描かれており、中国製品をかなり忠実にコピーしている。

おそらく、12に伴うものと思われる。高台畳付は露胎である。14は、染付碗である。口径10.2cm、器高4.9cm、高台径4.1cmを測る。高台畳付が平坦になっているタイプのものである。外面と見込みに飛鶴文が描かれている。10～14は、大橋康二氏の福年V期に属する。15は、柿釉灯明受皿である。口径10cm、器高2.1cmを測る。大型のタイプのものである。外面は無軸である。ロクロの回転は左回転である。16は、土師質土器椀付である。高さ5.15cm、最大幅3cmを測る。型合わせ成形で、合わせ目は、丁寧にヘラケズリを施している。形は、大黒天である。

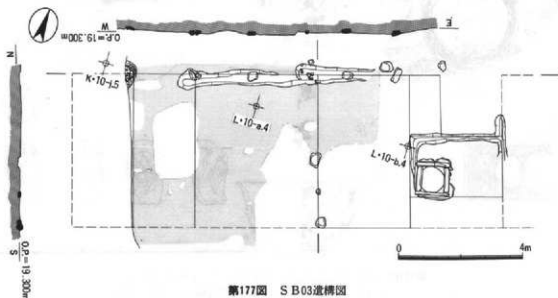
出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀中頃である。III-3 b期に属する遺構である。

包含層出土遺物

第175図一7は、寛永通寶である。直径5.5cm、厚さ0.2cmを測る。宝永5年(1798)に京都七条銭座で十文通用として鋳造された。しかし、評判が悪く、翌年1月に通用を停止した。背輪に「永久世用」の文字を鋳込みその字間には一カ所「珍」の小刻印が打ってある。

5. 第1次面の遺構と遺物

第1次面では、表土を取り除くと西側地口付近と中央から東側に三和土面を検出した。西側では、地口か



第177図 SB03遺構図

ら中央付近までSB03が建っていたことがわかった。北壁沿い中央に検出した便壺(SU01・02)は、SB03の北側の建物に伴うものと思われる。東側は礎石・礎石痕が検出できなかったので規模はわからなかった。また、東側より検出した、SA02は、近年まで続く建物の北端に一致し、それに伴うものである。さらに、SA01も近年に造られた構造物である。

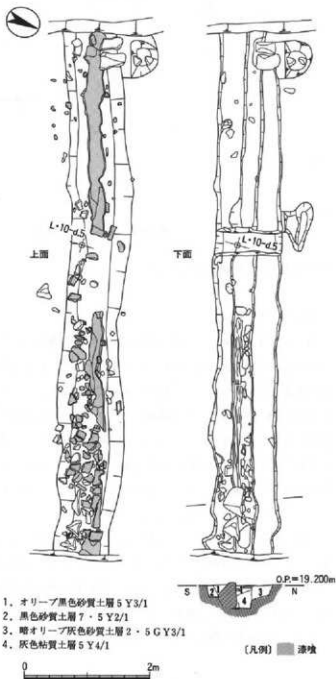
SB03

SB03は、1間を1.969mとし、桁行2間半(南北約4.9m)以上、梁行6間半(13.8m)以上の礎石建物である(第177図)。また、北側建物と三和土が連続していることから、北側の建物と棟続きの可能性はある。建物内の構造は予想は難しいが、SE01の位置から南側が通り庭と考えられる。また、三和土の下面遺構(SU309)の年代観が19世紀初頭と思われ、よってⅢ-3b期からⅣ期に属すると考えられる。

SD101

SD101は、調査区南東側に位置する(第178図・図版66)。検出長8.4m、幅1.08m、深さ0.32mを測る。屋敷境の石積溝である。このタイプのものは、その他の調査でも検出している。構造もほぼ同じである。ここでは、大きく2時期に分けることができる。1期目は、幅0.5mの掘形に、片方は木束、一方は0.5cm程の礫を敷き、その上に花崗岩石を1・2段重ね置いている。掘形から出土遺物がなかったが、他の調査区では18世紀末～19世紀前半と考えられており、この溝の築造時期もこの頃と考えられる。2期目は、1期目の上にさらに花崗岩石を重ね漆喰を敷いている。しかも何度も漆喰を塗り直していることから長期間にわたって使用していたことがわかった。Ⅲ-3期～Ⅳ期に属する遺構である。

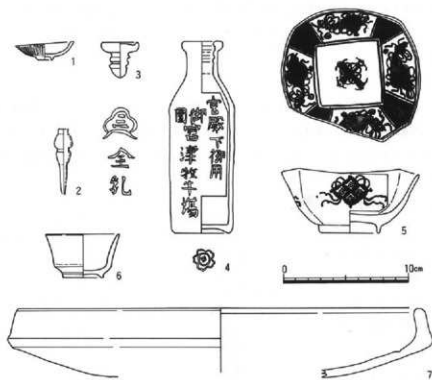
第179図一・5は、肥前磁器である。1は、紅皿である。口径4.8cm、器高1.5cm、高台径1cmを測る。型造り成形だが、体部がやや変形している。外面全体は無釉である。大橋康二氏の編年Ⅴ期に属する。5は、染付四角鉢である。一辺11.1cm、器高5.1cm、高台径4.8cmを測る。文様は、体部内外面と見込み、ゴム印判によって宝文が描かれている。2～4は、ガラス製品である。2は、スポイドである。口径0.7cmを測る。合わせ目がみられることから、型合わせ成形と思われる。体部



1. オリーブ黒色砂質土層 5 Y3/1
2. 黒色砂質土層 7・5 Y2/1
3. 暗オリーブ灰色砂質土層 2・5 GY3/1
4. 灰色粘質土層 5 Y4/1

(凡例) ■ 漆喰

第178図 SD101遺構図



第178図 S D101出土遺物

19世紀中頃～19世紀末と考えられる。

6. まとめ

D-4区は、上層の生活面の盛土整地の厚さが薄かったことと、18世紀後半～19世紀前半の遺構によって東側では古い遺構面が覆乱されていた事によって、18世紀代の遺構をはっきりとつかめなかった。ここで全体の変遷をまとめていうと、16世紀末～17世紀前半には、2×2程度の掘立柱建物が建ち、17世紀後半には、元禄の絵図にみられるような建物がたっていたと思われるが、上面の削平により、19世紀前半までの建物は調査では確認できなかった。しかし、図化しなかったが、第2次面SK202では、元禄十二年(1799)もしくは元禄十五年(1702)の焼土処理土壌を検出した。また、その上層には享保十四年(1729)の大火災の焼土層があり、焼土層の中に多くの遺物が含まれていた。この他、18世紀前半～18世紀中頃には竈を検出したことなどにより、建物の存在がうかがえる。また、18世紀後半から幕末までは、中央から東側は、廃棄土壌を多く検出したため裏庭だったと思われる。19世紀中頃になると、西側通りを間口とする棟続きの建物が建つ。また、第1次面で検出したSA02は、D-2-2区の既存建物の北端に位置する。SA02の南隣のSD01を埋めて三和土が敷かれており、SD01の上限期が第2次大戦前であるため、それ以降に建てられたと思われる。この様に、上面の遺構面によって削平され、なかなか正確に捕らえることができなかったが、そのなかでも多くの好資料を得られた。その中でも、有岡城期の溝は、この溝のひろがりを知るうえでよい結果を得られた。

の色調はコバルトブルーである。3・4は、牛乳瓶と蓋である。3は、口径3cm、器高3cmを測る。ネジ込み式の蓋である。成形は、型合わせである。4は、口径3cm、器高15.6cm、底径5cmを測る。成形は蓋と同様である。体部に「官殿下御用 御国官津牧牛場」とあり、底部には桜文のなかに「田」字がみられる。6は、土師質土器焙烙である。口径32.6cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプである。しかし、難波洋三氏の分類E類に属する。出土遺物を概観すると、

第11節 第97次調査D—6区

D—6区は、西側は猪名野神社にいたる参道（現・宮ノ前商店街通り）沿いで、北は参道と伊丹を南北に走る有馬道（産業道路）に通じる東西道路の角地にあたる。「元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郡町絵図」（第212図）によると、北小路村に属し、仁右衛門を屋敷主とし、借家人の「小物ウリ」長兵衛や九兵衛が居住していた場所に相当する。調査面積は279㎡である。

1. 基本層序

遺構面は4面検出した。地山直上層に、第3次遺構面（第180図第9層現地表面より50cm下）、その上には、第2次面で検出した細の軟土褐色土層粘質土層（第180図第15層現地表面より40cm下）が堆積していた。その上層には、明黄褐色砂質土層の整地層（第180図第14層現地表面より30cm下）が堆積し、その上に、第2次面で検出した元禄期の火災を受けた三和土の層（第180図第8層現地表面より28cm下）、さらに褐色砂質土層の整地層（第180図第6層現地表面より26cm下）、その上層には、第1次面で検出した享保14年（1729）の火災を受けた三和土の層（第180図第4層現地表面より12cm下）を検出した。

2. 第4次面の遺構と遺物

第4次面は、調査区西側を中心に遺構を検出した。西端では宮ノ前商店街の道路に並走する16世紀後半業掘溝（SD202）を検出した。その他に、調査区南西側を中心に掘立柱の柱穴が散在していた。建物は復元はできなかったが、建物の存在がうかがえる。また、これら柱穴の埋土は、一様にオリーブ色砂質土であった。この土は、これまでの周辺の調査で16世紀末～17世紀後半の包含層、または遺構のものと同判明しており、この柱穴群の所属時期もこの間に取まると考えられ、また、検出した溝などと合わせて考えると、有岡城時代から江戸初期にかけて、町屋となっていたことがわかった。

SD202

SD202は、西壁沿いに検出した（第183図）。南北7m以上、幅0.6m以上、深さ0.6mを測る。この溝は、D—4区SD301、D—2区SD401の続きであり、この調査区まで延びていることがわかった。出土遺物はなかったが、D—2区SD401の出土遺物から、16世紀後半の遺構であることが判明しており、II期に属する遺構である。

3. 第3次面の遺構と遺物

第3次面でも、敷地境を示すものは全くみられなかった。しかし、掘立柱建物や礎石建物を3棟検出した。

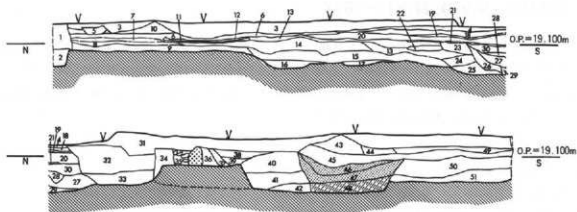
SB01

SB01は、北壁沿い東側に位置する（第184図・図版73）。桁行1間（南北1.96m）、梁行2間（東西3.94m）以上を測る。掘立柱建物である。この内の柱穴（SP409）から、唐津焼壺と政和通寶を出土した。遺物を概観すると、16世紀末～17世紀初頭と考えられ、III—1期に属する遺構である。

SP409

SP409は、調査区北壁付近東側より検出した（第184図・図版73）。平面形は楕円形を呈し、長辺0.3m、短辺0.23m、深さ0.03mを測る。

第187図—1は、唐津焼双耳壺である。底径6.2cmを測る。口縁部は残っていないのでわからないが、首部

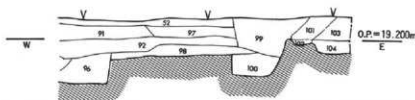
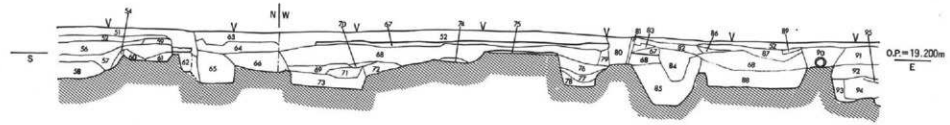
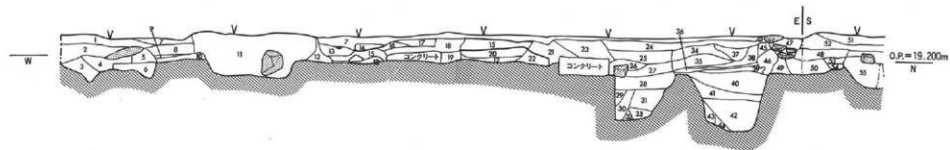


1. 黄色褐色粘質土層 2・5 Y R5/6
2. 褐色土層 10 Y R4/6
3. 灰オリーブ色土層 5 Y5/2 (雑品)
4. 浅黄色土層 2・5 Y7/4 (19世紀代の土間面)
5. 浅黄色粘土層 2・5 Y7/4
6. 褐色砂質土層 10 Y R4/4
(3～5 cmの礫多く含む、整地層)
7. 褐色粘質土層 7・5 Y R4/6
(～18世紀前半張床～享保まで)
8. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/8
(17世紀末～18世紀初頭張床～元禄まで)
9. 褐色粘質土層 7・5 Y R4/4
(第3包含層、17世紀後半)
10. 浅黄褐色粘質土層 10 Y R5/4
(5～10 cmの礫多く含む)
11. 灰黄褐色砂質土層 10 Y R4/2
12. 黄褐色土層 10 Y R5/6
(焼土、炭化物多量に含む、1次面火災面)
13. 暗灰黄色土層 2・5 Y5/2
(3～5 cmの礫多く含む)
14. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8 (整地層)
15. 褐色粘質土層 10 Y R4/6 (雑土)
16. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6
17. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/8
18. 浅黄褐色土層 10 Y R6/4
19. 黒褐色土層 2・5 Y3/1 (2回目土間)
20. 浅黄色土層 2・5 Y6/4
21. 黒褐色土層 2・5 Y3/2
22. 浅黄色土層 2・5 Y6/3
23. 暗灰黄色土層 2・5 Y4/2
24. 浅黄色土層 2・5 Y6/3
(2～5 cm大の礫多量に含む)
25. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6
26. 浅黄褐色粘土層 10 Y R6/4 (溝層)
27. 浅黄褐色砂質土層 10 Y R6/3
28. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
29. 黒褐色粘質土層 2・5 Y3/2 (溝底泥土)
30. 灰黄色土層 2・5 Y4/1
(2～10 cmの礫多く含む)
31. 浅黄色土層 2・5 Y6/4
32. 黄褐色粘土層 10 Y R5/8
33. 明黄褐色粘土層 10 Y R6/8
34. 灰オリーブ色砂礫層 5 Y4/2
(2～5 cmの礫多量に含む)
35. 暗灰黄色土層 2・5 Y4/2
(5～10 cmの礫多量に含む、石組溝込込め)
36. 灰オリーブ色土層 5 Y4/2
(2～5 cmの礫多く含む、石組溝2次溝埋土)
37. 灰色泥土層 5 Y4/1 (石組溝2次溝埋土)
38. 浅黄色土層 5 Y7/3 (石組溝1次溝埋土①)
39. オリーブ黄色土層 5 Y6/3
(石組溝1次溝埋土②)
40. 黒褐色粘土層 10 Y R3/2 (1次面の土間)
41. 灰黄褐色粘土層 10 Y R5/2
42. オリーブ褐色粘土層 2・5 Y4/4
43. オリーブ褐色粘土層 2・5 Y4/6
(2 cm大の礫多量に含む)
44. 暗オリーブ褐色粘土層 2・5 Y3/3
45. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4 (第1包含層)
46. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/6
(S K453・18世紀前半の火災地埋土坑)
47. 黄褐色土層 10 Y R5/6
(S K453・18世紀前半の火災地埋土坑)
48. 浅黄褐色土層 10 Y R5/4
(遺物、炭化物多量に含む)
(S K453・18世紀前半の火災地埋土坑)
49. 浅黄褐色土層 10 Y R4/3
50. 浅黄褐色土層 10 Y R6/3
(17世紀末～18世紀前半)
51. 黄褐色土層 10 Y R5/8

第180図 D-6区東壁土層図

から腰部にかけて、鉛軸が掛けられている。底部は無軸である。5は、輸入銭貨である。「政和通寶」である。直径3.4cm、厚さ0.1cmを測る。S P409はS B01の柱穴であるが、これらの出土状況から考えて地鎮め遺構の可能性はある。

出土遺物を概観すると、16世紀末～17世紀初頭と考えられる。III-1期に属する。

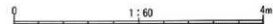


1. 褐色粘質土層 7・5 Y4/6
2. におい・黄褐色粘質土層10 Y R5/4
3. 黄褐色粘質土層10 Y R5/8
4. 褐色粘質土層10 Y R4/4
5. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
6. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
7. 暗オリーブ褐色粘質土層10 Y R3/3
8. 褐灰色粘質土層10 Y R4/1
9. 黄褐色粘質土層 2・5 Y4/4
10. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8
11. 擾乱
12. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/8
13. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
14. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
15. 暗灰黄褐色粘質土層 2・5 Y5/2
16. におい・黄褐色粘質土層 2・5 Y6/3
17. オリープ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
(20cm大の礫多量を含む)
18. 褐灰色土層 5 Y R/1
19. におい・黄褐色粘質土層 2・5 Y6/4
20. におい・黄褐色粘質土層10 Y R4/3
21. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
22. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6
23. におい・黄褐色粘質土層10 Y R4/3
(産物・5 cm大の礫多量を含む)
24. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3
25. 褐色粘質土層10 Y R4/4

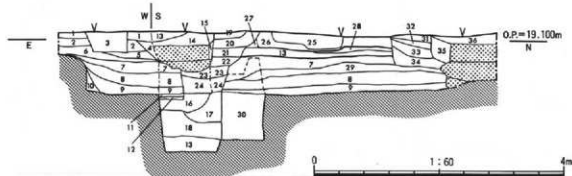
26. におい・黄褐色粘質土層10 Y R4/3
27. 褐灰色粘質土層10 Y R4/1
28. オリープ褐色 2・5 Y4/4
(5~25cm大の礫多量を含む)
29. 黄褐色粘質土層10 Y R5/6
30. におい・黄褐色砂質土層10 Y R5/4
31. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
32. におい・黄褐色粘質土層10 Y R5/3
33. 黄褐色粘質土層10 Y R5/6
34. におい・黄褐色粘質土層10 Y R5/3
35. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
36. におい・黄褐色粘質土層10 Y R5/4
37. におい・黄褐色粘質土層10 Y R4/3
38. 黒褐色粘質土層10 Y R2/3 (炭化物多量を含む)
39. におい・黄褐色粘質土層10 Y R5/4
40. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2
41. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
42. におい・黄褐色粘質土層10 Y R4/3
43. オリープ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
44. 灰オリーブ色砂質土層 2・5 Y4/6
45. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
46. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y6/4
47. 擾乱
48. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
49. オリープ褐色砂質土層 2・5 Y4/6
50. オリープ色砂質土層 5 Y5/6

51. 擾乱
52. におい・黄褐色砂質土層 2・5 Y6/4
53. 灰色粘質土層 5 Y4/1
54. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/6 (地山)
55. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
56. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y4/2
(産物・3~5 cm大の礫多量を含む)
57. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y4/2
58. におい・黄褐色粘質土層 2・5 Y6/3
59. におい・黄褐色粘質土層10 Y R5/4
60. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/6 (第2包含層)
61. におい・黄褐色粘質土層10 Y R5/3
62. におい・黄褐色砂質土層 2・5 Y6/4
63. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/3
64. オリープ黄褐色粘質土層 5 Y6/4
65. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y4/2
66. におい・黄褐色粘質土層 2・5 Y6/3
67. におい・黄褐色砂質土層10 Y R6/3
(粘土多量を含む1次面渾濁)
68. 灰白色砂質土層 5 Y7/2
(5~15cm大の礫多量を含む)
69. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/6
70. 灰黄褐色粘質土層10 Y R6/2
71. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y6/2
72. 淡黄色粘質土層 2・5 Y3/3
(8 cm大の礫多量を含む)
73. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y4/4
74. におい・黄褐色粘質土層10 Y R6/3
(5 cm大の礫多量を含む)
75. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8 (第2包含層)
76. 黄褐色粘質土層10 Y R7/8 (第2次地山)
77. 褐色粘質土層 7・5 Y R4/6

78. 黄褐色粘質土層10 Y R7/8
79. 淡黄色砂質土層 2・5 Y7/3
80. 擾乱
81. 褐色粘質土層 5 Y R6/6
82. 淡黄色砂質土層 2・5 Y7/4
83. 黄褐色土層 2・5 Y5/4
84. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3
(産物多量を含む)
85. オリープ黄褐色粘質土層 5 Y6/3
(炭化物多量を含む)
86. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y4/2
87. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/6
88. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4
89. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y4/3
90. におい・黄褐色粘質土層 2・5 Y6/4
91. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y6/2
(産物多量を含む)
92. におい・黄褐色粘質土層10 Y R6/4
(炭化物多量を含む)
93. オリープ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
94. 黄褐色粘質土層10 Y R5/8
95. 黄褐色砂質土層10 Y R7/8
96. 褐色粘質土層 7・5 Y R6/6
97. におい・黄褐色粘質土層10 Y R5/4
98. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/6
99. 黒褐色粘質土層 2・5 Y3/2
100. 明黄褐色粘質土層10 Y R6/8 (地山一遺蹟の輪郭)
101. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3
102. 黄褐色砂質土層10 Y R7/8
103. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y4/2
104. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y5/2



第181図 D-6区北壁土層図



1. におい黄褐色粘質土層10Y R5/3
2. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/3
3. 褐色粘質土層10Y R4/4
4. オリープ褐色粘質土層2・5 Y4/4
5. 褐色粘質土層10Y R4/6
6. 黄褐色砂質土層10Y R5/8
7. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
8. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/6
9. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/4
10. 黄褐色粘質土層10Y R7/8
11. 明黄褐色砂層10Y R6/8
(鉄分多く含む)
12. 黒褐色砂質土層10Y R2/3
13. 黄褐色砂質土層10Y R7/8
(10-15cm大の礫多く含む)
14. 褐色粘質土層10Y R4/6
15. 礫層
16. 明黄褐色砂層10Y R6/6
(10-15cmの礫多く含む)
17. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
(5-10cm大の礫多く含む)
18. 明黄褐色粘質土層10Y R7/6
(10-15cm大の礫多く含む)
19. 暗灰黄色粘質土層2・5 Y4/2
20. オリープ褐色粘質土層2・5 Y4/6
(5-10cmの礫多く含む)
21. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
(3-8cmの礫多く含む)
22. 褐色粘質土層10Y R4/6
(5-10cmの礫多く含む)
23. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
(5-10cmの礫多く含む)
24. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
25. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8
26. 明黄褐色砂質土層2・5 Y6/6
27. 黄褐色砂質土層2・5 Y5/6
28. 暗黄褐色砂質土層2・5 Y5/8
29. 明黄褐色砂質土層10Y R6/6
(5-10cmの礫多く含む)
30. 褐色砂質土層10Y R4/6
(10-15cmの礫多く含む)
31. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
32. 褐色粘質土層10Y R4/6
33. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
34. 褐色粘質土層10Y R4/4
35. オリープ色粘質土層5 Y5/6
36. におい黄褐色砂質土層2・5 Y6/4

第182図 D-6区西壁土層図

SB02

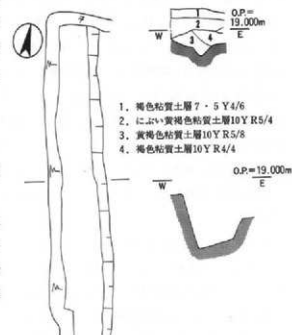
SB02は、SB01とはほぼ同位置にある(第185図・図版73)。浅い土壌SP401・SK401・SK400が2m間隔で並ぶ。これは礎石の抜き取り痕と考えられる。柱間は6尺5寸を用いるが、桁行1間(東西1.96m)以上、梁行1間(南北1.96m)の建物である。出土遺物はなかったが、おそらくSB01より後に建てられたと考えられる。III-1b期~III-2a期に属する。

SB03

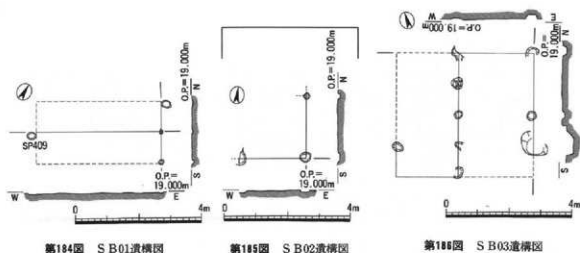
SB03は、調査区西側に位置する(第186図・図版72)。桁行2間(南北3.92m)、梁行2間(東西4.34m)を測る。掘立柱建物である。桁行は0.5m間隔で設置されていた。出土遺物は出土しなかったが、埋土が1様にオリープ色砂質土であった。この埋土は上述したが、16世紀末~17世紀後半と考えられており、この建物もこの間に取まると思われる。III-1期に属する。

SD300

SD300は、調査区東側中程に位置する(第188図・図



第183図 SD202遺構図



版73)。長さ6m以上、幅4.5m、深さ1.7mを測る。この溝は、第1次で検出したSD07の下面に位置し、この溝が作り替えられることがわかった。

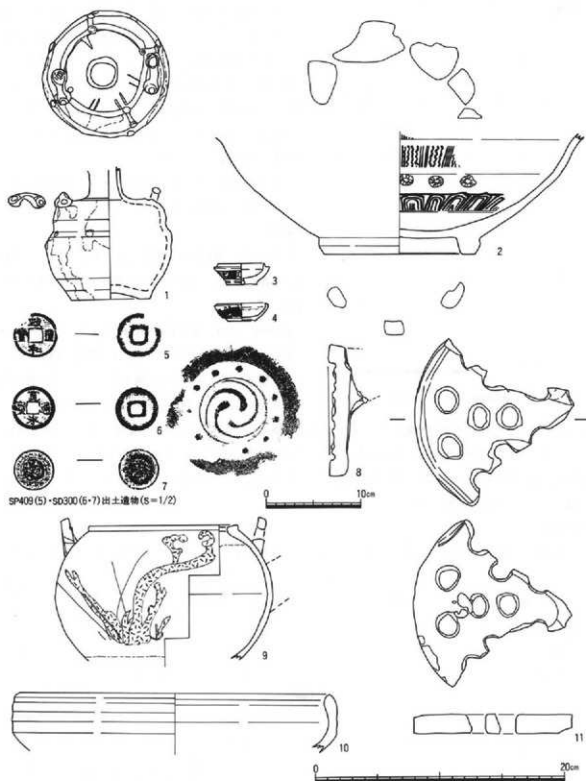
第187図一2は、唐津系陶器三島手鉢である。高台径12cmを測る。内面体部に花三島などの文様が施され、外面体部から内面にかけて施釉が掛けられている。高台部は無釉である。また、見込みと高台畳付に砂目が見られる。3・4は、肥前磁器染付合子である。3は、口径4.4cm、器高1.7cm、高台径2.4cmを測る。ロクロ成形で、全体的に厚い。体部内外面は施釉されているが、口縁部・高台部は無釉である。外面体部には、草花文が描かれている。4は、口径4.4cm、器高1.4cm、高台径2.2cmを測る。型押し成形で、外面の文様もそれに伴う。文様は紗綾形文で一部呉須を施している。口縁部と底部は無釉である。3・4は、大橋康二氏の編年(大橋1989年)Ⅴ期である。6・7は、銭貨である。6は、「寛永通寶」である。直径2.4cm、厚さ0.1cmを測る。古寛永通寶で、「寶」字の貝面末尾が「ス」であり、背文はみられない。7は、半銭である。直径3.2cm、厚さ0.15cmを測る。試鑄貨幣である。試鑄貨幣とは、試作貨幣・未発行貨幣・不発行貨幣・見本貨幣などのことを指す。表面に「大日本・明治十四年・2/1SEN」とみられ、裏面は錆が厚く読み取れなかった。8は、左巻き三ツ巴文軒丸瓦である。瓦当部径14cm、文様区径10.5cm、内区径9.5cm、周縁幅1.7cm、瓦当部厚1.8cmを測る。連続文数は11個である。調整は、瓦当周縁部と瓦当裏面周縁部は、周縁に沿ってナデ調整を、瓦当表面中央は不定方向にナデ調整を施している。瓦当部と丸瓦部の接合部は、凸部は縦方向にナデ調整、凹部は指頭圧調整後、ナデ調整を施している。9は、伊賀・信楽焼土駄である。口径12cmを測る。口縁部内外面から体部にかけて灰釉が掛けられている。外面体部には鉄釉にて草花文が描かれている。11は、瓦質煤煙のスノコである。直径16cm、厚さ1.5cmを測る。型造り成形である。10は、土師質土器焙烙である。口径25cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプである。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整、外面底部は未調整である。全体的に煤が付着している。難波洋三氏の分類(難波1992年)E類に属する。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀初頭と考えられ、Ⅲ-3期に属する遺構である。

SK450

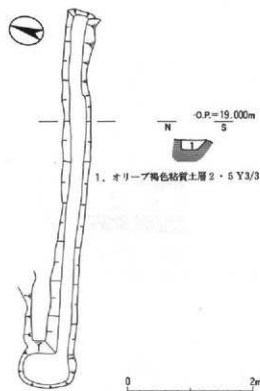
SK450は、北壁沿い東側に位置する(表1)。平面形は不整形で、長辺0.5m、短辺0.34m以上、深さ0.14mを測る。この遺構は、上面の遺構によって切られており、全体を掘むことができなかった。遺構内には、5～10cm位の礫石が数個敷かれてあり、須恵器もこの礫石に混じって出土した。

第189図一1は、須恵器長頸甕である。高台径10.6cmを測る。高台を伴うものである。高台は、比較的高くハの字形に外反する。端部は、わずかに段差があり内端部が接地する。また、高台はハリツケで体部と高台の接合部はナデ調整を施している。外面体部は回転ヘラケズリ調整、内面はナデ調整を施している。中村浩



第187図 SP409 (1・5)・SD300 (2～4・6～11) 出土遺物

氏の纏年（中村1981年）Ⅲ型式第3段階に属する。その他に、小片で図化できなかったが、中村浩氏の纏年Ⅳ型式第1段階と思われる甕などが出土し、遺物の年代観から、7世紀末～8世紀前半と考えられる。Ⅰ期に属する遺構である。

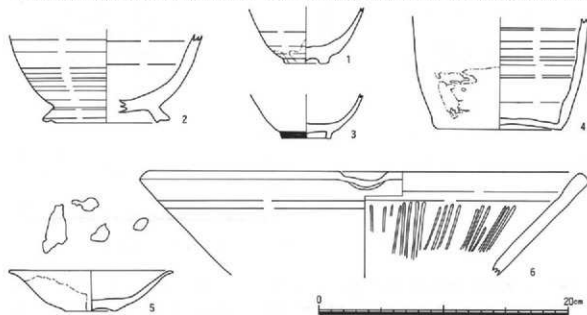


第188図 S D 300遺構図

いる。内面および外面底部は無釉である。5は、唐津焼溝線皿である。口径13.2cm、器高3.3cm、高台径4.2cmを測る。砂目積みで、内面から外面体部にかけて灰釉が掛けられている。高台には目跡3か所みられる。大橋康二氏の編年Ⅱ期に属する。遺物の年代観から、17世紀前半～17世紀後半と考えられる。Ⅲ-1 b期からⅢ-2 a期に属する遺構である。

S K 428

S K 428は、調査区中程やや北側に位置する（表1）。平面形は不整形を呈し、長さ1.4m、幅1.1m以上、



第189図 S K 412 (1)・S K 450 (2)・S K 120 (3～5)・S K 428 (6) 出土遺物

S K 412

S K 412は、北壁沿いS K 450の西側に位置する（表1）。検出時はS Kでとらえたが、南北に延びる溝と思われる。長さ1.54m以上、幅0.5m、深さ0.3mを測る。

第189図-2は、唐津焼灰釉碗である。高台径3.6cmを測る。高台は傾り出し成形で、寬っぽく浅い。内面から外面体部まで施釉されているが、外面底部は無釉である。大橋康二氏の編年Ⅰ期に属する。

出土遺物を概観すると、16世紀末～17世紀初頭と考えられる。Ⅲ-1 b期に属する。

S K 120

S K 120は、調査区中央付近に位置する（表1）。平面形は不整形を呈し、長さ0.54m、幅0.42m、深さ0.17mを測る。

第189図-3は、肥前磁器染付碗である。高台径3.8cmを測る。高台外面に具須による2本の帯線が描かれている。大橋康二氏の編年Ⅲ期に属する。4は、唐津焼徳利である。底径9.8cmを測る。外面体部に灰釉が掛けられて

深さ0.17mを測る。

第189図一6は、丹波焼鉢である。口径34.8cmを測る。口縁端部と体部が直角になるタイプで、内面体部の摺目は6本単位である。内面口縁部に凹線を持ち、片口がみられる。調整は、口縁部内外面はココナア調整、内面体部はナア調整、外面体部にユビオサエ痕が若干みられる。長谷川真氏の型式分類(長谷川1988年)のIIA 2類に属する。よって、16世紀末～17世紀前半と考えられ、III-1 b期に属する遺構である。

SK454

SK454は、SK450の東側に接する遺構である(表1)。平面形は不整形を呈し、長辺0.4m、短辺0.38m、深さ0.08mを測る。

第190図一1は、須恵器杯身である。口径15cm、器高3.7cm、高台径10cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、やや直立気味にのびるハの字の高台を呈す。外面体部・底部に回転ヘラケズリ調整がみられる。中村浩氏の福年IV型式1段階に属する。SK450に関連する混入遺物と考えられる。4は、丹波焼鉢である。口径19cmを測る。内面は無軸であるが、外面には塗土を施している。

出土遺物を概観すると、17世紀後半と考えられる。III-2 a期に属する遺構である。

SK453

SK453は、調査区東南隅に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長辺3.48m、短辺1.46m、深さ0.42mを測る。廃棄土壌である。埋土は3層であったが、第2層が焼土層で、その中から多量の瓦と遺物が出土した。出土遺物の年代から、享保14年(1929)の北少路村の大火災の際の処理土壌と考えられる。

第190図一2は、唐津系陶器刷毛目文碗である。口径5.25cm、器高4.85cm、高台径1.9cmを測る。素地に白化粧土で回転刷毛目文を装飾している。見込みには蛇ノ目軸ハギを施している。高台畳付は露胎である。大橋康二氏の福年IV期に属する。4・6は、土師質土器である。4は、皿である。口径10.6cm、器高6.2cmを測る。胎土はlight yellowish orange 9 Y R 8.5/5を呈する。口縁部に灯芯痕がみられ灯明皿として使用していたのだろう。手づくね成形で、調整は、口縁部内外面はココナア調整、内面底部はナア調整、外面底部は指頭圧調整を施している。IT(伊丹町期)1型式B類に属する。6は、焙烙である。口径28cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプである。口縁部内外面はココナア調整、内面底部はナア調整、外面底部は未調整である。難波洋三氏の分類E類に属する。5は、丹波焼鉢である。口径5.8cm、器高6.15cm、底径9.15cmを測る。外面体部から内面にかけて、塗土が施されている。見込みにはユビオサエ痕がみられる。7は、上臼である。花崗岩製である。直径25.5cm、高さ12cmを測る。体部には、挽き手を挿入する方形の孔を2カあけている。臼上面はやや浅く凹み、下面は4条1単位の目が8単位彫られている。

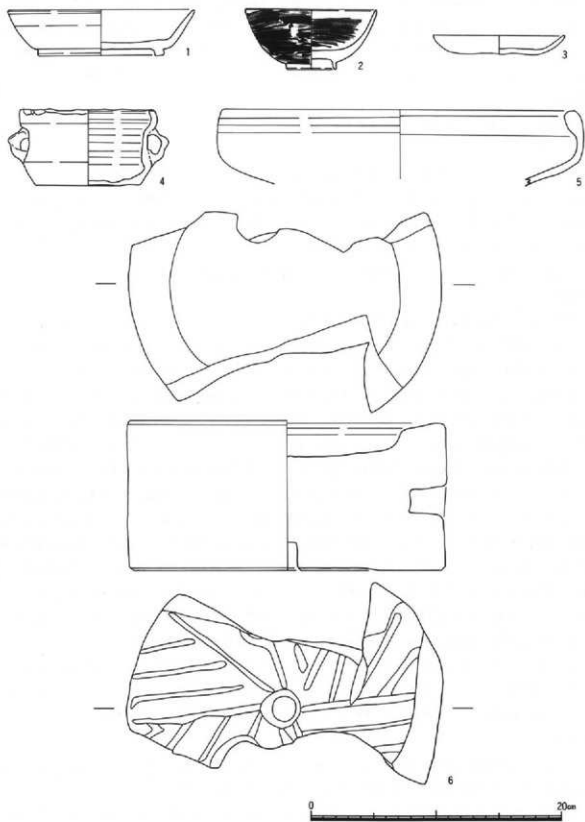
第191図一1・2は、花崗岩製下臼である。1は、直径25.2cm、高さ11.9cmを測る。上面の目は、4条1単位の目と8単位彫られている。2は、直径29cm、高さ9.6cmを測る。上面に5条1単位の目が8単位みられる。

出土遺物を概観すると、17世紀後半～18世紀初頭と考えられ、III-2 a期に属する遺構である。

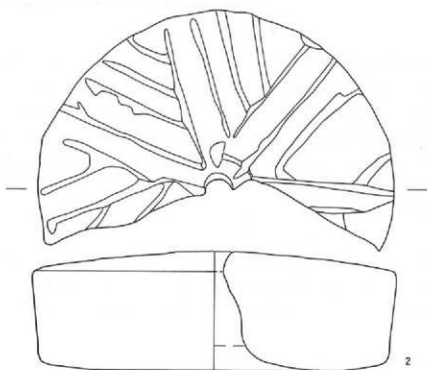
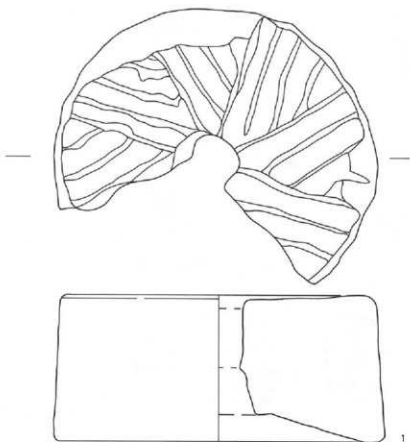
SK438

SK438は、調査区西北隅に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長辺0.57m、短辺0.5m、深さ0.28mを測る。本来は、第2次面の遺構と考えられるが、覆土が厚く検出できなかった。

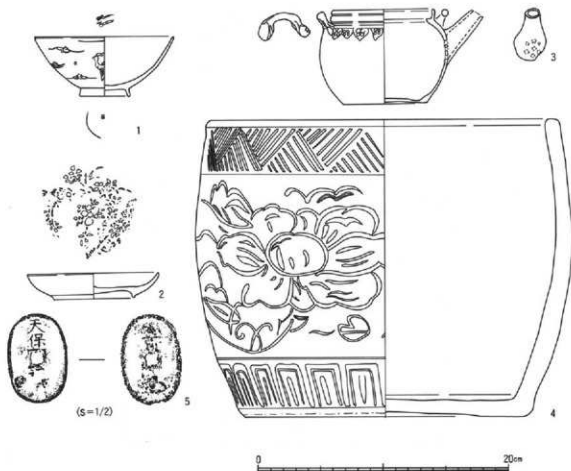
第192図一1は、肥前系磁器染付碗である。口径11.2cm、器高4.7cm、高台径4cmを測る。外面体部に鳳凰文・雲文、見込みには鳳凰文が描かれている。高台畳付は露胎である。2は、クロム青磁である。口径10.6cm、器高2cm、高台径6.4cmを測る。産地は肥前系の可能性が高い。内面に緑釉と白土により草花文が描かれている。高台畳付は露胎である。3は、常滑焼朱泥急須である。口径8cm、器高7.5cm、底径7.5cmを測る。



第190図 SK454 (1)・SK453 (2~6) 出土遺物



第191圖 S K453出土遺物



第192図 SK436出土遺物

注ぎ口は、茶漉し部分は体部に穴を明け、注ぎ口を張付けている。体部にスタンプ印で文様が描かれている。5は、「天保通寶」である。縦9.9cm、横3.2cm、厚さ0.25cmを測る。この銭貨は、天保6年（1835）に金座番所仮吹所で百文銭として鑄造が始められた。当時、形が小判に似ていることから、金銀に次ぐ貨幣として使われたが、盗鑄民鑄の影響で価値は下落したが、断続的に明治頃まで鑄銭された。4は、三田焼青磁印花文鉢である。口径27.9cm、器高23.8cm、底径22.2cmを測る。外面の文様は、体部の花文は印花文、口縁部の檢垣文・底部の雷文はヘラケズリにて施している。

出土遺物を概観すると、19世紀前半～19世紀後半と考えられる。Ⅲ-3 b期に属する。

SD800

SD800は、調査区東側トレンチ第3次面で検出した（表1）。長さ1.2m以上、幅0.5m以上、深さ0.34mを測る。屋敷境の溝である。南北に延びると思われる。小片で図化しなかったが、肥前磁器染付碗の大橋康二氏の編年Ⅲ・Ⅳ期のものが出土し、18世紀前半の年代観と考えられる。Ⅲ-2 a期に属する。

4. 第2次面の遺構と遺物

第2次面では、調査区西側と東側では様相が違う。西側は、三和土は検出されなかった。しかし、西側道路入口付近から礎石跡・柱穴を検出し、掘立柱建物S B04、礎石建物S B05が存在していたことがわかった。また、これらの建物の東側より、多くの廃棄土壌がみられ、裏庭となっていたことがわかる。

東側は2時期の遺構を検出した。1期目は、裏庭に畑をもつ建物が建っていた時期でもある。検出した畑

の敵(SX01-04)は、北側道路端から4mの所より検出した。「延宝五年(1677)伊丹御町地味委細絵図」(第212図)をみると、屋敷の裏側に畑が描かれている。このことから、道路から4mの範囲で建物が建っていたと考えられ、この時期の建物は、奥行き2間程の建物であったことが想定できた(川口1991年)。

2期目は、第1次面と第2次面の途中の面と思われ、部分的だが北側道路より南側へ約7mの地点まで火災をうけた三和土を検出した。三和土は、1期目で検出した畑の上に敷かれており、SD09付近まで見られた。おそらく、奥行き4間半程度に規模が拡張したと思われる。また、北壁沿いに焼土処理土壌(SK343)を検出し、出土遺物から元禄12年(1699)か元禄15年(1702)の大火災の跡と思われる。

SB04

SB04は、調査区西側に位置する(第193図・図版73)。桁行2間半(南北4.92m)、梁行3間(東西5.9m)を測る。掘立柱建物である。遺物は出土しなかったが、上面の遺構の切り合いから、17世紀中頃から17世紀後半と考えられる。III-2 a期に属する。

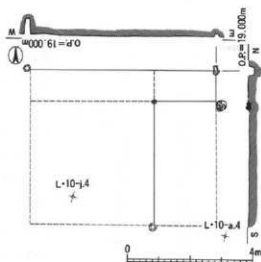
SB05

SB05は、SB04とはほぼ同じ場所に位置する(第194図・図版72)。桁行1間(南北1.969m)以上、梁行1間(南北1.969m)以上を測る。これもSB02でみられたような浅い土壌(SK101・SK111・SK109)を検出した。これも礎石を抜き取った痕と思われ、礎石建物と考えられる。柱間は1.969m間隔で並んでいた。出土遺物はなかったが、上面の遺構(SK10)の切り合いから17世紀後半～17世紀末と考えられる。III-2 a期に属する。

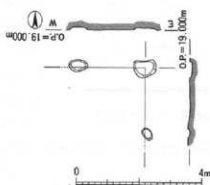
SE329

SE329は、調査区中央より検出した(第195図)。平面形は不整形を呈し、長辺1.15m、短辺0.82m、深さ2.9mを測る。土壌で取り上げたが、後に井戸であることがわかった。

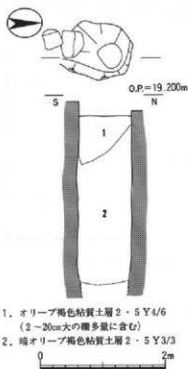
第197図-1～4は、肥前磁器である。1は、色絵小杯である。高台径2.8cmを測る。外面に黄色釉を全面に掛け、その上から赤絵具で文様を描いている。高台内に銘がみられる。2は、染付碗である。口径9.4cmを測る。口縁部内外面に嬰塔文、外面体部には唐子文が描かれている。3は、染付皿である。口径13.8cm、器高3.8cm、高台径7.6cmを測る。外面体部は折れ松葉文、内面体部は草花文が描かれている。見込みはコンニャク印判による五弁花文を、高台内には渦福の銘がみられる。4は、青磁染付筒型碗である。口径4.1cm、器高7.1cm、高台径2.2cmを測る。文様は、内面口縁部に四方學文、見込みにコンニャク印判による五弁花文が描かれている。1～4は、大橋康二氏の編年IV期に属する。5～7は、土師質土器である。5は、皿である。口径9cm、器高2cmを測る。胎土にはふい橙色7.5Y R 7/3を呈する。やや厚めで、口縁部内外面に灯明芯が5カ所みられる。手づくね成形で、調整は、口縁部内外面はヨコナデ調整、内面底部はナデ調整、外面底部



第193図 SB04遺構図



第194図 SB05遺構図



1. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
(2~20cm大の層多量に含む)
2. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3

第195図 SE 329遺構図

は指頭圧調整を施す。1 T (伊丹御町期) 2 型式A類に属する。6は、器種はわからないが、ミニチュア製品か? 縦7.1cm、横4cm、厚さ3.8を測る。型合わせ成形で、合わせ目をナデ調整し、先部に直径0.2cm位の孔が2カ所みられる。7は、大黒型芥子面子である。縦2.7cm、横3cm、厚さ1.2cmを測る。表面にくぼみを持ち、指頭圧痕がみられる。芥子面子は、小児か指の腹に付けて遊ぶとされているため、裏面にくぼみをつけている。また、19世紀初頭頃賭博遊びが禁止されると、銭貨の代用として遊ばれたりした。8は、伊賀・信楽焼鉄軸土鍋である。口径16.8cm、器高6.9cm、底径6.6を測る。内面から外面体部にかけて鉄軸が掛けられ、外面底部は無軸である。また、外面底部に煤が付着している。9は、右巻き三ツ巴文軒丸瓦である。全長(残)7.45cm、瓦当部径13.9cm、文様区径9.6cm、周縁幅2.4cm、瓦当部幅1.8cmを測る。調整は、顎下部は周縁に沿ってナデ調整、瓦当表面周縁部は円周に沿ってナデ調整、瓦当裏面は不定方向にナデ調整を施している。また、瓦当部と丸瓦部の接合部は凹部は指頭圧痕とナデ痕がみられ、凸部には周縁にそってナデ調整が施している。丸瓦部には縦方向にヘラケズリ調整を行っている。瓦当部表面に雲母が付着している。

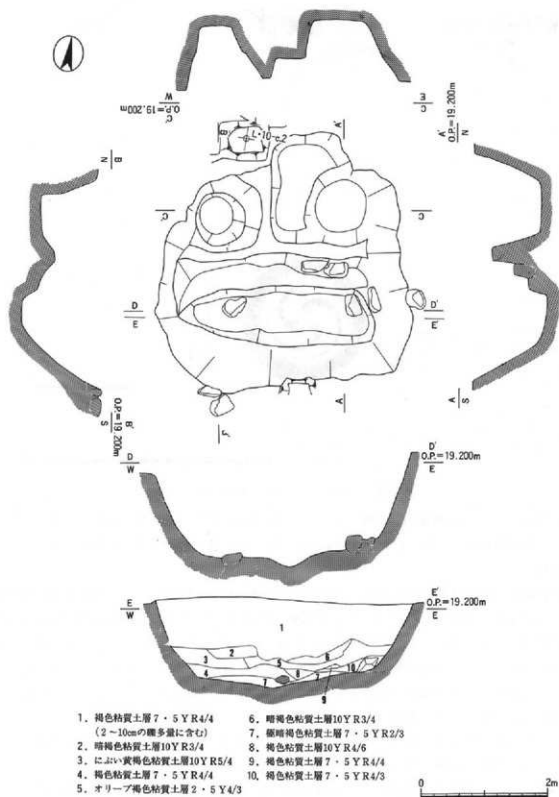
出土物を概観すると、18世紀後半~19世紀初頭と考えられ、III-3 a期に属する遺構である。

S K 300

S K 300は、南壁沿い東隅に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長辺4.1m、短辺2.44m、深さ0.4mを測る。廃棄土壌で18世紀後半~19世紀前半の遺物がまぎって出土した。

第198図-1は、中国製青花皿である。高台径6.1cmを測る。漳州窯系のものと思われる。高台内は無軸を呈し、内面に蓮文、外面に山水文が描かれている。2は、肥前系磁器染付燗反碗である。口径11.5cm、器高6.1cm、高台径4.8cmを測る。外面体部・内面口縁部・見込みに山水文が描かれている。高台畳付は露胎である。3は、伊賀・信楽焼碗である。口径8.7cm、器高5.9cm、高台径6.1cmを測る。内面から外面体部にかけて灰軸が掛けられている。高台は無軸である。4は、中国製青花散り連華である。幅4.7cm、深さ2.3cmを測る。呉須の発色が良好で、内面に牡丹唐草文が丁寧に描かれている。景徳鎮窯の製品と考えられる。5は、瀬戸・美濃焼鉢である。口径20.6cm、器高6.8cm、高台径10cmを測る。内面から外面体部にかけて調縁軸が掛けられ、外面底部は塗土が施されている。口縁部は輪花のように窪みがみられる。内面の文様はスタンプ印による。6は、伊賀・信楽焼鉄軸土鍋である。口径21.2cm、器高13cm、底径9cmを測る。内面から外面体部にかけて鉄軸が掛けられている。外面底部は無軸で、脚が三足みられる。7は、右巻き三ツ巴軒丸瓦である。瓦当部径13.5cm、文様区径9.5cm、内区径4cm、周縁幅2cm、瓦当部厚2cmを測る。連珠文は13個を数える。瓦当周縁部にナデ調整がみられ、瓦当裏面周縁部は周縁に沿ってナデ調整を施している。また、瓦当部と丸瓦部の接合部はナデ調整。丸瓦部凹部には接合するためのクシ目がみられる。

第199図-1は、陶質窯道具である。底径9cm、厚さ9cmを測る。用途は不明である。体部に自然釉が付着している。2は、土師質土器風炉である。口径31.2cm、器高25.2cm、底径25.6cmを測る。焔炉の一種である。口縁から底面までの大きな切り込みを持ち、出窓を有する。このような形を「船カマド」ともいう。粘土円盤に粘土紐輪積み成形し、外面は丁寧にヨコナデ調整を施している。外面口縁部に粘土紐をハリツケ凸凹状



第186図 S X 362遺構図



第197図 SE329 (1~9)・SX362 (10) 出土遺物

の帯を施している。底部外面に離れ砂痕がみられ、三角の脚を有する。内面に煤が付着している。

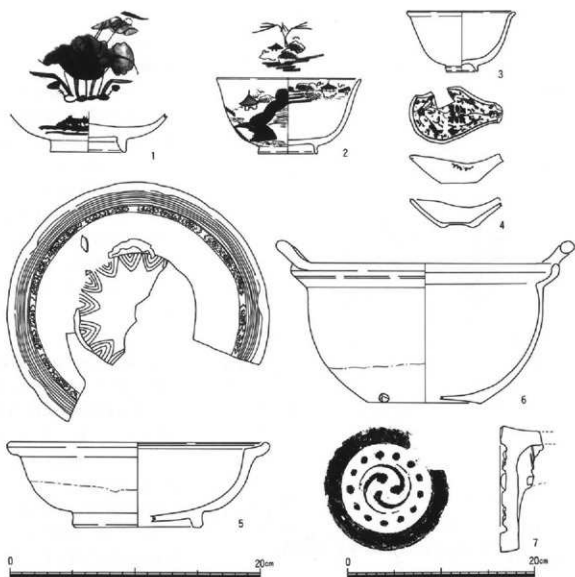
出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられ、III-3 a 期に属する遺構である。

SX362

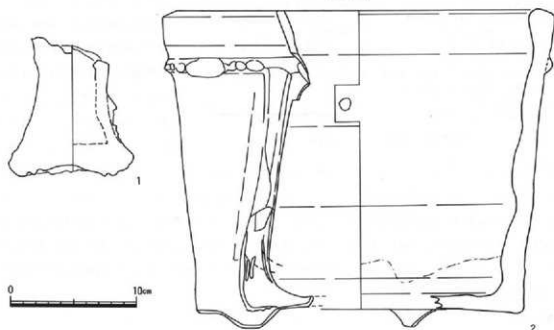
SX362は、調査区東側中央に位置する(第196図)。平面形はほぼ正方形を呈し、一辺3.3m、深さ1.4mを測る。この遺構は、中央がやや盛り上がり、その北及び南側は低くなっている。北側は、直径0.6m、深さ0.8mの凹部が2カ所みられる。また南側は、東西に深く掘られ、端には石が置かれていた。その中央には方形の凹部がみられた。この様な遺構は、伊丹郷町の他の調査でも検出されており、酒造工程の「搾り場」の遺構と考えられている。この遺構の場合、南側の凹部は男柱跡と考えられ、酒を搾る「船」と呼ばれる長方形の大型木箱は、男柱を中心に東西に2カ所あると考えられる。

ここは、元禄の絵図では町屋となっている。さらに、享保14年(1729)大火災でここは火災に遭い、その後町屋になっており、非常に短い間だけ酒造業を営んでいたのではないかと考えられる。

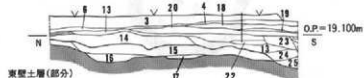
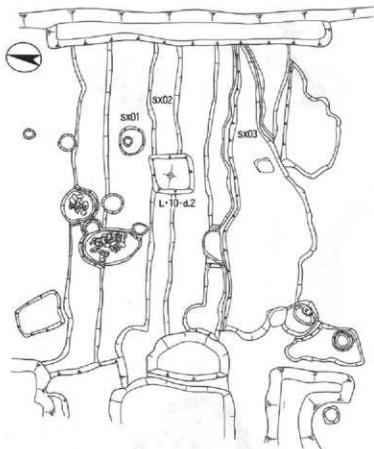
第197図-10は、唐津焼灰輪碗である。高台径4.5cmを測る。内面から外面体部にかけて灰釉が掛けられている。高台は無釉である。大橋康二氏の編年II-1期に属する。そのほかに、図には載せなかったが、肥前磁器染付碗や土師質土器焙烙(難波洋三氏の分類E類)などが出土し、17世紀末～18世紀初頭と考えられる。



第188圖 SK300出土遺物(1)



第189圖 SK300出土遺物(2)



東壁土層(部分)

- | | |
|--|---|
| 3. 灰オリーブ色土層 5 Y5/2 (壁土) | 18. におい黄褐色土層 10 Y R6/4 |
| 4. 浅黄色土層 2・5 Y7/4
(19世紀代の土間面) | 19. 黒褐色土層 2・5 Y3/1 (2回目の土間) |
| 6. 褐色砂質土層 10 Y R4/4 (築地層)
(3~5cmの礫多く含む) | 20. におい黄色土層 2・5 Y6/4 |
| 13. 暗灰黄色土層 2・5 Y5/2
(3~5cmの礫多く含む) | 22. におい黄色土層 2・5 Y6/3 |
| 14. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8 (築地層) | 23. 暗灰黄色土層 2・5 Y4/2 |
| 15. 褐色粘質土層 10 Y R4/6 (畑鉄土) | 24. におい黄色土層 2・5 Y6/3
(2~5cm大の礫多量を含む) |
| 16. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6 | 25. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6 |
| 17. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/8 | |

第200図 SX01・02・03遺構図

南側は三和土が検出されなかったことと、土壌が多いことから裏庭ではなかったかと考えられる。東側では、『元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹町絵図』をみると、4軒分敷地が存在していたことがわかる。しかし、今回の調査では屋敷境を確認できなかった。しかし、検出した三和土が敷地いっぱいにかけており、棟続きの建物だった可能性がある(川口1991年)。また、東側では井戸を3カ所検出した。第1次面で検出したS E01は、近年まで使用されており、残りのS E329・S E42とそれぞれ時期差があり、時代を通して共用していたものと考えられる。

SP17

S P17は、調査区中央や西側に位置する(表1)。平面形は円形を呈し、直径0.42m、深さ0.122mを測

III-2 a 期に属する。

S X01~04

S X01~04は、調査区東側中央から南側で検出した(第200図・図版73)。それぞれ平均で検出長5m、幅0.5mを測る。上記でもいったが、畑の畝遺構である。この畝を覆っていた築地層の年代観が、17世紀後半の遺物を含んでおり、その頃までは畑地だったと思われる。III-1 b 期~III-2 a 期に属する。

5. 第1次面の遺構と遺物

第1次面では、礎石が検出されず、建物の範囲及び内部構造を復元できないが、残存する三和土によってだいたいの範囲を撰むことができた。

調査区域西部は、西側道路より7.5mまで三和土を検出された。三和土より東側は土壌が多く、井戸も検出され第2次面同様に裏庭ではなかったかと考えられる。

調査区域東部は、南側に東西に延びる屋敷境界の石組溝があり、北側道路から石組溝までは約10mを測る。その間に火災にあった三和土が検出されたので、溝まで建物があったと考えられる。溝より

る。

第204図-1は、肥前磁器である。口径9cm、器高3.3cm、高台径6cmを測る。器種は不明で、元は瓶類と思われ、口縁を磨いたか研いだかで再利用している。大橋康二氏の編年IV期に属する。よって、17世紀末～18世紀前半である。Ⅲ-2期aに属する。

SP07

SP07は、調査区南壁西側に位置する(表1)。平面形は円形を呈し、直径0.5m、深さ0.195mを測る。

第204図-2は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。口径12cmを測る。内面から外面体部まで鉄軸が掛けられている。藤澤良祐氏の本業焼編年(藤澤1988年)年I期4類に属する。

出土遺物を概観すると、17世紀後半と考えられ、Ⅲ-2期aに属する遺構である。

SU01

SU01は、調査区中程やや北西部に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長さ0.53m、幅0.44m、深さ0.17mを測る。木桶遺構と考えられるが、残存状態が悪く図化できなかった。

第204図-3・4は、土師質土器である。3は、擦り棒である。長さ7.4cm、厚さ2cmを測る。両端部に黒色の付着物がみられ、一方には長さ1cmの切り込みがある。4は、皿である。口径8.2cm、器高1.6cmを測る。内面は丁寧にナデ調整を施し、外面は指頭圧調整がみられる。

出土遺物を概観すると、18世紀後半と考えられる。Ⅲ-3a期に属する。

SY03

SY03は、調査区中程東側に位置する(第201図)。掘形の平面形は円形を呈し、内径の直径0.23m、掘形の直径0.36m、深さ内径・掘形共に0.19mを測る。水琴窟遺構である。甕をただ逆さまにしただけの簡単なものである。

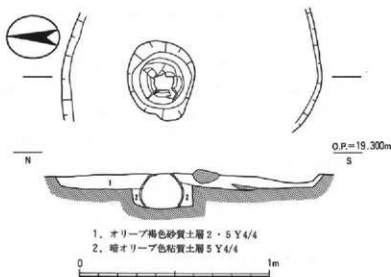
第204図-6は、丹波焼甕である。口径19.1cm、器高17.8cm、底径11.8cmを測る。外面口縁部下から体部中央にかけて細かい沈線がみられる。内面口縁部から外面体部に掛けて塗土が施されている。内面及び外面底部は無釉である。

出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半と考えられ、Ⅲ-3a期に属する遺構である。

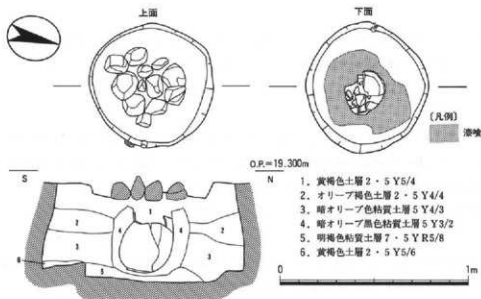
SY29

SY29は、調査区南側中央に位置する(第202図・図版74)。平面形は円形を呈し、内径の直径0.22m、深さ0.35m、掘形の直径0.66m、深さ0.53mを測る。水琴窟遺構である。直径10～15cm位の礫の上に置き、それを取り除くと漆喰が敷かれており、丁寧に造られている。

第205図-1は、丹波焼甕である。口径35cm、器高35.8cm、底径17.4cmを測る。口縁上部は平状になり外側に傾いている。体部は外側に張りだし丸味を帯びている。外面底部以外に塗土を施し、外面口縁部外縁帯下より灰釉を流し掛けしている。



第201図 SY03遺構図



第202図 SY 29遺構図

底部に目跡が7カ所みられる。橋崎彰一氏の編年江戸IV期に属する。

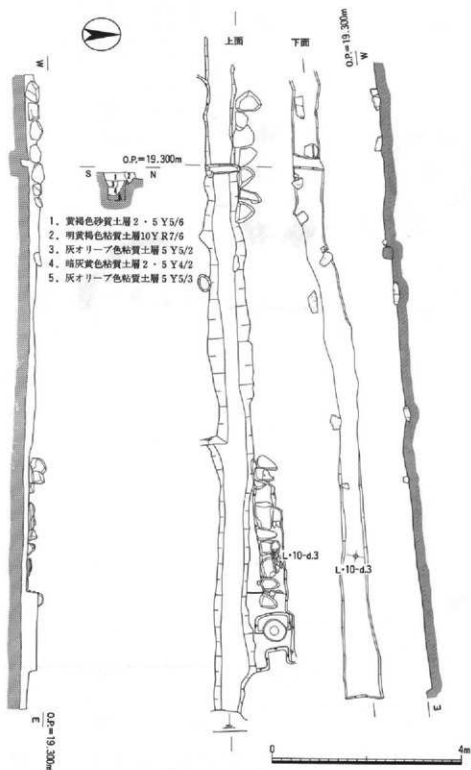
出土遺物を概観すると、18世紀末～19世紀前半と考えられ、III-3 a 期に属する遺構である。

SD09

SD09は、SY03の南側に位置する(第203図・図版74)。この溝は3回作り変えられていたことがわかった。古い方から、第1次溝は、東西15m、幅0.8m、深さ0.25mを測る。第2次溝は、東西約13m、幅0.7m、深さ0.25mを測る。第3次溝は、東西約13m、幅0.65m、深さ0.3mを測る。第1次溝は、素掘りの溝で、第2次溝の時に石積の溝に造り替えている。

第204図-5は、肥前磁器紅皿である。口径4.5cm、器高1.5cm、高台径1.4cmを測る。型造り成形で、外面体部から底部にかけて無軸である。大橋康二氏の編年V期に属する。この遺物は第3次溝掘形出土遺物である。7～9は、肥前磁器である。7は、染付碗である。口径10.1cmを測る。体部はやや厚手であり、「くらわんか手」のものと思われる。呉須の発色は良好である。文様は、桐文はコンニャク印判によって施され、それ以外は手書きである。8は、青磁染付碗である。口径11cm、器高4.5cm、高台径6.3cmを測る。内面口縁部に四方準文、見込みにはコンニャク印判による五弁花が施されている。高台内に一重方形枠内に渦福の銘がみられる。7と8は、大橋康二氏の編年IV期に属する。9は、染付紅皿である。口径4.2cm、器高1.7cm、高台径2cmを測る。型造り成形、外面の文様は銅判摺による。大橋康二氏の編年V期に属する。10は、右巻き三ツ巴文軒丸瓦である。周縁幅1.7cmを測る。調整は、瓦当周縁部は周縁に沿ってナデ調整、瓦当表面には指頭圧痕がみられる。瓦当部と丸瓦部の接合部は、凸部はナデ調整、凹部は指頭圧調整を施している。また、瓦当部の接合部にクシ目を入れている。7・9～10の遺物は第2次溝掘形出土遺物である。8は、丹波焼甕である。口径38cmを測る。口縁部内面から外面体部にかけて塗土が丁寧な掛けられている。内面に煤が付着しており、火入れとして使用されていたのではないかと考えられる。この遺物は第1次溝掘形出土遺物である。

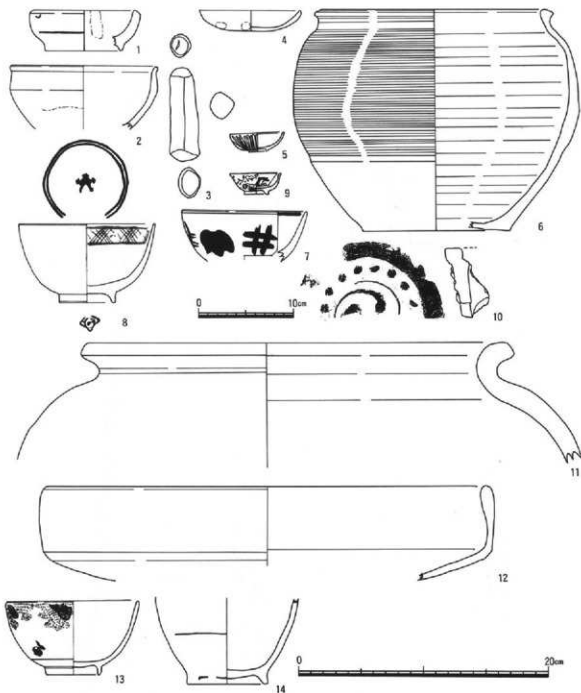
出土遺物を概観すると、第1次溝は18世紀前半、第2次溝は18世紀後半～18世紀末、第3次溝は18世紀末～19世紀前半と考えられる。この事により、18世紀前半頃に造られ、18世紀後半～18世紀末頃に造り替えられたと思われる。III-2 b 期からIII-3 a 期に属する遺構である。



SK150

SK150は、北壁沿いに位置する(表1)。平面形は長方形を呈し、長さ3.3m、幅1.3m、深さ0.64mを測る。焼土処理土壌である。第1次面の三和土を切って埋められており、この遺構によって火災時期が判明した。

第204図一12は、土師質土器焙烙である。口径35cmを測る。口縁部と底部が直立するタイプである。内面体



第204図 SP17 (1)・SP07 (2)・SV01 (3・4)・SY03 (6)・
SD09 (5・7~11)・SK150 (12~14) 出土遺物

部から外面体部はヨコナエ調整、内面底部はナエ調整を、底部と体部の接合部をヨコナエ調整を施している。また、外面底部に煤が付着している。難波洋三氏の分類E類に属する。13・14は、肥前磁器である。13は、染付碗である。口径10.6cm、器高5.9cm、高台径4.4cmを測る。体部は薄手を有する。外面の文様は、呉須の発色は良好で、点描地に桜文が描かれている。高台畳付は露胎である。14は、染付瓶である。高台径6.6cmを測る。火災に遭ったのか体部全体が変色している。13は、大橋康二氏の編年Ⅲ期、14は、Ⅳ期に属する。

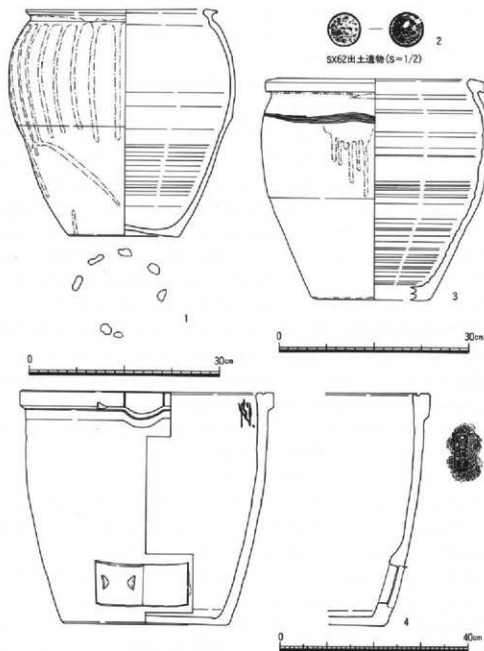
出土遺物を概観すると、17世紀末~18世紀前半と考えられる。このことから、享保14年(1729)の北小路村の大火災の際の焼土処理土壌と思われる。Ⅲ-2 a 期に属する遺構である。

SK11は、調査区西側中央に位置する(表1)。平面形は不整形を呈し、長辺0.9m、短辺0.68m、深さ0.43mを測る。III-3b期に属する遺構である。廃棄土壌であるが、19世紀中頃～19世紀末頃の遺物がまとまって出土した。埋土は1層で一期に埋められたと思われる。

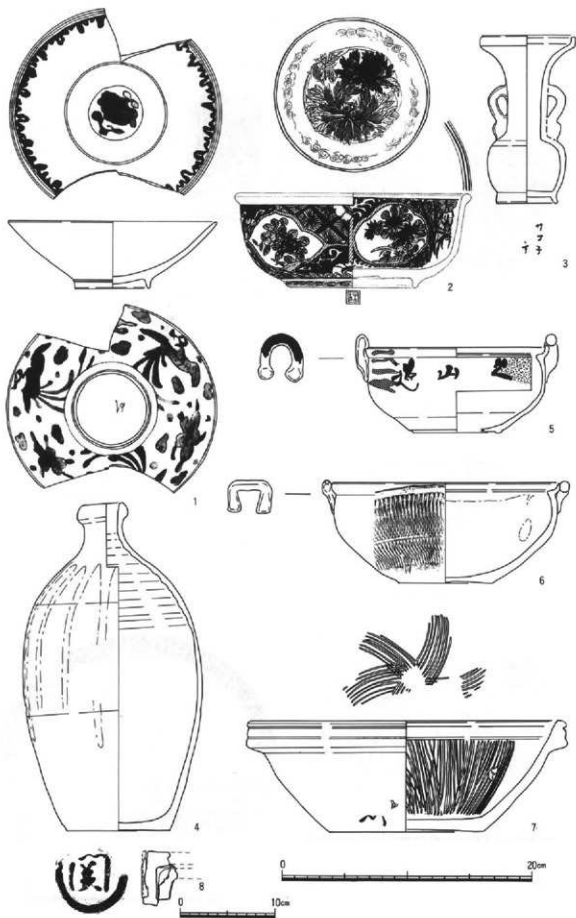
第206図一1は、染付磁器鉢である。口径16.6cm、器高5.4cm、高台径6cmを測る。器壁が平形に開く「うがい茶碗」に似たタイプの鉢である。口縁部に口縁がみられる。外面体部に鳳凰文、内面口縁部に波文、見込みに牡丹文が描かれている。産地は関西周辺のものと考えられる。高台内に朱書で文字が書かれている。2は、肥前磁器色絵鉢である。口径18cm、器高7.5cm、高台径10cmを測る。底部から体部・口縁部にかけて真直ぐに立上がり、口縁部が外側に向き口縁部先端はまるみを有する。高台は、蛇ノ目凹形高台である。体部内外面の文様は、窓に蜘蛛文・菊文・牡丹文が描かれ、窓の四方に四方禪文と花唐草文がみられ、高台部に連弁文・渦文が描かれている。また、見込みの文様は渦文・牡丹文である。絵付けには、呉須をはじめ赤色・黒色・緑色などの釉が使用されている。有田窯の製品と思われる。大橋康二氏の編年V期に属する。3は、信楽焼銅緑釉仏花瓶である。口径7.2cm、器高13.3cm、底径4.8cmを測る。内面体部から外面体部にかけて、銅緑釉が掛けられ、底部は無釉である。この信楽焼銅緑釉の製品は、伊丹では19世紀後半以降から出土し始める。底部内に墨書がみられる。4、丹波焼徳利である。口径3.3cm、器高26.15cm、底径8.2cmを測る。揚げ徳利である。内面口縁部から外面体部にかけて栗皮釉を施し、その上から灰釉を掛けている。底部は無釉である。5・6は、鍋である。5は、口径14.1cm、器高7.9cm、高台径7cmを測る。高台を持ち、内面体部から底部にかけて灰釉を施し、外面口縁部から体部に白土釉を掛け、瑠璃釉で文字・文様を描いている。また、所々に赤色釉・緑釉を施している。また、外面底部には煤が付着している。産地は不明だが、関西周辺のものと考えられる。6は、口径18cm、器高8.2cm、底径7.6cmを測る。内面体部から底部にかけて灰釉が掛けられ、それ以外は無釉である。外面体部にトビカンナにより文様が施されている。外面底部に煤が付着している。産地は伊賀・信楽系と考えられる。7は、明石焼磁鉢である。口径24.4cm、器高8.8cm、底径12cmを測る。胎土は明赤褐色を呈する。口縁のつくりは、外へやや張り出し断面が三角形に近い形をしている。外面の調整は、底部際から口縁部外縁帯まで軽く回転ヘラズリを施している。内面体部の描目は11本を1単位とするものが密に施され、見込みの描目は放射状に8本を1単位とするものが6単位あると考えられる。外面底部に墨書がみられる。8は、軒瓦である。軒丸瓦部の文様区径5.1cm、周縁幅4cm、瓦当部厚2.2cm、軒平瓦部の瓦当部幅4.5cm、顎下部厚1.7cmを測る。調整は、軒丸瓦部は瓦当部周縁部端にはヘラズリにより面取りがみられ、瓦当全体に雲母が付着している。瓦当裏面は軒平瓦部との接合部にはナゲ調整を施している。軒平瓦部は、瓦当面に丁寧なナゲ調整を施し、周縁端部にはヘラズリにより面取りをしている。裏面はナゲ調整を施しているだけである。軒丸瓦部瓦当の文様は「関」である。

第207図一1は、王地山焼六方人物文火入である。口径16cm、器高18.6cm、高台径15.6cmを測る。王地山焼は、兵庫県多紀郡篠山町で文政年間(1818～1830)にはじまった磁器を中心とする窯である。開窯の要因は、当時の篠山藩主青山忠裕の「御庭焼」として始まったという考えと、隣接する三田窯における「三田青磁」の成功による影響とする2つの考えがある。しかし、開窯の要因の考えかたの違いはあるが、技術的な影響は大きく受けたことは間違いない。成形は、土形成形で、体部・底部・耳部と別々にかたどり、接合している。体部の文様は体部成形時にいっしょに形押しされている。6面の文様は対向する面が同じ文様である。文様は琴棋書画図である。室町時代から江戸時代にかけて儒教の思想の発展とともに、当時の人々に好まれた。また、文様部は釉が掛かっていない。釉は瑠璃釉で、内面口縁部から外面底部まで掛けられている。高

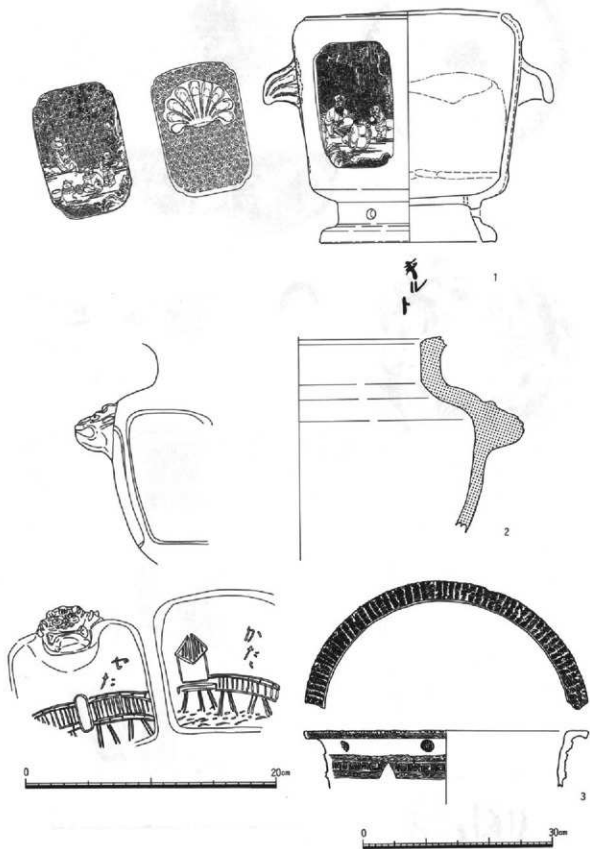
台内に一部軸がみられる。内面体部は無軸である。高台には穿孔が面ごとにあり、見込みにも2つ1組の穿孔が3カ所みられる。また、高台内に墨書が書かれている。さらに、これとよく似たタイプのが、和歌山の男山焼でもみられた。これは、王地山焼に技術指導した京焼の欽古堂亀祐が、男山焼においても指導しておりその影響と思われる。2は、瓦質土器火鉢である。底部がないので分らないが、体部と口縁部は別々に型造り成形され、接合されている。外面から内面口縁部にかけて丁寧に回転ヘラミガキされ、内面体部にはナデ調整を施している。肩部に獅子形の耳部が2カ所みられる。外面の文様は、窓は体部と同時にかなどり、その後、へら状のもので文様を描いている。文様区内に「せた」、「かたた」の文字があり、おそらく近江八景（矢橋の帰帆、三井の晩鐘、瀬田の夕照、石山の秋月、粟田の春風、唐崎の夜雨、堅田の落雁、比良の暮雪）を描いたと思われる。3は、甕である。口径45.2cmを測る。陶器で産地は不明である。口縁部の文様と体部の雷文はスタンプ印で施し、菊文は型抜き後、ハリツケている。



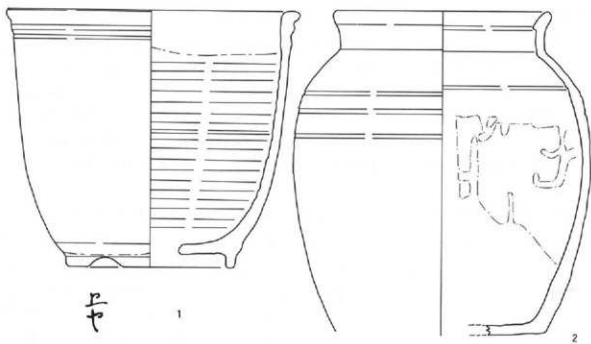
第205図 SY29(1)・SX62(2-4)出土遺物



第206图 SK11出土遗物(1)



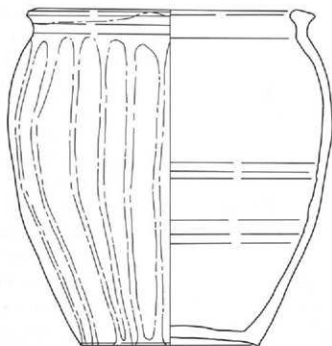
第207図 SK11出土遺物(2)



1

1

2



3



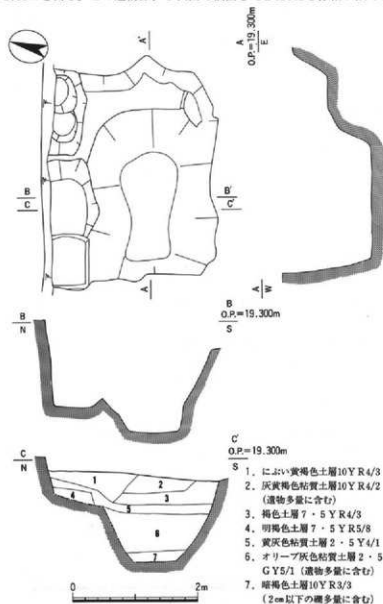
第208圖 SK11出土遺物(3)

第208図—1は、陶器植木鉢である。口径23.2cm、器高20.5cm、高台径13cmを測る。ロクロ成形で、口縁部はやや外へ張っているが、体部は筒型である。内面口縁部から外面体部にかけて黒色釉が掛けられ、内面・底部は無釉である。底部には直径4.2の穿孔がみられる。産地は不明である。また、高台内に「上や」の墨書がみられる。2は、唐津焼壺である。口径17cm、底径17cmを測る。口縁部は外へ張りだし丸手を帯びている。内面口縁部から外面体部にかけて塗土を施している。それ以外は無釉である。外面底部に砂が付着している。3は、丹波焼甕である。口径23.2cm、器高26.8cm、底径14.2cmを測る。口縁上部は平状でやや外側に傾いている。外面体部は塗土が施され、外面口縁部外縁帯下り、灰釉が掛けられている。口縁部内外面から内面は無釉である。底部には目跡が5カ所みられる。楢崎彰一氏の編年（楢崎1977年）江戸V期に属する。

出土遺物を概観すると19世紀中頃～19世紀末頃と考えられ、III—3 b期に属する遺構である。

S X 88

S X 88は、調査区中程やや北側に位置する（第209図）。検出形は方形を呈し、長さ2.7m、幅2.6m、深さ1.35mを測る。この遺構は、2次面で検出したS X 362と様相が似ており、「埴り場」遺構と思われる。時代



第209図 S X 88遺構図

観もほぼ同時代と思われる。非常に短い間酒造業を営んでいたの、作り替えたというより、同時に使用していたと考えられる。III—2 a期に属する遺構である。

第210図—1・2は、肥前磁器である。1は、染付碗である。口径10.2cm、器高5.6cm、高台径4cmを測る。全体的に黒帯びており、具須の発色も悪い。外面の文様は草花文である。また、高台畳付は露胎で砂が付着している。2は、染付皿である。口径14cm、器高3cm、高台径8.4cmを測る。具須の発色は良好で、内面体部に折枝椿文が丁寧に描かれ、外面には花唐草文を、高台内には二重枠内に「福」が書かれた銘が見られる。また、口縁部に2カ所半月状の切れ目を、後から入れており、筆置きかなにかに転用したと思われる。1・2とも、大橋康二氏の編年IV期に属する。3は、土師質土器皿である。口径7.2cm、器高1.5cmを測る。調整は、内面全体にナア調整、外面には指頭圧調整を施している。ま

た、内面には灯明油が燃えた痕跡?かみられる。I T (伊丹郷町期) 1 型式A類に属する。

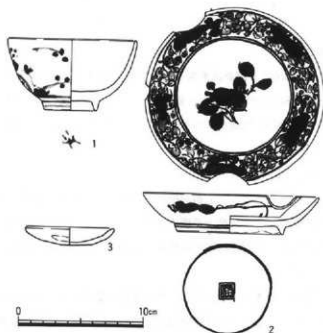
出土遺物を概観すると、17世紀末~18世紀初頭と考えられ、III-2 a 期に属する遺構である。

S X 62

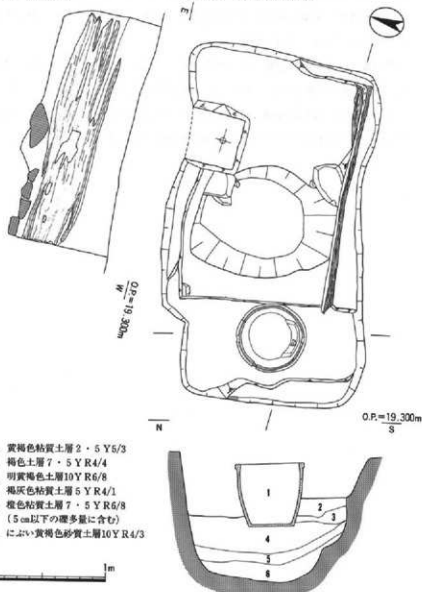
S X 62は、調査区北東隅に位置する(第211図)。平面形は長方形を呈し、長辺2.82m、短辺1.57m、深さ0.75mを測る。地下室遺構と考えられる。一部しか残存していなかったが、南壁に木が張られていた。また、南側底部に礎石がみられた。IV期に属する遺構である。

第212図-2は、アルミ鏡である。直径1.9cm、厚さ0.15cmを測る。昭和初期に発行された「五銭」である。3は、信楽焼甕である。口径35cm、器高35.3cm、底径18cmを測る。内外面に丁寧に鉄輪が施され、随所に黒色釉が掛けられている。外面底部は無釉である。4は、瓦質土器釜戸である。口径53.3cm、器高49.6cm、底径34.4cmを測る。移動式電である。器形は筒型を呈し、粘土紐輪積み成形で、外面体部は回転ヘラミガキ調整、内面には回転ナデ調整を施している。窓部は体部を切り張り張り付けている。外面体部に「北海商會 國益ムシカマド 責任理製」とある。

出土遺物を概観すると、19世紀末~20世紀初頭と考えられ、IV期に属する遺構である。



第210図 SX 88出土遺物



1. 黄褐色粘質土層 2・5 Y 5/3
2. 褐色土層 7・5 Y R 4/4
3. 明黄褐色土層 10 Y R 6/8
4. 褐灰色粘質土層 5 Y R 4/1
5. 橙色粘質土層 7・5 Y R 6/8
(5cm以下の礎石量を含む)
6. 濃い黄褐色砂質土層 10 Y R 4/3

第211図 SX 62遺構図

SD800

SD600は、調査区東側トレンチ内で検出した（表1）。これも屋敷境の溝と思われるが、3次面で検出したSD800よりは東側に移動している。長さ1.7m、幅0.7m、深さ1.3mを測る。遺物は堺焼摺鉢を出土した。出土遺物の年代観から19世紀前半と考えられる。よってIII-3b期に属する。

6. まとめ

この調査区では、上面が擾乱されていたため最上層の江戸時代後期以降の面を充分に把握できなかったが、これを除いて3時期の遺構面をとらえることができた。このうち、第1次面の享保14年（1729）の火災痕跡のほか、さらに古い元禄12年（1699）か元禄15年（1702）の火災と考えられる面が確認できたことが特筆される。

建物の変遷をまとめると、出土遺物や遺構から、16世紀末～17世紀初頭には、建物が建っていたことがわかった。それは、間口1間以上、奥行き2間程の小規模な掘立柱建物や礎石建物が存在し、裏庭では、食料自給のために野菜などを栽培するための畑を造っていたと思われる。17世紀後半に三和土が敷き始められると、畑を埋め、南側に造られた屋敷境溝まで拡張したことがわかった。それ以後は、18世紀前半以降はほとんど変わっていないと思われる。

その他に、酒造関係遺構が2カ所検出した。しかし、それともなう酒造関係の遺構がみあたらなかったが、「搾り場」が検出された事により、酒造業を営んでいた可能性がある。

このように、建物の変遷が明確にわかったものはめずらしく、特に、畑遺構がこんなにはっきり検出されたのは、宮ノ前地区でははじめてであり好資料を得られた。

第4章 結 語

第1節 調査区域の遺構の変遷について

1 時期区分について

有岡城跡・伊丹郷町遺跡の時期区分については、既往の調査によって判明した遺跡の大きな変化から、以下のように考えている。

I期 中世の在地主豪伊丹氏の伊丹城の時期（～天正2年・1574年）

II期 近世移行期の戦国大名荒木村重の有岡城の時期および池田之助（元助）の伊丹城の時期（天正2年・1574年～天正11年・1583年）

III期 近世在郷町・伊丹郷町の時期（天正11年・1583年～明治中頃）

IV期 近代（明治中頃～）

さらに、このうちIII期については、前回の宮ノ前地区の報告書（藤井直正他『有岡城跡・伊丹郷町IV』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1995年）において、遺構・遺物の変化からIII-1期～III-3期に大別し、さらにそれをa・bによって新古を細分した。その後、今回の調査区の整理作業を通じて、1～3期の大区分は変わらないが、a・bの細分を修正する必要が生じた。

第1に、III-1期（16世紀後半～17世紀前半）は、遺構・遺物ともに少なく、他の遺跡の時期区分で唐津焼の胎土目積み製品が主として出土する時期が存在することと、その生産地での年代観を勘案して、a（16世紀後半～末）とb（16世紀末～17世紀前半）に区分した。これらの実年代については、大橋康二氏は胎土目積みが16世紀末（1580年代）～1600年代、砂目積みが1600年代～1630年代、肥前磁器は1610年代以降に出現するとしている（大橋1993年）。一方、消費地では、近年特に大坂城下町において胎土目積みの唐津焼は豊臣後期（1598年～1615年）に多く、砂目積みおよび初期の肥前磁器は1620年代以降に出土量が多くなるという（森 毅1995年）。このように、生産地と消費地において実年代観が相違しており、なお論議を深める余地が残されている。当調査地の出土品も論議の行方によって年代観が変わる可能性があるが、一応胎土目積みの唐津焼製品の年代を16世紀末～17世紀初頭とし、砂目積み、初期の肥前磁器を17世紀前半以降としてとらえておきたい。今回は、B-2-1区やD-6区で少し資料が増えた。これらの遺物を見ると、胎土目積みの唐津焼を少量含むものの、砂目積みおよび初期の肥前磁器に属するものが主体に出土する例が多い。そうすると、先の編年観から17世紀前半～17世紀中頃までをひとつの時期としてとらえられることとなる。また、少ないながら、瀬戸・美濃焼III期の鉄袖天目茶碗・灰釉ソギ皿と胎土目積みの唐津焼が共存する遺構があり、16世紀末～17世紀初頭をひとつの時期としてとらえられるのではないかと考えている。

これに加えて、III-1期の開始時期も16世紀後半では有岡城期にかかる印象を与えるため、16世紀末とする。よって、III-1期（16世紀末～17世紀中頃）、a（16世紀末～17世紀初頭）、b（17世紀前半～17世紀中頃）と変更することとする。ただ、少ない資料の中での見通しであり、資料の増加を待って再検討する余地を残している。

第2に、III-2期（17世紀後半～18世紀後半）は、前回は生産地の遺物の編年区分にしたがってa（17世紀後半～18世紀中頃）、b（18世紀中頃～18世紀後半）とした。しかし、その後その区分の根拠として享保14年（1729）に北少路村で発生した大火が関係しているであろうことが有力となったため、今回はa（17世紀



寛文9年(1670)伊丹町絵図



延宝5年(1677)伊丹町地味委細絵図



元禄7年(1694)柳沢古保領伊丹町絵図



寛政8年(1796)伊丹細見図



天保15年(1844)伊丹町分間絵図

第212図 伊丹町古絵図

後半～18世紀初頭)、b (18世紀前半～18世紀後半)に変更することとした。

したがって、変更後の区分は以下のようになる。

		図中の区別	その他……
Ⅲ-1 期	16世紀末～17世紀中頃		
a	16世紀末～17世紀初頭		
b	17世紀前半～17世紀中頃		
Ⅲ-2 期	17世紀後半～18世紀後半		
a	17世紀後半～18世紀初頭		
b	18世紀前半～18世紀後半		
Ⅲ-3 期	18世紀後半～19世紀後半		
a	18世紀後半～19世紀初頭		
b	19世紀前半～19世紀後半		

2 各調査区の遺構の変遷について

さて、上記の時期区分にもとづいて、前回と同様に時期別遺構図を作成した(第213～224図)。以下に、ここから読み取れる遺構の変遷を述べたい。

第51次調査 B-1-1区 (第213・214図)

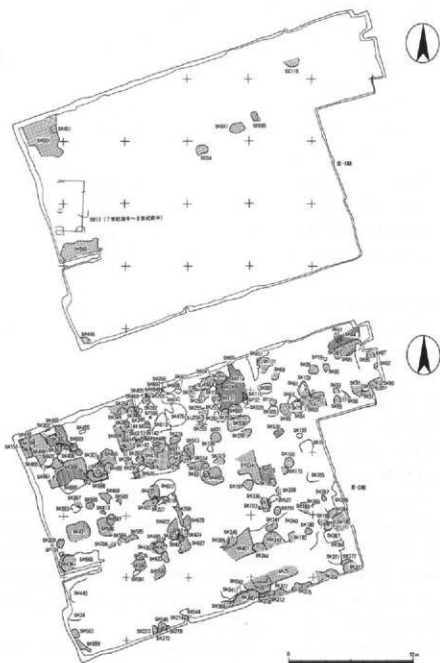
猪名野神社参道(現在宮ノ前商店街通り)に面するB-1-1区では、7世紀後半～8世紀前半に属するであろう掘立柱建物(S B13)を検出した。これは、南北の柱通りを真北に近づくて建築している。周辺で同時期の土壌や遺物を検出しており、この時期の集落があったことを示す貴重な発見であった。

それ以後は、伊丹郷町期まで遺構はない。伊丹郷町期では、Ⅲ-1 期(16世紀末～17世紀中頃)のうち、Ⅲ-1 a 期の明確な遺構は見あたらない。Ⅲ-1 b 期(17世紀前半～17世紀中頃)の井戸S E04・S E118といくつかの土壌がみられる。このほか、時期不明の掘立柱の柱穴が参道に近いところに分布する。また、裏手にあたる西側には、畑の耕作土と考えられる灰黄褐色土の堆積が認められる。土地の区画を示すものはない。このようなことから、Ⅲ-1 b 期(17世紀前半～17世紀中頃)には、参道に面して掘立柱建物が立ち、裏手には、畑の耕作地が広がっている、という景観を復元できる。

Ⅲ-2 期(17世紀後半～18世紀後半)には、急激に遺構が増加する。このうち、Ⅲ-2 a 期(17世紀後半～18世紀初頭)は少ない。北西部の裏手には、後述する池状遺構S K282があり、なお耕作もおこなわれていたと考えられる。また、享保14年(1729年)の大火の焼土処理土壌S K340などを検出した。Ⅲ-2 b 期(18世紀前半～18世紀後半)の遺構は、たいへん多い。竈S V234や三和土(タタキ)がみられ、Ⅲ-3 期(18世紀後半～19世紀後半)のS B04と構造は異なるものの、ほぼ同規模の建物が建てていたことが推測できる。

Ⅲ-3 期(18世紀後半～19世紀後半)では、Ⅲ-3 a 期(18世紀後半～19世紀初頭)には地割境界の石積み溝S D05が設けられる。道路に面した東側では、三和土の範囲からⅢ-3 b 期とほぼ規模を同じくする建物が建てていたことが推定できる。Ⅲ-3 b 期(19世紀前半～19世紀後半)には道路に面した建物S B04・01以外に、裏手にS B08・09と土蔵S B014が建てられる。甕衣壺(S I02・03など)は、すべてこの時期のものである。場所は、建物の中や通り庭に位置している。水琴窟(S Y04など)も、この時期に設けられている。

Ⅳ期には、S B01・04がそのまま受け継がれ、新たにS B02、土蔵S B15が建てられる。

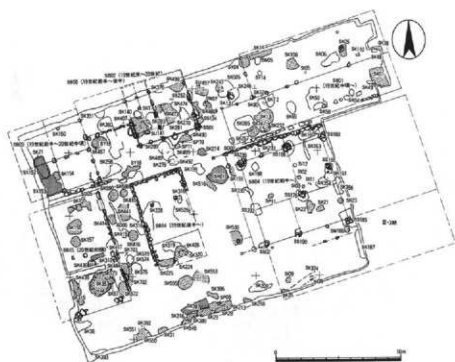


第213図 B-1-1区遺構変遷図(1) III-1・2期

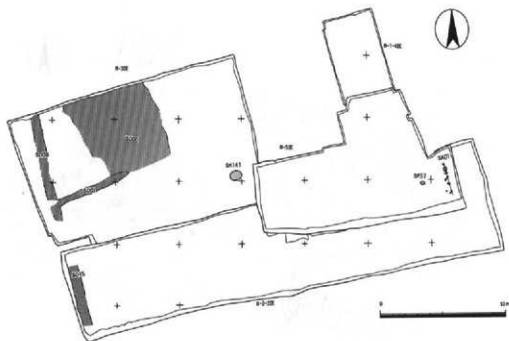
第51次調査B-1-4・B-2-2・B-3区、第63次B-5区(第215~218図)

この地区では、I期伊丹城期からII期有岡城期に続く溝SD06と現行道路に沿って延びるII期有岡城期の溝SD08・15がある。B-2-2区のSD15はB-8区SD04に続くが、SD04はIII-2 a期の17世紀後半まで再利用される。再利用される点で、前回の報告のA-1区SF01と共通する。しかし、それ以外には、ほとんど遺構はない。

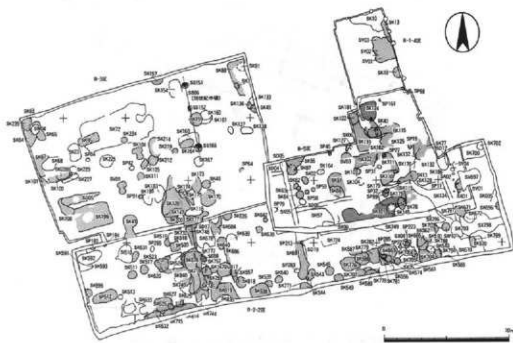
III-2期(17世紀後半~18世紀後半)には、ここでも急激に遺構が増加する。特にIII-2 b期(18世紀前半~18世紀後半)の遺構が多い。III-2 a期(17世紀後半~18世紀初頭)は少ないが、B-2-2区で検出した鍛冶炉SX04・05が目される。D-2区でもIII-1 b期の鍛冶炉SX302が検出されている。この頃



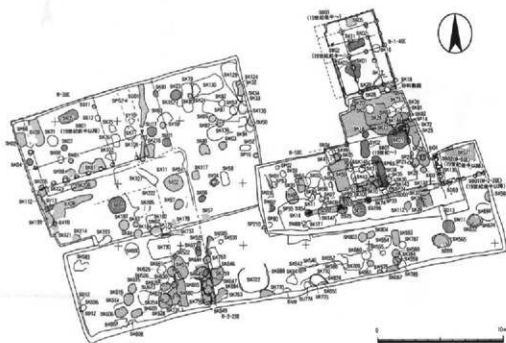
第214图 B-1-1区遗址平面图(2) III-3期



第215图 B-1-4·B-2-2·B-3·B-5区遗址平面图(1) III-1期

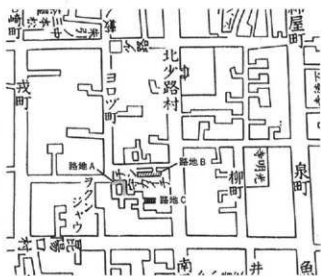


第216图 B-1-4·B-2-2·B-3·B-5区遣构变迁图(2) III-2期



第217图 B-1-4·B-2-1·B-3·B-5区遣构变迁图(3) III-3期

は、北少路村は伊丹町の外縁に位置していたため、このような火を扱う職業が容易に行えたのであろう。その後は鍛冶炉は見られなくなる。B-5区東側の標列S A02は、南北方向の分割り境界ラインに合致する。この時期の地割境界を示すものはほとんどない中で、貴重な例である。このほか、享保14年(1729年)の大火の焼土処理土壌B-3区S K72などを検出した。この大火はこの地域全体に認められる。規模は不明ながら、建物があったことが想定できる。III-2 b期(18世紀前半~18世紀後半)も遺物があったと考えられ、その裏手には、廃棄土壌が集中する。B-3区の池状遺構S K147はこの時期のものである。なお耕作もおこなわれていたと考えられる。籠衣壺は、この時期の後半に出現する(B-2-2区S I 510)。



第218図 文化改正伊丹之図(八木哲浩1982年)

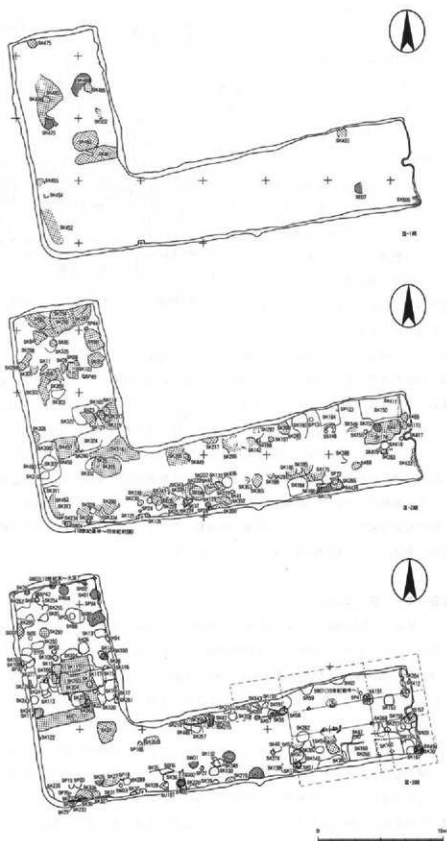
III-3期(18世紀後半~19世紀後半)では、III-3 a期(18世紀後半~19世紀初頭)に起こった火災の焼土処理土壌B-2-2区S K730などがみられる。この火災は文献に明確に記載されていないが、この地区で散見される。遺物は前代同様に建っていたと考えられる。III-3 b期(19世紀前半~19世紀後半)には、B-2-2区からB-3区に「く」の字に折れる道路S X11を検出した。これは、『文化(1804~17)改正伊丹之図』(第218図)に描かれた、路地Aである。この地区の東側裏道を宅地化するために必要となったものであろう。B-5区建物S B01はこの時期から存在する。同じく、B-1-4区の南端からB-5区北側で東西に延びる砂利敷面を検出したが、これも同図の路地Bと一致する。これは、B-5区の建物のためのものであり、裏地の宅地化がこの時期に進められたことがわかる。

第51次調査B-2-1区(第219図)

ここでは、S K468・S K506から7世紀後半~8世紀前半の遺物が出土した。

伊丹町町期では、III-1期(16世紀末~17世紀中頃)のうち、III-1 a期の明確な遺構は見あたらない。S K479は、III-1 a期の胎土目積みの唐津焼皿や瀬戸・美濃焼の灰釉ソグ皿を含むが、III-1 b期(17世紀前半~17世紀中頃)の遺物の方が主体となる。III-1 b期の土壌は、一定数みられる。したがって、III-1 b期以降に生活痕が濃厚となる。これは、B-3区など西側の調査区と異なる点である。東側の猪名野神社参道に面したところでは、この時期のものであろうと考えられる掘立柱建物の柱穴が分布する。また井戸S E07はこの時期のものである。参道に近い場所に位置しているのは、B-1-1区S E118に似る。また、西側の土壌が分布する部分には、灰黄褐色土が堆積しており、畑であったと考えられる。

III-2期(17世紀後半~18世紀後半)には、ここでも急激に遺構が増加する。特にIII-2 b期(18世紀前半~18世紀後半)の遺構が多いのは、先の調査区と同様である。III-2 a期(17世紀後半~18世紀初頭)は少ないが、元禄年間の大火(元禄12年・1699もしくは元禄15年・1702)の焼土処理土壌S K411を検出したのは大きな成果であった。後述するように、元禄年間の大火の焼土処理土壌には、17世紀後半の遺物群が多く



第219图 B-2-1区遗构变迁图

含まれる。この上面は、三和土によって覆われている。その範囲は、東側道路から西へ約11m(5間半)ほどである。明確にはとらえられないが、この範囲に近い建物が建っていたと考えられる。また、享保14年(1729)の大火の焼土処理土壌SK190・SK184・SK256が検出された。裏手には、元禄年間の大火までに使用された池状遺構SK293・SK294がある。

Ⅲ-2b期(18世紀前半～18世紀後半)では、Ⅲ-2a期とはほぼ同じ範囲で三和土が検出され、建物の規模はあまり変わっていないようである。井戸SE05は18世紀前半まで、SE04は18世紀後半まで使用されている。西側は、全面に廃棄土壌が営まれる。

Ⅲ-3期(18世紀後半～19世紀初頭)では、Ⅲ-3a期(18世紀後半～19世紀初頭)の椀瓦や陶磁器が大量に出土した土壌SK160が目目される。長方形で深いこの土壌は、地下室^{5a}と考えられる。また、この時期の建物は総瓦葺きであった可能性が高い。建物SB04は、この時期のものである。『元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町検図』では、「本百姓長左衛門」を屋敷主とし、「味噌ウリ五兵衛」が表に、「日用伝兵衛」・「日用吉兵衛」が裏に住んでいたことが記されている。SB04の東端は、「味噌ウリ五兵衛」の建物の奥行き十二間一尺八寸(一間が京間の六尺五寸=1.969m換算で、24.18m)の西端に一致し、この建物は時期は下るものの、同様に裏に住む住人のものと考えられる。この時期の井戸SE03は、Ⅲ-3期を通して使用された井戸枠瓦積みのものである。

Ⅲ-3b期(19世紀前半～19世紀後半)には、地割境の石横溝SD01が設けられている。これはIV期まで造り替えられつつ存続する。東側では、既存の礎石建物SB01がみられる。これは、SK160を埋めた後に建てられたもので、根石の掘形からは、19世紀初頭までの遺物が出土する。したがって、19世紀前半には建てられ、近年まで改造されつつ使用されたものと考えられる。中央に一間の通り庭を設け、両側を居室とした「中土間型」の建物である。

埋構SU167・SK226は、この時期の2基1組の便槽と考えられる。丹波流の便槽変SW01は、その後に設けられ、IV期に廃絶する。北西部にも脆衣壺SI06や水琴窟SY05、井戸SE01がみられ、建物があったことがわかる。

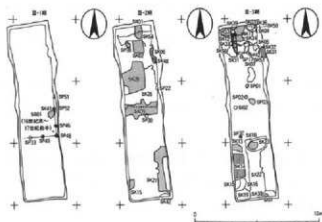
IV期(19世紀末～)には、礎石建物SB01のほか、北西部にも建物SB03とこれに伴う大谷焼便槽変SW04がみられる。SB01に伴う大谷焼便槽変SW02は、Ⅲ-3b期埋構SU167の真上に造り替えられたものである。この時期の井戸は、既存の井戸枠瓦積みのSE02である。

第97次調査B-13区(第220図)

ここは、南側に東西の主要道路の昆陽口通りがあり、それに面した屋敷地である。Ⅲ-1期(16世紀末～17世紀中頃)に属する孤立柱建物SB01を、道路から約5m奥で検出した。また、Ⅲ-1b期(17世紀前半～17世紀中頃)の土壌SK41が建物の内側にある。

Ⅲ-2期(17世紀後半～18世紀後半)には、遺構が増加する。Ⅲ-2a期(17世紀後半～18世紀初頭)では、享保14年(1729)の大火の焼土処理土壌SK26を検出した。Ⅲ-2b期(18世紀前半～18世紀後半)には、この土壌SK26を埋めて道路から11.8mの範囲で三和土がみられ、間口2間半、奥行き6間の建物があったことを推測できる。

Ⅲ-3期(18世紀後半～19世紀後半)では、Ⅲ-3a期(18世紀後半～19世紀初頭)の埋築遺構と考えられる土壌SX22が入り口付近にある。商業用(紺屋や油屋など)のものであろう。Ⅲ-3b期(19世紀前半～19世紀後半)には、前代と同じ範囲で三和土がみられ、同規模の建物があったことがわかる。この建物は、



第220図 B-13区遺構変遷図

ここは、西側に猪名野神社参道があり、それに面した地域である。また、D-6区の北側は東西の道路に面している。もっとも古い遺構は、7世紀後半～8世紀前半のD-6区SK450である。これ以降、II期まで空白である。

II期（16世紀後半）の有岡城期には、D-2区SD401・D-4区SD301・D-6区SD202と続く溝がある。これは、D-4・D-6区では参道に沿って設けられているが、D-2区では東に折れ、幅を広げて南へ続く。有岡城期の溝は、A-1区SF01（藤井直正他『有岡城跡・伊丹郷町IV』1995年）、B-3区SD08・B-2-2区SD15・B-8区SD04（藤井直正他『有岡城跡・伊丹郷町IV』1995年）など、現行南北道路の東側に設けられることを特徴とする。有岡城跡主郭部西側の侍屋敷地（JR伊丹駅前再開発地区、藤井直正他『有岡城跡・伊丹郷町II-第1・2分冊』1992年）では、堀が同じように現行南北道路の東側に設けられていた。したがって、これと同様の計画性を持った溝と考えられる。D-2区で「く」の字に折れ、幅を広げることは、何らかの理由があったものと思われる。その屈曲部で、多量の土師質土器皿と瓦質土器釜、犬の遺体などを検出した。これは、拡張部を選んで行った何らかの儀礼に伴う廃棄行為と考えられる。この溝は、有岡城期に廃絶して、伊丹郷町期には再利用されていない。

III-1期（16世紀末～17世紀中頃）では、III-1a期（16世紀末～17世紀初頭）に属するかと思われる掘立柱建物D-6区SB01・SB03がある。2間×2間あるいは1間×2間程度の小規模なものである。井戸はD-2区SE301だけである。D-6区SE477は、この時期からIII-1b期にかけて使用された、この屋敷地最古の井戸である。III-1b期（17世紀前半～17世紀中頃）の掘立柱建物D-6区SB04、D-4区SB01・SB02も規模は変わらない。いずれも、道路に面して建てられている。この時期の井戸D-2区SE01はSE301の後身と考えられる。この時期には、廃棄土壌がかなりみられる。この点は、同じく参道に面したB-2-1区と共通する。

III-2期（17世紀後半～18世紀後半）には、遺構が増加する。III-2a期（17世紀後半～18世紀初頭）にはD-6区東側のトレンチで、背割りの茶掘溝SD800を確認した。これは、III-3期には埋められている。この時期の建物D-6区SB02・SB05は、前代同様の小規模な建物であるが礎石建物となっている。D-6区SE326は、この時期の茶掘井戸である。北側道路から約7m入った位置にあり、ちょうど掘立柱建物の裏手あたりになる。またD-6区東南部では、17世紀後半の煙の款SX01-03が検出された。これは、「延宝五年（1677）伊丹郷町地味委細図」（第212図）の建物裏手の煙の記載に一致する。その後、17世紀後半の内

入り口の胎衣壺SI01の存在から、東側を通り庭とする建物である。その裏は、裏庭となっていたらしく廃棄土壌が重複して数多く検出された。

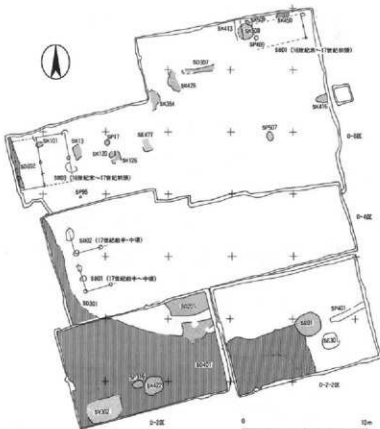
IV期（19世紀末～）も同じ規模、構造の建物が想定できる。SK14は、この時期の地下の室である。SE01は既存の井戸であるが、少なくともこの時期の初期から使用されていた可能性がある。

第51次調査D-2区・第63次調査D-4区・
第97次調査D-6区（第221～223図）

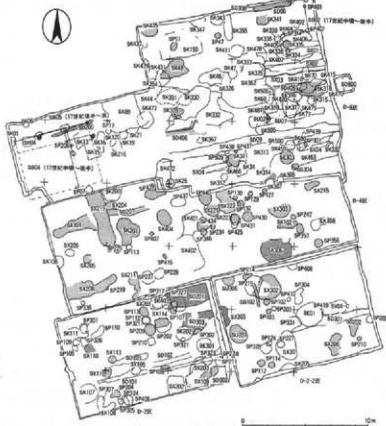
にこの畑を埋めて三和土が敷かれるが、その規模は道路より6.5m～7.5mすなわち3間半程度となる。三和土が敷かれ始めるのは、17世紀後半からである。この時期に建物の規模・建築方法に面期があったことに注目したい。3間半規模の建物は、面として調査できなかったが、断面土層の観察から元禄年間（元禄12年・1699か元禄15年・1702）の火災に遭っている。D-6区SK343・347はこの大火の焼土処理土壌である。D-6区では、その後1類（2槽さし単基）（小長谷正治・川口宏海1996年）の酒搾り遺構SX362・SX88が短期間設けられ、これを埋めて享保14年（1729）の大火に遭った三和土面が敷かれている。これが、第1次面である。この三和土は、北東部で道路端から奥行き10m（5間）の、地割溝SD09まで敷かれており、建物規模がいつそう大きくなったことが判明する。享保14年（1729）の大火の焼土処理土壌は、D区全域で確認している。

Ⅲ-2 b期（18世紀前半～18世紀後半）には、それぞれの地区で道路に面して間口2～3間、奥行き5間程度の建物が建っていたことが三和土の範囲から推測できる。地割溝SD09の第1次掘溝は、この時期に造営されている。

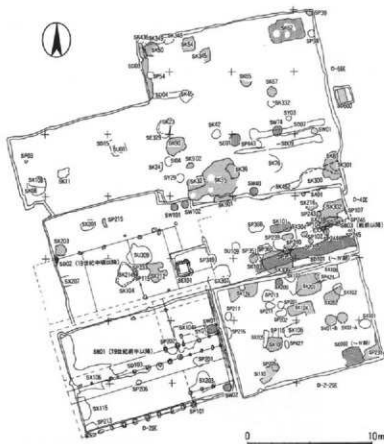
Ⅲ-3期（18世紀後半～19世紀後半）では、Ⅲ-3 a期（18世紀後半～19世紀初頭）に地割の石積溝のD-6区SD09（第2次溝）・D-2区SD101が設けられる。こ



第220図 D-2・D-2-2・D-4・D-6区遺構変遷図(1)Ⅲ-1期



第221図 D-2・D-2-2・D-4・D-6区遺構変遷図(2)Ⅲ-2期



第223図 D-2・D-2-2・D-4・D-6区遺構変遷図(3) III-3期
 以上、各地区の時期別遺構変遷図の概要を述べた。今回の調査区は、B-13区・B-3区を除いて猪名野神社参道に面する北少路村に属する。最古の遺構は7世紀後半～8世紀前半で、この地域一帯に広がっていることが判明した。その後、I期伊丹城期の15世紀後半～II期有岡城期にかけて存在したB-3区SD06まで、空白がある。II期有岡城期には、前回報告したA-1区同様、現行南北道路の東側に、これに沿った溝(B-3区SD08・D-6区SD202など)が検出された。したがって、ここでも有岡城期に可割りなされたことが判明した。しかし、この時期の明確な建物などはみあたらず、人家は存在していなかったと考えられる。

3 まとめ

以上、各地区の時期別遺構変遷図の概要を述べた。今回の調査区は、B-13区・B-3区を除いて猪名野神社参道に面する北少路村に属する。最古の遺構は7世紀後半～8世紀前半で、この地域一帯に広がっていることが判明した。その後、I期伊丹城期の15世紀後半～II期有岡城期にかけて存在したB-3区SD06まで、空白がある。II期有岡城期には、前回報告したA-1区同様、現行南北道路の東側に、これに沿った溝(B-3区SD08・D-6区SD202など)が検出された。したがって、ここでも有岡城期に可割りなされたことが判明した。しかし、この時期の明確な建物などはみあたらず、人家は存在していなかったと考えられる。

III期伊丹町期に入ると、III-1a期(16世紀末～17世紀初頭)にさかのぼる可能性のある掘立柱建物(D-6区SB01など)があるが、遺構が一定数みられるようになるのは、III-1b期(17世紀前半～17世紀中頃)になってからである。この時期には井戸もかなりみられ、参道に面した場所に小規模な掘立柱建物が建ち、裏には畑が営まれている、といった景観を復元することができる。土壌出土遺物には、胎土目の唐津焼も散見されることから、III-1a期(16世紀末～17世紀初頭)の終わり頃から人家が建ち並び始めたものと考えられる。すなわち、北少路村の成立は、III-1a期(16世紀末～17世紀初頭)の終わり頃と考えられるのである。しかし、猪名野神社参道や昆陽口通りから外れたB-3・B-5区では、まだ人家はみられない。この点は、前回報告した、西側のA-1-5区の様相と共通する。

のような地割溝は、2軒おきに設けられており、この時期に石積みとなって全域で整備される。井戸は、各屋敷地にあるが、D-6区井戸SE329のように、共同利用していたと考えられるものもある。

D-4区のIII-3b期(19世紀前半～19世紀後半)にも、前代と同じ範囲で三和土がみられ、同規模の建物があったことがわかる。D-2区の電SV01-A・Bはこの時期のもので、裏にも建物が建てられていたことがわかる。

IV期(19世紀末～)には、D-2・D-4区の既存建物が建つ。D-2区SB01は2戸1棟の礎石建物であり、大谷焼便槽SW01・02を有していることから、20

Ⅲ-2期(17世紀後半～18世紀後半)には、遺構が増加する。Ⅲ-2a期(17世紀後半～18世紀初頭)には、礎石建物がみられる。裏では畑の畝がみられるが、17世紀後半のうちに三和土が敷かれるようになり建物規模が拡張する。小画期としてとらえられる時期である。さらに18世紀初頭の元禄年間の大火以後享保14年(1729)の間に建物は5間程度の奥行きをもつものへ拡張し、大きな変化が訪れる。通りから外れたB-3・B-5区でも遺構が急増し、『元禄七年(1694)柳沢吉保領伊丹郷町絵図』にみられる町並みが形作られたと考えられる。

Ⅲ-2b期(18世紀前半～18世紀後半)には、一部で素掘の地割溝が設けられる。裏地は廃棄土填や池状遺構があり、畑や裏庭として利用されていたものと考えられる。胞衣壺は、この時期の後半から出現する(B-2-2区S I510)。

Ⅲ-3期(18世紀後半～19世紀後半)では、Ⅲ-3a期(18世紀後半～19世紀初頭)に地割の石積溝(D-6区S D09など)が整備される。総瓦葺建物もこの頃からみられる(B-2-1区S K160)。井戸は素掘で、上部に粘土と瓦片を互層にした井戸側をもつものがみられる(D-6区S E303)。裏地に家屋が建って、裏地利用が進んでいく様子もうかがえる(B-2-1区S B04)。大きな景観の変化が、この時期から始まる。

Ⅲ-3b期(19世紀前半～19世紀後半)には、既存建物の古いものが建てられる(B-1-1区S B04など)。これらは、小規模な根石を持つものが多く、重量のかかる総瓦葺厨子二階の建物であったと考えられる。また裏地に家屋が建って、これに通じる路地が各所で設けられるようになる(B-3・B-5・B-2-1区など)。この点は、先の報告のA-1～5区と共通する。便槽には木桶が用いられ、2基1組のものも多い(B-5区S U02・03など)。また、丹波焼甕を利用した便槽もみられる。井戸は井戸枠瓦を上部に巻いたものが増加する。胞衣壺や水琴窟が盛んに設けられるのも、この時期である。

Ⅳ期(19世紀末～)には、既存建物が壊れ、埋桶の便槽が大谷焼甕に造り替えられる。

以上のように、建物や井戸、便槽などの遺構の様相の変化すなわち景観の変化は、17世紀後半に小画期があり、18世紀前半に大きな画期が認められる。また、18世紀後半から19世紀前半(中でも化成熟期を中心として)第2の大きな画期が認められるのである。これは、伊丹郷町の酒造業の発展期と一致しており、伊丹郷町の経済的発展が、このような画期を生みだした直接的要因であろうと考えられるのである。

参考引用文献

大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社 1993年

小長谷正治・川口宏海『伊丹郷町の酒造業』『関西近世考古学研究Ⅳ』関西近世考古学研究会 1996年

森 毅『16・17世紀における陶磁器の様相とその流通—大坂の資料を中心に—』『ヒストリア』第149号 大阪歴史学会 1995年

表1 主要遺構年代表(1)

地区	遺構名	グリッド	遺構面	土層	平面形	長辺or直径 or-辺(m)	短辺 (m)	深さ (m)	断面形	時代	備考
CIT51 B-1-1	S K525	K10-e 3	4	1	不整形	2.34	1.3 以上	0.68		16C後半	
B-1-1	S K450	K10-a 2	4	5	不整形	1.2	0.58 以上	0.24		17C前半	
B-1-1	S K565	K10-a 4	5	20	不整形	3.24 以上	1.34 以上	0.56		17C前 -後半	
B-1-1	S K601	K10-a 2	5	1	不整形	2.85 以上	2.44	0.15		17C中 -後半	
B-1-1	S K80	K10-e 1	2	1	不整形	1.0	0.72	0.36		17C後半	
B-1-1	S E03	K10-d 5	4	5	不整形	1.22	0.5 以上	3.62 以上		17C末 -18C初	
B-1-1	S K475	K10-c 2	4	5	不整形	1.8	1.56 以上	0.54		17C末 -18C中	
B-1-1	S K451	K10-a 2	4	3	不整形	0.53 以上	0.49 以上	0.3		18C前半	
B-1-1	S K340	K10-e 4	3	15	不整形	6.5 以上	3.22 以上	0.68		18C前半	享保火災
B-1-1	S K305	K10-b 3	3	1	不整形	3.22 以上	2.43 以上	0.27		18C前 -中頃	
B-1-1	S E01	K10-d 2	1	3	円形	0.92		2.65 以上		18C後半	
B-1-1	S K465	K10-b 3	4	23	不整形	2.18 以上	1.56 以上	0.89		18C後-末	
B-1-1	S D06	K10-b 4	4	1	溝	6.66 以上	0.84	0.16		18C後 -19C初	
B-1-1	S S332	K10-e 3	3	5	不整形	0.94	0.6 以上	0.44		18C後 -19C初	
B-1-1	S K198	K10-e 3	2	3	不整形	0.62	0.58	0.30		18C後 -19C初	
B-1-1	SW15	K10-a 3	3	1	円形	内矩0.18 圓形0.27		内矩0.16 圓形0.20		18C後 -19C前半	変
B-1-1	SW07	K10-d 2	2	3	円形	内矩0.22 圓形0.40		内矩0.21 圓形-		18C後 -19C前半	変
B-1-1	S U141	K10-c 2	2	5	円形	0.90		0.46		18C後 -19C前半	植
B-1-1	S K270	K10-c 2	3	2	楕円形	1.04	0.66	0.06		18C末 -19C前半	
B-1-1	S Y18	K10-c 3	1	3	不整形	1.64	0.88	0.48		18C末 -19C前半	水琴窟
B-1-1	S D02	K10-c 3	1	1	溝	1.96 以上	0.36	0.08		18C末 -大正	
B-1-1	S E699	K10-e 2	5	1	不整形	1.1	0.24	0.11		19C初 -中頃	
B-1-1	S X01	K10-d 3	1	5	不整形	1.6	1.44	0.42		19C代	
B-1-1	SW571	K10-b 5	5	1	不整形	内矩0.32 圓形0.53	内矩0.20 圓形0.40	内矩0.02 圓形0.03		19C前半	植

表1 主要遺構年代表(2)

地区	遺構名	グリッド	遺構画	土層	平面形	長辺or直径 or-辺(m)	短辺 (m)	深さ (m)	断面形	時代	備考
B-1-1	SK497	K10-d 2	4	1	不整形	1.07	0.50 以上	0.23		19C前半	
B-1-1	SW16	K10-b 4	4	1	不整形	1.10	0.90	0.15		19C前 ~中頃	変
B-1-1	SK441	K10-b 3	4	5	不整形	1.1 以上	0.66 以上	0.56		19C前 ~後半	
CIT51 B-1-4	SK20	K10-a 8	3	1	不整形	4.2 以上	1.0 以上	0.24		18C後 ~末	
B-1-4	SK06	K10-b 8	1	3	長方形	1.4	0.8	0.9		18C後 ~19C初	
CIT51 B-2-1	SK468	K11-e 1	5	8	不整形	1.4 以上	1.1 以上	0.34		7C後半	
B-2-1	SK461	K11-e 2	5	4	不整形	3.4 以上	1.12	0.32		17C前半	
B-2-1	SK475	K11-d 10	5	1	不整形	0.69	0.63 以上	0.17		17C前半	
B-2-1	SK479	K11-d 2	5	1	不整形	0.82	0.66	0.35		17C前半	
B-2-1	SK480	K11-d 1	5	5	不整形	2.8 以上	1.98	0.34		17C前半	
B-2-1	SK413	K11-j 2	4	1	不整形	2.64 以上	1.8 以上	0.4		17C前 ~後半	
B-2-1	SK322	K11-e 2	4	10	不整形	1.1	0.86 以上	0.58		17C後 ~18C初	
B-2-1	SK411	K11-i 2	4	1	不整形	3.16 以上	2.2 以上	0.46		17C後 ~18C初	元禄火災
B-2-1	SK190	K11-h 2	3	1	不整形	3.92	2.3	0.45		17C後 ~18C前半	享保火災
B-2-1	SK150	K11-i 2	2	2	長方形	3.23 以上	2.0 以上	0.37		17C末 ~18C前半	享保火災
B-2-1	SK252	K10-d 10	3	1	不整形	2.66 以上	1.48 以上	0.06		18C代	
B-2-1	SK317	K11-e 2	4	3	不整形	2.1	1.3 以上	0.70		18C前 ~中頃	池状遺構
B-2-1	SK256	K10-d 10	3	1	不整形	2.0 以上	1.88	0.45		18C前 ~中頃	享保火災
B-2-1	SE05	K11-f 3	4	8	円形	0.72		3.16 以上		18C前 ~後半	
B-2-1	SU167	K11-f 3	2	1	円形	内径0.5 掘形0.55		内径0.28 掘形0.34		18C前 ~後半	
B-2-1	SK293	K10-d 10	4	1	不整形	5.4	2.1 以上	0.31		18C前 ~後半	池状遺構
B-2-1	SK174	K11-i 2	3	2	不整形	3.0 以上	1.6 以上	0.43		18C前 ~後半	
B-2-1	SK217	K11-f 2	3	1	不整形	1.26	0.6 以上	0.24		18C前 ~後半	享保火災
B-2-1	SK280	K11-f 2	3	1	不整形	1.62 以上	1.14 以上	0.02		18C前 ~後半	

表1 主要遺構年代表(3)

地区	遺構名	グリッド	遺構面	土層	平面形	長さor or-辺(m)	短 辺 (m)	深 さ (m)	断面形	時代	備考
B-2-1	SY05	K11-d 1	3	7	不整形	0.81	0.47	0.4		18C中 ~19C初	水琴窟
B-2-1	SU225	K11-f 3	3	2	不整形	0.46	0.42	0.4		18C中 ~後半	桶
B-2-1	SS148	K11-h 2	2	3	円形	0.60		0.20		18C後 ~末	
B-2-1	SK82	K10-d 10	2	2	不整形	0.68	0.5	0.07		18C後 ~末	
B-2-1	SS65	K11-j 2	1	1	不整形	0.73	0.54	0.14		18C後 ~19C初	
B-2-1	SW03	K11-e 3	1	1	円形	内矩0.22 掘形-		内矩0.18 掘形-		18C後 ~19C初	礎
B-2-1	SK286	K11-i 3	3	6	長方形	4.84	1.8 以上	0.98		18C後 ~19C初	
B-2-1	SK160	K11-i 3	2	4	長方形	4.4	2.3 以上	0.62		18C後 ~19C初	
B-2-1	SE01	K11-d 1	1	9	不整形	1.38	0.6 以上	2.8 以上		18C後 ~19C前半	
B-2-1	SK01	K10-e 10	1	5	不整形	0.82	0.74	2.53		18C後 ~19C前半	
B-2-1	SD02	K11-f 3	1	1	溝	1.7 以上	0.22	0.04		18C後 ~19C後半	
B-2-1	SW01	K11-f 3	1	4	円形	内矩0.54 掘形0.70		内矩0.58 掘形0.70		19C代 ~近代	礎
B-2-1	SS151	K11-i 2	2	2	円形	0.88		0.16		19C前半	
B-2-1	SU262	K11-e 2	3	1	不整形	1.05	0.84	0.42		19C前 ~中頃	桶
B-2-1	SK243	K11-d 2	3	2	円形	0.66		0.18		19C前 ~中頃	
B-2-1	SK283	K11-g 2	3	1	不整形	3.16 以上	1.36 以上	0.09		19C中頃	享保火災
B-2-1	SW02	K11-f 3	1	1	円形	内矩0.42 掘形0.54		内矩0.26 掘形0.4		19C中頃	礎
B-2-1	SW04	K10-d 10	1	5	円形	内矩0.32 掘形0.8		内矩0.76 掘形0.78		明治	礎
CIT51 B-2-2	SD19	J11-j 1	3	1	溝	3.7	0.4	0.18		17C後半	
B-2-2	SD17	J10-i 10	2	1	溝	1.9	0.26	0.14		17C後 ~末	
B-2-2	SW639	J10-i 10	2	2	不整形	0.84	0.57	0.23		17C後 ~18C初	礎
B-2-2	SK724	K11-a 1	2	7	不整形	1.4 以上	0.93 以上	0.58		17C後 ~18初	
B-2-2	SD12	J11-g 1	1	1	溝	6.92 以上	0.23	0.17		17C後 ~18C前半	
B-2-2	SK798	K10-c 10	3	1	不整形	3.27 以上	1.7	0.11		17C後 ~18C前半	池状遺構

表1 主要遺構年代表(4)

地区	遺構名	グリッド	遺構面	土層	平面形	長2l or 直径 or-辺(m)	短辺 (m)	深さ (m)	断面形	時代	備考
B-2-2	SK771	J11-j 1	3	1	不整形	1.2 以上	0.4 以上	0.55		17C後 ~18C前半	
B-2-2	SK750	K11-b 1	3	1	不整形	3.11 以上	1.66	0.28		17C前 ~18C前半	
B-2-2	SK678	J10-i 10	2	1	不整形	2.26 以上	1.2 以上	0.62		17C前 ~18C前半	享保火災
B-2-2	SK839	J11-i 1	4	1	不整形	1.26	0.42 以上	0.29		17C末 ~18C前半	
B-2-2	SK730	J11-b 1	2	1	不整形	3.0	1.59	0.42		18C初 ~後半	
B-2-2	SU525	J11-h 1	1	2	円形	内矩0.47 掘形0.72		内矩0.33 掘形-		18C前半	桶
B-2-2	SK663	K11-b 1	2	4	不整形	1.5	1.44	0.54		18C中 ~後半	
B-2-2	SW10	K10-i 10	1	2	円形	内矩0.43 掘形0.63		内矩0.13 掘形0.21		18C後半	甕
B-2-2	SK670	K11-c 1	2	4	不整形	2.25	1.4 以上	0.1		18C後半	火災直
B-2-2	SK733	J10-h 10	2	1	不整形	0.8 以上	0.1 以上	0.08		18C後半	火災直
B-2-2	SU817	J11-i 1	4	2	不整形	0.84	0.6 以上	0.25		18C後 ~末	桶
B-2-2	SK681	J11-h 1	2	1	半円形	0.84		0.46		18C後 ~末	
B-2-2	SK722	J11-i 1	2	4	不整形	2.38	2.08	0.7		18C後 ~19C前半	
B-2-2	SD20	K11-c 1	3	1	不整形	1.2 以上	0.8 以上	0.2		18C後 ~19C前半	
B-2-2	SD13	K10-c 10	1	1	溝	1.14 以上	0.26 以上	0.4		18C後 ~19C前半	
B-2-2	SK710	K11-a 1	2	4	不整形	3.56	1.54	0.60		18C後 ~19C前半	
B-2-2	SW575	K11-b 1	1	1	円形	内矩0.21 掘形0.43	内矩- 掘形0.35	内矩0.05 掘形0.11		19C前半	
B-2-2	SK803	K10-a 10	3	1	不整形	0.63	0.55	0.45		19C前 ~後半	
B-2-2	SK804	K10-a 10	3	1	不整形	0.64	0.45	0.23		19C前 ~後半	
B-2-2	SK731	J11-h 1	2	1	不整形	0.9	0.86 以上	0.11		19C前 ~後半	
B-2-2	SW09	J11-j 1	1	4	半円形	内矩- 掘形0.64		内矩0.34 掘形0.4		19C中 ~後半	
CIT51 B-3	SK231	J10-g 9	3	2	隅丸 長方形	1.34	0.88	0.16		17C末 ~18C中	
B-3	SS165	J10-i 9	3	1	円形	0.65		0.20		18C後半	
B-3	SV01	J10-g 10	1	8	不整形	0.71	0.38	0.12		18C前 ~中頃	甕

表1 主要遺構年代表(5)

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	長さor直径 or一辺(m)	短辺 (m)	深さ (m)	断面形	時代	備考
B-3	SK222	J10-h9	3	10	不整形	5.6	3.2	0.6		18C前 ~後半	火災痕
B-3	SV13	J10-f10	2	9	不整形	0.9	0.42	0.15		18C前 ~19C初頭	竈
B-3	SD05	J10-g10	3	1	溝	3.16	0.56	0.14		18C後半	
B-3	SK72	J10-g9	2	1	不整形	5.8	2.6	0.45		18C後 ~19C前半	享保火災
B-3	SU03	J10-i9	1	2	円形	内矩0.47 掘形0.61		内矩0.31 掘形0.33		18C末 ~19C前半	種
B-3	SU50	J10-j9	1	4	円形	内矩0.58 掘形0.62		内矩一 掘形0.41		19C初 ~後半	種
B-3	SV04	J10-i9	1	5	不整形	0.57	0.38	0.7		19C前半	竈
B-3	SU01	J10-g9	1	1	円形	内矩0.3 掘形0.38		内矩0.13 掘形一		19C前半	種
B-3	SD01	J10-h9	1	1	不整形	3.61 以上	0.2	0.18		19C前 ~中頃	
B-3	SE02	J10-h10	1	6	円形	1.08		3.4 以上		19C前 ~後半	
B-3	SU02	J10-h10	1	1	半円形	内矩0.39 掘形0.54		内矩0.14 掘形0.16		19C中 ~後半	種
CITE3 B-5	SK175	K10-b10	4	3	隅丸 長方形	2.12	1.36	0.44		17C後半	
B-5	SX06	K10-a9	3	3	不整形	0.46	0.37	0.39		18C前半	
B-5	SD11	K10-c11	3	1	溝	1.6	0.22	0.14		18C前半	
B-5	SD12	K10-c9	3	1	溝	0.96	0.26	0.3		18C前半	
B-5	SD06	K10-a10	3	1	溝	5.1 以上	0.3	0.2		18C後半	
B-5	SK43	K10-a9	2	1	不整形	1.92	1.16	0.42		18C後 ~19C初	
B-5	SD03	K10-c10	2	1	溝	3.84 以上	0.52	0.1		18C後 ~19C前半	
B-5	SI80	J10-j10	3	1	不整形	0.32	0.30	0.08		18C末 ~19C初	臨衣壺
B-5	SW88	J10-j10	3	1	円形	内矩0.25 掘形0.33		内矩一 掘形0.3		19C代	甕
B-5	SU03	K10-b9	2	1	円形	内規0.46 掘形0.65		内規0.24 掘形0.25		19C前半	種
B-5	SD01	K10-b10	2	1	溝	8.6	0.38	0.1		19C前半	
B-5	SD02	K10-a10	2	1	溝	3.4 以上	0.5	0.08		19C前半	
B-5	SW01	J10-j10	1	1	半円形	内矩0.4 掘形0.55		内矩一 掘形0.26		明治	甕

表1 主要遺構年代表(6)

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	長さor直径 or一辺(m)	短辺 (m)	深さ (m)	断面形	時代	備考
B-5	SU18	K10-a 9	1	1	円形	0.53		0.16		明治以降	種
B-5	SU04	K10-b 9	2	1	不整形	内矩0.48 楕形0.69	内矩一 楕形0.51	内矩0.42 楕形0.44		大正	種
CIT97 B-13	SK26	J11-j 10	2	11	不整形	3.12 以上	2.68 以上	0.9		17C末 ~18C初	享保火災
B-13	SK54	J11-j 9	3	3	不整形	2.68 以上	2.0 以上	0.29		17C末 ~18C前半	
B-13	SK28	J12-j 1	2	1	不整形	2.4	2.04	0.195		18C中 ~後半	
B-13	SK34	J11-j 9	2	1	不整形	0.92	0.36 以上	0.28		18C末 ~19C前半	
B-13	SK22	J12-j 1	2	9	不整形	3.7 以上	1.0 以上	0.34		19C初 ~中頃	
B-13	SK15	J12-j 1	1	1	不整形	0.52	0.44	0.43		19C前 ~中頃	橋跡
CIT51 D-2	SP316	L10-a 6	3	1	不整形	0.92	0.7	0.08		17C前半	
D-2	SD301	L10-a 7	3	2	不整形	6.3	0.8	0.07		17C前半	
D-2	SD303	L10-b 6	3	13	不整形	3.84	2.54	0.45		17C前 ~後半	
D-2	SD101	L10-a 7	1	1	溝	10.5	0.22	0.04		17C後 ~18C初	
D-2	SK202	L10-b 6	2	1	円形	1.17		0.52		17C後 ~18C初	
D-2	SP113	L10-a 6	1	1	不整形	0.88	0.67	0.44		18C前 ~後半	
D-2	SX202	L10-b 7	2	2	不整形	1.5	1.34	0.57		18C前 ~後半	
D-2	SK106	K10-j 6	1	1	不整形	4.2	3.4	0.22		18C後 ~末	
D-2	SY01	L10-b 6	2	1	円形	内矩0.35 楕形0.43		内矩0.30 楕形一		19C前 ~後半	
D-2	SW01	L10-b 6	1	3	円形	内矩0.6 楕形0.64		内矩0.35 楕形0.38		19C後半 以降	
D-2	SW02	L10-b 7	1	2	円形	内矩0.56 楕形0.61		内矩0.40 楕形一		19C後半 以降	
CIT51 D-2-2	SX305	L10-c 5	3	1	隅丸 長方形	1.3	0.8	0.4		17C後 ~18C前半	
D-2-2	SP212	L10-c 5	2	8	不整形	0.92 以上	0.9	0.54		17C末 ~18C初	
D-2-2	SX108	L10-d 5	1	1	不整形	4.0 以上	1.38 以上	0.14		18C ~19C初	
D-2-2	SP304	L10-d 5	3	1	不整形	1.28	0.6	0.06		18C前半	
D-2-2	SX209	L10-d 6	2	1	不整形	1.7	0.88	0.16		18C末 ~19C前半	

表1 主要遺構年代表(7)

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	長辺or直径 or-辺(m)	短辺 (m)	深さ (m)	断面形	時代	備考
D-2-2	SX104	L10-d 5	1	1	不整形	2.02	0.8	0.1		19C前 ~後半	
CIT63 D-4	SK202	L10-a 4	2	3	不整形	1.35	1.2	0.3		17C後 ~18C初	火災致
D-4	SX404	K10-j 4	4	2	楕円形	1.36	1.0	0.3		17C末 ~18C初	
D-4	SX202	K10-j 4	2	1	不整形	0.76	0.6	0.8		18C代	
D-4	SX206	K10-j 5	2	1	不整形	1.16	1.0	0.1		18C後半	
D-4	SP352	L10-c 4	3	2	円形	0.5		0.36		18C後 ~19C初	
D-4	SX304	L10-c 4	3	5	不整形	1.7	1.62	0.54		18C後 ~19C前半	
D-4	SX218	L10-d 4	2	1	不整形	1.86	0.58	0.36		19C前 ~後半	
CIT97 D-6	SK450	L10-c 1	3	1	不整形	0.5	0.34 以上	0.14		7C	
D-6	SP409	L10-c 1	3	1	楕円形	0.3	0.23	0.03		16C末 ~17C初	
D-6	SE477	L10-a 3	3	3	不整形	0.76	0.68	2.72 以上		16C末 ~17C中	
D-6	SD412	L10-c 1	3	1	溝	1.54 以上	0.5	0.19		17C前半	
D-6	SK428	L10-b 2	3	1	不整形	1.4	1.1 以上	0.17		17C前半	
D-6	SK120	L10-a 3	2	1	不整形	0.54 以上	0.42	0.17		17C前 ~後半	
D-6	SD200	K10-j 3	3	1	溝	3.0 以上	0.35	0.28		17C中 ~後半	
D-6	SK150	L10-b 1	1	1	不整形	3.3	1.3	0.64		17C中 ~18C初	
D-6	SP07	K10-j 4	1	1	円形	0.5		0.195		17C後半	
D-6	SD401	L10-b 1	3	1	溝	2.38 以上	0.28	0.23		17C後半	
D-6	SK454	L10-c 1	3	1	不整形	0.4	0.38	0.08		17C後半 以降	
D-6	SD307	L10-b 1	2	1	溝	2.65 以上	0.26	0.07		17C後~末	
D-6	SP17	K10-j 3	1	1	円形	0.42		0.122		17C後 ~18C前半	
D-6	SK44	L10-b 2	1	1	不整形	5.93	2.16	0.31		17C後 ~18C前半	
D-6	SU02	L10-c 2	1	2	円形	内矩0.48 掘形0.7		内矩0.25 掘形0.49		18C代	橋
D-6	SD406	L10-b 3	3	1	溝	2.8 以上	1.0	0.62		18C初 ~中頃	

表1 主要遺構年代表(8)

地区	遺構名	グリット	遺構面	土層	平面形	長さor直径 or一辺(m)	短辺 (m)	深さ (m)	断面形	時代	備考
D-6	SD800	L10-d 2	3	1	溝	1.2 以上	0.5 以上	0.30		18C前半	
D-6	SD308	L10-c 10	2	1	溝	5.51	0.21	0.47		18C前半	
D-6	SD600	L10-d 2	1	1	溝	0.95 以上	0.62	0.17		18C前半	
D-6	SK453	L10-d 3	3	3	不整形	3.48 以上	1.46 以上	0.42		18C前半	
D-6	SK459	L10-c 3	3	1	不整形	0.78	0.74 以上	0.2		18C前半	
D-6	SD405	L10-c 2	3	1	溝	4.06 以上	0.9 以上	0.19		18C前 ~中頃	
D-6	SX04	L10-d 3	2	1	溝	2.43	0.28	0.12		18C前 ~後半	畑の畝
D-6	SI01	L10-a 3	1	1	不整形	0.53	0.44	0.17		18C後半	箱衣壺
D-6	SE04	K10-i 3	3	2	不整形	1.49	1.41	0.62		18C後 ~19C初	
D-6	SE01	L10-c 3	1	1	円形	0.96		23.5		18C後 ~19C初	
D-6	SD04	L10-a 2	1	1	溝	2.0 以上	0.44	0.13		18C後 ~19C初	
D-6	SI322	L10-c 2	2	2	不整形	0.6	0.57	0.3		18C後 ~19C初	箱衣壺
D-6	SW18	L10-a 2	1	1	不整形	2.7 以上	2.6	1.32		18C後 ~19C初	甕
D-6	SK300	L10-d 3	2	1	不整形	4.1 以上	2.44 以上	0.4		18C後 ~19C前半	
D-6	SU04	L10-a 3	3	4	円形	内径0.66 掘形0.77		内径0.44 掘形0.37		19C初 ~中頃	桶 (2時期有)
D-6	SD03	L10-a 1	1	1	溝	4.6	0.6 以上	0.9		19C初 ~中頃	
D-6	SK436	L10-a 1	3	1	不整形	0.76	0.5	0.28		19C前半	
D-6	SD06	L9-c 10	1	1	溝	3.0	0.26 以上	0.04		19C前 ~中頃	
D-6	SK11	K10-j 3	1	4	不整形	0.9	0.68	0.43		19C中 ~後半	
D-6	SU74	L10-c 2	1	4	円形	内径0.35 掘形0.75	内径0.12 掘形0.43			明治 ~昭和	桶 (2時期有)

第2節 焼土処理土壌について

今回の調査区域の伊丹郷町期の土壌には、埋土が焼土と黒色炭化物で構成される土壌が各所に見受けられる。焼土は、しばしば10～20cmの壁土のまま残っていた。また、被熱した遺物が混じることが多い。さらに、各所で検出した焼土層の面に伴って存在する。焼土層は、火災の規模から考えてかなり厚く形成されたはずであるが、検出されるものは5cm前後と薄く、部分的にしか残っていなかった。このようなことから、この種の土壌は、記録にある幾度かの大火の焼土を集め、処理したものと考えた。

また、その形状は不整形なものもあるが、長方形で長さ3～5m、幅2m、深さ0.5m前後のものも多く、位置は建物の床下か裏庭部分に設けられることが多い。長方形土壌の場合、建物の床下に位置することが多い。この場合は、礎石列をはずして設けられており、上部を黄色粘土の三和土でしっかりと覆われている。この理由について、いくつかの推測ができる。第1に、長方形の土壌の場合は、もともと地下室として利用されていたもので、火災の焼土処理のために利用して埋めた可能性が考えられる。第2に床下に埋めた例については、炭化物を湿気除けに利用する意図があったのではないかと考えられる。火災の後処理であれば、生焼けの廃材も発生したはずであるが、炭化物にはそのようなものはみあたらない。したがって、これは単に廃材を埋めたのではなく、再度完全に焼いてから意図的に埋めたと考えられるのである。

調査区域の北少路村を襲った可能性のある大火は、古野將盈『有岡庄年代秘記』（『伊丹市史第4巻』伊丹市役所 1968年）の元禄12年（1699）、元禄15年（1702）、享保14年（1729）の3件である（表2）。土壌出土遺物を検討すると、下層遺構面の最初期の焼土処理土壌からは、17世紀後半の肥前磁器一重網目文碗や京焼風陶器とともに、大橋編年IV期の肥前磁器染付草花文丸碗などが出土する（B-2-1区SK411など）。その上の遺構面にも焼土処理土壌が形成されており、ここからは、大橋編年IV期の肥前磁器染付草花文丸碗・肥前磁器染付コンニャク印判文碗・唐津系陶器刷毛目文碗などが出土し、17世紀後半のものをほとんど含まない（B-1-1区SK340など）。このような出土傾向から、前者を元禄12年（1699）か元禄15年（1702）、後者を享保14年（1729）の火災の際の焼土処理土壌に比定した。元禄年間の2度の火災は時期が近接しており、遺物組成の上から区別できない。このほか、18世紀後半から19世紀初頭の遺物を含む焼土処理土壌がみ

表2 伊丹郷町火災年表

年 代	主 な 出 来 事
元禄元年	1688 町の中心部にある井筒町から出火して、160軒を焼く。
元禄十二年	1699 北西隅の天王町から出火して、寺院6ヶ寺・酒家16軒のほか多くの民家を焼く。
元禄十五年	1702 西側の中少路村から北端の北之口町へかけて439軒が焼ける。大火災の直後に「伊丹定火消防」が置かれる。
正徳二年	1712 吹屋の飛び火で、北東の機町で火災。
享保十四年	1729 北西の北少路村西裏から出火して80軒を焼く。
宝暦元年	1751 北少路村で火災、13軒焼失。
明和二年	1765 北少路村で火災、6軒焼失。
明和三年	1766 北西の成町で火災、6軒焼失。
文化九年	1812 2月に下中少路村で火災、3軒焼ける。 12月に北中少路村で火災、5軒焼ける。
文化十年	1813 西北端の扇子町で火災、4軒焼失。

られた（B-2-2区SK730など）。宝暦元年（1751）と明和2年（1765）に北小路村での部分的な火災があるが、遺物はこれより新しい様相を示す。「有岡庄年代秘記」成立以降（記録は文政年間まで）の火災である可能性もある。

これらの分布を示したのが、第224図である。これを見ると、元禄年間の火災は、猪名野神社参道の両側に分布することがわかる。すなわち、このときの火災は、北小路村の中心を焼き尽くしたことがわかる。一方、享保14年（1729）の焼土処理土壌は調査地区全域に分布している。前回報告した、西側の昆陽口村にあたるA-1～5区でも、検出しており、この地域一帯を全焼させたより規模の大きな火災であったことがわかる。18世紀後半～19世紀初頭の火災は、B-3・B-2-2・B-5区の一隅で確認された小範囲のものである。このように、各時期の焼土処理土壌の分布から、火災が及んだ範囲を知ることができた。

また、出土遺物は、当該期の基準的資料として位置づけられるが、これについては次回の報告でまとめた。



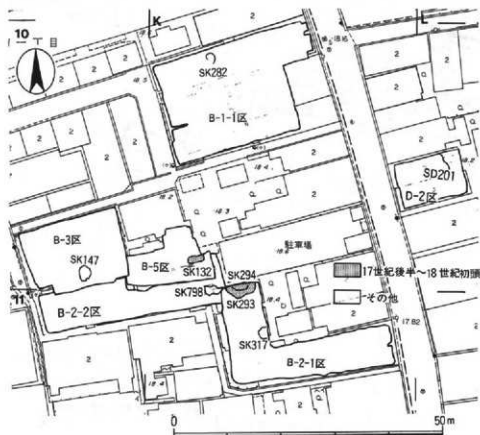
第224図 焼土処理土壌分布図

第3節 池状遺構について

今回の調査区域の各所で、池状遺構が検出された。いずれも最下層埋土がシルト質で帯水していたことを示していた。また、底部には細い木杭の痕跡がみられた。その分布を示したのが第225図である。形状は、
 1型式 長方形で、石積みを伴うもの（B-3区SK147、B-5区SK132、D-2区SD201）
 2型式 長方形で素掘りのもの（B-1-1区SK282、B-2-1区SK317）
 3型式 不整形円形を呈するもの（B-2-1区SK293・294、B-2-2区SK798）
 に分類できる。

また、その位置は、道路に面した主屋建物が建つ場所ではなく、奥まった裏庭部分にみられる。時代的にみると、17世紀後半から18世紀初頭で廃絶したものと18世紀中頃あるいは後半まで存続したものに分類できる。しかし、いずれも伊丹郷町III-2期（17世紀後半から18世紀後半）に収まる。

これらの遺構の第1の用途は、このころまで裏地に設けられていた畑や裏庭の用水であろう。それとともに、前述したこの時期に北小路村を3度も襲った大火が想起される。すなわち、これら大火の防火を兼ねていた可能性も考えられるのである。伊丹郷町では、火災年表にあるように、元禄15年（1702）に「伊丹定火消方」が設置される。その後に享保14年（1729）の大火が発生したが、以後は小規模の火災に留まっている。消防組織の整備の成果かと考えられる。このような事情と、その後この地域で裏地の宅地開発が始まったために、これらの池状土壇が廃絶していったと考えられるのである。



第225図 池状遺構分布図

第4節 遺物計測方法および分析結果について

1 目的

調査を重ねるごとに出土する遺物は膨大な数に上るが、各遺物については個々に事実報告を行って来た。今回も前回と同様、出土遺物の大半を占める土器・陶磁器・土製品について、一括遺物を対象として、

- 1 遺物の種類
- 2 生産地
- 3 器種・器形

の分類基準を定め、破片計測法と集計方法についても独自の方法を用い、計測、数量化を行った。これにより、同時期の種類・器種構成、伊丹における当時の土器・陶磁器の流通動向の把握、生活空間の状況復原が、ある程度可能になると考えられる。但し、その基準については編年作業の進展や生産地での調査成果により、今後さらに精密にして行きたい。

2 種類と分類基準

種類—土器・陶器・磁器・玩具（ミニチュア品を含む）

基本的な種類は、大別して4項目に分けた。分類基準については、細分化するとかえって正確さを欠くと考えたため、下記に示す大枠に従った。

- A 土器—素地は陶土、原則として軟質で、無軸である。
- B 陶器—素地は陶土、土器よりも硬質である。釉薬の有無は原則的には問わず、焼締陶器・施釉陶器共に含む。
- C 磁器—素地は陶石、原則として硬質である。
- D 玩具—他の遺物とは異質であり、単独に別置した。よって分類基準としては、他とは異なる（土器・陶器・と分類せず、玩具・ミニチュア品として一括した）。

3 生産地と分類基準

生産地の分類は最小限に留めた。消費地の場合、生産地を特定することは甚だ困難であり、且つ、安易な特定は混乱を招くと考えたからである。そこで、断定はせずに「～系」とし、さらに生産地を明確にしえないものは、その他（産地不明）とした。

A 土器

在地系①—いわゆる土師質土器である。焙烙は、17世紀前半～後半は堺か大坂産の難波分類C類、18世紀前半～後半には明石もしくは堺産のE類、18世紀末には枚方の津田産G類が加わることが難波洋三氏によって明らかにされている（難波1992年）。しかし、厳密に堺・大坂・明石の生産地を破片から区別することは難しく、便宜上ここに含めた。また、18世紀末～19世紀前半には大坂産D類と津田産のG類を模した焙烙の生産痕跡が、伊丹市教育委員会が調査した本遺跡の宮ノ前地区第93次調査で検出されている（小長谷1992年）。土師質土器皿などは、伊丹市近郊において生産され、購入されたものと考えられる。

在地系②—いわゆる瓦質土器である。

泉州系—焼塩壺・火筒壺・焜炉など、澳焼と称される土器は、大阪府堺市西湊町周辺及び八田北町な

ど和泉において生産されたものと考えられる。

その他一棹輪が施された製品は、施輪されている点で陶器に含まれるべきものであるが、焼成温度が低く、軟質であるという点から、その他の土器に含めた。

B 陶器

備前系、堺・明石系、丹波系、大谷系、万古系、瀬戸・美濃系（太白手）、瀬戸・美濃系（その他）、唐津系（京焼風陶器）、唐津系（埴野焼）、唐津系（呉器手）、唐津系（その他）、京焼系（伊賀・信楽焼を含む）、萩焼系、中国系、その他（産地不明）

C 磁器

肥前系（有田、波佐見を中心とする肥前磁器と、肥前磁器の製作技法をまねた、あるいは工人が移動して制作したと思われる肥前系磁器とあるが、前者を肥前系とした。）

瀬戸・美濃系（新製焼）、三田系、京焼系、中国系、その他

D 玩具

ミニチュア、土人形、泥面子、ままごと道具

4 器種と器形の分類基準

器種はその形状から大きく15種類に分類した。近世の土器・陶磁器の器種は多様化するため、細分すればきりが無く、器形に関してはなお一層この傾向が顕著な為、使用法が明確なものに関しては、これを重点に分類した。それ以外は細分化を避け、個々の分類基準に関しては、以下に掲げた。

(1) 碗（鉢との相違点は、口縁装飾が華美でないもの。）

小杯—口径5.0cm未満、小碗—口径5～9.0cm未満、中碗—口径9～12.0cm未満、大碗—口径12～15.0cm未満。

紅猪口—白磁の小杯のみを選んだ。白磁以外的小杯の中にも、紅猪口として用いられた製品があるかもしれないが、特定の製品に特定した。

薄手酒杯—幕末から明治にかけて現れるもので、器壁が1.0mm前後の小杯である。清酒用に用いられたと考えられる。

仏飯器

(2) 皿

極小皿—口径7.0cm未満、小皿—口径7～14.0cm未満、中皿—14.0～26.0cm未満、大皿—口径26.0cm以上。

灯明皿—口縁部に煤の付着しているもの。灯明受皿—口縁内部に環状の受けをもつもの。

卸皿—内面底部に卸目が認められるもの。

(3) 鉢（碗との相違点は、1 高台径が広い、2 口縁装飾が華美。皿との相違点は、1 器高と口縁の比が三分の二以下、2 主文様が器の外面にある）

小鉢—口径15.0cm未満、中鉢—口径15～24.0cm未満、大鉢—24.0cm以上

水鉢（手水鉢を含む）、餌鉢（餌猪口・鳥鉢を含む）、鬘盤、植木鉢、猪口（そば猪口を含む）、蓋物、段重、片口鉢、擋鉢、練鉢（こね鉢）、香炉、灰吹、火入、火鉢（手あぶり）、火消し壺、焔炉、七厘（火力調整窓がある）、匣鉢、風炉（火窓や脚の形態に工夫が凝らされている物）、建水

(4) 壺

小壺—器高12.0cm未満、中壺—器高12～30.0cm未満、大壺—器高30.0cm以上、お歯黒壺（口縁の一方所が

葛口で、片に耳か付く壺)、木指、焼塩壺

(5)甕

小甕一器高12.0cm未満、中甕一器高12～30.0cm未満、大甕一器高30.0cm以上

(6)瓶類

小瓶一器高10.0cm未満、中瓶一器高10～15.0cm未満、大瓶一器高15.0cm以上、神酒德利、香油壺、燗德利、花瓶

(7)水注

小水注一器高6.0cm未満、中水注一器高6.0cm以上、急須（火に掛けない）、土瓶（火に掛ける）、水滴

(8)釜

釜、茶釜

(9)鍋類

焙烙、土鍋、行平

(10)鉢類

瓦灯（傘部）、瓦灯（皿部）、火もらい、灯笼、手焙り

(11)杓子類

散運筆、十能

(12)乗燭類

乗燭、カンテラ

(13)器台類

有脚灯明皿、有脚灯明受皿

(14)蓋類

小碗蓋、中碗蓋、合子蓋、蓋物蓋、段重蓋、焼塩壺蓋、火消し壺蓋、七厘窓蓋、壺蓋、水注蓋、急須・土瓶蓋、土鍋・行平蓋、乗燭・カンテラ蓋

(15)その他

5 集計・表記方法

今回報告した遺構から、時代・出土量・種類共まとまった遺構を4カ所選び、上記の分類基準に従い計測を行った。

計測方法は、計算の際の正確さを求め、口縁部換算値のみから推定個体数を求めた。口縁部の無い破片は0個体と換算し、体部から底部がほぼ完全に残り、口縁部もほぼ欠損の無いものは1個体と換算した。

口縁部の破片は、「口縁部半径チャート（1/12分割）」を用いて少数第2位までを記録した。その値を合計したものが推定個体数である。

6 分析結果

今回の入力方法としては、「EXCEL V5.0」を利用して、基礎データ（番号・遺構番号・器種・産地・用途・破片数・推定個体数）を入力し（表3）、遺構ごとに産地別構成比と用途別構成比をグラフ化した（第226・227図）。

産地別構成比の凡例については、個々のグラフに付した。用途別構成比の凡例については、

- A—食膳具（食べ物を盛る器 ex.碗、皿、鉢、猪口など）
 B—調理具（食べ物を加工する道具 ex.搥鉢、焙烙、土瓶、急須など）
 C—貯蔵具（物を保存する容器 ex.甕、壺、瓶、水注、手水鉢など）
 D—調度具（暖房・灯明・喫煙・化粧などに使用された器具 ex.香炉、火鉢、火入、瓦灯、灯明皿、植木鉢、香油壺など）
 E—その他
- とした。

7 遺構の年代について

今回取り上げた4遺構を、生産地の編年観を基準に年代を与えるると以下ようになる。

- B—1—1区SK601（17世紀中頃～17世紀後半）、B—13区SK26（17世紀後半～1729年）
 B—2—2区SK722（18世紀後半～19世紀前半）、B—1—1区SK441（19世紀中頃～19世紀末）

8 破片数と推定個体数について

破片数と推定個体数について、全体における比率には大差は無いが、土師質土器などは破片数が比較的高くなる。これは破片数が土師質土器の場合、破棄されると細かく割れる場合が多く、硬質な陶磁器の破片数と推定個体数が同率、あるいは推定個体数の方が上回るのと対照的である。

9 用途別構成比について

遺構の性格を知るうえで、破棄された遺物の用途別の傾向を把握することは必要であり、用途別の数量化は産地別の数量化にも影響を与えると考えられる。

SK601とSK26では、食膳具（A）が個体数で58%と62%、次いで調度具（D）12%と21%、調理具（B）27%と7%、貯蔵具（C）3%と10%となっており、17世紀中頃～18世紀初頭の遺構では、調理器具を除いてさほど変化はない。その内訳の主なもの挙げると、以下ようになる。食膳具は、SK601では皿が多く41.48%（個体数、以下同様）、次いで碗が10.97%、鉢が8.27%となる。SK26では、碗が多く29.76%、次いで皿が21.78%となる。調度具は、SK601で灯明皿11.21%、SK26で灯明皿10.03%となる。灯明皿はすべて在産系①の土師質土器の手すくねのものである。このほか、SK26では香炉0.29%、仏飯具1.54%がみられることに注目したい。神仏壇の普及は、この頃と考えられよう。化粧道具の紅猪口は、SK26に0.022%みられる。17世紀後半～1729年頃から少しずつ目につくようになる。調理具は、SK601で焙烙23.9%、搥鉢1.06%、SK26で焙烙6.02%、搥鉢2.49%。貯蔵具では、SK601の瓶、SK26では甕が少量出土している。一方、SK722では食膳具が個体数で38%、SK411では22%に減少する。調度具は、SK722では26%、SK411では47%となっていて、SK722は前2者と変わらないが、SK411では増加が著しい。これは、灯明具・火鉢などの比率が高まったこと、新たに植木鉢が加わったことに起因している。調理具では19%と13%となっており、前2者より少し多くなっている。貯蔵具は10%と13%で、前2者と変わらない。18世紀後半～19世紀末頃の遺構では、食膳具の割合が減少し、調理具の割合がやや高くなっていることがわかる。しかし、前回の報告（藤井他1995年）では、50%前後が多く、このような減少傾向はない。前回のデータは、18世紀後半～19世紀前半の資料が中心であり、SK722・SK411とはほぼ同時期である。したがって、今回のSK722・SK411のデータが、片寄りをみせているといえる。

その内訳は、食膳具は、S K 722で碗21.94%、皿6.57%、鉢1.64%。S K 441で皿8.02%、碗7.33%、鉢3.01%となる。調度具は、S K 722で灯明皿18.56%、瓶2.18%、火鉢1.77%など。S K 441では、灯明皿23.53%、瓶2.02%、香炉1.29%などとなる。灯明具の合計比率はS K 601・S K 26の約2倍にのぼり、灯明の利用が進んだことを読み取ることができる。化粧道具の紅猪口は、S K 722で0.004%、S K 441で0.02%と比率を高め、普及していく様が見取れる。また、この中に少ないながら桶木鉢がみられるようになる。S K 722で在地系①(土師質土器)と丹波焼系が破片数で0.0018%、S K 441で丹波系が個体数で0.0067%となる。19世紀中頃～後半には比率が高まっていることがわかる。園芸文化が広がりをみせてきたことを示している。調理具は、S K 722で土瓶7.14%、土鍋・行平3.00%、焙烙1.77%、播鉢1.46%など。S K 441では、土瓶2.46%、播鉢2.02%、焙烙1.33%、土瓶・行平0.78%となる。土瓶・鍋・行平鍋などの器種は、S K 722の18世紀後半から急増する。ただ、S K 722は土瓶・土鍋が他の遺構より多く、やや性格に片寄りが感じられる。万古系急須が、S K 722に破片数で0.008%入っていることも興味深い。煎茶道の高まりを感じさせる製品である。さらにS K 441では壺德利が破片数で0.0029%みられる。これも新たな器種である。

このほか、S K 722とS K 411では、その他(E)が7%～5%見られるが、そのほとんどはミニチュア土製品である。すなわち、ミニチュア土製品は、18世紀後半以降に増加し、19世紀末頃まで一定量を占めることがわかる。

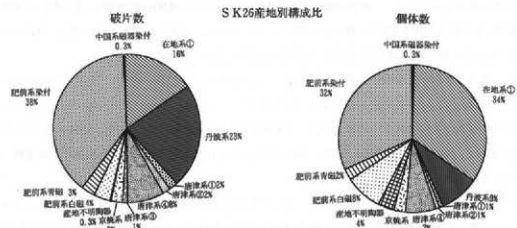
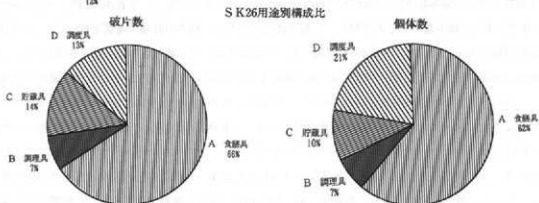
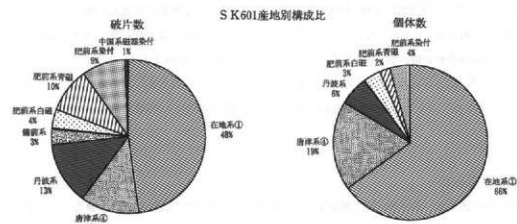
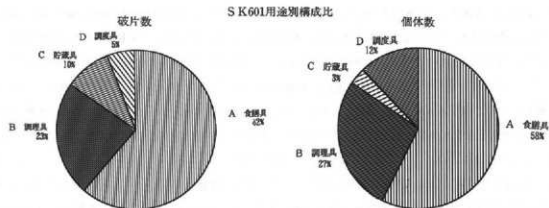
10 産地別構成比

S K 601とS K 26では、在地系①(土師質土器)の比率と肥前系染付の比率が大きく異なっている。在地系①(土師質土器)の個体数は、S K 601では66%と過半数を占めるのに対し、S K 26は34%。肥前系染付は、S K 601では4%と極少数であるのに対し、S K 26は32%である。他の同時期の遺構と比べると、S K 601の構成比が特殊である。これは、S K 601で在地系①(土師質土器)の小皿・灯明皿と焙烙が多いためである。

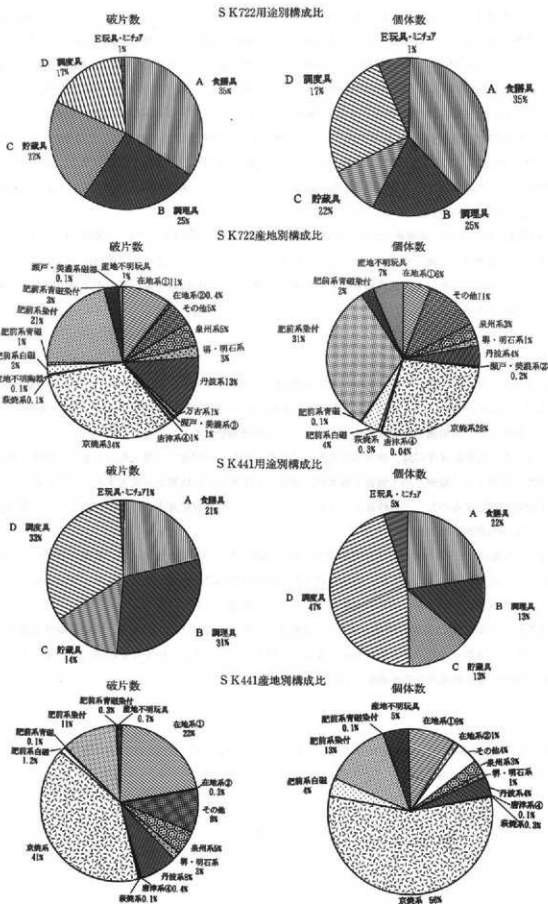
肥前系は前回の報告では、有田の肥前系と波佐見およびその周辺の波佐見系に分けたが、厳密には分類し難い。したがって、今回は肥前系とした。分けたとすれば、前回の分析と同様に大半が波佐見系になると考えられる。これは、S K 601とS K 441が極端に少ないが、S K 601は前述のように在地系①が多いためであり、S K 441は京焼系が多いためである。この2例は特別であって、S K 26とS K 722では、42%と37.12%となっており、ほぼ40%を占める。前回の報告アーチ(18世紀後半～19世紀前半の資料中心)でも50%前後が多く、こちらが一般的傾向である。器種は、碗・皿・猪口・鉢・仏銀具・花瓶などで、時期を問わず食膳具と調度具の主流を占めている。一般的傾向を示すS K 26とS K 722の具体的な比率は、多い順にS K 26で碗0.27%、仏銀具0.062%、皿0.033%、紅猪口0.022%、猪口0.02%。S K 722では、碗0.18%、碗蓋0.06%、皿0.029%、極小皿0.021%、仏銀具0.019%、蓋物蓋0.018%、鉢0.013%となる。

このほか、唐津系陶器がS K 601で19%、S K 26で9%みられる。主に碗・皿・鉢である。その内訳は、S K 601で碗は個体数では0% (破片数で1.37%)、皿は17.35%。S K 26では碗1.36%、皿0.68%、鉢4.37%である。丹波系は6%と9%である。その内訳は、S K 601では瓶0.031%、鉢0.012%、播鉢0.011%となっている。S K 26では、壺0.042%、播鉢0.025%、鉢0.012%、壺0.01%などである。壺・播鉢は、両遺構とも丹波焼が独占している。

S K 722とS K 411では、前2者にみられなかった漆・明石系が1%、萩焼系が0.34%と0.28%と少量であるが登場する。漆・明石系はすべて播鉢、萩焼系は碗である。播鉢は、S K 722では漆・明石系だけである。しかし、S K 441では丹波系が0.011%みられるようになる。



第226図 用途別・産地別構成比グラフ(1)



第227図 用途別・産地別構成比グラフ (2)

もっとも目につくのは、京焼系の増加である。S K 722で28%、S K 411では56%に上る。その器種は、碗・鉢・土瓶・鍋・行平鍋・灯明皿・有脚灯明受皿などで、特に土瓶以下の調理具、調度具が多い。内訳を多い順に示すと、S K 722では土瓶0.071%、灯明皿・有脚灯明受皿など0.051%、急須・土瓶蓋0.043%、土鍋・行平0.03%、碗0.028%、土鍋・行平蓋0.012%、水注0.009%などとなる。S K 441では灯明皿・有脚灯明受皿など0.134%、御神酒徳利0.05%、水注0.036%、蓋0.032%、カンテラ0.016%、土瓶0.016%などとなっている。灯明皿は、S K 601・S K 26では、すべて在地系①（土師質土器）であった。ところが、S K 722では柿釉灯明皿0.1%、京焼系0.047%、在地系①（土師質土器）0.029%で、柿釉灯明皿が多く、京焼系のもも比較的多い。S K 441では、京焼系0.076%、柿釉灯明皿0.031%で、京焼系の方が多くなっており、在地系①（土師質土器）はみられなくなっている。

S K 722では、また、泉州系が3%みられるのも注意したい。そのほとんどが、「湊焼」あるいは「八田焼」の土師質土器風呂・火鉢・火消壺などである。焼塩壺はここに入るが、この宮ノ前地区では少ない。今回の資料には、みられなかった。武家屋敷など社会的に上層の人々の居住地と違って、中下層の町人達の居住地であるためであろう。

11 まとめ

以上のように、B-1-1区S K 601（17世紀中頃～17世紀後半）とB-13区S K 26（17世紀後半～1729年）は似通った組成を示し、B-2-2区S K 722（18世紀後半～19世紀前半）とB-1-1区S K 441（19世紀中頃～19世紀末）が似通った組成を示していた。これは時期的な差としてとらえられる。

すなわち、18世紀後半以降、伊丹町遺跡では京焼系の製品が増加し、樺・明石系播鉢や萩焼系碗、柿釉灯明皿が登場する。泉州系の土師質土器風呂・火鉢・火消壺もこの時期から流入するようになる。ミニチュア土製品が増加するのも、この時期からである。このように、18世紀後半から19世紀前半には、遺物組成の上で大きな画期が認められる。

また、S K 601とS K 26の間にも、仏飯具や紅猪口の増加などの変化が認められ、遺物の総量も2遺構の間には大きな差がある。このように、17世紀後半から18世紀初頭にも画期が認められる。今回は提示しなかったが、波佐見系の「くらわんか手」が急増するのもこの時期である。

さらに、S K 441では柿釉灯明皿が減少し、京焼系の灯明具が主流となっている。京焼系御神酒徳利が増えるのもこの時期である。丹波焼植木鉢も増加し、園芸文化が定着していくことが読み取れる。このように、19世紀中頃にも、組成変化の小画期があることがわかる。

参考引用文献

- 小長谷正治「資料紹介 伊丹町阿見の焙焼窯」『関西近世考古学研究II』関西近世考古学研究会 1992年
難波洋三「徳川氏大坂城期の焙焼」『難波宮址の研究 第九』勤大阪市文化財協会 1992年

第5節 土師質土器皿の分類について

今回報告した遺構から、手すくね成形の土師質土器皿の出土量のまとまった遺構3カ所を選び、口径と器高によるグラフを作成した。この3遺構を、土師質土器皿以外の物も含めた出土遺物の生産地の編年観を基準に年代を与えると、以下のようになる。

有岡城期 (AR) D-2区SD401 (16世紀後半)

伊丹郷町期 (IT) B-1-1区SK475 (18世紀前半~18世紀後半)

D-2-2区SX108 (18世紀中頃~19世紀前半)

有岡城期 (AR) の土師質土器皿については、藤井他『有岡城跡・伊丹郷町II第2分冊』(1992年)の中で、胎土・色調・形態などの点で以下のように3型式に分類し、さらに法量によって細分化している。このうち、AR・2型式については、今回のグラフ化に伴い、新たに口径5.5cmというグループが出現したため、そのグループを新A類とした。そのため、前A類は新B類、前B類は新C類、前C類は新D類とした。これをまとめると、以下のようになる。

AR・1型式一浅黄橙色10YR8/3を呈し、橙色気味である。器高は高く、口縁部は直線的に伸び、底部との境で明瞭に屈曲するもの。外面は指頭圧調整、内面はヌキナゲ調整を行う。

A類—口径8cm前後、器高1.7cm前後

B類—口径10cm前後、器高2.3cm前後

C類—口径12.6cm前後、器高2.5cm前後

AR・2型式一灰白色2.5Y8/2を呈し、褐色気味である。器高は低く、口縁部は内湾する。調整は1型式と同様である。

A類—口径5.5cm前後、器高1.5cm前後

B類—口径7.5cm前後、器高1.5cm前後

C類—口径11cm前後、器高2cm前後

D類—口径34.2cm前後、器高3.3cm前後

AR・3型式一灰白色5Y8/2を呈し、白さが強い。器高は低く、口縁部は直線的に伸びる。調整は1型式と同様であるが、外面の指頭圧調整は目立たず、丁寧な作りである。

A類—口径10cm前後、器高1.6cm前後

B類—口径11.7cm前後、器高1.6cm前後

C類—口径15.2cm前後、器高2.2cm前後

今回の計測では、D-2区SD401の資料がこの有岡城期の分類に当てはめることができる。1型式 (A類、C類) と思われるものは数点しか無く、残りは全て2型式 (A類、B類) に当てはまる。3型式は見られなかった。その中でも、ヘソ皿状のものとそうでないものとに分類した。その結果、ヘソ皿状のものは2型式のA・B・C類のいずれにもみられ、中でも2型式B類に多いことがわかった。

伊丹郷町期 (IT) のB-1-1区SK475、D-2-II区SX108の2遺構についてはこの分類には当てはまらない。調整方法は、似通っている。明確な差は、器壁の厚さか0.4cm前後のもので、胎土は精良で、にぶい橙色7.5YR7/3を呈する一群と、胎土は精良であるが、断面が層をなし表面が薄くはがれ落ちることが多く、色調が明褐色7.5YR7/2を呈し1型式よりわずかに黒い一群である。このような差は、粘土の質の差によるものであろう。前者をIT・1型式、後者をIT・2型式とする。IT・1型式は法量によってA・B

の2類に分類できる。1 T・2 型式は器壁の厚さが0.4cm前後で口径が11cmを中心とするものと、器壁が0.7cm前後の厚手で口径が13cmを中心とするものに分けられる。1 T・1 型式は伊丹郷町期の初期から中期まで認められ、さらに細分可能である。しかし、個体数が少ないため、今回は見送ることとした。1 T・2 型式は、18世紀後半から出現する。これをまとめると、以下のようになった。

1 T・1 型式—器壁の厚さが0.4cm前後。胎土は精良で、にぶい橙色7.5Y R7/3を呈する。器高は低く、口縁部は内湾する。外面口縁端部はヨコナア調整、底部は指頭圧および手掌圧調整、内面口縁部はヨコナア調整、底部は一方もしくは不定方向のナア調整を施す。

A類—口径8.0cm前後

B類—口径12.0cm前後

1 T・2 型式—胎土は精良であるが、断面が層をなし、表面が薄くはがれ落ちることが多い。色調は明褐灰色7.5Y R7/2を呈し1 型式よりわずかに黒い。調整は、1 型式と同様である。

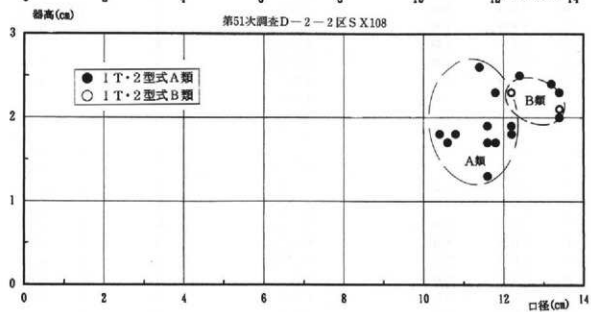
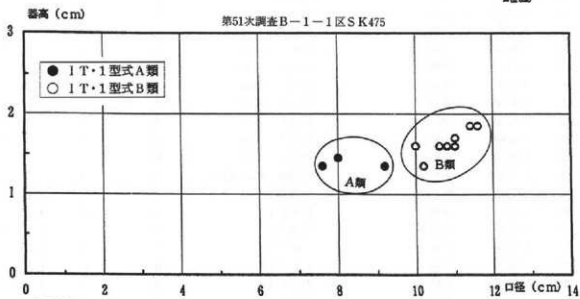
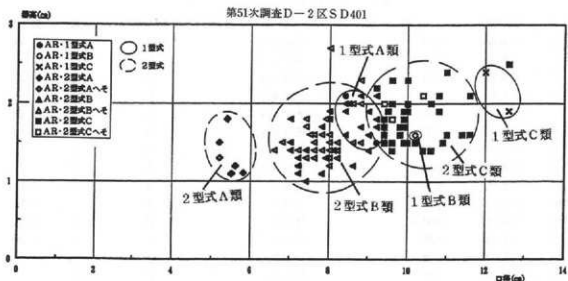
A類—口径11cm前後、器壁の厚さ0.4cm前後

B類—口径13cm前後、器壁の厚さ0.7cm前後

以上のように、今回は有岡城跡期の資料で2 型式に新たに口径5.5cm前後のグループ(A類)が加わる事が判明した。また、伊丹郷町期の手すくねの皿を18世紀後半を境に大別することができた。両期のつながりや、全体を通した分類・編年作業は今後資料の増加を待って行いたい。

時期	型式・分類	器形	時期	型式・分類	器形
A R (有岡城期)	1 型式A類		I T (伊丹郷町期)	1 型式A類	
	1 型式B類			1 型式B類	
	1 型式C類			2 型式A類	
	2 型式A類			2 型式B類	
	2 型式A類 (ヘソ皿)			0 10cm	
	2 型式B類				
	2 型式B類 (ヘソ皿)				
	2 型式C類				
	2 型式C類 (ヘソ皿)				

第228図 土師質土器型式分類図



第229図 第51次調査出土土師質土器皿流量グラフ

表3 伊丹郷町遺物計測基礎データ(1)

No.	遺構番号	器種	産地	用途	破片数	個体数
1	S K601	小皿	在地系①	A	34	2.95
2	S K601	灯明皿	在地系①	D	7	1.37
3	S K601	小鉢	在地系①	A	1	0.75
4	S K601	焙烙	在地系①	B	28	2.92
5	S K601	小杯	唐津系④	A	1	0.13
6	S K601	小皿	唐津系④	A	13	2.12
7	S K601	中皿	唐津系④	A	2	
8	S K601	中碗	唐津系④	A	2	
19	S K601	小鉢	丹波系	A	3	0.13
10	S K601	中鉢	丹波系	A	1	0.13
11	S K601	播鉢	丹波系	B	6	0.13
12	S K601	大瓶	丹波系	C	2	0.38
13	S K601	中壺	丹波系	C	1	
14	S K601	大甕	丹波系	C	6	
15	S K601	大甕	備前系	C	5	
16	S K601	小碗	肥前系(白磁)	A	1	0.13
17	S K601	小碗	肥前系(染付)	A	1	
18	S K601	中碗	肥前系(白磁)	A	3	0.29
29	S K601	中碗	肥前系(青磁)	A	13	0.29
20	S K601	中碗	肥前系(染付)	A	12	0.5
21	S K601	中皿	肥前系(青磁)	A	1	
22	S K601	小鉢	肥前系(白磁)	A	1	
23	S K601	花瓶	肥前系(白磁)	D	1	
24	S K601	小皿	中国製(磁器染付)	A	1	
25	S K26	極小皿	在地系①	A	2	0.43
26	S K26	小皿	在地系①	A	13	4.0
26	S K26	灯明皿	在地系①	D	12	2.5
27	S K26	火鉢	在地系①	D	2	0.13
28	S K26	焙烙	在地系①	B	21	1.5
39	S K26	小杯	唐津系④	A	1	0.13
30	S K26	小碗	京焼系	A	4	0.25
31	S K26	中碗	唐津系①	A	3	0.21
32	S K26	中碗	唐津系③	A		
33	S K26	中碗	唐津系④	A	4	0.13
34	S K26	中碗	京焼系	A	3	0.04
35	S K26	小皿	唐津系①	A	3	
36	S K26	小皿	唐津系②	A	5	0.17
38	S K26	小皿	唐津系④	A	4	
49	S K26	小鉢	丹波系	A	1	0.04
40	S K26	小鉢	唐津系④	A	1	0.04
41	S K26	中鉢	丹波系	A	6	0.25
42	S K26	中鉢	唐津系④	A	5	0.21
43	S K26	中鉢片口	唐津系④	B	1	0.13
44	S K26	大鉢	唐津系④	A	7	0.71
45	S K26	蓋物	唐津系④	C	2	0.33
46	S K26	播鉢	丹波系	A	24	0.62
47	S K26	香炉	京焼系	D	1	0.29
48	S K26	火入	丹波系	D	1	
49	S K26	中壺	丹波系	C	6	0.25

表3 伊丹町遺物計測基礎データ(2)

No	遺構番号	器種	産地	用途	破片数	個体数
50	S K26	中甕	丹波系	C	11	0.92
51	S K26	大甕	丹波系	C	13	0.12
52	S K26	大瓶	丹波系	C	10	
53	S K26	中水注	産地不明	C	1	0.96
54	S K26	小碗	肥前系(白磁)	A	3	0.96
55	S K26	小碗	肥前系(染付)	A	16	0.71
56	S K26	中碗	肥前系(白磁)	A	1	
57	S K26	中碗	肥前系(青磁)	A	3	
58	S K26	中碗	肥前系(染付)	A	82	5.12
59	S K26	大碗	肥前系(染付)	A	1	
60	S K26	紅猪口	肥前系(白磁)	D	1	0.54
61	S K26	仏飯具	肥前系(染付)	D	9	1.54
62	S K26	小皿	肥前系(白磁)	A	5	0.21
63	S K26	小皿	肥前系(青磁)	A	1	0.29
64	S K26	小皿	肥前系(染付)	A	3	0.33
65	S K26	猪口	肥前系(白磁)	A	2	0.29
66	S K26	猪口	肥前系(染付)	A	1	0.21
67	S K26	花瓶	肥前系(青磁)	D	5	0.33
68	S K26	花瓶	肥前系(染付)	D	11	
69	S K26	小杯	中国製(染付)	A	1	0.04
70	S K722	極小皿	在地系①	A	4	0.75
71	S K722	小皿	在地系①	A	38	0.21
72	S K722	灯明皿	在地系①	D	29	3.25
73	S K722	灯明皿	その他(柿釉)	D	47	9.38
74	S K722	灯明受皿	その他(柿釉)	D	13	2.25
75	S K722	中鉢	在地系①	A	7	0.33
76	S K722	植木鉢	在地系①	D	1	
77	S K722	香炉	在地系②	D	2	
78	S K722	火鉢	在地系②	D	1	
79	S K722	火鉢	泉州系	D	6	1.96
80	S K722	風炉	泉州系	D	46	1.54
81	S K722	焙烙	在地系①	C	40	1.96
82	S K722	瓦盤	在地系②	D	1	
83	S K722	乗燭	その他(柿釉)	D	1	1.0
84	S K722	火消し壺蓋	泉州系	D	2	0.25
85	S K722	小碗	産地不明	A	1	0.54
86	S K722	小碗	京烧系	A	46	2.54
87	S K722	小碗	萩烧系	A	1	0.38
88	S K722	中碗	唐津系④	A	3	
89	S K722	中碗	京烧系	A	9	0.46
90	S K722	小皿	唐津系④	A	1	
91	S K722	小皿	京烧系	A	4	0.75
92	S K722	灯明皿	京烧系	D	19	4.54
93	S K722	灯明受皿	京烧系	D	4	1.17
94	S K722	中鉢	唐津系④	A	2	
95	S K722	大鉢	唐津系④	A	1	0.04
96	S K722	植木鉢	丹波系	D	1	
97	S K722	蓋物	丹波系	C	1	0.04
98	S K722	蓋物	京烧系	C	1	0.04

表3 伊丹町町遺物計測基礎データ(3)

№	遺構番号	器種	産地	用途	破片数	個体数
99	S K722	火入	丹波系	D	1	0.04
100	S K722	摺鉢	堺・明石系	B	29	1.62
101	S K722	摺鉢	丹波系	B	3	
102	S K722	小壺	丹波系	C	10	
103	S K722	中壺	丹波系	C	10	1.21
104	S K722	中壺	瀬戸・美濃系②	C	4	
105	S K722	中壺	京焼系	C	3	
106	S K722	大壺	丹波系	C	2	
107	S K722	中甕	丹波系	C	18	1.67
108	S K722	中甕	京焼系	C	1	
109	S K722	大甕	丹波系	C	63	
110	S K722	中瓶	丹波系	C	5	
111	S K722	中瓶	京焼系	C	38	0.42
112	S K722	大瓶	丹波系	C	31	2.0
113	S K722	小水注	京焼系	C	3	1.04
114	S K722	中水注	京焼系	C	7	
115	S K722	急須	万古系	B	9	
116	S K722	土瓶	京焼系	B	144	7.92
117	S K722	土鍋・行平	京焼系	B	72	3.04
118	S K722	行平	京焼系	B	3	0.29
119	S K722	乗燗	京焼系	D	1	0.04
120	S K722	蓋物蓋	瀬戸・美濃系②	C	2	0.25
121	S K722	急須・土瓶蓋	京焼系	B	15	4.79
122	S K722	土鍋・行平蓋	京焼系	B	3	1.29
123	S K722	蓋	京焼系	B	3	2.46
124	S K722	小杯	肥前系(染付)	A	4	0.87
125	S K722	小碗	肥前系(白磁)	A	8	1.83
126	S K722	小碗	肥前系(染付)	A	48	5.37
127	S K722	小碗	肥前系(青磁染付)	A	4	1.17
128	S K722	中碗	肥前系(白磁)	A	3	0.29
129	S K722	中碗	肥前系(青磁)	A	1	0.13
130	S K722	中碗	肥前系(染付)	A	113	11.42
131	S K722	中碗	肥前系(青磁染付)	A	12	0.21
132	S K722	中碗	肥前系(染付)	A	1	
133	S K722	大碗	肥前系(染付)	A	1	
134	S K722	紅猪口	肥前系(白磁)	D	1	0.46
135	S K722	仏銀具	肥前系(白磁)	D	1	0.54
136	S K722	仏銀具	肥前系(染付)	D	3	1.54
137	S K722	極小皿	肥前系(白磁)	A	2	1.04
138	S K722	極小皿	肥前系(染付)	A	2	1.29
139	S K722	小皿	肥前系(白磁)	A	1	
140	S K722	小皿	肥前系(染付)	A	15	3.25
141	S K722	中皿	肥前系(染付)	A	1	
142	S K722	小鉢	肥前系(染付)	A	11	0.25
143	S K722	小鉢	肥前系(青磁染付)	A	1	0.08
144	S K722	中鉢	肥前系(染付)	A	1	0.08
145	S K722	中鉢	肥前系(青磁染付)	A	12	1.04
146	S K722	猪口	肥前系(染付)	A	2	0.96
147	S K722	蓋物	肥前系(染付)	C	3	0.46

表3 伊丹郷町遺物計測基礎データ(4)

No.	遺構番号	器種	産地	用途	破片数	個体数
148	S K 722	香炉	肥前系 (白磁)	D	1	0.13
149	S K 722	花瓶	肥前系 (白磁)	D	2	
150	S K 722	花瓶	肥前系 (青磁)	D	5	
151	S K 722	花瓶	肥前系 (染付)	D	4	1.0
152	S K 722	神酒徳利	肥前系 (染付)	D	1	
153	S K 722	水滴	肥前系 (染付)	D	1	
154	S K 722	中碗蓋	肥前系 (染付)	A	22	6.5
155	S K 722	中碗蓋	肥前系 (青磁染付)	A	3	0.17
156	S K 722	蓋物蓋	肥前系 (染付)	C	6	2.0
157	S K 722	ままごと道具(お盆)	産地不明	D	1	1.4
158	S K 722	ミニチュア(鈴)	産地不明	D	1	0.42
159	S K 722	ミニチュア(独楽)	産地不明	D	2	0.92
160	S K 722	土人形	産地不明	D	4	3.17
161	S K 722	泥面子	産地不明	D	2	1.5
162	S K 441	椀小皿	在地系①	A	6	0.67
163	S K 441	小皿	在地系①	A	29	5.08
164	S K 441	灯明皿	在地系①	D	10	
165	S K 441	灯明皿	その他 (柿釉)	D	51	2.33
166	S K 441	灯明受皿	その他 (柿釉)	D	4	0.25
167	S K 441	火鉢	在地系②	D	2	0.83
168	S K 441	燗炉	泉州系	D	22	0.63
169	S K 441	風炉	泉州系	D	1	
170	S K 441	花瓶	その他 (柿釉)	D	3	
171	S K 441	焙烙	在地系①	B	101	0.99
172	S K 441	乗獨	その他 (柿釉)	D	1	0.71
173	S K 441	火消し壺	泉州系	D	9	1.54
174	S K 441	七厘 (きな)	泉州系	D	1	
175	S K 441	小杯	唐津系①	A	1	
176	S K 441	小杯	京焼系	A	3	0.54
177	S K 441	小碗	京焼系	A	7	0.58
178	S K 441	小碗	萩焼系	A	1	0.21
179	S K 441	中碗	唐津系④	A	2	0.04
180	S K 441	中碗	京焼系	A	8	
181	S K 441	小皿	京焼系	A	1	
182	S K 441	灯明皿	京焼系	D	34	5.67
183	S K 441	灯明受皿	京焼系	D	24	9.21
184	S K 441	小鉢	丹波系	A	1	0.33
185	S K 441	小鉢	京焼系	A	8	0.66
186	S K 441	小鉢片口	京焼系	B	1	0.46
187	S K 441	檜木鉢	丹波系	D	3	0.5
188	S K 441	蓋物	京焼系	C	1	0.13
189	S K 441	播鉢	堺・明石系	B	12	0.67
190	S K 441	播鉢	丹波系	B	12	0.83
191	S K 441	香炉	京焼系	D	3	0.67
192	S K 441	小壺	京焼系	C	6	
193	S K 441	小壺	丹波系	C	3	
194	S K 441	中壺	丹波系	C	2	
195	S K 441	大壺	丹波系	C	2	
196	S K 441	小瓶	丹波系	C	1	

表3 伊丹町町遺物計測基礎データ(5)

No	遺構番号	器種	産地	用途	破片数	個体数
197	S K 441	中瓶	丹波系	C	2	1.21
198	S K 441	中瓶	京焼系	C	4	0.29
199	S K 441	大瓶	丹波系	C	26	
200	S K 441	神酒徳利	京焼系	D	22	6.0
201	S K 441	燗徳利	京焼系	B	1	0.79
202	S K 441	花瓶	京焼系	D	4	0.5
203	S K 441	小水注	京焼系	C	4	1.37
204	S K 441	中水注	京焼系	C	32	2.42
205	S K 441	急須	京焼系	B	2	1.25
206	S K 441	土瓶	京焼系	B	7	1.83
207	S K 441	土鍋・行平	京焼系	B	8	0.58
208	S K 441	土鍋	京焼系	B	44	
209	S K 441	行平	京焼系	B	1	0.04
210	S K 441	乗燗	京焼系	D	1	0.13
211	S K 441	カンテラ	京焼系	D	16	1.83
212	S K 441	有脚灯明受皿	京焼系	D	3	0.04
213	S K 441	有脚タンコロ型乗燗	京焼系	D	1	0.29
214	S K 441	蓋物蓋	京焼系	C	8	2.5
215	S K 441	瓶蓋	京焼系	C	1	1.0
216	S K 441	急須・土瓶蓋	京焼系	B	6	1.42
217	S K 441	土鍋・行平蓋	京焼系	B	10	1.17
218	S K 441	小杯	肥前系 (白磁)	A	2	0.83
219	S K 441	小杯	肥前系 (染付)	A	3	1.21
220	S K 441	小碗	肥前系 (白磁)	A	1	0.25
221	S K 441	小碗	肥前系 (染付)	A	11	0.87
222	S K 441	中碗	肥前系 (白磁)	A	1	
223	S K 441	中碗	肥前系 (青磁)	A	1	
224	S K 441	中碗	肥前系 (染付)	A	36	3.33
225	S K 441	中碗	肥前系 (青磁染付)	A	1	0.04
226	S K 441	大碗	肥前系 (染付)	A	1	0.13
227	S K 441	紅猪口	肥前系 (白磁)	D	3	1.46
228	S K 441	仏飯具	肥前系 (染付)	D	1	0.63
229	S K 441	極小皿	肥前系 (染付)	A	2	0.04
230	S K 441	小皿	肥前系 (染付)	A	4	0.17
231	S K 441	小鉢	肥前系 (染付)	A	4	0.08
232	S K 441	中鉢	肥前系 (染付)	A	5	0.71
233	S K 441	中鉢	肥前系 (青磁染付)	A	1	
234	S K 441	香炉	肥前系 (染付)	D	2	0.29
235	S K 441	中水注	肥前系 (染付)	C	2	1.0
236	S K 441	燗徳利	肥前系 (染付)	D	1	
237	S K 441	花瓶	肥前系 (白磁)	D	1	0.13
238	S K 441	花瓶	肥前系 (染付)	D	2	
239	S K 441	水滴	肥前系 (染付)	D	2	0.29
240	S K 441	中碗蓋	肥前系 (染付)	A	1	0.96
241	S K 441	玩具 (鳥)	産地不明	E	1	0.58
242	S K 441	玩具 (栗)	産地不明	E	1	0.5
243	S K 441	玩具 (皿)	産地不明	E	3	2.67

付章 伊丹郷町出土の貝類

有岡城跡・伊丹郷町遺跡では、多くの遺構を発見し、そこからは多量の遺物が出土している。これら遺物は、陶磁器を中心に木製品・石製品などがあり、その他に、動植物遺存体がみられる。この動植物遺存体の中で最も多く出土するのが貝類である。今回、報告書の対照なった宮ノ前地区出土の貝類を中心に、当時の町人における食生活の一端についてみていきたいと思う。

表4 伊丹郷町出土の貝類種名

軟体動物門						
腹足綱	アカニシ	クロアワビ	サザエ	ツメタガイ	トコブシ	バイガイ
	テングニシ	マルタニシ	マイマイ			
斧足類	アカガイ	イガイ	イタヤガイ	ウチムラサキ	カガミガイ	
	セタシジミ	マシジミ	ヤマトシジミ	ハマグリ		
	バカガイ	マツカサガイ				

第1節 伊丹郷町遺跡出土の主な貝類の特徴

軟体動物門

腹足綱

アカニシ（あっきがい科）

アカニシは、北海道より南の海に生息している。殻が大きく螺塔が低いのが特徴である。出土数は18点と比較的多い。大きさはだいたい殻長が9cm前後のもの、12cm程のものに大別できる。殻径は10cm前後である。伊丹郷町では、18世紀後半頃から出土し始めるが、19世紀代に入ると量が増える。

クロアワビ（みみがい科）

クロアワビは、本州から南九州に亘り、水深20m以内の岩礁に棲む。特徴は、殻が前後に細長く体部がふっくらとしている。貫通する孔数は4～5で、樹枝状に分岐して複雑である。出土数は18個体ある。出土遺体の大きさは、長さ10～12cm位、高さは10cm程度である。伊丹郷町では18世紀後半以降出土している。

サザエ（りゅうてん科）

サザエは、全国的に広く分布している。サザエは無刺型と有刺型の2つのタイプに分かれる。それは、生息している環境の違いで生じるものである。外海にすむサザエは刺が鋭く発達し、内海の波静なところのサザエは刺が短いか全くみられないのである。伊丹郷町ではどちらのものもみられる。出土数は14個体で、残存状態が悪く大きさは大体殻長は5cm前後、殻径5cm位である。伊丹郷町では18世紀後半以降出土している。

ツメタガイ（たまかい科）

ツメタガイは、北海道より南の内湾に棲む。臍孔は大きく臍索の中央に細い溝があって殻軸と直角に近い。また、殻は黄褐色を呈す。出土数は3個体である。出土遺体の大きさは、殻長6.5cm、殻径7.5cm前後位である。伊丹郷町出土時期は19世紀以降みられる。

シマバイ（えぞばい科）

シマバイは、全国的に広く分布している。特徴は、殻頂が尖っており全体に大形である。殻皮は濃褐色を呈し、火焔彩が体部の真中位にみられる。出土数は233個体と比較的多い。出土遺体の大きさは、殻長5cm、

殻径3.5cm前後である。伊丹郷町出土時期は18世紀後半頃から出土し始める。

テングニシ (てんぐにし科)

テングニシは本州南側に生息する。特徴は、やや大形の貝で、紡錘形をし、^{ムシ}螺塔はやや突き出ており、結節突起が少しあるものと、全く消失するものがある。出土数は3個体で、出土遺体の大きさは殻長が8.5cm、殻径5.5～9cm位である。伊丹郷町出土時期は18世紀後半以降からみられる。

マルタニシ (たにし科)

マルタニシは、水田などに生息し、全国的に分布している。殻は、卵形で質は薄い。また、殻口の外唇が外側に反っているのが特徴である。出土数は6個体である。大きさは残存状態が悪く、だいたい殻長2.5cm、殻径2.5cm位である。伊丹郷町出土時期は19世紀中頃以降である。

弁足類

アカガイ (ふねがい科)

アカガイは、北海道より南の水深10～50m位の泥底に生息する。殻は薄手で全体的に大きいのが特徴である。出土数は91個体である。出土遺体の大きさは、高さ4cm、長さ4.5～5.5cm位のものが多いが、高さ8cm、長さ9.5cm程の大きいものもある。伊丹郷町出土時期は18世紀後半以降である。

イタヤガイ (いたやがい科)

イタヤガイは、北海道南部より南側の水深10～100mぐらいの砂泥底に生息する。特徴は、殻は団扇形をし、左右の膨らみが違うものが多い。また、殻頂の前後に耳状の突起がある。また、竹の柄をつけて貝杓子として使用される。伊丹郷町出土の中にも1点みられる。出土数は5個体である。出土遺体の大きさは高さ6.5cm、長さ7.5cm程である。伊丹郷町出土時期は19世紀以降である。

マツカサガイ (いしがい科)

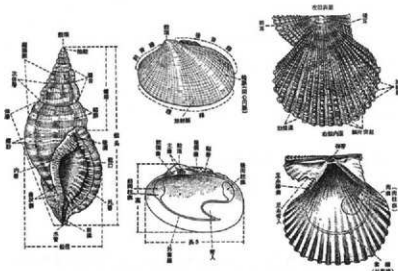
マツカサガイは、全国各地でみられる最もふつうの淡水貝の一つである。特徴は、殻は長円形で漆黒色をし、頂部から後背部にかけて分岐したうねがあり、これが多数の溝に区切られている。これは周縁部ではなくて、頂部から後背部にかけて分岐したうねがあり、これが多数の溝に区切られている。これは周縁部ではなくて、頂部から後背部にかけて分岐したうねがあり、これが多数の溝に区切られている。これは周縁部ではなくて、頂部から後背部にかけて分岐したうねがあり、これが多数の溝に区切られている。これは周縁部ではなくて、頂部から後背部にかけて分岐したうねがあり、これが多数の溝に区切られている。

ウチムラサキ (ますすだれがい科)

ウチムラサキは、北海道南部より南の内湾に分布し、砂の荒い磯のある所にすんでいる。特徴は、殻は大形で丸みのある三角形をしている。また、殻表には粗い成長輪脈がみられ後端で多少板状になる。出土遺体の大きさは高さ6cm、長さ7.5～8.5cmである。出土数は44個体である。伊丹郷町出土時期は18世紀後半以降である。

ハマグリ (ますすだれがい科)

ハマグリの特徴は、殻は亜三角形



第230図 貝類部分の名称「原色日本貝類図鑑」より

気味で、質が厚くなり膨れている。また、殻表は平滑で光沢がみられる。淡水の流入する^低鹹度低い砂泥地を棲み、全国的に分布している。出土遺体の大きさは、高さ4.5cm以上、長さ5.5cm以上のものと、高さ2.5cm、長さ3.5cm×2.5~3.5cmの2つのタイプに大別される。出土数は231個である。伊丹郷町出土時期は18世紀中頃以降で、19世紀代に入ると量が増える。

セタシジミ (しじみがい科)

セタシジミは、琵琶湖及びその水系の砂底に生息する。亜三角状の蛤形をし、殻頂が秀いでいる。殻表は若いころは黄褐色で光沢があり、老成すれば黒褐色で光沢がなくなる。出土遺体の大きさは高さ2cm、長さ2cm位である。出土数は9個体である。伊丹郷町出土時期は19世紀以降である。

マシジミ (しじみがい科)

マシジミは、セタシジミとよく似ている。頂部は大きく低い。殻表は成長すると黒褐色で光沢があるが、若い貝は黄褐色で光沢があり、焼け焦げたような黒斑点がある。北海道を省いて流れのある川の砂底に生息している。出土遺体の大きさは、高さ1.5cm、長さ1.6cmと、高さ2.3cm、長さ2.5cmに大別することができる。出土数は587個体で、貝類中最も多く出土している。伊丹郷町出土時期は17世紀後半以降である。

ヤマトシジミ (しじみがい科)

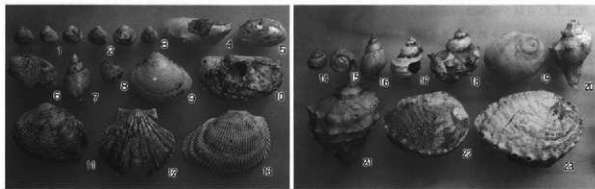
ヤマトシジミは、セタシジミやヤマトシジミ比べて前後に長く、殻表は黒い漆をぬったようで光沢がある。全国の河口の汽水域に生息し、宍道湖や利根川河口などに多くみられる。出土遺体の大きさは、高さ1.5cm、長さ1.5~1.8cm前後である。出土数は75個である。伊丹郷町出土時期は17世紀後半以降である。

第2節 出土貝類の年代別組成と出土状況

ここでは、貝類の時期別出土組成と、出土状況も合わせてみていきたいと思う。

まず、年代別に出土組成をグラフ化したのが第232図である。これを見ると、時代が経過するとともに貝類の種類も多くなっていることがわかる。18世紀中頃以前は淡水産のものが大半を占めていたが、18世紀後半に入ると海産のものが量が増え、19世紀代になると海産・淡水産を問わず全体的に増加していることがわかる。

また、シジミ類などは、時代を通して量的にさほど変化がなく出土している。その他、バイガイやハマグリなども全体的に出土数が多いのがわかる。バイガイは、貝類が出土する遺構から必ず出土する。中には一カ所で144個も出土したところもあり、これはハマグリにも同様な傾向がみられる。



第231図 伊丹郷町出土の貝類

1. セタシジミ 2. マシジミ 3. ヤマトシジミ 4. イガイ 5. マツガサガイ 6. カガミガイ 7. バイガイ
8・9. ハマグリ 10. マガキ 11. ウナムラサキ 12. イタヤガイ 13. アカガイ 14. マルタニシ 15. マイマイ 16. バイガイ
17・18. サザエ 19. ツメタガイ 20. テンダニシ 21. アカニシ 22. トコブシ 23. クロアヒビ

一方、グラフを見ても分かるようにアサリが全く出土していないのがわかる。江戸遺跡などでは、ハマグリと並んで出土数が多く、日常的に食べられていたようである。伊丹郷町付近の遺跡例を見ても少量であるが出土している。しかし、シジミやハマグリ・バイガイの出土量に比べると少ない。喜多川守貞の『守貞漫稿』（慶応三年（1867））に、「京坂には白魚これなし。中略 また蛤はこれにあり、あさり・ばか・さるぼうこれなし。烏貝・赤貝等、三都これあり。」とあり、あまり食べられていなかったであろう。

次に出土状況だが、1種類のものが1カ所で多量に出土したり、短期間に多量に捨てられ、貝層をなしている遺構がある。種類でいうと、ウチムラサキ・シジミ・バイガイ・ハマグリなどである（表5）。これらは祝宴的な行事で食べられたか、何か専門的な目的で利用されたのではないかと考えられる。

このように、出土した貝類の組成をみたが、これによって当時どのような種類の貝類を食べているかわかった。シジミやハマグリ・バイガイなどは時代を通して多く出土したが、これらはごく日常的に食されていたためであろう。

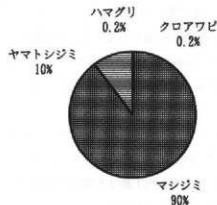
第3節 伊丹郷町出土のサザエ及びシジミでみる貝類流通について

上記のようないろいろな貝類が出土しているが、これら貝類を通して、どこから運ばれていたかについて考えたいと思う。

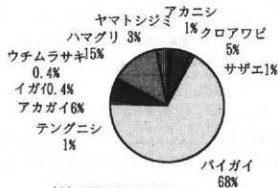
出土した貝類の90%は海産のものである。そのなかでサザエは採集場所を特定できる特徴がみられる。前述し

たように、サザエの無刺型と有刺型の関係である。伊丹郷町ではどれらのタイプのもも出土している。18世紀代は無刺型で、全体的に少し小さい。19世紀代に入ると様相が一変する。無刺型のももみられるが、体部は大きくなり、有刺型のもが主流になってしまうのである。しかし、伊丹郷町で出土する有刺型のサザエは、刺が比較的鈍いのである（第231図18）。となると考えられるのは、内海でも流れの激しい場所か、内海と外海の境に生息するものと思われ、明石や紀淡・鳴門海峡付近の遠海で採集された可能性がある。

その他にシジミでもおもしろい結果がわかった。上述したが、伊丹郷町では3種類のシジミを検出した。そのうちマシジミとヤマトシジミは、16世紀後半の遺構を初めとして、各時期を通して出土するが、セタシジミは18世紀以降にならないと出土しないのである。次に、採集場所を考えると、マシジミは淡水にすみ、伊丹近郊では、猪名川・藤川もしくは武庫川上流で採集できる。ヤマトシジミは汽水域に生息するため、



(1) 18世紀中頃以前出土の貝類構成比



(2) 18世紀後半以前出土の貝類構成比



(3) 19世紀以降出土の貝類構成比

第232図 時期別出土組成比

表5 一括廃棄一覧表

地区	遺構番号	貝種類名	個数	年代
CIT51B-1-1区	SK153	ウチムラサキ	40	明治～昭和
CIT51B-2-1区	SK104	ハマグリ	86	18世紀後半～19世紀初頭
	SK106	アカガイ	17	18世紀後半～19世紀初頭
	SK170	アカガイ バイガイ	17 28	18世紀後半～19世紀初頭
CIT64B-5区	SK35	ハマグリ	34	19世紀中頃～19世紀後半
CIT51D-2区	SE301	マシジミ ヤマトシジミ	476 55	17世紀後半～18世紀初頭
	SX102	バイガイ	144	18世紀後半

伊丹近郊では、武庫川河口や神崎川でとれる。尼崎の大物付近では、江戸時代中期頃から活発にシジミ採り業をおこなっている(八木1968年^{註1})。あるいは、その辺りからきたのかもしれない。最後に、セタシジミであるが、これは他のシジミとは違い琵琶湖及びその水系の川すなわち、淀川・寝屋川でしか生息しないのである。時期別出土組成比(第232図)と合わせて考えると、18世紀後半以前は伊丹に隣接する川で採集したものを中心に食し、19世紀以降は淀川や寝屋川産のやや遠域ものが流通するようになったと思われる。

この様に、19世紀を境に様相かわるのは、いろいろな理由があると考えられる。これは、伊丹郷町での食文化の向上と、商品流通の発達が関係あると思われる。商品流通の発達の中には、大阪や尼崎などの魚市場の発展の影響が大きいと考えられる。

大阪や尼崎の魚市の様子を、喜多川守貞の『守貞漫稿』慶應三年(1867)によってうかがうことができる。これによると、「大阪の西北隅に雑喉場と称す官許の魚市あり。その行、江戸の魚市に及ばすといへども、また小行ならず。けたし界市に出す魚類、近海に漁する所なるべし。この故に自ずから肉肥えて味美なり。尼ヶ崎およびぎこばに出すもの、遠海より来る故に味肉ともに劣れり。価も大略堺魚の半値とす。」とある。これら魚市は、江戸時代を通して活発だったが、江戸時代後期頃に株仲間を結集し、市内の生魚取引の独占権を得てからは益々繁栄した。

隆あげされた魚介類は、一般的に、市売りと下売りがどこの市場にもみられ、彼らによって売りさばかれた。その中で活発であったのが振り売りである。『守貞漫稿』によると、「界・尼ともに夜中彼所に魚市を行ひ、未明より発して大阪に至り、専ら市民得意の家に弔(訪)ふのみ。あるひは得意これなき者は、市中を呼び行く。これを俗に「ふりうり」と云ふ。」とあり、活発に行動していたことがわかる。

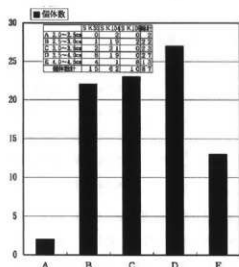
このように、伊丹郷町においても、振り売りなどの行商の活発な行動により、いろいろな新鮮な魚介類を手に入れることができたと考えられる。

第4節 伊丹郷町出土の貝類の調理法

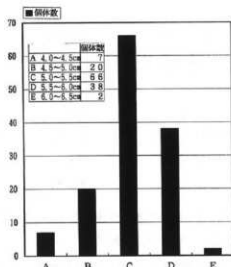
ここでは、出土した貝類がどのように調理されていたか、貝類殻長の計測分布と文献資料からみていきたいと思います。

今回、計測分布に対象としたのはハマグリとバイガイである。

ハマグリは、今回の調査区全体で231個体出土した。比較的多く出土した遺構をピックアップし、ハマグリ の殻長分布図を作成した。それが第233図である。それを見ると、2～4cmのものが圧倒的に多いのが、遺構別に見ると、2つに分けることができる。2～3cmの小形と3.5～4cm以上の中形のものである。この傾向は、江戸遺跡をはじめ他の遺跡でもみられる。これは調理法によって大きさを使い分けていたと考えられる(桜井1994年^{註1})。



第233図 ハマガリ殻長分布図



第234図 バイガイ殻長分布図

ハマグリは調理法について、寛永二十年（1643）刊の『料理物語』に「むし、す、鍋焼き、杉焼き、汁、焼いて。」とある。さらに、元禄八年（1695）刊の『本朝食鑑』には、「蛤一炙物を最上とし、煮物これに次ぎ、生食また佳なり。」とある。焼きハマグリは大きなものが通っており、4cm以上あるものはこれに、それ以下のものは汁物・煮物に料理されていたのであろう。

次にバイガイであるが、第51次調査D-2区SX102では、144個体のバイガイが出土した。この144個体の殻長を調べてみた。これが第234図である。これを見ると5cm前後に集中し、その他のバイガイも同様の傾向がある。また、バイガイは成員すると、肥厚があり、殻口がラッパ状に広がっているが、出土したバイガイは、肥厚が薄く、殻口の開きが鈍いものが大半であった。

バイガイは、『料理物語』によると「ころばし、煮物、殻焼き。」とある。ころばしとは、いわゆる煮ころがしのことで、煮汁が焦げないように転がしながら、煮汁がなくなるまで煮る調理法である。また、『本朝食鑑』には「貝一煮て食すれば味甘味美なり。」とあり、バイガイは煮物で食されることが多かったようである。煮物にする際に5cm位の大きさが丁度よかったのであろう。

このように、貝類の計測分布をすることによって、調理法を特定する糸口を得ることができる。

第5節 まとめ

以上のように、伊丹郷町出土の貝類から、伊丹郷町期の食文化や商品流通の一端をみる事ができた。今回対象とした地区は、「元禄七年（1694）柳沢吉保領伊丹郷町絵図」（第212図）をみると、「日用」（日雇い）を職業とする僧家人が多く住んでいた地区であった。出土状況と合わせて考えると、以下のように考えられる。18世紀中頃までは、この様な中・下層の人達には、限られた貝類以外はなかなか食することはむずかしかつたのだと考えられる。それが、18世紀後半になると、魚市場の発達や振り売りの活発な行動によって生鮮貝類の流通が拡大され、尼崎などを通してセタジミのような遠隔地の貝類が伊丹でも食されるようになったのであろう。また、この時期以後酒造業が発展したことによって経済的に生活水準が向上し、高級貝類も食されるようになったと思われる。

近年の発掘調査においても多くの貝類が出土している。今後これらのものを含めて、今回できなかった採集季節の分析を含めて、伊丹郷町における食生活の復元をさらに検討したいと思う。

最後に、本稿作成にあたり、貝類については日本貝類学会評議員鹿取秀雄先生・清風高校紀平肇教諭に

御教示いただき、大手前女子大学藤井直正教授・大手前栄養文化学院川口宏海助教授には貴重な御助言を得た。また図版作成には大手前女子大学史学研究所文化財調査室川上啓子・小出匡子・渡辺晴香・佐藤由美各氏の協力を得た。末文ながら、ここに感謝致します。

註

- 1) 八木哲浩「尼崎城下の産業と周辺農村の商品生産」『尼崎市史』第2巻 尼崎市役所 1968年
- 2) 桜井準也「遺跡出土の動物遺体からみた大名屋敷の食生活—動物遺体分析の成果と問題点—」『江戸の食文化』吉川弘文館 1992年

参考文献

- 1) 赤松和佳「出土遺物からみた江戸時代の食文化」『城・町・くらし』大手前女子大学史学研究所 1996年
- 2) 尼崎市役所『尼崎市史』第2巻 1968年
- 3) 伊丹市役所『伊丹市史』第2巻 1869年
- 4) 奥谷喬司『日本の貝類』小学館 1983年
- 5) 金子浩昌「江戸の動物質食料—江戸の街から出土した動物遺体からみた—」『江戸の食文化』吉川弘文館 1992年
- 6) 金子浩昌「加賀藩邸内出土の動物質食料残滓研究の一例」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部四号館、文学部三号館建設地遺跡』2 東京大学遺跡調査室編 1990年
- 7) 小池裕子「一橋高校地点出土貝類とその採集季節について」『江戸—都立一橋高校地点発掘調査報告』都立一橋高校内遺跡調査団 1987年
- 8) 吉良哲明『原色日本貝類図鑑』保育社 1992年
- 9) 笹原臨風・足立 勇『日本食物史』下 雄山閣 1995年
- 10) 鈴木公雄『貝塚の考古学』東京大学出版会 1983年
- 11) 原田信男『江戸の料理史』中公新書 1989年
- 12) 渡辺 実『日本食生活史』吉川弘文館 1994年

参考・引用文献

- 青木重雄「兵庫のやきもの」神戸新聞総合出版センター 1993年
- 井尻隆夫他「東京都新宿区内藤町遺跡—放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—」新宿区内藤町遺跡調査会 1992年
- 井上光貞監修「図説歴史散歩事典」山川出版社 1979年
- 伊藤幸司「近世遺構出土の埴塼と羽口」『難波宮城の研究第九』財団法人大阪市文化財協会 1992年
- 井上喜久男「尾張陶磁」ニュー・サイエンス社 1992年
- 大塚達朗編「東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡」東京大学遺跡調査研究室 1990年
- 大橋康二他「国内出土の肥前磁器」佐賀県立九州陶磁資料館 1984年
- 大橋康二「肥前磁器」ニュー・サイエンス社 1989年
- 大橋康二「古伊万里の文様—初期肥前磁器を中心に—」理工学社 1994年
- 大平 茂「下相野窯址—近世丹波焼の調査—」『近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書』兵庫県教育委員会 1992年
- 岡崎正雄「丹波焼について」『中尾城跡—近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—』兵庫県教育委員会 1989年
- 小川啓司「そば猪口絵柄事典」光芸出版 1974年
- 小川 望「刻印からみた焼塩釜の系統性について」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 東京大学本郷内の遺跡医学部付属病院地点』1990年
- 小野正敏「15—16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会 1982年
- 小長谷正治「伊丹郷町発見の埴塼窯（兵庫伊丹）」『関西近世考古学研究Ⅱ』関西近世考古学研究会 1991年
- 小長谷正治・川口宏海「伊丹郷町の酒造業」『関西近世考古学研究Ⅳ』関西近世考古学研究会 1996年
- 垣内光次郎「江戸高嶋硯の生産」『江戸遺跡研究会第7回大会江戸時代の生産遺跡』1994年
- 加藤唐九郎編「原色陶器大辞典」淡文社 1972年
- 河原正彦「丹波—近世以降の展開—」『世界陶磁全集 4 桃山（一）』小学館 1977年
- 川口宏海「陶衣考考」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録第9号』大手前女子学園 1989年(a)
- 川口宏海「大谷焼探訪記」『いな文化財調査室だよりNo.5』大手前女子大学史学研究所文化財調査室 1990年
- 川口宏海「関西における住空間」『江戸の住空間とその周辺』江戸遺跡研究会第2回大会、発表要旨 1989年(b)
- 川口宏海「近世在郷町における屋敷地利用の変遷—摂津国伊丹郷町を中心として—」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録』第11号 1991年
- 川口宏海「江戸時代の土師質土器の製作技法—兵庫伊丹郷町遺跡出土遺物を中心として—」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録』第15号 1995年
- 関西近世考古学研究会編「近世陶磁器の諸様相—消費地における18・19世紀の器種構成—」関西近世考古学研究会 1994年
- 建築資料研究所「水琴窟アラカト」『庭別冊の水景』1986年
- 古泉 弘「江戸の考古学」ニュー・サイエンス社 1987年
- 小林謙一「江戸における近世瓦質・土師質焼炉について」『江戸在地土器の研究Ⅰ』江戸在地土器研究会 1991年
- 佐賀県立九州陶磁文化館「柴田コレクションⅣ—古伊万里様式の成立と展開—」1995年
- 佐賀県立九州陶磁文化館「よみがえる江戸の華—くらしのなかのやきもの—」
- 鳴谷和彦「堺環濠都市遺跡発掘調査報告—宿院町東4丁目SKT14地点・調御寺跡—」『堺市文化財調査報告第20集』

堺市教育委員会 1984年

白神典之『堺播鉢について』『堺環濠都市遺跡(SKT79)発掘調査報告堺市文化財調査報告第37集』堺市教育委員会
1984年

白神典之『堺播鉢と明石播鉢』『江戸の陶磁器』発表要旨・資料編江戸遺跡研究会 1990年

鈴木重治『京焼と京焼写し—生産と流通—』『江戸の陶磁器』発表要旨・資料編江戸遺跡研究会 1990年

鈴木由紀夫『17世紀末から19世紀中葉の銘歌と見込み文様』『柴田コレクションⅣ』県立佐賀九州陶器文化館 1995年

山口昭二『美濃焼』ニュー・サイエンス社 1985年

富樫雅彦他『三栄町遺跡』東京都新宿区教育委員会 1988年

長崎県窯業試験場編『波佐見古陶磁文様集』肥前波佐見焼振興会 1985年

中村 浩『和泉陶器窯の研究—須恵器生産の基礎的考察』柏書房 1981年

永井久美男編『山崎町の中世・近世銭貨—中世大量備蓄銭と近世銭貨の調査報告—』兵庫県宍粟郡山崎町教育委員会
1994年

永井久美男編『日本出土銭総覧』兵庫県埋蔵銭調査会 1996年

日本貨幣商協同組合『日本貨幣カタログ』1996年

橋崎彰一・他監修『瀬戸市史 陶磁器篇 四』瀬戸市史編纂委員会 1993年

橋崎彰一編『丹波』『日本陶磁全集11』中央公論社 1977年

橋崎彰一他『萩焼古窯』日本工芸会山口支部 1990年

難波洋三『徳川氏大坂城期の地格』『難波宮址の研究第九』大阪市文化財協会 1992年

長谷川真『丹波系播鉢について』『中・近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会 1988年

服部 郁『近世瀬戸窯における磁器生産の開始と展開』『財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第2輯 財
団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 1994年

波部忠重『続原色日本貝類図鑑』保育社 1936年

藤井直正・川口宏海・藤本史子・前川 要『大坂城三の丸跡Ⅲ』大手前女子大学史学研究所 1988年

藤井直正・藤本史子・前川 要『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ—三井パークマンション建設に伴う発掘調査報告書—』伊丹
市教育委員会・大手前女子学園有岡城跡調査委員会 1987年

藤井直正・川口宏海・前川 要『有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ—J R駅前市街地再開発に伴う調査報告書 第1・2分冊』
大手前女子大学史学研究所 1992年

藤井直正・川口宏海・藤本史子・小笠原典子・赤松和佳・木南アツ子・山崎晴世『有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ』1995年

藤井直正・川口宏海・赤松和佳・川上啓子・小出匡子・渡邊通香・佐藤由美・大石 真『城・町・くらし—有岡城跡・
伊丹郷町調査10年の成果から—』大手前女子大学史学研究所 1996年

藤井直正『「近衛家会所」所用の屋瓦』『地域研究いたみ 第18号』伊丹市立博物館 1989年

藤澤良祐他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館 1986年

藤澤良祐他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』瀬戸市歴史民俗資料館 1987年

前川 要『有岡城跡の再検討』『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』大手前女子学園有岡城跡調査委員会 1987年

前川 要『近世城下町発生に関する考古学研究』『ヒストリア第121号』大阪歴史学会 1988年

前川 要『伊丹郷町の都市構造の変化とその歴史的背景』『いな文化財調査室だよりNo2』大手前女子大学史学研
究所文化財調査室 1990年

前川 要『都市考古学の研究—中世から近世への展開—』柏書房 1991年

前川 要『有岡城跡・伊丹郷町Ⅲ—三軒寺プラザ建設に伴う発掘調査報告書—』大手前女子学園有岡城跡調査委員会
1994年

間壁忠彦『備前焼』ニュー・サイエンス社 1991年

- 間壁忠彦・間壁菫子「備前研究ノート(1)」『倉敷考古館研究集報第1号』倉敷考古館 1966年
- 間壁忠彦・間壁菫子「備前研究ノート(2)」『倉敷考古館研究集報第2号』倉敷考古館 1966年
- 間壁忠彦・間壁菫子「備前研究ノート(3)」『倉敷考古館研究集報第3号』倉敷考古館 1968年
- 間壁忠彦・間壁菫子「備前研究ノート(4) (一その後の新資料一)」『倉敷考古館研究集報第18号』倉敷考古館 1984年
- 松井かおる「型抜き遊びについて—遺跡出土メンガタから現代のカタまで—」『江戸在地系土器の研究I』 1996年
- 水野正好「江州高島産石硯資料暫見録」『滋賀考古学論叢第2集』滋賀考古学論叢刊行会 1985年
- 森田克行「摂津高槻城本丸発掘調査報告書」高槻市教育委員会 1984年
- 両角まり「近世における土器の型式と系統—土師質壺類の胎土分析—」『東京考古14』 1996年
- 両角まり「釜形製品と江戸在地系土器の展開」『江戸在地系土器の研究I』 1991年
- 八木哲浩他「伊丹市史」第1～5巻 伊丹市役所 1968～1972年
- 八木哲浩他「伊丹古絵図集伊丹資料叢書6」伊丹市役所 1982年
- 和歌山県立博物館「紀州徳川家陶磁の美」 1995年

〈表紙図版解説〉

本報告書の表紙の図版に使用したのは、第97次調査D-6区のSK11すなわち調査区西側中央に位置する土壌から出土した火入または手埴りとよぶことのできる磁器に施された文様である。

完形品でないのが惜しいが、六角形を呈する体部に高台をつけ、体部の対向する2面に花形の把手をつけている。器形・法量・製作手法については、報告書の本文（205ページ）に述べているので参照していただきたいが、篠山藩の藩窯であった王地山焼の優品である。ここでは、王地山焼のこと、体部に施されている文様について少し解説を加えておきたい。

兵庫県多紀郡篠山といえば、デカンショ節で知られた丹波国篠山藩の城下町である。

篠山のことについては、たまたま平成9年の4月から大手前女子大学学長にお迎えする米山俊直先生の高著『小盆地宇宙と日本文化』（1989年1月、岩波書店刊）があり、「4. 篠山盆地—世界にかよう世界性」の中に篠山城のことについて述べられているので引用させていただくことにしたい。

篠山は、なによりもまず城下町である。それも慶長五年（一六〇〇年）の関が原の合戦、同八年の江戸開府ののち、家康のとった施策によって築かれた平城を中心に、それを囲むかたちで作られている。（中略）

家康は西国の毛利、島津あるいは福島正則などの勢力へのおさえとして、山陽道には姫路城に女婿の池田輝政、山陰道のおさえとして松平康重を篠山に配置した。そして山城にかわる新しい城を、盆地底に作らせることにした。篠山盆地の中心には三つの小山が散在している。王地山、篠山、飛ノ山といった。それを候補地として家康に話すと、家康は直ちに篠山を選んだという。（中略）

徳川時代を通して篠山藩は親藩、譜代大名であった。初代康重が岸和田城へ移ったあと、別の松平氏が五代居住した。あと青山氏が亀山城から転封になって来て六代、明治四年の廃藩にいたる。青山氏は二代目の忠裕は老中になって六万石に増加。慶応四年（明治元年、一八八六年）1月、山陰道鎮撫使西園寺公望に城はあげ渡されて二百六十年の歴史を閉じた。

王地山焼についても次のように述べられている。

篠山藩の御城下には藩窯の「王地山焼」の磁器があった。城の東の王地山に、登り窯があった。これも江戸時代も末に近い文政年間（一八一八～三十年）にはじまり、明治のはじめに廃止されるという、わずか五十年ほどの寿命であった。

その起源は、江戸で幕府の老中を長くつとめた篠山藩主、青山忠裕が、他にも誇れる名産を望み、隣の三田藩の青磁を指導していた欽古堂亀祐などの指導で「お庭窯」を造ったのがはじまりという。（後略）

さて、件の火入の体部は六方、すなわち六角形につくられ、六角の各面のうち対向する二面には把手をつ

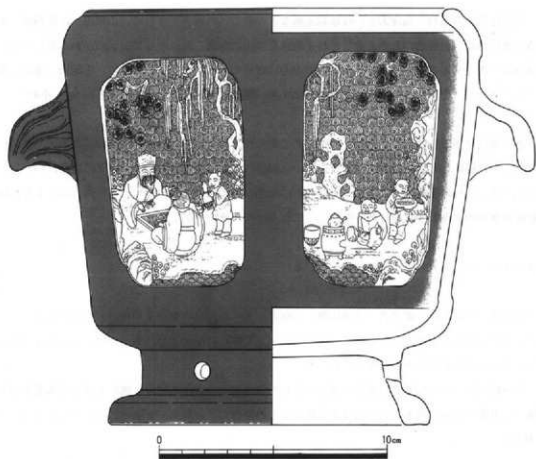
け、そのまわりには小さい渦巻文を押し捺している。あとの四面は、これも二面づつ対向するように同じ文様
が型押しで押し捺されていたようである。本器は全体として濃い硝子色（コバルトブルー）の釉薬がかけられ
ているが、文様を押し捺した二面と把手のある二面の渦巻文様の部分は施釉されておらず、褐色の地肌のまま
である。

二面に見られる文様は右側と左側では異なっているが共通する背景で場面の連続性が認められる。右側は
一人の童子が菓子らしい物が入った容器を抱きかかえ、もう一人の童子が盛り込んで前に置いた風炉で茶を
立てている図柄である。また左側は、将棋盤か碁盤をはきんで対面する貴人らしい二人の人物が幅かれ、客
の持つ茶碗に茶を水瓶から注いでいる図柄である。

この文様については、川口宏海君を通じて大手前女子短期大学で美術史を担当されている塩田昌弘講師の
所見をお聞きしたところ、書簡で次のような解説をいただいたので掲載させていただくことにしたい。

これは、室町から江戸時代へかけて儒教思想の発展とともに、当時の人々に好まれた図柄で、高
士・隠者の余技とされていた琴・棋・書・画の四つの高尚な趣味に遊ぶ光景を表している。すなわ
ち琴棋書画図といえよう。

ところで、発見された火鉢の図はもう片方にも2つの図があったと考えられる。おそらくそこ
には琴をひく図柄があらされていたと想像される。もしそうだとすると、中国で高士のたしなむ四芸
を二場面づつ、計2基で1セットあったようにも考えられる。



第235図 琴棋書画図文火入

図柄は、高士が碁碁を打って楽しんでいるところへ、童子が茶を持ってきて給仕している。老松の大樹の下で涼しげである。まわりには海、蓬莱山のようなものである。(両側に見える車輪状の文様は)松葉、(渦巻文と青海波文は)波、(地面の矢印状の文様は)蕨の葉をあらわし、ともに悠久の刻を表現・演出している。

従って、タイトルとしては、琴棋書画図文火入（1対のうち）ということができる。

文面は一部かえさせていただいた。また参考として、重要文化財に指定された京都妙心寺所蔵の海北友松筆「琴棋書画図」の図版を添えていただいた。これについては、大手前女子大学美学・美術史学科武田恒夫教授の『海北友松』（日本美術No.324）にくわしい解説がのせられている。

なお、王地山焼の青磁で同じ范型を使った製品が鎌山歴史美術館の列品中にも見られ、紀伊和歌山藩の藩窯であった南紀男山焼にも近似する范型で製作されたと考えられる「青磁六角火入」のあることも付記しておく。後者は「文政十二年（1829年）」の銘がある（清岡忠成編『日本やきもの集成7 近畿II』平凡社1988年）本器の名はこれに従って「火入」とした。

本文を書くに当たっては、上記の塩田昌弘氏のほか、王地山焼の同定・確認には、丹波古陶館学芸員中西薫氏の懇切なご教示を得た。また、実測は大手前女子大学史学科卒業生木南アツ子（芦屋市教育委員会嘱託）の手に成るが、長い時間をかけて精密な図を描いてもらった。これらの方々のご厚情と労苦に対し、共に記して感謝の意を表する。

<参考文献>

『鎌山藩窯、王地山焼名品図録』（鎌山歴史美術館、1988年）

『紀州徳川家、陶磁の美』（和歌山県立博物館、1995年）

